
妹の異世界譚 パート 2

ポンカス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹の異世界譚 パート2

【Nコード】

N5096M

【作者名】

ポンカス

【あらすじ】

大学二年生の城山仁は、異世界から帰って来たばかり、それなりの収穫とほろ苦い思い出を胸に、春休みを謳歌していた。収穫の最たるもの、妹、奈々華との絆を再び取り戻した彼はまたも見知らぬ世界に放り込まれる。そこで「ビー玉ゲーム」という安直なネーミングの一攫千金のゲームをやることになる。予定調和のように妹をパートナーに迎え入れて始まったゲーム。妹やその友人達との関わり合いをマイペースに切り抜けながら、青年は借金返済を目指す。

ラノベタッチのものを書きたくなって、挑戦いたします。妹の異世界譚との関連ですが、もし言及するようなことがあっても、詳細を説明する気はないです。つまり前作を読んでもいなくても大抵はわかるけど、読んでいる方がもっとわかりやすい部分もあると思います。あと明るい話を書くので、前作の閉塞的な話が好きだと言う方は今回のご遠慮くださるのが賢明かと思われます。

1 (前書き)

あらすじでも書いていますが、なるだけ前作をお読みいただいているほうがご理解が早いかと思えます。

階下に下りると家は静まり返っていた。当然奈々華は学校に出かけていた。居間の掛け時計を見ると十時半を少し過ぎた頃。十一時間くらい寝ていたのか。腹が減った。テーブルの上に、奈々華が用意してくれていた弁当がある。兄妹の仲がよくなって、こっちに戻ってきて一週間。風のような速さで奈々華は弁当箱を用意してくれた。春休みだというのに、役に立つなんて思わなかったが。

ステンレスの味気ない弁当箱の蓋には、奈々華の顔を撮ったプリクラが貼られている。何かばっちり決めているのが腹立つ。どうして貼っているのかはちょっと俺にもわからない。聞いてみようとも思うが、下手に藪を突いてアナコンダでも出てきたら始末に終えない。結局、触らぬ妹に祟りなしだ。二段重ねのそれを展開すると、飯が詰め込まれている方、その白米の上にふりかけで丁寧なハートマークが形作られている。

「ふう」

疲れた溜息は自然と。馬鹿じゃなかるうか。俺の大学が始まる前には何とかこれだけでもやめさせようと思っている。こんなものを他人に見られた日には恥ずかしくて死ぬる。

味は問題なく、ぺろりと平らげたが、ここで問題。足りねえ。三輪車ほども役に立たないくせに、ベンツのように燃費が悪いのが俺の持ち味だ。冷蔵庫を漁る。特に目を惹くものはないので、上の段、冷凍庫を開ける。途端に涼しい風が頬を撫でていく。カップのアイスクリームがあった。だけどこれは奈々華のお気に入り、そもそもおっさん化著しい昨今の俺は甘いものをもう好まない。扉を閉じかけて、ふと付箋が目についた。カップの蓋のところにピンクの紙切れ。取って見る。「食べてもいいよ」語尾にもハートマーク。危ねえな。兎に角好意に甘えて食うことにしよう、と蓋を開ける。無性

に切なくなった。

カップの中のアイスが綺麗に半円だけ食われている。最初にスプーンを入れて割ったのだろう、その姿を思い浮かべると、涙が出そう。半分といわず全部食っていいから。ていうか俺を何歳児だと思ってるんだ。一番悲しかったのは、結局スプーンを取り出して、その残骸をむさぼり食ったことだ。

奈々華が春休みにも関わらず学校に行くのは特講のためだった。進学校に通う彼女は血の繋がりを疑うほどに俺とは正反対の勤勉さを持ち合わせ、自由参加のそれに毎日顔を出しているのだ。俺だったら時給が発生しても行かない自信がある。それでいて俺の昼のエサまで用意して出て行って、帰ってくるとその他の家事もキッチンやってくれるんだから、そろそろ尊称をつけて呼ぶべきかと思う。奈々華様。そういう風俗店を思い浮かべて、何かいやらしい気持ちになる。俺はもうダメだ。変態罪で捕まって死刑になればいいのに。そんな自慢の妹だが、こちらに帰って来て俺に一つだけ頼みごとをした。毎日の迎えをやって欲しいというのだ。ここいらは治安が良くて、しかも大抵寄り道せずに大通りを通って帰ってくるので然程心配していなかったが、本人は一人での帰路に不安な思いもあったのかもしれない。彼女は俺とは違って顔立ちが大層良く、鼻にかけるようなことは勿論ないが、それでも無自覚なわけもないので人一倍警戒があるのかもしれない。危機管理をしっかりとしておくのは良い事だし、そもそも家事全般を丸投げしている俺に毎日の迎えくらいは断る気も資格もない。そんなわけで半ドンの奈々華は、俺がアイスを食べ終えたあたりで最後の時限の始まりを迎えているはずだった。

身支度を終えて家を出ると、外はザーザー降りの大雨だった。

「ちよっと気付こうぜ、俺」
車に走り込んだ。

霧雨はフロントガラスに小さな水滴をつくり、それをワイパーが定期的に端に追いやっている。端の方ではエンジンに耐えるように、プルプルと身体を震わせていた同じような水滴が、その度合流してきた粒と合わさってすうと下に流れた。信号待ちだった。ここのは何時も長い。近くに小学校があつて、通学路になっていることは、意図的に住宅街に続く道への青信号が長い。

なんとなく、びしょ濡れになって泣いている奈々華の姿が思い起こされた。随分と小さな奈々華だった。過去にそういうことがあっただろうか、と探ってみるがちよつとすぐには思い出せない。俺の妄想の産物だとしたら、そろそろ本格的に通院も視野に入れておかないといけない。どっちにせよ、俺の方こそあの子を何歳だと思っているんだよ、と苦笑する。

ピツと後ろの車が遠慮がちなクラクション。信号が青に変わっている。心持ちいつもよりアクセルを踏む力は強かった。奈々華が傘を持たずに出て行ったのを思い出していた。

確か黒い髪をボブカットにしているほうが、乾沙奈いぬいさなで金髪の方が沼田叶恵またかなえだったか。沼田の方が遅しくて、良く言えば物怖じしない性格、悪く言えばクソ生意気で浅慮。最初に車に乗せてやったときも平然と「煙草くせえ」と漏らした。嫌なら放り出して良いんだよ、と応じたかったけれど俺は一応彼女よりも四つは大人でなければいけない。四回我慢したらシャイニングウィザードを顔面にぶち込んでやろうと思っている。乾さんの方は間逆に喋っているのを聞いたことがない。のほほんとしていて、小動物のようだ。二人とも奈々華より小さいが、乾さんは特に小さくて140センチ台ではないだろうかと思う。だけど胸は中々あって、いつか触れないだろうかと頭を捻っている。沼田の方は最近の女子高生ってやつを地で行く女

で、気だるげに伸ばす語尾も、中途半端な敬語も、パンダみたいなアイシャドウも、あまり好きになれずにいた。

「超ラッキーだよ。やっぱ足あるっていいすねえ」

お前にも足は生えているだろう。それで降り注ぐ雨が身体に触れる前に家まで走り抜ければ良い。風になればいい。奈々華は俺の内心を汲んでいるのか、終始ゴメンねと繰り返した。お前が謝ることじゃないよ、と俺もその度返した。乾さんは雨しか見えないだろうに、それでも窓の外をポケっと眺めている。

奈々華を迎えに行くと、そこにはこの二人も同伴していた。大方俺の車狙いで沼田あたりが奈々華に無理を言ったのだろう。全くもつてあざといガキだ。

「あ、お兄さん腹減りませんか？」

どっちかって言うのと立ってる。

「いや、どうして？」

「飯行こうって話しに決まってるじゃないすか。マック行きましようよ」

小馬鹿にしたような言い方が俺に二回目をカウントさせる。これで俺に奢らせるつもりなら三回目で、もし俺のポテトをつまんだ日には、跳び膝蹴りが炸裂するだろう。努めて冷静に助手席の奈々華を見やる。

「ちよつと小腹が空いたかも」

えへへと照れ笑い。仕方ないな。ハンドルを切って右折レーンに入る。ここを折れて道なりで駅前だ。

アメリカからやって来たそのファストフード店は、ハンバーガーを提供してくれるのだが、ソースやマヨネーズで肉とパンの間を滑りやすくすることに腐心していて、大抵最後の一口を食べる段になると紙包みの中でパンの上がなかったり、肉が少なかったりと、俺の神経を逆撫ですることにおいては他の飲食店の追随を許さない。店内に入ると雨降りだというのに人がごみごみしていた。半ドンを終

えた頃だから昼飯時。他に行くところがないのかね。列に並ぶと前のサラリーマンの雨に濡れたスーツから何とも言えない匂いがした。不意に後ろから肩を叩かれて、振り返ると沼田が財布からいくらかクーポン券を差し出して寄越した。

「系列店で働いてるんすよお」

とのこと。乾さんはもう諦めているにしても、奈々華まで何も言わないで列の最前列の学生の頭頂部あたりに目をぼんやりと合わせているだけだった。あれ？　これ俺が広げなきゃいけないのか？　興味ないんだけど。

「へえ。バイトしてるんだ？」

「まあね」

今タメ語きいたな。沼田は特にしまったという風でもない。俺は右ひざを軽く揉んでおいた。

「これすげえ汚い油使ってるんすよ」

ポテトを一つ摘んで、流石に俺ののではないが、目の前に掲げてみせる。声のトーンを落とせ。「へえ」と興味ないオーラを全開にして返事するが、あまり効果はないようだ。

「ほんでマジでスマイルとか言ってくる酔っ払いとかも来てさあ」
どういうわけか俺はこのお嬢さんに気に入られているようで、話はほとんど俺にふられる。大方聞き上手だとも思われているのだろうが、俺は会話を積極的に行おうという意思がないだけだが。相槌さえ返ってくればいいのか。俺は話半分に聞きながらさっさとハンバーガーを口の中に押し込んでいた。ついに俺の心の声が聞き届けられたのか、最近新発売されたそれは、ソース類は控えめで大ききなく、俺の腹におさまった。やれば出来んじゃないかよ。偉そうな感想を抱いていると、隣からにゅっと手が伸びてきた。紙ナプキンで俺の口元を拭っていくその白魚のような手は勿論奈々華のものだ。本当に甲斐甲斐しい子だ。

「……へえ」

おや、と思った。対面に座る沼田の顔が妙に優しく緩んでいた。そういえば、と思い出す。奈々華の話ではこの沼田には小学生くらいの弟がいるという話ではなかったか。

「可愛がってもらってるんだね？」

と、奈々華の目を見て言う。世話をされているのは俺の方だけど、可愛がっていないこともない筈だ。はたして奈々華は嬉しそうに目を細め「うん」と力強く肯定した。少し認識を変えなければいけないかな、と頬を掻いた。思えば奈々華が友達の見込みを軽々に誤ると思えなかった。少し見た目や話し方なんかは左右されすぎたかと反省する。四回溜まってもしゃイニングウィザードはよそう、そう思った。ジャイアントスウィングくらいにしておこう。まあ本当に

やりやしないけどね。

「お兄さん、聞いたことあります？」

そろそろお開きかと思っていた頃、まだ話し足りないのか、沼田が新しい話題を俺にふった。しばらく話しているうちに、コイツはもうしょうがないと慣れてきていた。「何を？」と普通に返してやる。

「マネーゲームっす」

どうも要領を得ない。パンダみたいな瞳を見つめる。

「ネットで噂になってるんすよお」

もう少し順序だてて話してくれないだろうか。そんな風に思っていると、奈々華が隣から助け舟を出してくれた。

「なんかね、気付いたら知らない場所に居て、そこで同じように集められた人たちとお金の取り合いをするんだって」

「……なんか眉唾だな」

ネット上の噂なんて信憑性はないに等しい。気付いたら知らない場所って……俺達じゃあるまいし。

「でも複数の書き込みがあって、結構リアルな話も出てるんだって」

「一攫千金っすよ」

お前はちよつと黙ってる。

どうやら彼女達はそういう話を学校でやっていたらしい。暇な奴等だなあと、自分のことを棚に上げて三人を交互に見る。乾さんがにこりと笑ってくれた。

夕飯を食べて自室でくつろいでいると、コンコンと控えめなノックがした。この家には俺と奈々華しかいないわけだから、ドアを開けると当然見飽きた美人がいる。毎晩俺に宿題を見てもらいにくる。奈々華の成績はかなり良くて、一人でも出来るだろうといつも思っているながらも追い出すようなことはしない。「可愛がってもらってるんだね」プレッシャーになるわけでもないけど、何となく沼田の言葉

を思い出した。アイツもあんなだけど、家では弟の宿題を見たり世話を焼いているのだろうか。

「座りなよ」

膝を広げる。俺の部屋には座椅子が一つしかなくて、破れて綿が飛び出しているクッションがあっただけで捨てられた、奈々華はいつも俺の膝の上に座る。奈々華の部屋にはクッションがあるが、何故か持って来るといふ発想には至らない。そしてやはり俺も持って来いよと強く言うようなことはない。身も蓋もないことを言えば俺も奈々華も甘えが抜け切らないということになる。

今日は英語の教科書と参考書を携えている。奈々華は語学が得意で、既に忘れかけている俺としては教えることなんて何もない。それでも時々ありえないような間違いをして、後ろから俺に指摘させる。やはりお前わざとだろうと怒るようなことはしない。

膝の上にお尻の柔らかい感触。前屈みになってテーブルの上のノートに何かを書き込むたびに、彼女の長い髪は小さく揺れる。しばらくカリカリとやっていると、急に奈々華が思い出したように口を開いた。

「お兄ちゃんは興味ない？」

「何が？」

「マネーゲーム」

まさかお前まで信じているのか、という言葉は喉の奥にしまった。

「元々資金が要るもんだろう？ 仮に本当にあったとして俺には無理だ」

奈々華が振り返る。純粹な好意を浮かべたあどけない少女の顔と、男に見られることを意識したような抜け目ない女の顔が混在したような表情で、俺はいつもこの子への接し方には苦労している。

「金がない。特に今はない」

6を掴んでもボーナスが引けない。等価ボーダーを遙かに上回る良釘台を積もっても、負け散らかしている。だからお金はない。借金ならある。沢山ね、沢山。

「ふうん。もし初期費用は要らないってなったら、興味ある？」

「うん、そうだね。それなら俺をねじ込めっ！ て感じだね」

リスクがなくてチャンスだけあるなんて、ギャンブルいや世の道理の根底を覆すような甘い話だ。それこそ夢の中の話だよ、そう心の中で妹に語りかけた。

ベッドで寝ていたはずだ。

いつの間にか俺の背中にゴリゴリと食い込む石の感触に目を醒ました。目を開いて、半身を起こして、周囲に目を回すと、溪谷を思った。こげ茶の土、聳える岩山が視界に飛び込んできた。岩山は、それはもう山で、先が見えない。雄雄しささえ感じさせる堂々とした佇まいで、いくつか乱立している。背後を見ても同じような風景だった。上を見上げると遙か高い岩山の頂点に突き刺されるような青空。谷底。俺の知識の中ではそれが一番しっくりきた。

「勘弁しろよ」

ベッドで寝ていたはずだ。全身を起こして、歩いてみるしかないという結論に至り、そのようにしかけた時、上の方から「キャー」と若い女性の悲鳴が聞こえた。反射的に見上げるとスカートの捲れあがった生足が見えた。

「眼福…… いや、まずい。こっちに落ちてきてんじゃねえか！」

避けるのは簡単だが、彼女が潰れたトマトみたいになる未来を思い浮かべてしまい、受け止める覚悟を決めた。両手両足に問うてみると何とかかなりそうという力強い回答を頂いた。おみ足…… いや少女が落下してくる速度は増すばかりに見えるのは目の構造。俺は落下予測地点で微動だにせず、両手を広げ、少女の身体を受け止める。衝撃が来る瞬間にスライディングの要領で下半身を滑らせて倒れこんでみる。それでも腕が折れるんじゃないかと思えた。ついで俺の腹の上に落ちる人一人分の重さ。腕で多少は緩和したとしても口から涎を出させるには十分だった。むせるむせる。安否も気遣う余裕がなくて、俺は仰向けに倒れたまま、女の子は俺の腹の上、顔を横に向けて咳き込む。岩山の足の辺りが滲んで見える。

「大丈夫ですか！ すいませ……」

妙に聞き覚えのある声。というよりこの声は…… 向こうも途中で

気付いたように口元を押さえたような雰囲気があった。正面に顔を戻すと、くりくりとした綺麗な二重の瞳。

「お兄ちゃん！」

「奈々華！」

「だいじょう……」

「早くどいてくれ！」

結局淡いピンクのパンツにきゃっきゃ言って喜んでいた俺は、妹のパンツを下から覗きこんでいたに過ぎなかった。

「ここはどこ？」

当然の疑問に、当然に答えを持ち合わせない。不安げな瞳を左右に振る奈々華を見て、俺は自分のせいでもないのに申し訳ない気持ちになった。

「俺もさっき気付いたらここにいたんだよ」

呼吸も整ったところで立ち上がって周囲を見る。乱立する岩山の間を縫うようにしていけばある一方向には進めそうだった。各々の間隔が狭くて、空を見るに夜ではないだろうに、ほの暗い。道とも呼べないその隙間を縫うしか……

「いたた」

弱々しい声に振り返ると、奈々華が右の足首を押さえたまま座り込んでいた。何でお前が傷んでんだよ。おぶろうかと近づきかけて、ふと悪戯心が生まれた。

「さて…… 君に選択肢を与えよう」

「ごめんね。大丈夫？ 頭打った？」

「一番、おんぶ。二番、お姫様だっこ。三番……」

「二番！ 二番！」

「三番、放置。四番、休憩及び回復待ち」

「二番しかないかなと思ったけど、おんぶも捨てがたいなあ」

三番、四番あたりで「冷たいよ」と言うツツコミ待ちだったのだが、奈々華の関心はハナから一、二番のどちらかしかないようだ。つま

らん。

「ちょっと実演も交えて説明してよ」

奈々華としてはどちらも堪能した上で決めようという腹だろう。本当にどうしようもない甘えん坊だ。少し考えて奈々華に乗ってやることにする。

「おんぶ。対象の上体を背中に預けたまま、行為者が対象の脚部及び臀部を両手で掴み支えそのまま静止若しくは歩行をすること。お姫様だっこ。行為者が対象の膝裏に片手を当て、もう片手を背中に回して持ち上げ、そのまま静止若しくは歩行すること」

奈々華の瞳から急激に輝きが失われていく。

「放置」

と言いながら二歩、三歩、奈々華から距離を取って背中を向ける。

「このようにする」と付け加える。

「休憩」

戻ってきて奈々華の隣に腰掛ける。「このようにする」と付け加える。

「……」

しばらくして奈々華は結局おんぶを選択した。

やはり此処は歩けば歩くほど谷底だ。歩いても歩いても変わらない景色。背中には奈々華。ごめんね、と繰り返すもんだから、これくらいなんでもないと返す。本当に軽くて、俺は逆に心配になるくらいだ。ちゃんと昼飯を食べているのだろうか、学校でいじめられているんじゃないか、俺の世話が忙しいのだろうか……

岩山を縫うのは俺達だけじゃなくて、時に追い越し、時にぶつかって風が吹いていく。いくら軽いといっても人を背負って歩いてなお涼しいということは、谷底ということを加味しても、季節は秋くらいだろうか。

「このまま誰にも会わなくて、どこにも繋がらなかったらどうなる

「んだろう？」

「奈々華がポツリと言った。」

「大丈夫だよ」

「なるだけ優しく。もっと優しい声音は出ないものか。」

「大丈夫。いざとなったらお兄ちゃんが、お前を背負って岩山を登ってやるから」

「そんなの無理だよ」

「出来るさ。お兄ちゃんは脳みそまで筋肉で出来てるんだぞ？」

小さく振り返って優しく微笑む。なるだけ優しく。奈々華も安心したのか、俺の気遣いが通じたのか笑ってくれた。正面を向きなおした俺の頬に奈々華の頬が重なる。風に吹かれて少し表面は冷たいけれど、そのプニプニの底には確かな温かさがある。

ポツネンとほったて小屋があった。藁葺の屋根に牧歌的な錆鉄の煙突を立てて、カビか元々かもわからない黒ずんだ木造りの建物部分。およそこの場所に不釣り合いな建物に、絶句した。後ろを振り返ると奈々華もやはりポカンと口を開けて、宇宙人でも見たように固まっている。

「あれ、なんだろう？」

しばらく固まっていた奈々華の唇が動く。

「ハウスかな」

「カレー粉を作っているの？」

奈々華も俺も随分余裕だな、と心の中で笑う。どうする？ 入ってみるか。あからさまに怪しいけれど。

「行ってみようよ」

奈々華は沼田のお株を奪ったように、考えなしのような調子で言った。だが彼女は馬鹿ではない。どうせこのまま谷底を彷徨っていても突破口は見つからないのだから、なるだけ何でもないうような口調で言ったほうが空気が良い。そういうところまで考えての言葉なんだから俺も鷹揚に「そうだな」と返して、足に向けた。

戸を叩いても返事はなく、やはり廃墟かと気落ちしそうな気持ちで鼓舞して中に入ってみることにした。入ってみて吃驚した。

薄い灰色の床と壁。それらを簡素な蛍光灯が照らしている。それらは木造りでは勿論なく、近代的な建物を連想させる。いや、言葉にはしたくないが、宇宙船の内部を思った。得体の知れない薄気味の悪さもそれに拍車をかけた。

「うわあ。すごい。全然外見と違うね」

奈々華はやりのほほんと。ゴーサインらしい。確かに谷底で餓死するのは嫌だ。当分は奈々華のおしっこを飲みでもすれば生き残れ

るだろうが、そのプランもやはり口には出していない。変態だと思われたら辛い。

宇宙船は随分と縦長の構造になっているらしく、廊下は数十メートル続いた。やはり外見の構造からは明らかにおかしい。ペタンペタンと靴は情けない音を立てるが、俺は何かジリジリと照り返して足を焼く真夏のアスファルトを歩くように嫌な感触を抱いていた。突然パカッと足元が割れて奈落の底に落ちるのではないか、カチッと気付かないスイッチを踏んで、壁から天井から毒矢が飛んでくるんじゃないかと、気が気でなかった。長い廊下の終わりが見えた。行き止まり。しかし壁に同化した扉がある。ドアノブだけは銀色に輝いていて、いよいよ罠じゃないかと疑心暗鬼が止まらない。

「入ってみようよ。大丈夫だよ。きっと」

気休めだなあ、と苦笑が出るが、この子が言うとな本当に大丈夫なんじゃないかと思えてくるから不思議だ。すんなりとドアノブは回り、再び灰色の世界が目に入った。

ただ一つ違うのはそこは小部屋になっていて、部屋の中央には防弾ガラスの間仕切りがあった。向こう側にはどうやっても行けないように部屋全体を二分していた。ドラマなんかで見る、刑務所内の面会室を思った。そして看守よろしく、そのガラスの向こうには椅子に腰掛けた人間がいた。人間としか言い様がないのは、奇天烈な仮面で顔をすっぽり覆い、映画で魔術師が着るような黒いローブを身に纏っていたから。

「おい。なっち。変態がいるぞ」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんだって変態なんだから」

なんでバレてんだよ。まあいい……話を聞こうと警戒は怠らずにガラスに近寄る。身体に起伏がないので男と仮定する。

「ようこそ。ビー玉ゲームへ」

キてるなあ。やはり男の声だった。

「あの…… 僕達迷子になってしまって、谷底に落っこちちゃって、

一命は取り留めたんですけど……」

まさかベッドの上から、学校で勉強に勤しんでいたら、突然ここに居たなんて頭のおかしい真実は話せない。男と正対するようにガラスに向き合う。

「ようこそ。ビー玉ゲームへ」

ダメだ。日本語が通じない。

「知らないか？　ビー玉。誰もが子供の頃一度は手に取ったことがあるだろう」

「……はあ」

なっちゃん、助けてくれ。後ろを見ると、奈々華はそ知らぬ顔で男を見下ろしていた。俺の視線に気付かないわけもないのに、観察するように男を見ていた。このガキヤ、人をけしかけといて、変なの捕まったら丸投げしやがった。

「そのビー玉を君たちに集めてもらう」

駄菓子屋に行け。

「ゲーム終了時点で一番多くのビー玉を所持しているチームが優勝となる」

何の話をしているのだ。

「マネーゲームの亜種だな」

男が俺の心を読んだように、ゲームの種類を言った。

「君たちをここに呼んだのは我々だ」

ついにそこまで言ってくれた。最後の堤防が決壊するようなイメージを頭に持った。認めざるを得ない。まーた来ちゃったよ異世界。

ビー玉ゲーム ルールブック

＜概要＞

プレイヤーは二人一組となって、本仮想世界においてゲームを行う。各所でビー玉を集めていくのが本ゲームの主旨である。ビー玉はこの仮想世界において通貨の役割を担う。ゲームは一ヶ月間の期間を設け、仮想世界とプレイヤー自身の世界とを行き来する形で行われる。期間終了後、最も多くのビー玉を所持していたチームが優勝となり、賞金として更に金色のビー玉四百個が贈呈される。

＜禁則＞

1…他プレイヤーに対する暴力行為。傷害を負わせた者には、本仮想世界内の治安機構によって嚴重に処罰される。また他プレイヤーを故意に絶命させたと判断された場合には、ゲームの残存期間に関わらず強制的にゲームを終了させる。

2…「ビーリング」の非装着。「ビーリング」を故意に着脱することとは基本的に不可能であるが、紛失及び損壊した場合には、ゲームの残存期間に関わらず強制的にゲームを終了させる。なお具体的な規定については「ビーリングについて」の項に詳しい。

3…許可なき再編成。パートナーを自由に変更、及び解任する権限はプレイヤーのどちらにあって、これを認めない。必ず定められたパートナーと行動を共にすることを厳命する。なお具体的な規定については「パートナーについて」の項に詳しい。

ざっと読むとそんな文字たちが踊った。男に渡された、ガラス張りの下部僅かに数センチ開いた隙間から寄越してきた、冊子をばらばらと読むと一先ずそれを閉じた。

「参加にあたっての条件は？」

「特にない」

夢の中の話は異世界では現実のものとなっていた。

「参加へのこちら側の意思は？」

「当然考慮する。不参加の意思がある場合は最初、つまり私にその旨を伝えろ」

「このゲームは今回で何回目になる？」

ネットで噂になってるのは、つまりこれのことではないか。そういう憶測が立っていた。

「過去のゲーム記録については言及の権限が私にはない」

機械みたいなヤツだ。だがこれで少なくとも今回が初めてではないことが窺える。

「この他プレイヤーへの暴力行為。これについて詳細はないのか？」

「ない。禁則一項に記載されるものだけである」

男の声は何を聞いても画一的で、何か一定の音域に意図的に定めているような気味の悪さがあった。

「強制終了とは、どうなる？」

「強制終了となる」

どうやらその後については「言及の権限がない」とやらなのだろう。抑止力への貢献として殺害されるのか、はたまた元居た世界に帰されるだけなのか。

「禁則を犯して失格になったプレイヤーのそのパートナーはどうなる？」

「禁則三項と照らし合わせて、そのパートナーもまた失格となるのが望ましい」

望ましいって何だよ、望ましいって。政治家でも相手にしているような徒労感が俺を襲う。日本語考えたヤツちよっと出て来い。

「ベールリングとやらは？」

「これだ」

また屈んだ男が足元から何かをこちらに寄越す。名に違わず指輪だった。二組ある。特段変わったところはない。金属を輪っかにしただけのお粗末なもので装飾はない。拾い上げて奈々華に渡しておく。足が攣りそうになったのは俺の胸の中だけにおさめる。

「コレを装着しておけと？」

「ゲーム内ではそう定められている」

「ゲーム内ってことは、行き来するっていう元の世界に戻ると外せるのか？」

それなら原則外すことが出来ないと、いかな魔法か科学か原理は知らないが、いうことになっているソレを紛失及び損壊なんて事態が起こりうることも納得できる。

「外の世界については言及の権限が与えられていない」

またか、と小さく溜息を吐いてやる。しかしそこで小さな電流が頭の中に走ったような爽快感を感じ、はっとする。

「暴力行為ってのは、身体だけを指すのか？ 指輪への攻撃は禁則に当たらないのか？」

「当所治安維持機構が暴力行為と判断するものが暴力行為である」馬鹿か。本当にゲームの中の村人に話しかけているような、そんな意思疎通においての齟齬というか瑕疵というか。また溜息が漏れて、後ろの奈々華を振り返る。お前からは何かないのか、と見つめるが、何を勘違いしたのか、はにかんだように笑ってから、俺の肩甲骨辺りに頬を擦りつけた。こっちもダメか。

「他の質問がないのなら、ゲーム開始ポイントへと転送するが？」

「そのお面どこで買ったんだ？」

もう破れかぶれのような質問をぶつけてみた。男がつけている仮面は獅子の顔に蛇が絡んだデザインだ。どうせ「ゲームに関連しない質問については言及の……」とか何とかだろう。

「近くのホームセンターで購入した」

何！

「それはアンタ個人の家の近くのか？」

「そうだ」

なんて攻めの姿勢を忘れないホームセンターだろう。何かもつと建設的な疑問が浮かぶまでの時間稼ぎも兼ねての質問だったが、俺の意識はそのホームセンターに集中する。

「他にはどんな有り得ないもの売っているんだ？」

「アダルトビデオなども取り揃えている」

「それは一体どれくらいジャンルを網羅しているんだ？」

「……そうだな。全般的にあるが、マニアックなもので言えば母乳というジャンルや……」

「転送してください」

奈々華の氷のように冷たい声が遮り、目の前が真っ白になった。

再び視界が落ち着きを取り戻すとそこは街中だった。化粧レンガをふんだんに敷き詰めたメインストリートに降り立っていた。それに沿うように、縦断するように、河が流れていた。橋を渡した向こう側もやはり同じような赤茶の道が続いている。建物も景観を損なわないためか、レンガ造りのものが多かった。威勢のいい客引きの声に、視線を戻すとすぐ近くにアーケードがあった。軒先に出している。恰幅のいいおばさんが俺達兄妹に品物を掲げて見せている。アクセサリーのようだ。

「彼女にお一つどうだい？ お兄さん」

俺はどうにも違和感を覚えた。何せおばさんの風貌はどう見ても日本人には見えなかったからだ。栗色の髪に緑がかった瞳をしている。よくみると往来を行き来する人間は皆、西欧風の顔立ちをしていた。

「やだあ。おばさん。私達兄妹なんですよ」

背中から雑音が聞こえる。今はそこじゃないだろう。

「僕達旅の者でして、街が見えたから入ったのですが、ここは何と言う街でしょうか？」

「おやまあ。うちは旅人さんは多いけど街の名前も知らないで入ってくるなんてねえ」

ふと、アーケードの下、長机の上に置かれた様々なアクセサリーの横に、木の皮で編まれたカゴが目にとまった。中に沢山のビー玉が入っていたからだ。斜陽に反射してキラキラと輝いているものだから目を惹いたのだろう。どうやらあの母乳マニアの変質者の言うことは、正しかったようだ。この世界ではビー玉が本気で通貨の役割を担っているらしい。

「ここはケーンズパーク。古い言葉で始まりの街って意味らしいよ」
「始まりの街。もしヤツの言うとおりの仮想世界だとしたら、ヤツやヤツの仲間が作った世界かも知れない。神をも恐れぬ所業、なんてフ

レーズが浮かんだが、実際に無から作り上げたのか、既存の世界に洗脳を施したのか。どちらにせよ並大抵のことではない。一体どうやって？　そこまでで思考を切り上げた。到底思いつかないし、第一元々がビー玉を流通させていた世界なのかも知れないし、その起源を思うことに意味がなかった。今日の前に、そういう世界があつてそこで俺達は奴等の指示通り動いてみる。金になればそれでいい。ならなければ多少乱暴な手段に訴えても元の世界に帰させる。それだけだ。

「おばさん。どこか休める場所はないですか？」

「宿なら沢山あるさね」

ケツのポケットの感触を確かめようとして、奈々華をおぶっていることに気付いた。そして更に意味がないことに気付いた。俺の財布に入っている札も硬貨も、ここでは紙切れと鉄くずに等しい。

「……まあ行くアテがないなら広場にでも行ってみたらどうだい？

何かサーカスでも来るのか人だからが出来ていたようだからね」あれ、と眉間に皺を寄せた。休める場所と聞いたのに、人だかりの出きる場所を薦めるとはどういった見だろう。しかもお婆さんの声はこれまで会話したものと明らかに違って、少し硬質な声だった。機械が出すような、何かに操られているような……

「ねえお兄ちゃん。行ってみようよ」

奈々華が俺の顎に手を当てて、無精ひげをシヨリシヨリしながら言う。アンタ呑気でいいわね。

その化粧レンガのメインストリートをずっと北へ進むと、お婆さんが嘘を教える筈もなく、広場とやらにぶち当たった。河の水を利用しているのか、お約束のように噴水が中央にあり、落ちかけた太陽のオレンジを取り込んで綺麗だった。その噴水を取り巻くように人が、数十人は居ようか、ある一点を凝視していた。出で立ちはまちまち。俺達のように日本人らしき服装をした人も居れば、この世界にも溶け込めるだろう、キルトのドレスを着た女性も居た。

「あ！ サナたちだ」

奈々華の反応は早かった。背中を見ただけで友人達を識別したようだ。彼女等と付き合いの浅い俺には言われるまで、そうではないかというアタリすらつかなかった。確かに奈々華と同じ制服を着た少女と思しき背中が二つあった。一つは金の髪を肩甲骨の辺りまで伸ばしていて、中背。一つは黒い髪を肩にかかるくらいで切りそろえた小柄。どうしてここに？ アイツ等も拉致られたのか。偶然にしては中々憎い演出だ。偶然だろうか？

「早く行こうよ。サナたちが居るんだから大丈夫だよ」

ぺちぺちと俺の頬を優しく打つ。優しくればいいってもんじゃなくて、それは俺がその場から足を動かすまで止みそうにない。

「わかったからぺちぺちすんな」

思考を一旦止めて、背中のお姫様の意思に従った。

沼田と乾さんに挨拶を交わそうとすると、すぐに噴水の傍に立つ男に注意された。男と判断したのは、やはり野太い声を出していたから。先ほどの変質者と同じように、虎の顔に蛇が巻きついた悪趣味なお面をして、黒いローブで全身を隠している。ただ、同一人物ではないと判断したのは、男がローブ越しでもわかる屈強な肉体をしていたからだ。何かスポーツをやっていたのか。お面はやはりホームセンターか。どうでもいいことを考えていると、男がお面越しに俺達をねめつける。少し睨んだ後、手に持った名簿のようなものに目を落とす。

「お前たちが最後だな。ええっと城山仁。城山奈々華」
名前まで知っていやがる。名簿の端にレ点を打つ動作。

「ここに居るのは全員参加者か？」

「……そうだ」

改めてぐるりと見回すと、まさに人種も国籍も関係なく集められてようだ。麻の着物を着た男まで居る。まさか時代までまちまちじゃないだろうな。

「全員揃ったところで本ゲームの詳しい説明をする」

さっきのおばさんのことを思った。誘導したのではないだろうか。

「既に各自に冊子は渡っていると思うので、本会では補足的説明を行う」

そうして始まった説明会で伝えたいことは概ね三点に絞られた。第一義的な意味合いを持たせているのは「ビーリング」の装着の確認だった。なんだってこんなに推してくるのかよくわからなかったが、俺は奈々華に預けたそれを受け取るために、左手を差し出した。思えばどうして右手を出さなかったのかと悔やまれる限りだ。俺の左手をがっちり両手で掴んだ奈々華は、その薬指に指輪をはめた。一

瞬のことで何の反応も出来ないまま嵌った。奈々華は既に自分も同じ場所に指輪をはめていた。悪戯にしてはやりすぎだと思ったが、人目もある中で叱り付けたら恥の上塗りになると冷静な頭は判断してくれて、その場は何も言わずに流した。

次に説明があったのは「パートナーについて」の項目だった。いわくパートナー同士が百メートル以上離れると警告音が発生し、五分経っても両者の肉体の距離が百メートル以内におさまらない場合、失格と見なされる。これは四人、六人、八人……複数のプレイヤーたちの協力の可能性を示唆した。互いのパートナーと離れさえしなければ、同じようにしたツーマンセルを仲間に加えることが出来るのではないか、と。裏づけはその筋肉バカの説明を締めくくった言葉「この要件を満たさない限り、禁則三項にはあたらない」だった。

そして最後に、皆の一番の関心事であろう、ゲームの具体的な進め方に説明は移って行った。プレイヤーたちはこの世界にやって来たその時から二十四時間をこちらで過ごし、その中でビー玉を稼ぐということだ。ビー玉は貨幣と同じであるから、当然に労働の対価として支払われる。各町に、職業斡旋所のような場所があつて、そこでは長期、短期問わず仕事を紹介しているそう。この説明を聞いたとき、なんだやっぱり働かなくちゃいけないのか、と暗澹たる気持ちになった。しかし続く男の言葉で気持ちを直すことが出来た。「通常の、少なくともお前達が暮らしていた世界で真つ当な職に就くよりも遙かに高い賃金を確約しよう」とのこと。どうせ働かなきゃいけないなら割の良い方が良いに決まっている。

ゲームはこちらの世界での滞在時間が二十四時間に到達した時点で、その場所から元居た世界に強制送還。次回開始地点は、その強制送還を受けた場所からとなる。

「質問を受け付けよう」

日本人らしく大人しくしていよう、と思ったが誰も全く口を開かな

いものだから、仕方なく質問をぶつけてみることにした。欧米人はこういうとき積極的に質問をするなんて聞いたことがあるんだが、どうにもそっち系の人間達も何を質問していいかわからないという風だった。混乱覚めやらぬということか。まあ異世界慣れしている方が問題だが。

「ここに来るまでの間に会った街の人間、アレはロボットか？」

「ほう…… まさかこんなに早く気付く者が居るとはな」

なめてんのか。伊達に人の顔色ばかり窺って生きちゃいないんだよ。

「その通りだ」

男は少し嬉しそうに頷いた。明らかに俺達がいた世界よりも科学技術は上の集団が主催していることになる。さすがに自律の意思を持って人間と会話するロボットは開発されたとは聞いたことがない。

「じゃあ、アイツ等に暴力をふるっても罪には問われないのか？」

最悪壊してしまっても殺したことにはならないんだから、いやそもそも他プレイヤーには当たらないんだから失格にはならないのか？」

もしそうなら、奴等から金を巻き上げていけば働くより手っ取り早い。やらないけどね。やらないよ、流石に。多分。背中の奈々華が睨んでいるような気がしたので心の中で弱い否定。

「当仮想世界における治安維持機構によって相応の処罰が下される」さすがにそういう簡単な抜け道は用意していないか。

「そのお面は……」

「質問は以上です」

奈々華が口を挟んだ。

男が居たあたりが蛍光灯の何倍もの光に包まれて、直視が難しくな
って目を閉じる。再びおっかなびっくり開けたときには、そこには
人っ子一人見当たらなかった。広場に取り残された人間たちは今の
不可思議な現象に口をあぐり開けたり、自分なりの見解を知らな
い言葉で捲くし立てたり、収拾には時間がかかりそうだった。振り
返ると奈々華のお友達二人は、意外にも面食らっていないくて、沼田
は「マジであつたんだねえ」なんて呑気な言葉。乾さんは相変わら
ず何を考えているのかわからない、ポケッとした顔で俺を見上げて
いた。

「場所を変えよう」

周囲にもう一度目をやって、さっきの着物の男が「妖術じゃ」と騒
いでいて隣の俺達と変わらないくらいの年恰好、服装の女の子が呆
れたようにそれを見つめていた、俺は小さく二人に告げた。

場所を移動したのは、二つの理由からだった。あの広場で数人の人
間はこのゲームの本質に気付き策を弄するならこの場だと直感的に
悟っている雰囲気があった。狡猾で抜け目ない人間のいやらしく光
る目に俺は人一倍敏感であると自負している。まあ何の自慢にもな
らないけれど。もう一つは広場からこっそり抜け出した人間達。彼
らは逸早く職業幹旋所に向かったのではないか。説明をした男はど
れくらいの仕事を提供されているかは明言しなかった。最悪この街
の幹旋所には参加者全員が職に就けるだけの数がないかもしれない。
就けたとして、割のいい仕事はやはり早い者勝ちで、チンタラして
いるとポンカスみたいなしようなない仕事しか残っていない可能性
もある。そんなわけで俺達は職業幹旋所を街のロボットに聞いてそ
こへ向かっているところだった。

「マジの異世界っすよ！ ヤバイヤバイヤバイ。すげえテンション

上がってきた」

若さってのはある意味武器だな、なんて老いた考えも浮かぶのも仕方ない。通りを下りながら四人は並んで歩いていた。もっとも奈々華は俺に背負われているから、西日に伸ばされた影は三つだが。

「つていうかやっぱり奈々華とお兄さんなんすね」

「何がだよ」

茶化するような声音と、悪戯っぽい笑み。

「あれ？ 聞きませんでした？ このパートナーってのは色んな世界の色んな時代の人間の中から一番相性の良い人間同士が選ばれて、異性なら恋人同士、同性なら親友同士になりやすいって統計があるらしいっすよ」

奈々華の身体がピクリと動くのを背中で感じた。

「何の冗談だ」

「聞かなかったのかあ。ウチ等は真っ先に聞いてみたんすけどね」なるほどそれぞれあの広場に集められる前に、事前の説明は受けたようだ。そして俺がホームセンターのことを聞いているうちに、彼女等はパートナーの選考基準について聞いてみたようだ。

「どうしようお兄ちゃん。私達恋人になるんだって」

ならねえよ。落ち着け。統計なんてものを真に受けるんじゃない。奈々華を諫めようと口を開きかけた時、ふと乾さんが沼田の手を掴んでいるのが見えた。アレ、そっち系？ なんて思っていると、乾さんの指が沼田の手の平の上ですると動く。何か文字を書いているようだった。

「ああ。そうだねサナ。ウチが勝手に聞いたんだよね」

コクコクと乾さん。寡黙にも程度があって、その行動は既にそんな言葉で括れるほど単純ではなくて、まさかと思う。

「サナは口が利けないんですよ」

沼田がなんでもないような口調で言った。そこに何らの感情もなく、ただ厳然たる事実を告げただけという空気を出していた。ああ、と俺は思った。既に見当のついていた乾さんのことより、沼田の方

にこそ俺は感嘆した。そういう気遣いが出来る子なんだと。ついで奈々華の慧眼に感服せざるを得ない。染髪を禁止している進学校において、彼女は間違いなく不良のレッテルを貼られているだろう。だけどそんな見てくれじゃなくて、奈々華は本質を見抜いていた。そして俺は自分が恥ずかしくなった。

「舌が生まれつき良くなかったらしくて、音を出すことは出来るんですけど……」

「ああ、そうなんだ」

俺もなんでもないことのように返した。もしかして、沼田は乾さんが俺に見られていることも承知で先の行動をしたことの真意を読み取ったのかもしれない。俺を信用してくれたのか、はたまたこの流れの先を読んで共闘の可能性を感じたのかはわからないが、そうすると乾さんもとてとても賢く大人だということになる。何だよ、何だよ。妹のパンツ覗いたり、A Vに心躍らせたり、ガキは俺じゃねえか。だけど恥ずかしさよりも嬉しさが増してくる。

「これから奈々華と仲良くしてやってね」

自然と口が動いてそんな言葉を吐いていた。二人は不思議そうに顔をしばらく見合わせて、それでも最後には笑って頷いてくれた。

職業幹旋所は、メインストリートを折れた路地裏にあった。いかにもだねえ、と俺と沼田は珍しく意気投合。汚らしいドアをくぐるとそこには広場でも見た顔がいくつかあった。その中の白色人種の女性が「ハーイ」と気さくに声をかけてくれた。安ホテルの内装のようだった。板を張っただけのような室内には、分厚い眼鏡をかけた白髪の老婆が部屋の奥の長机からこちらを見つめた。

「外国の売春宿ってこんな感じだよね。偏見かも知れないけど」
攻めてみた。乾さんのむっとした顔が見れた。

「どれにするんだい？」

列は形成されていなくて、老婆は今しがた来た俺達に手元の帳簿を開く。狭い室内を歩くというより、身を寄せていくような感覚で老婆が座る机の前まで移動する。どれどれと奈々華が背中越しに覗く。背中の感触に、奈々華も成長しているんだなあ感慨深くなる。

帳簿を覗き込むとそれこそ色とりどりの仕事があった。不思議なことに日本語に見える。漢字まである。どういった仕組みなのだろうか、とやはり気になる。周りの明らかに日本人ではないだろう参加者達が特に不満を口にも顔に出していないということは、それぞれが読解できる言語で書かれている、ように見えるのだろうか。見る人間によって文字が変化する？　なにそれ、魔法？

「コレなんか簡単そうじゃないすか？」

同じように隣から顔を出した沼田が言う。言ってから存外俺達の顔の距離が近くて、照れたように笑って引っ込めた。意外と可愛いところもあるらしい。帳簿に目を戻すと、沼田が言った仕事の見当がつく。ペットが欲しいという内容だった。買いに行けばいいんじゃないかな？

「なんせ成功報酬が金のビー玉三十個ですよ」
金のビー玉が一個どれくらいの価値があるのかもわからないので、

俺は曖昧な顔をして振り返る。

「え？ 貨幣価値もわからないんすかあ？」

まだ時折イラッとする。悪気はないのだろうが、小バカにしたような口ぶりが出る。法則性は見つけてはいる。彼女が知っていて、俺が知らないことを話すとき、彼女はそういう口調になる。きつとあまり知識をひけらかすように映って欲しくないという思いから軽く話すのだろうと好意的に解釈はしているが。

「どれにするんだい？」

先ほどよりイラついた感じの声は老婆。ロボットにしては感情豊かなことで。

「これにしますよ」

そのペット募集の仕事を請け負った。老婆は机の引き出しから判子を取り出して、そのページの上部にポンと押した。

仕事の概要は依頼人から直接聞いてほしいということで、俺達はその依頼人の家に向かうことになった。幸いメインストリートに沿うように縦長の道と、それらを横断する道。丁度網の目のような作りになっているものだから、道に迷うことはなさそうだった。道すがら俺は沼田にさっきの詳細を尋ねることにした。

「ビーリングとか言う変なのあるでしょ？」

別に変じゃないだろう、と思ったが話の腰を折っても仕方ないので続きを促した。

「ガイドブック読んでないの？」

またタメ口。首を横に振ってやると「ちょっとちょっと頼みますよ、先輩」とよくわからないノリで返ってきた。こっちは奈々華を背負ってるんだから何かを読むなんて出来ない。

「ビーリングはビー玉を吸い込むんすよ」

「吸い込む？」

「プール機能もあるってこと」

確かにしばらくやっていたら、この仕事が上手く行けば既に三十の

ビー玉を手に入れることになるのだから、玉をジャラジャラ言わせながら通りをねり歩くななんて事態は想像に難くない。そういう不便を解消するための機能なのだろう。

「俺の二つの金の……」

玉も吸い込まれるのか？ と聞こうとしたところで奈々華が後ろから手加減なしに俺の頭を叩く。

「お兄さんモテないでしょ？」

「うるせえ」

沼田がハアと溜息をついて閑話休題。

「そんで最初に金のビー玉三つ入っているんです」

自分の右手の小指に嵌ったビーリングをかざして見せる。なるほど、文無しで放り出してグッドラックということではないようだ。

「そんでウチら早くこの街に着いたもんだから、試しに買い物してみたのさ」

「うん」

「パンを一つ買ったたら、銀が九個、銅が一つ返ってきた」

なるほど。金が一万円札くらいに当たって、銀が千円札、銅は五百円玉くらいか。あくまで俺達の考える物価だが無茶苦茶な推量でもないだろう。

「だから金三十個って言う……」

三十万。うまい。うますぎる。

依頼人は老夫婦だった。正確には老夫婦の出で立ちをしたロボットと言ふべきか。この老夫婦が一癖も二癖もあって、「夜分に恐れ入ります」と戸口で挨拶をする。「恐れ入るなら日を改めろ」と言つてのけた。それは爺さんの方だったが、婆さんの方も茶も出さずにロッキングチェアに掛けたまま編み物に没頭しているだけだった。ボケているのかな、なんて不謹慎なことを考えた瞬間に、物凄い形相で睨まれたものだから肝が冷えた。まさか人の思考を読めるなんてハイテクにも程があるだろと勘繰りながら、それでも下手なことは考えないようにした。

老夫婦はペットを限定してきた。「ローベルドッグ」という大型犬を所望したのだが、その犬に問題があった。非常に賢く毛並みの色艶もよく、市場では彼らが提示した報酬額よりも高い値で取引されているらしい。冗談じゃないと俺が契約の破棄を申し出かけたときに爺さん。「捕まえて来い」とのたまった。街を北に抜けてしばらく歩くと森に出る。そこに生息しているそうだ。

野生のローベルドッグは群れで行動する、そうだ。狩りや子育ても群れ単位で行うという話で、俺はどうにも狼を連想した。統制の取れた動きと鋭い牙を以って敵に立ち向かう一筋縄ではない相手。仔犬を捕まえて来いとの指令だった。もし俺の想像通り狼と似た生態なら、不安だけがいや増す。愛情溢れる生き物ではなかったか。想像が違っていてもこれからの群れの構成員を易々と手放す生き物はいないだろう。

期限を聞いてみると、特に定めないとのことだった。ただなるだけ早くとは注文がついた。「俺も妻も老い先短い身だからな」と言うてにやりと歯を見せた。軽口を叩いたのか、本気なのかわからないが、俺は辛うじて前者と判断して、苦笑いのような、愛想笑いのようなものを浮かべるしかなかった。ふと隣を見ると乾さんも同じよ

うな笑みを浮かべていた。

「どうするんすか？」

沼田に年長者を立てるなんて殊勝さがあるとも思えず、多分俺に丸投げしてきたのだろう。夫婦の家を後にした俺達はメインストリートをどちらに行くでもなく立ち止まっていた。空には半月とまばらな星が瞬いていた。夜だった。そこらへんのことも含めての裁量を求められているのだろう。

「宿を取ろう」

三万の入ったビーリングが四つあるのだから、今晚いきなり宿無しということもなからう。乾さんが俺の手を掴んだ。ドキッとしたのは一瞬で、すぐに何かを俺の手の平に書いていく。「二十四時間しかないのいいんですか？」と取れた。こっちに居られる時間は限られている。他のチームがしゃかりきに働いていることを思えば遅れを取ることにしかなかない。

「いや、奈々華を休ませたい。それに仕事は俺一人でやったほうがやりやすい」

つまりはそういうことだった。単独行動でこれから犬たちと戯れてくるつもりだ。沼田がニヤニヤと笑って「優しいですね、お兄ちゃん」とからかう。ほっとけ、と取り合わない。分が悪すぎる。

「一人で大丈夫？ 寂しくない？」

背中から奈々華。だから俺を何歳だと思ってるんだ。

「私なら大丈夫だよ？ もう足なんて全然痛くないから」

「あれ？ え？ あれ？」

「まあ奈々華。お兄さんがああ言っているんだから任せよう。アンタのお兄さん結構強いんでしょう？」

薄情な。結構強いという評価で野犬の群れに突撃させるとか。

結局乾、沼田ペアを宿に残して俺達は、ついてこなくていいと言ったが奈々華は聞かなかった、街を縦断して抜けた。

森まで来ると、空気は澄み、星が多くて夜の中であって意外に明るかった。天気が良いのも幸いした。まさか参加者の船出を祝して天候まで操れるのか、なんて馬鹿げた考えが浮かんで一人苦笑する。

「お兄ちゃんなんか嬉しそうだね」

「ああ。肩の荷、いや背中荷が下りて動きやすい」

「……ぶう」

唇を突き出して隣の奈々華が冗談ぽく怒ってみせる。気温も過ぎやすく、ひんやりとはしていても寒くはない。

「まあ、結構歩くことになるかもしれない。疲れたらまた負ぶってやるから言いなさい」

やれやれと優しい気持ちになる。やったあ、と奈々華。いつの間にか手ごろな木の枝を持っていて、それを魔法のステッキみたいのに、宙に円を書きながら歩いていた。

あてもなく歩いているわけではなかった。爺さんの話では森の中ほどに小さな滝があって、その近くに件の犬の群れが生息しているんだそう。ちなみにその滝は脈々北の山から流れ落ちる大きな河で、街へと注ぐそれだった。道中街と街を繋ぐ街道にも沿って流れていた。だから今は河沿いを上流へと歩いているわけだ。時折飛沫が頬を濡らして余計に清々しい気持ちになる。

滝が落ちる場所は、水の勢いが強く、長い年月をかけて地面を抉り、泉のようになる。雨だれが石を穿つよりもっと力強いプロセスを頭に描いてみる。

その泉から本流へと流れるその場所は、一際空気が湿度を帯びていて落差が少なくとも滝のダイナミズムを堪能できた。野生の犬がそういう場所を好むのかは知らないけれど、もしかしたら参加者にわかりやすい目印として半ばご都合に設定されたのかもしれない、飲

み水には困らなそうだった。

「ねえ、あれ」

奈々華が俺のシャツの袖をクイクイ引っ張る。言われるまでもなく気付いていた。河の対岸に目をやる。泉の隣には当然に木立が続いているわけだが、その中に茶色い体色の犬が一頭。アレがそうなのだろう。

「さしずめ見張りってとこだろうね」

犬は既に俺達を視認していて、警戒の色を濃く含んだ瞳でじっと見つめてくる。すぐさま群れの仲間を呼んで夜食を狩りに行こうという獐猛さは感じられなかった。こちらが手を出さなければ、群れに近づかなければ、自発的に襲ってくることはない、そういう賢さを感じた。夜食なら強くて賢い人間を相手にせずともウサギでもとればいい。

「どうするの？」

どうするもこうするも。

「行くしかないだろう。仕事を請けた以上」

奈々華にここで待っているように指示して、一人河へ近づく。近く少し太くて頑丈そうな枝を手折って武器とした。

見張りの犬が「わおーん」と大きく通る声で鳴いた。

犬たちをぼんやりと眺めた。多分オスなのだろう、後ろのより少し大きな身体をした数体の犬が牙を剥いてこちらを威嚇している。防波堤のようにメス達の前に立って進路を塞いでいる。グルルルと唸りながらも賢いコイツ等は恐らく俺とまともにやって勝てる算段がないのだ。野生の生き物はとても賢い。普通の動物ならそれこそ尻尾を巻いて逃げるのだろう。だけどそうしない。

繁殖期を迎えた彼らは、その後ろに子育ての最中のメスを守るのだ。現に目的である小さな犬を何匹か見つけた。メスの腹の下に庇われるように居る。大人の半分にも満たない。ほんの仔犬。つぶらな瞳には子供ながらに怯えを敏感に映していた。右手を見つめた。枝の

先端がひどく尖っているように見えた。これを振り回して、彼らの目の前でお父さん達を殴りつけるのか。気が入らない。仕事、言い聞かせても意味はない。

「……やめよう？」

警戒もそこそこに振り返ると奈々華が後を追ってきた。

「可哀想だよ」

まるつきり俺が悪者だ。実際そうなんだから困る。

「あ。別にお兄ちゃんを責めてるわけじゃないよ？ でも可哀想だから……」

そんなことはわかっている。お前はそんな薄情じゃない。やがて俺の右手から枝がするりと落ちる。地面に落ちて小さな音を立てた。オス達が様にギクリと身体を硬直させる。

「そうだな」

呟いていた。遮二無二金を稼いで、仮に優勝をモノにしても、奈々華に嫌われたんじゃない。いや、そもそも俺がやりたくない。気持ちの入らない仕事なんて…… 現実世界の、社会人になればイヤでもやることだ。今はそんなことをしてまで金を手にする必要は無い。楽しいことをして、こっちで暮らす僅かな金があればいい。隣で奈々華が笑っていて、沼田が俺をおちよくってきて、乾さんがにっこり微笑んでいればそれが一番いい。それはこのゲームの本質から逸脱しているだろうけど、知ったことか。

「邪魔したな。悪かった」

犬たちに謝る。ペットとして需要があるのだから、多分他の人間が子供達を攫いに来るだろうが、俺には関係ない。俺達がやることじゃない。そう思った。背を向けても襲い掛かってくる気配はなかった。そのままと来た道を引き返す。奈々華もいつの間にか木の枝を捨てていて、その空いた手が俺の手を柔らかく握り込んだ。

「寒くないか？」

暫く無言で歩いていた奈々華に俺から話をする。街道まで出てきていた。ここもコンクリートやらレンガやらで舗装されているわけではなく、幾人もの旅人達が踏みしめて、自然と草が生えない道が出来上がっていた。黄土の土には小さく、黒い斑点が出来上がっていた。さっきまでの晴天が嘘のように小雨。

「ちよつと寒いかも」

奈々華がきゅつと手を握り直す。片手でシャツのボタンを外すと、掛けるではなく留め金に嵌め込むタイプで良かったとどうでもいいことを考える、それを片手で巻くって奈々華に掛けてやる。きよんとした目で俺を見上げるが、すぐに何かにはつとしたような表情で捲くし立てる。

「いいよ。お兄ちゃんだって寒いでしょう。風邪ひいたら大変だよ」
冗談がきつい。俺が風邪なんてひいたこともないのを知っているくせに。

「大丈夫だから羽織ってなさい」
優しく笑ってやると、迷っていたような奈々華の顔も綻んだ。

「でも二人には何と言おうか？」

宿でぐっすり眠っているだろう二人のことだ。共同戦線を張ろうかどうかというところで最初の仕事をしくじって帰っていくわけだから、罵られることは二人の性格からないだろうが、心苦しいことには変わらない。

「二人とも良い子だよ？」

「そういう問題でもなくてだな……」

寧ろそれだから余計に心苦しい。

「お兄ちゃん気遣い過ぎだよ」

「え？」

「カナだって危なかったり嫌だったら帰って来いってくらいだったし、サナなんか始めから今日は疲れたから休もうってことしか考えなかったと思うよ」

「そうなの？」

言いながら複雑な気持ち。全幅とまではいかなくてもハナからこれっぽっちも信用されていないんじゃないのか、それ。

「勿論上手くいけばいいとは思っていただろうけど、私達に何がなんでもやらせようと思ってたわけじゃないよ。それは信頼されていないわけじゃなくて……」

なんて言ったらいいんだろう、と奈々華は首を捻る。

「まあ、兎に角素直に話せばわかってくれるし、怒ったりしないよ、二人とも。寧ろ見直すと思うな、お兄ちゃんのこと」

そうか、と微笑んでおく。それにしても見直すってことは俺の評価は二人の中でどうなっているんだろうと気になるが、奈々華に訊いてみるのもそれはそれで怖かった。

「カナはさ。お父さんが居ないんだ」

奈々華が何の脈絡もなく言った。もう街が見えてくる頃だった。どう答えて言いかかわからず、曖昧に苦笑してみる。俺達だってお父さんなんて居て居ないようなもんだろう、と。

「あんまり良いお父さんじゃなかったみたいで、カナが中学の時に離婚したんだって」

「うん」

奈々華はそれ以上語らなかった。まるで連絡事項を告げる淡白な担任のようだった。この情報から色々察せということなのかも知れなくて、果たして色々察する。彼女が高校生の身空で働いているのは、あのパンダみたいな化粧を保つツールを買うためだけではなくてそういう事情もあるのかもしれない。母親も忙しく働いているだろうから、小学生の弟の面倒も良く見ているのだろうか。乾さんのこと

も話したわけだから、近いうち彼女の口から直接そのことを聞くことになるのだろうか。いや、下手な同情を嫌いそうな彼女が話さなくても、万一込み入ったことを俺が聞いてしまつて難しい反応を迫られる事態を予め回避するように今奈々華は話したのか。様々な憶測が頭の中を乱舞する。

「奈々華」

「ん？」

「……いや、なんでもない」

君は賢いな。言葉にするのは野暮な気がした。

宿に戻るとそのまま力尽きたようにベッドに倒れ込んだ。ごろんと寝返りをうってみると、白いシーツに魚拓みたいに雨で湿った俺の身体の跡がついていた。

「そのまま寝たら本当に風邪引くよ？」

奈々華とは同室になっていた。ただでさえ安宿は少しでも経費を節減しようと考えた参加者達が埋め尽くして間に合わず、俺達はメイストリート沿いのそこそこ値のはるホテルに泊まっているのだから、当然といえば当然だった。何とかベッドだけは二つある部屋を取るという点は頑として譲らなかったが。

「大丈夫だよ。あんなのは心の弱いヤツがひくんだ」

「お兄ちゃんのメンタルが強い？」

失笑に近い笑み。バカにしやがって。何か仕返しという言葉がないかと思案しているうちに、コンコンと扉を叩く音がした。どうぞ、と奈々華。こんな時間に、信じられないことに時計のないこの世界では正確な時間を知ることが出来ないが空の具合なんかを見るととくに日付は変わっているだろう、高校生二人は起きていた。平素と変わらない飄々とした顔の沼田。少し瞼が腫れぼったい乾さん。

「どうだった？」

とやはり表情を変えずに聞く沼田に俺は苦笑を返すだけ。奈々華があらましを話し出した。

乾さんが奈々華の手を取って何かを書き込んでいくのをぼんやり眺めていると、沼田が俺を慰めるように声をかけた。

「お疲れっす」

「ああ」

何にもしていないけどな、とは卑屈すぎて付き合いを悪くするので胸の内にしまう。

「ああ…… まあ仕方ないっすよ。そういうことがあったんなら。ウチが一緒でもけしかけやしませんて」

声にしなくても、顔に出ていたのか。アゴヒゲを触ってどう返したものか思案する。今朝剃ったつてのにもう少し伸びている。

「家族が離れ離れになっても良い事なんてなんもないからね」

俺のベッドに腰掛けた沼田が小さく言う。やはり予め聞いていて良かったなと思った。部屋に備え付けられたソファーに乾と並んで腰掛けた奈々華の笑う声が聞こえる。あいつらは何をやっているんだ。

「……奈々華から聞いてますか？ ウチのこと」

「ん？ 君のことって？」

空とぼける。

「ウチの家庭。母子家庭なんですよ」

ふうん、と。沼田の顔を見ると、何かを勘付いているような雰囲気があった。多分奈々華に予め聞いていたことを悟っている。

「アタシが中二だったかな。ろくでもない親父とママが別れて……」

「それで君はバイトしてるの？」

「そ。まあ自分の小遣い稼ぎって意味合いが強いけど」

わかりやすい嘘だ。薄情に映ってもいいから、興味なさげに前髪をいじって気付かないフリを試してみる。

「まあそのワンコに同情するわけじゃなくて、単にサナのことだけ話して自分のこと話さないのはフェアーじゃないかなって思っただけっす」

つまらない話してスイマセン、と謝ってくる。

「それじゃ俺もフェアーじゃないなあ。君ら二人は俺のことあんまり知らないよな？」

何か障害を持っているだとか、不如意だとかそういうことはないけれど。それでも話すべきなんじゃないかと思う。

「知ってますよ。奈々華がいつも、特に最近はずげえ話すから」

何となくそういう可能性も考えなかったわけではないけど、わざとらしく眉間のあたりを揉む。

「公衆便所の壁にシヨンベン引っ掛けたこととか？」

「……初耳。何でそんなこと？」

「むしろくしゃしていた」

沼田が有り得ねえ、とゲラゲラ笑う。良かった。

「凡夫は中でするんだろうけど、俺はむしろ外でやってやるって感じだね」

「もう…… あんまり恥ずかしいことしないでよ」

いつの間にか奈々華と乾が俺達の傍までやって来ている。

「盗み聞きとは感心しないな、マイシスター」

「私だって聞きたくなかったよ。そんな社会に迷惑をかけている話」「かけたのは小便なんだがね」

今の上手くないか、と奈々華に目で問う。人形のように無感情な顔で首を横に振る。隣の乾さんを見る。視線を外された。

「話に聞くよりダメ人間すね」

沼田がそう締めた。

それから四人がまとまって今後のことを話した。まず爺さん婆さんにも正直にわけを話して謝ろう。明日は違う街に行ってみよう。

結局そんな話で落ち着いて、異世界での初めての夜は更けていった。

胸元にひやりとした感触がして一気に眠気が覚めた。頭の隅では牛乳パックに口をつけて直接飲もうとしたこと、そしてそれが上手くいかなくて零したことを認識していた。ついで上から手が伸びてきて牛乳を拭き取っていく。顔を上げると奈々華が柔らかく笑っている。ああなるほど、「可愛い」のだろう。奈々華は寝ぼけた俺をして「可愛い」と表現する。妹に可愛いがられる兄というのも示しがつかないのだが、彼女の好きにさせている。

「こぼちちゃったの？」

赤ちゃん言葉は容認できないが。ごしごしと布巾が俺の胸を擦るたび、ゆっくりと頭が覚醒していく。寝ぼけている間の記憶はいつだってモヤがかかったように曖昧だ。立ち上がって台所に向かって…… 何か引かかる。

「ほら。昨日もお風呂入らないで寝ちゃったんだから、目が覚めたら入ってしまいなさい」

お母さんよろしく、奈々華は相変わらず甲斐甲斐しい。昨日は風呂に入らなかったっけ？ 昨日。昨日…… はっと頭を殴られたように記憶が戻ってくる。立ち上がって辺りを見回す。フロアリングは奈々華が定期的にワックスをかけてピカピカ蛍光灯の白を反射している。目を上げる。カウンターキッチンには壁を一部切り取ったように向こう側を見渡せる。テーブルと椅子。白を基調にツツジの花をあしらった模様を混ぜたテーブルクロス。俺の家だ。

「奈々。俺達はいつの間に帰ってきたんだ？」

「まだ寝ぼけてるの？ お兄ちゃんが眠ってる間に二十四時間経って帰ってきたじゃん。さっき起きた時に帰って来たのかって呟いたよ？」

知らない。記憶にございません。奈々華は呆れ顔でお風呂入ってきなさいと繰り返した。

アコーディオンカーテンを緩慢な手つきで開けると、脱衣所。見慣れすぎた光景に本当に帰って来たのかと額に手を当てる。もしかするとアレは最初から俺が見ていた夢なんじゃなろうか、など思えてくる。着替えをポンと収納ラックの一番上の段に置く。下の段からボディータオルとバスタオル、フェイスタオルと取る順番も体が覚えたとおりのだ。ふと左手に目が止まる。指輪だ。アクセサリーの類を嫌う俺がこれを着けているのは、昨日の出来事が夢なんかじゃないことを訴えかける。そうだな、あんなリアルな夢があつてたまるか。逐一みんなの表情まで思い出せる。気の遣いすぎか。そんな中で奈々華の言葉が気になっている。奈々華はもう慣れたものだけど、二人はどうだろうか。付き合いが深まるにつれ、俺のその不必要なまでに気を揉む性根が受け入れられるだろうか。無理にテンションを上げていたような気もする。防衛策か。上半身を裸に剥いて、横にずれて洗面台に両手をつく。陶器のひんやりした温度が手の平に伝わる。鏡を見る。自信の欠片も見えないつまらない顔だ。ヒゲが伸びている。体ばかり大人になって、俺の心は成熟を果たしていないのではないか。

「やめよう」

厳しいもう一人の自分が顔を上げるたび、弱くて自分に甘いもう一人は顔を下げる。こうやって昨日の自分に本当の自分に負け続けて今の俺は成り立っている。指輪を引っ張る。痛い。もう一度引っ張る。引っ張る。引っ張る。

「……」

抜けねえんだけど、これ。

居間に戻るといつの間にか乾さんと沼田が居た。居間は広くて、さっきのテーブルはキッチンのカウンターに接しているわけで、部屋の奥まった場所に置いていて、専ら食事時に使うもの。普段はテレビに近い場所にガラスのテーブルを挟んで向かい合わせに置いた安物のソファアが憩いの場となっている。そこにちよこんと座る二人の姿が見えたのだ。丁度奈々華が盆に四人分の紅茶を載せて台所から運んでくる。

「服を着なさい」

「着てるよ」

パンツを履いている。言ってみただけだからそう睨むな、と鬼の形相の奈々華に心の中で屈して、シャツと半パンを取りに二階に上がった。

「改めていらっしやい。二人とも」

いつの間に来たのだろう、と思案するがシャワーの音でインターホンが掻き消された可能性を考える。二人が予めソファアにそれぞれ向かい合って座っていたものだから、俺は乾さんの横、奈々華は沼田の隣に腰掛けた。その乾さんが俺の手を遠慮がちに取る。「さっきも聞きましたよ」と指は走る。

「え？ 二人は俺が風呂に入っている間に来たんじゃないの？」

それは相当すつとぼけたことを言っているようで、沼田が対面でケラケラ笑う。「マジウける」とか何とか。

二人はこちらに帰って来てすぐに家に集まっていた。今後の予定について詰めるためだ。だが俺がくすぐっても叩いてもほっぺたを引っ張っても死んだように起きないので、もっとも一度目を開けて歓迎の言葉を吐いたらしいのだがさっぱり覚えていない、奈々華の部屋でゲームをして時間を潰していたそう。起床の報が奈々華から

入って階下に下りて来たというからくり。待たせた侘びを三人に入
れて、紅茶に口をつけたあたりで本題が始まった。

「まずは一つ困ったことをお兄さんに。ついで皆がそれぞれ気付い
たことを話そうと思います」

学級会みたいなノリだ。沼田が中々楽しそうだから余計にそんな風
に見える。

「困ったこと？」

奈々華が携帯をつまんで開く。俺と一緒に映った写メールを待ち受
けにしているのはこの際些事だ。意味なくそういうことをしている
わけではないだろうから、しばらく見つめていて、はたと気付く。
日付が昨日より一つ進んでいる。そしてすぐに今までのことを思う。
なかったケースだ。異世界慣れした俺だが、今までのものは戻って
くると旅立った時間きっかりに帰って来ていた。

「こっちに時間の経過が反映されるのか」

「おかげで私達昨日は消失、今日はサボリだよ」

奈々華が冗談めかして言う内容は冗談でもなんでもない。

「まあ元々自由参加だからどやされはしないけど」

と沼田が補足。乾さんが再び手の平を掴んで走り書く。「最初に気
付いたのアタシなんですよ」ということらしい。いつも奈々華や沼
田に伝えている内容はこんなに可愛らしいのか、と頬が緩む。って
そんな場合じゃない。

「マズインじゃないのか？」

「不味くても美味くても、仕方ないっしょ」

それはそうだが。奈々華の顔をうかがう。俺の視線に気付いて弱々
しく笑う。折角真面目に勉強している彼女等が何だか可哀想だ、と
単純に思った。

次は各自が気付いたことについてだった。ディスカッションの授業
を思い出す。はぐらかすように教授と趣味の話に花を咲かせている
と真面目そうな同級の男子学生に怒られたっけ。「まずは奈々華か

ら」と沼田が振ると、奈々華はちよつと考えてから口を開いた。

「お兄ちゃんが靴を履いていた」

すぐさま乾さんが書き書き。「お兄さん靴履けないんですか？」ツボに入るからやめてくれ。俺は確かにカスだけど、まさか自分で靴も履けないほどではない。ギリギリひとりでできるもん。「なんとか履けるよ」と返してやると、乾さんも冗談だったらしくニコニコと虫も殺さないような笑顔を見せてくれる。案外ポヤポヤしているだけではないみたいだ。

「お兄ちゃんはトドみたいにいびきかいて寝てたはずなのに」トドって。

「お兄さんっていつも寝てるの？」

人をナマケモノみたいに。

「大抵はね」

「……コラ。お前等」

本人を前にとどまることを知らない雑言の数々を、必死に止めつつ。俺もそれは気になっていた。確かにあっちに居た時には初めから靴下まで履いていた。

「周囲に迷惑がかからないように配慮されているのかな？」

奈々華が憶測を言う。

「別に俺が素足だって周囲に迷惑がかかるか？」

所詮は憶測だ。奈々華もまだまだだな。

「あんな臭いのに裸足だなんて…… バイオテロの域だよ」

「……」

「なるほど。それじゃあウチらも周りに気付かれないように消えてたかも。気付いたら居ないみたいだな」

それだと確かにアイツ等ふけやがった程度の認識しか持たれない筈。乾さんがサラサラと手の平に。早くも慣れつつあった。「お兄さんの足そんなに臭いんですか？」 乾さんはSかもしれない。

「じゃあ俺からも」

と切り出しながら、頭の中でどういう言葉を使って説明しようか思案をめぐらせていた。伝えないでやり過ぎすということは頭になかった。彼女等にも危険の一端を理解しておいてもらったほうが都合がいい。

「まずは街を変えようって話と関連するんだが……」

このゲームの本質と言ってもいいかもしれない。

「危険だということだ」

「危険？」

奈々華がきよんとする。小さく頭を振って頷いてやる。

「マネーゲームって言ったら君らはどういうのを想像する？」

乾さんの反応が早かった。「お互いのお金を賭けてゲームして、騙して騙されて……」そこで俺は再び大きく頷いてみせる。

「禁則一項になんて書いてあった？」

続けて乾さんの顔を見て尋ねる。乾さんは少し思案顔をして、それから気付いたようだった。

「そう。このゲームってさ、一見真面目に働いて金を稼ぐゲームなんだけど…… 勿論そういうプレイヤーも居るだろうし、俺達はそうしようとしているからそれも側面としては正しくて」

結局言葉がくるくるとうわ滑るような気持ちだった。やっぱり俺はディベートに向いていないな、と。だけど聡明な我が妹も俺が言いたいことに気付いたらしく神妙な顔をしている。

「けどもう一つの側面として、乾さんが思ったような互いの持ち金を奪い合う頭脳戦だって出来るんだ」

思えば法律の文言のように書かれたガイドブックは、穴を突く輩に隙を与えそうだった。

「詐取ってのは暴力行為にはどうあっても含まれないだろう？」

沼田も顎に手を当てて、テーブルを漫然と見つめていたが、なるほどと呟いた。そしてそのまま顔を上げて、

「でも普通、全く知らない人間に協力を持ちかけられたら警戒されませんか？」

「ああ。だけど、仕事の帳簿を見て気付いたんだが、専門的な技術を要求してくるものも散見された。協力が効率が良いのは明白だ」
足の上に肘を置いて両手を組む。ぐっと奈々華の下半身が近づいて見える。綺麗な足だ。

「自分に専門の知識や技術がないと、本来なら忌避するところも協力によって補える可能性が増える。それは他プレイヤーの可能性を摘むことにもなる」

当然にそういった仕事は割が高いのだから、誰でも出来るような内容の働き口で半日働くのとは差が出る。お互いに違う畑の専門家チームが組めば、時間効率という点で他が及びようがない。

「だから協力が全くナンセンスではないんだ。だからこそ付け入る隙がある」

そして付け入られる隙もある。所詮このゲームの勝者は一チームなのだから、どこかでは協力は解消されるだろう。だけどそれまでは利用しようとお互いに思うのだ。そしてその解消は、自分達のツーマンセルが相手からビー玉を騙し取った後行われるのが尚良い。三人が三人難しい顔をしている。俺が言った内容を正しく消化していると良い。ややあって沼田。

「でも騙されることを警戒されているんなら、そう簡単に騙せないんじゃないですか？」

甘いなあ、と口には出さずに。口から産まれてきた様な輩なんてゴロゴロ居る。それに、

「最悪騙せなかったら隙を見て指輪を破壊するって手もある」

「え？ でもそれって」

そう。ここからは実は不確実だ。だけどあの文言を読む限り、指輪への攻撃は暴力行為とは考えない。だけど、確証はないけれど、恐

らく俺の推測は正しい。乾さんが「指輪への攻撃は暴力行為に当たらないかもしれない？」と聞いてくる。「そういうこと」と頷く。出来の良い生徒に教える教師のように、胸のうかがスカッとするような理解の早さだ。

「ダメならば明言してても良さそうだろう？ それに殺人についてはゲームのホストが、傷害については治安維持機構がその裁量を担っているってのは多分このからくりのためだ」

「どゆこと？」

沼田がヘルプ。

「警察を思えばいい。いくら迅速な対応をする警官が居ても、指輪を壊されて、即座に失格となるんだから、普通は現場に到着しても誰も居ない。壊した側の人間はいるかも知れないけど。それにもし万が一にも鬼のように警官がパトカーを走らせてその現場に間に合ったとしても多分意味はない。一般人、つまりロボット達は指輪をしていない。浸透していないと考えると、たかだか指輪を壊したとして重罪に問われるとは到底考えられない」

ほとんど民事だ。あちらの世界の警察が民事不介入かは知らないけど、せいぜい示談を勧める程度だろう。殊更感心したように沼田が何度も首を振る。

「お兄さんて何も考えてなさそうで考えているんですね？」

「どうも」

過大評価とまでは言わないが、もう少し年長者らしく扱ってもらえないかなと思う。

「だから最初の街には、当然に参加者が沢山居るんだから、そういう連中も居るだろうってことさ」

それに仕事も限りがあるようだから、競合が起きかねない。諸々考慮すると街を移動しておいた方が賢明だろうということだ。

結局俺の言いたいことを要点だけ伝えと、知らない人と不用意に話さない、付いていかないという子供に口酸っぱく言うような内容だった。そんなふうに考えてしまうと自分の話が急に照れくさくなった。つまり二人に偉そうに振舞っているように映らないか気になった。「気を遣いすぎ」奈々華が言った言葉が鼓膜に貼りついていゝるみたいだった。

「そういうわけだから他のプレイヤーとは安易に接触しないで欲しい」

自分で言って、これも勝手な言い分に聞こえた。この子たちとはしばらく行動を共にするだろうが、実際に彼女等がどういう意図を持っているかわからない。俺は、多分奈々華も、そこまで必死に優勝を狙いに行っていない。そりゃ俺だって金は欲しい。だけど優勝を狙うのならそういう狡猾で、他者を蹴落とすことに微塵も躊躇しない輩とやりあわなければいけないかもしれない。単にリスクとリワードの話だ。奈々華の安全や心証を最優先するなら、論外ということ。奈々華はアキレス腱だ。狙われると弱い。だけどないと俺は歩けない。

だけどこの子達はどうだろうか。優勝を狙っているのだとしたら、俺達と組むより多少の危険を冒してでも他者を利用する側に回ろうとしないだろうか。特に沼田は…… 考えの途中でその沼田が俺を見て言った。

「でも…… ウチ等は無理に優勝は狙いにいかないって決めたんすけど…… 奈々華とお兄さんはどうなんですか？ ウチ等足手まといになりませんか？」

驚いた。まるで脳内の思考を読まれたような言に、組んでいた指をほどき、のけぞるように背をソファに預けた。乾さんがすかさず補足。「えっと。お金に執着したりするのは嫌だから。今のお兄さ

んの話し聞いて余計に。命は奪われないけど、そんな人たちと関わって嫌な思いするのは怖い」乾さんの小さな指が俺の手の平をくすぐるたび、頭で上った気温が冷めていくような気分だった。

「士気が低いって言うか、志が低いって言うか、やりにくくありませんか？」

冷めて、自分を殴りつけたい衝動に駆られていた。俺はさっき何と考えかけた。沼田の家庭環境を思って勝手に彼女の人格まで決め付けていたんじゃないか。最低だ。

「私達も無理に優勝は狙わないよ。ね、お兄ちゃん？」

俺の心中を察しているわけではないだろうが、口を閉じてしまった俺に奈々華が優しく問いかける。本当にこの子には頭が上がらない。「ああ」と情けない声が出て内心苦笑した。

沼田と乾の話は実に有益だった。

「銀行があるんすよ」

いつもの調子で始まった彼女の話に俺は途中から熱心に耳を傾けざるを得なかった。彼女の話では街のメインストリート、河を挟んだ西側に銀行を見つけたというのだ。「カルパッチョ銀行」と看板が出ていたそう。カルパッチョがあるのかな。いやないだろう。イタリアがない。とか何とか、奈々華と二言三言かわす。話の腰を折られた沼田はぶう垂れて話をやめようとしたが、謝って宥めすかす続けた。

「そこに二人、ウチ等と同じような格好の、つっても多分外国人だろうけど、女の人が入ってたんすよ」

乾さんがまた補足説明。彼女の立ち回りは、こと沼田とのコンビネーションにおいては、そういう役らしい。「他の人たちより話しが聞きやすそうだったから、私等も行ってみることにしたんです」さつきより文面は短いのに敏感なところに触れたのか、くすぐったい。「その人たちがウチ等と同じような感じなんかなあって、後を追ってみたんですよ」

かぶったね、と乾さんをからかおうかと思ったが、また沼田がへそを曲げて面倒くさいのでやめる。

「そしたらそってマジで銀行だったんすよ」

マジじゃない銀行ってのは、行員が野菜を売っていたり、ATMがオモチャだったり？ まあ言いたいことはわかる。こっちで見るのとほとんど変わらなかったのだろう。

「ほんで女の人たちは銀行のATMに行って操作してたんすよね。話しかけようとしたんですけど二人で真剣な顔して話しこんでたら、話しかけづらくて」

「なるほどな。それで？」

「だからウチ等も仕方なく何もせずに帰るのは格好悪いから、隣の機械を触ってみたんすよ」
日本人根性丸出しだ。

「そしたらビーリングをかざす場所があって、かざしてみたら色々情報が出てきたんですよ」

口元に手を当てて考える。情報。

「もしかして三万入っているってわかったのはそのせいかな？」

正確にはおよそ三万だが。「いえいえ、説明書に書いていますよ」と乾さん。後できっちり読もう。沼田が乾さんと俺の会話を待っている様子があって、ここらへんは慣れたもんだなと思う、俺は質問を変える。

「他にはどんな情報があったんだ？」

「参加者の名前と、その持ち金すね。あとは……　なんかあったかな？　なかったと思う」

俺が気になったのは、その外国人の二人組だった。彼女等は銀行の機能を予め知っていたのだろうか。それとも単に入ってみただけだろうか。

銀行で確認できる情報。これは俺の先ほどの推測をほぼ裏打ちすることになる。黙認どころか、実はけしかけている。騙しあいの取り合いを。持ち金まで表示するということは、そういうことだ。ライ

バルを蹴落とせ、と暗に焚きつけている。気にいらねえ。

異世界の話はそれで打ち止めとなった。次の一日は老夫婦に仕事の失敗を謝りに行った後、そのカルパッチョだかトトカルチョだかに寄ってみて、それから街を移動しようという話で落ち着いた。

ソファーに横になると、奈々華の膝枕に後頭部を沈める。いつも通り高さも柔らかさも完璧だ。苦しゅうない。そのまま横を向くと奈々華のお腹辺りを見つめる。指が頬に触れる感触。耳にふわふわとした綿毛が差し込まれる。優しく、それでいて時々強く耳垢をほじくる。苦しゅうない。

「お兄さんって、人の尊厳みたいなのはなんでしょうか？」
失礼なパンダだな。中国に送り返せ。

「あるわけないだろうが」

会話が途切れる。そもそも妹に耳かきをされてケツを向けている人間とまともに会話をしようというのがどうかしている。つまり俺は悪くない。溶けた飴のようにグジグジした地帯を、奈々華の綿棒が捉える。引き抜くと、耳の通りが即効に良くなったような気がするものだから人ってのは単純だ。

「おお。いいぞ奈々華。まだ居るから沢山ほじりだしてくれ」

「はいはい」

グリグリ、グジュグジュ、と擬音を頭の中で補っていると何だか楽しくなってきた。本当に俺は一体何歳児なんだろうな。

「まあなんていうか、ラブラブで結構なことだ」

沼田が呆れた口調で言う。後ろを向けているものだからわからないが、口ほどに顔は冷たくなって、丁度猿の毛繕いでも見るように和やかなんじゃないかと思う。

「そうそう。ラブラブだよ、お兄ちゃん？」

そこで腸の動きを感じる。弛緩しきった体はケツの締めりも当然に悪くする。ブバツと良い感じの屁が出る。パチンと頬の上で何かが弾けたような感触。手加減された奈々華の張り手だ。

「無視しないでよ」

「屁んじしただろう」

「おならで返事された人の気持ちって考えたことある？」

そういえばないな。奈々華は俺の前であまりしたことがない。いやむしろ…… 頭の中の記憶を探る。聞いたことがないかもしれない。

「今度お兄ちゃんに聞かせてくれないか？ 君のおなら」

「変態」

「変態」

奈々華と沼田の口撃はほぼ同時だった。

「でも本当にしばらく話もろくにしなかったなんて信じられないです
ね、だって」

乾さんの筆談を沼田が読んだ。何のことを言っているんだ、と頭を動かしたのは一瞬。すぐに二人の雰囲気から俺達兄妹のことを話しているのだとわかった。確かに俺達には三年近くの空白がある。嫌われたと思い込んだ俺が勝手に奈々華を避けていた。

俺は隣に座る奈々華を流し見る。君はそんなことまで話していたのか。責めるつもりは毛頭ない。彼女が信頼して話したのだろうから、俺から言うことはない。

「なんかお兄さんのシスコンを治すために距離を置いていたとか聞いてたけど……」

あるなあ。言うこと。言いたいこと。奈々華の顔を覗きこむようにして見つめる。いや、眉を無理矢理寄せてガンを飛ばす。気付いてないわけがないのに、奈々華は俺と視線を合わせようとしない。方便を使うにしても、随分と都合が良い嘘じゃないですか、奈々華さんよお。

「どうも逆みたいですな」

良いぞ沼田。思考の表面は楽に考えている。だけど奥の方では、逆だろうかと自問。俺の奈々華への依存度もちよつと半端ない。意味のないガン飛ばしをやめて前を見る。沼田も乾さんも女性を感じさせる優しい笑み。ああ、なるほど。透徹されている。沼田は口では俺の方を立てただけのようだ。

「でも良かったです。最近の奈々華楽しそうだから」

また乾さんが沼田の指の動きを言語化する。

「大変だよ。大きな赤ちゃんを世話してるようなもんだから」

咄嗟に反論しかけて開いた口はそのまま音を発することなく閉じられる。返す言葉がない。やはり二人はそんな奈々華の照れ隠しも見抜いていて相好を崩したまま。

義務だ。そう思った。異世界でのことだ。この三人の子供達の笑顔を守ろう。義務は自分で自分に課す掟のようなものだ。俺はやりたくないことはしないから。

沼田がアルバイトの就業時間が近づいているとかで帰ると言い出し、俺と奈々華は二人を送っていくことになって、楽しい時間は終わった。誰かとの会話の終了に、名残惜しさすら感じるのは俺にとって中々珍しいことだった。

二人を送ったあと、晩飯の話になった。テレビでは忍者の卵が色々な事件に巻き込まれて、悪戦苦闘するアニメが流れている頃合だ。助手席にちょこんと座る奈々華に目だけ動かして話しかける。

「どうする？ 何か買って帰るか？ 外食しようか？」

「お兄ちゃんに任せる。作ってもいいよ？」

奈々華はそう言うと思った。

「奈々ちゃんも疲れているだろう？ 色々あったし」

環境の急激な変化。精神の疲れは身体の疲れにもリンクする。

「私は別に。お兄ちゃんにおんぶしてもらってたし」

あの仮病を思っただけで苦笑する。だけど言葉に奈々華の気遣いも含まれていることに、俺はちゃんと気付いている。俺は今あまり金がない。自業自得の困窮だが、この出来た妹はそこを考慮に入れてくれている。じゃないと奈々華が俺との外食を渋ることはない。作るのが面倒とかそういうことなく、単純に俺と外で食事をするのを喜んでくれる。倒錯しようにすらなる純真さで、俺はいつも温かい気持ちになる。

「ファミレスにしようか？」

「……うん。お兄ちゃんが食べたいところで」

決定。最後は折れてくれる。口ではなんやかんや言うが、根底にはちゃんと俺に敬意を持っているようで、主導権を渡してくれる。少しの沈黙を挟んで、俺は口を開いた。

「なあ。奈々華。俺のお嫁さんになってくれないか？」

結婚するならこんな子が良いな、と思ったらそういう冗談も出てきた。人をドン引きさせるような冗談を軽く口に出来る俺はやはり一流なのだと思う。一流のカスなんだろうと。きもいという言葉は誉め言葉と言わんばかりに奈々華の返答を待っていると、想定外の動きをした。

「え？ でも、え？ そんな。本当に…… え？ 嘘」
テンパリ過ぎだ。

「……冗談だよ？」

なあんだ。やめてよお兄ちゃん。そんな返事をまた予測する。またまた裏切られる。明らかに怒った顔を一瞬見せて、肘を窓際につけてそこに顎を乗せて景色に没頭しだす。こっちから見えるのはやや斜めの後頭部だけ。

「あれ？ 奈々華？」

「……」

「おおい。なっちゃんや」

「……」

返事がない。ただの妹のようだ。やってしまったかな、と今更ながら反省する。行き過ぎた冗談だった。ほんの少しだけ、俺の理想の女性を重ねて見てしまったことが、照れくさくて戒めたくて、考えなしに言ってしまった。難しい、とつくづく思う。いくら大人びていると言ってもこの子は難しい年頃だ。そのことを忘れて、まるで年上の女性を相手にしているような錯覚が心を支配している時がある。

奈々華の後頭部をまたチラリと窺って、短くなった煙草を備え付けの灰皿に押し付けた。

ファミレスで向かい合わせに座っても、奈々華は伏し目がちで、俺が何を言っても無愛想な返事が返ってくれば良い方だった。仕方がないから俺は奈々華の胸元に目をやる。彼女にしては珍しく少し開いた服を着ていた。左の胸のつけねに小さなほくろが見えた。その上、ネックレスは俺があげたものだ。数字の七を重厚なメタリックの銀装飾で囲んで、中々いかす。奈々華とかけたつもりであげた半分ギヤグだったけど、大層喜んでくれた。

いよいよ悪いことをした、と思いはじめる。折角楽しい気持ちで、俺があげたネックレスまでつけてくれている奈々華を嫌な気持ちに

させてしまった。どうして、いつも勢いだけで物を言ってしまうのだろう。

「……決まった？」

メニューに目を落としていた奈々華は、コクンと小さく首を縦に振った。店員を呼んで注文を受けてもらおう。奈々華は言葉数すくなく、「コレを」とメニューの写真を指差してした。

気まずい雰囲気料理より堪能させられて、俺はげんなりしながら部屋に居た。コンコンとノックがしたのは座椅子にだれながら煙草を二本吸い終わった頃。「どうぞ」と丁寧な言葉が出て、改めて自分の妹への依存を確認した気持ちになる。もう失いたくはないんだ。仲直りのことしか考えていない。

ガチャリとドアノブが回り、奈々華の姿が見える。やはり目を合わせないままズカズカと入ってきて、俺の膝の上に座る。手には教材がある。

「今日は学校行かなかっただろう？」

「だから」

それだけじゃわかんない。と思ったけど、だから今日の範囲を自分でやっておくということなのかと推測が立つ。果たして教材を開いて、それは教科書だった、黙って読んでから例題を解いていた。いつもは付属の問題集を開いてそれをやっていることを考えると恐らくは俺の推察どおり。しばらく睨めっこと鉛筆を動かす作業を交互にやっていて、部屋には沈黙が生まれる。

「そこ間違ってるよ？」

そもそも使う公式が違う。何をやっているんだ、と不思議に思う。奈々華は返事もなく、消しゴムを動かす。

「また間違ってるよ？」

また公式が違う。やはりおかしい。普段なら有り得ない間違い方だ。そこでやっところさ間抜けな俺は気付く。謝る機会と時間をくれている。何のために俺の部屋に来た？ わざと間違って時間を使ってい

るのは何のためだ？ おっきな赤ちゃん。言いえて妙。

「奈々華、ごめんよ。俺考えが足りなかった」

「……」

「冗談でも言っていることと悪いことがあるよな…… ほんとにごめん」

「反省してる？ ていうか本当にわかってる？」

顔はこちらに向けず。

「わかってるよ。もう二度とあんなこと言わない」

「……」

「奈々華？」

顔が見えない。何を考えている？ 何を思っている？ はあ、と溜

息。疲れたような呆れたような。

「もういいよ。私も身勝手だった」

身勝手？ 何がどう身勝手だったのだろう。どちらかという身勝手は俺だった気がするのだが。ポンと鉛筆を教科書の上に投げて、奈々華は俺の腹に背を預ける。

「ずり落ちそうだから支えてて」

俺は足を伸ばしていて、奈々華は俺の膝小僧の手前に腰を落ち着けているのだからずり落ちるってことはない。口にするほど野暮だったらいよいよ愛想を尽かされてしまったかも知れないけど、俺は黙って奈々華のお腹に手を回す。柔らかい。温かい。変態。言いえて妙。いやそのものか。

サラサラと問題を解いていく奈々華は、あとは指摘する部分すらなく、しばらく鉛筆の音だけが俺の部屋を支配していた。

夜中に目が覚めた。汗なのか涙なのかわからない液体で滲んだ視界に、白い変哲のない部屋の壁が映る。カタカタと震えていることに気付く。どんな夢を見たのか思い出せない。だけど嫌な、怖い夢だったのだろうとは容易にわかる。身体を抱こうと腕を動かしかけたとき、そっと胸に腕が回ってきた。俺のじゃない。驚いて首を動かすと、奈々華が居た。砂漠にオアシスを見つけたように、心の中に言葉に出来ないほどの安堵が広がる。いつの間に、俺の部屋の俺のベッドに入り込んでいる。

「大丈夫だから」

そう呟いた。俺がこっちに帰ってきて一週間、これで三度目だ。つまりは燃えるゴミの回収日みたいに頻繁だった。しばらくしたら収まるのだろうか。延々と、生きる限り、続くのだろうか。

奈々華の組まれた指を見る。小さな手だ。俺のより一回り小さい。魔法だ。ぼんやりと思った。そうじゃなきゃ説明がつかない。こんな小さな手が、毎日食卓に座ると美味しい飯を食わせてくれる。毎日ダンスを開けると綺麗な服をしまっていてくれる。毎日汚い俺の部屋を綺麗にしてくれている。毎日俺がうなされていないかチェックして、そうやっていたらこうして抱いてくれる。その小さな手で「大丈夫だから」

繰り返す。耳に心地良く、身体が心地良く、母親が子守唄を歌う傍の揺り籠に揺られるように、俺はもう一度眠ることが出来るらしい。意識が遠のく感覚。上も下も横も縦もない暗い闇に包まれるというのに、そこには俺を苦しめる意識の片鱗がいるかもしれないのに、背中にある体温が絶対で不変で普遍だから、そう思えるから心の底からの安心をくれる。光だ。薄れ行く意識の底で思った。

伸びをする。寝苦しい夜だった。目を擦ると、視界が開けて、昨日寝る前に見た景色と全く違う光景を脳に伝えてくる。その主原因は主に二つだった。一つは、すぐ隣の布団のふくらみ。奈々華だ。いつの間にこの甘えたは、と微笑みかけたところで、夜中に一度目をさましたことを思い出す。霞に覆われたように判然としないけど、奈々華に抱かれていたような気がする。胸に微かな体温が残っているような気がする。また守ってもらったのかもしれないと瞳を閉じて、心地良さそうに眠る奈々華に心の中で無尽の感謝を告げる。もう一つは、見知らぬ部屋の内装だった。正確には全く知らないわけではない。ただ馴染みがない。白い壁紙にはヤニに黄ばんだ跡もなく、境界を見誤りそうなほど同じように白いカーペットにも煙草の灰を落とした跡がなくて、木で出来たテーブルは頑丈そうで、白いポリエステルの皮を被ったソファも座り心地が良さそうだ。異世界の最後に見た部屋だった。

「奈々華」

肩のあたりを持って少し揺すってみる。寝覚めの良い彼女はすぐに目を開ける。「おはよう」と眠たい子供が出す、甘えるような声で挨拶をしてくれた。俺も返すと自然と笑みを含んだ声音になっていて、微笑んでいることに気付く。だけどそんな和んだ空気を俺が保っていられるのもその間だけだった。

奈々華が起き上がると、俺はさすがに目のやり場に困った。寝苦しい夜に、奈々華のパジャマは第二ボタンまで外れていて、白い肌が露出していた。昨日の夜、膝の上に座る奈々華の胸元から偶然視認出来た水色の下着はつけていないようだった。良い所、いや際どい所まで見えそうだ。ガン見したい欲望に辛勝、視線を外してベッドを下りる。

「また来たんだね」

奈々華が背後から声をかけてくる。みたいだね、と小さく返す。そのまま歩いて、朝日を遮ってぼんやり白んでいたカーテンを開ける。二階から見渡すとレンガの尖塔に太陽が突き刺さっていた。

沼田と乾さんと合流すると、既に日は昇りきっていた。女の子は準備に時間がかかりすぎる。左手に嵌めて寝たはずの腕時計はなくなっていた。奈々華の説に一捻り加える。俺達が行動するのに都合がいいようにしているとは一概に言えないのではないか。とにかく時間はわからないが、十時くらいなんじゃないかと根拠なく思う、朝日に目を細めながら四人はメインストリートを歩いた。

爺さん婆さんの家は、夜見たより小奇麗に映った。眩い太陽の光か、周囲の軒先にアーケードが連なって元気の良い声が飛び交っているせいだろうか。レンガに鉄の枠を嵌めて、その鉄の枠に木の板を張った扉は手の甲で叩くとゴンゴンと鈍い音を響かせた。すぐに内側に開かれて、胡散臭いものを見るような目で爺さんが出迎えてくれる。

「朝早くに恐れ入ります」

「恐れ入るなら出直せ」

言いながらも戸を開け放って俺達を中に誘導する。前回のやり取りで爺さんの偏屈には多少は耐性がついたつもり俺も思わず頬がっりあがる。素直に、よく来たくらい言ってくれないか。

「すみません。以前受けたお話なのですが……」

立ち位置も定まらないまま、俺は開口一番に本題を選んだ。変に回りくどくするとこの爺さんは嫌がりそうだ。そんな直感が働いていた。自分のロッキングチェアに、婆さんが座るもののすぐ近くにある、腰掛けた爺さんは眉一つ動かさないまま、婆さんの膝の上を目をやった。編み物ではなく、猫を抱いている。

「アレはもういい。婆さんの気が変わって猫にした」

おいおい。まあ都合がいい。それじゃあなかったことに、という話の流れを予想していた俺は爺さんの瞳が品定めするように俺達を見

ているのに気付いた。

「見たところ仕事はまだやっていないようだが、途中経過と言うところか？ 中々律儀な若者だ」

「はあ」

いきなり話が変わった。一体何なんだ。人を律儀不義理判断する前に、アンタ俺達がローベルドッグを捕まえてきたらどうする気だったんだ。そうも言いたくなる。

「まあこちらとしては好都合だ」

「……何がでしようか？」

受けながら嫌な予感がしていた。

「犬はいいから、少し火急の仕事をこなしてもらいたい」
的中。爛々と輝く爺さんの瞳。

「実は隣町の息子の畑で何チャラ言うサツマイモを作っているんだが、それがだいひつとしたらしくて人手が足りないと嘆いていてな……」

火急。取り急ぎの用。対策が急務の問題。イモ。ぐるぐる単語は頭を回るが、どれ一つ口にはしなかった。代わりに思いついた正論らしきものをぶつけてみる。

「そういうのは、ひよつとしたらあの職業斡旋所……」

俺の言葉を最後まで聞くことなく、爺さんは懷に手を入れる。黄ばんだのか元々なのか、淡い黄色の中着袋をポンとテーブルの上に投げた。ゴツンと大きな音がして、思わず顔を顰める。

「金が四十。前金でやろう。路銀も要りよう？」

少し推測を立ててみる。あの職業斡旋所は中々ピンハネているんじゃないかと。それにしても…… 随分羽振りがいい。この爺さん達がどうやって生計を立てているのか気になった。働いているようには見えない。この世界に来て一番どうでもいい考察だ、とはわかっていながら思考の一端にそれを任せた。

「今までのような請けたはいいがウンともスンとも言ってこん連中とはお前等は違いそうだ」

もしかしたらコレも一種のツンデレというヤツではないだろうか。口では憎まれ口を叩きながら、この爺さんは今までも色々と仕事を頼んでみて、裏切られてなお、信用に足る人間を探していたのではないだろうか。ない話ではない。過去にも同じようなゲームが開かれていたと推察できるわけで、最初の街の最初の仕事なものだから遊び感覚でやる輩も居たかもしれない……

「上手くやればアイツからも幾らか払ってもらえるだろう」

そんな風に考えてしまったものだから、この強気な態度の裏には寂しさと期待と怖さが入り混じっているのかも知れないと深読みする。「請けてくれんか？」

ついに深読みでも何でもないと悟ってしまう。その顔はまさしくさつき考えた裏の顔だった。懇願にも似ていた。違法行為にはあたらないだろうか、と思案する。俺たちがいた世界の民法典に照らし合わせれば勿論何ら問題はないが、こっちとあっちでは勝手が違う。職業幹旋所には多くの依頼があった。もしかしたらそこを通すのが筋なのかもしれない。

振り返った。奈々華も乾さんも沼田も、何となく爺さんの心中を理解しているようだった。

「請けてもいいか？」

皆バラバラだけど頷いてくれた。了承を伝えようと、もう一度顔を前に向けると、喜びを噛み殺したような雰囲気 of 爺さんを見て、婆さんが優しく笑っていた。

ペタペタと足を動かして俺に追いついたと思うと「お兄さん優しいです」と乾さんの小さな指。可愛らしく笑ってくれる。

俺達は隣町へ。街道を北へ上る。爺さんの話では、銀行はどの街にもあるらしく、だったら隣町のそれに寄ってみようという話になった。途中何人かの他プレイヤーらしき人物を見かけたことも結論を急がせた。

「金が良かったから請けただけさ」

ふふふと乾さんが含む。気になって後ろを見ると奈々華も沼田も同じように微笑んでいた。バツが悪くなって首を戻す。歩く速さを適度にあわせているつもりだが、どうにも乾さんの小さな足が動く感覚が掴めなくて、俺が一人ハブられているみたいになっている。いっそ後ろから投石されたら面白いかな、なんて冗談めいた考え。多分泣くだろうけど。

「ね。お兄さん。次ラップエルでしたっけ？ 着いたら地図を買いましょうよ」

「お。珍しく建設的な意見だな」

立ち止まって振り返る。時々こうして合流しないと俺は本当に放牧した家畜みたく野を一人行きそうだ。

「ははは。照れるな」

めでたい頭の構造だ。と思ったら、隣で愉快げに目を細める奈々華を見るに、どうもわざとのようだ。爺さんが俺達に地図を持たせようとしたのだが、タンスやサイドボードをひっくり返しても出でこず、散々待たされた挙句、婆さん。「使わないので捨てましたよ」

と。「そういうことは早く言え」と爺さん。そんな寸劇を正確にはわからないが三十分以上かけて見て、歩くこと一時間ほど、だろう。日はとっくに空の天辺に登頂。夏ではなさそうで、そもそも四季があるのか知らないが、汗ばむ陽気と言ったところ。シャツの首の辺

りを掴んで振る。つられた奈々華が手で顔の前をパタパタ扇ぐ。

「奈々。暑いかな？ 水飲むかな？」

ペットボトルなんて高尚なものではなくて、辛うじて水筒があるだけだった。それも魔法瓶構造のものはかなり値が張り、爺さんから前金で貰っておいてよかったと心底。女の子に持たせるのも気が引けて俺が持っている。ふとさっきの乾さんの言は、そういうところも含んでのことだったのか、と考える。さっき爺さんの心中を察そうと、深読み癖がまた顔を出しているだけかもしれない。

「いいよ、まだ。さっき飲んだばっかだから。皆の分だし私だけがブガブ飲んだら悪いし」

「俺の分を飲んでいいよ」

正確に一日の摂取量をはかったことなんかないが、奈々華は人より水分を多く取る性質。食後なんかにも頼まれたわけでもないのに、茶を出したりすることが多い。食中にもよく飲んでいるのに。

「お兄さん。激甘っす」

沼田の笑みは思わずといった格好。

「甘いかな？」

「ええ。ケーキの上に乗ったサンタクロースの砂糖菓子のように」例の限度をわきまえない甘さが舌の上に再現されるように明瞭に。やめろ、喉が渴くだろうが。奈々華が俺と沼田の茶番の終わりを待って、遠慮を示す。本当にいいんだがな、としてもやっぱり遠慮。「お兄ちゃんが干からびちゃったらヤダもん」とまで言われてしまっっては、俺もそれ以上はやめておく。乾さんがまたトコトコとやってくる。俺の手を掴むと書き書き。さっきと同じ言葉なんじゃないかと思っていると、「お兄さんシスコンです」だそうだ。

ラッフェルは紡績と農業、畜産の街だ。すぐ北にラプラインダル山を臨み、そこから流れるコット川は、ケーンズパークを貫通して、はるか南の海にまで注ぐそう、街に肥沃な土壌を提供している。ラッフェルとは古い言葉で「神に愛された地」と言うそう。

寂れてはいないが、決して都会然とした栄え方はしていない。基本的には長閑な農村を思わせる。家々のすぐ近くには畑があって、綿毛を孕んだ緑や、瑞々しい野菜を多く抱えた緑。しかし一度街の中央に目をやるとケーンズパークを思わせるようなレンガ造りの重厚な建物。未だ野生児のような視力を誇る俺の目には「カルパッチョ銀行」の文字。やっぱりカルパッチョなのか。その隣には「ラッフェル職業斡旋所」の看板を引っさげた同じような建物の姿も。三人に伝えると奈々華以外は驚いた表情。

「どういう目してるんすか？」

「私は遠くのものまでキチンと見渡せる、そういう力があるんです。貴方とは違うんです」

「バカやってないで早く街に入ろうよ」

俺達二人を追い越して、奈々華と乾さんはすたすたと街の入り口にかかったアーチを潜っていった。

ラスク・パドリオードの家は、他の家々と変わらず、丸太を組み合わせたログハウスのようだった。家屋の隣に大きな畑があった。その畑と家の敷地との境界あたりに木が二本刺さっていて、その間に紐を通して洗濯物を干していた。ログ・パドリオード、即ち爺さんの頼みを聞いてやって来たと伝えると、すぐに人の良さそうな笑顔をを見せて家の中に招き入れてくれた。屋内には同じように木製の簡素なテーブルと椅子が三脚。ラスクさんが座って、俺達にも促すので、奈々華と乾さんを座らせた。ラスクさんは見たところ三十台の後半から四十台の中頃くらいだろう。男性にしては長い金色の髪を後ろで縛って、前髪もかきあげてデコを見せている。切れ長の目にやや太い眉とシャープな顎。

「美形っすよ。美形。あの爺さんからよく……」

と口にかけて自分がかなり失礼なことを口走っていることに気付いたのか、沼田は口元を手で隠す。

「す、すいません。いきなり失礼なことを」

そして謝るのは俺。ラスクさんは苦笑しながら、

「構いませんよ。親父とはよく似ていないと言われます」

大人の対応に一先ずは胸を撫で下ろすが、沼田に目だけやる。手の平を合わせて「ごめん」のポーズ。そんな俺達を交互に見て、また苦笑するラスクさん。この人とは何だか仲良くなれそうだ。

「お疲れでしょう？ 爺さん、人遣いが荒いから。強行軍で来て頂いたんじゃないですか？」

「いえ。僕達も街を移動しようという話をしていたので、全然問題ありませんよ」

月並みな社交辞令を交わす。日本人を相手にしているようだ。仕事の話に移ろうかというところで、背後の戸がガタガタと鳴って、少し建てつけが悪かった、開かれる。小さな窓しかない屋内は薄暗く

て、戸を開いた瞬間に眩い光が飛び込んでくる。振り返ると小さな子供を抱いた女性が後光を携えたように玄関先に立ち尽くしている。さっき見た洗濯物に女物や子供用の衣服を見止め、既婚者だと推測していたので別段驚かない。

「あら。ラスク。お客様？」

女性が引き戸を閉じると再び昼間を忘れさせる薄暗い室内に戻る。こちらの中々の美人だった。茶色い瞳は見開いたように大きく、すっと通る鼻梁の下に桜色の唇。

「あ、ああ。早かったんだね」

すぐにラスクさんは俺達に二人の家族を紹介してくれる。奥さんはヴォルテナと言う名前だそう。娘さんはまだ四つで、カーリーナと言らしい。

「こんにちは、ヴォルテナさん。カーリーナちゃんもこんにちは」

沼田がヴォルテナさんの腕の中に居る小さな女の子に手を振る。こういうところは素直に尊敬する。カーリーナちゃんも人懐っこいのか舌つたらずに「こんにちは」と返した。

「ええと…… こちらの方々は、親父から頼まれてきた……」

ラスクさんが気の弱い笑みを浮かべながら俺の方を見る。まだ名乗っていないことに気付く。

「まあ、呆れた。お名前も伺わないまま、お茶も出さないまま。全く貴方って人は」

ヴォルテナさんの声には呆れと、それ以上の愛情を感じた。ああ、この人とは仲良くなれそうだという直感は間違っていないかった。俺と奈々華の関係にどことなく似ている。奈々華も何か感じたのかこっちを見て、意味ありげな笑みを浮かべた。

ヴォルテナさんは家事と育児に専念し、ラスクさんは家の横の畑で例のイモを作っているのだそう。そしてラスクさんは丁度休憩を、ヴォルテナさんは買出しに出かけたその一時に俺たちが訪れたようだった。これで俺はこの街にキッチンと買い物が出来る場所もあるこ

とを、それはあるんだろうけど何せ異世界なもんで一つ一つ潰して
いけないといけない、知る。

「早速で悪いんですけど、ジンさんには私のお手伝い、カナエさん
とサナさんはカーリーナのお守りをしてもらえませんか？」

と、申し訳なさそうにラスクさん。俺達の身体を気遣って、今日は
休んで明日からという話を持ちかけたが、俺達としても仕事として
来た以上、家の中で休んでいて依頼主のラスクさんだけ畑に放り出
すなんて気が引けたので断った。それなら、と逡巡のあとに先の割
り振りを口にした。

「ヴォルテナには私を手伝ってもらおうとして……」

「あの」

奈々華が小さく手を挙げる。そういえばさっきの割り振りに奈々華
の名前がなかった。その旨を彼女が伝えたと、ラスクさんは「あ」
と気の抜けた声。その後うんうんと唸りだした。

「奈々華さんには私の代わりに家事をやってもらってはどうでしょ
う？」

妥当だ。奈々華の家事スキルは今すぐどこに嫁に出しても恥ずかし
くないレベルだ。それに、身体の小さな乾さん、根気のなさそうな
沼田に農作業を任せても効率的でないだろう。元々慣れない、しか
も女の子にやらせるには重労働すぎる。案外このラスクさん、人
を見る目があるんじゃないかと思う。

「それじゃあ皆決まったところで始めましょうか」

能ある鷹は、何とやらではないだろうけど、ラスクさんのおずおず
と切り出した言葉を皮切りに、今日のお仕事が始まった。

畑は横に広く、隣の家の敷地にまで侵食している。尋ねてみると侵食ではなく買い取りだそうだ。「使わないらしくて、掛け合ったら譲ってくれました」とラスクさんは如才なく笑って言った。ラスクさんの家と隣接する側に畑を持っていて、その反対側に養鶏場がある。どうやら隣家は養鶏一本でやっているようだ。

ラスクさん一人で管理しているという畑は、努力のあとは見えるものの、雑草が生えている箇所も散見されて、これは骨が折れそうだと覚悟を強いる。春のうちに定植をしておきたいというラスクさんは助っ人待ちだったようだ。

「ジンさんは申し訳ありませんが、まだ整っていない場所を耕してくれませんか？」

ヴォルテナさんが苗を植えつけることに専念、俺が畑の整備に専念、ラスクさんは遅れるほうを適宜ヘルプ。うん、やっぱり妥当な判断。植物に詳しくない俺に大切な芋の苗を触らせるのは、ヴォルテナさんに力仕事を割り当てるのは、好ましくない。ヴォルテナさんは心得ているのか、さっさと作業に入って、俺が了承を伝えると本格的に畑仕事が始まった。

鍬を振りかぶる。バネみたいな筋肉の収縮を感じながら、振り下ろす。土に金属が食い込む感触。それは柄を通して指先に手応えらしきものを与える。固くもなく柔らかくもなく。一つ一つの動作はそれ単体では別段どうということはない。だけどただそんなオモチャみたいに腕を上下に振るだけの単調な作業を積み重なることで俺の心身を疲労させていく。左手を見ると更に鬱になれそう。一体何平米あるのだろうか。ラスクさんに問うことも考えたが、途方もない数字が返ってきたらいいよ戦意喪失しそうでやめにしておいた。ザク、ザク、ザク。耳に入る鍬の音も何だか遠く感じる。地面に目

を戻すと雑草が見える。これは根から掘り起こす。後でラスクさんたちが回収して行くのだ。地にウンコ座りする二人は時折何かをにこやかに話しながら作業の手は止めずに。ブランクのあったヴォルテナさんの方が作業が遅く、元々ただ耕していただくだけの俺と苗を適当に植えつける作業の彼女では差が出るのは当たり前らしく、ラスクさんは向こうにつきつきりだった。俺の無駄に高い身体能力もそれを助ける。

「別に寂しいわけじゃないけどさ」

少し手を止めて、瞼にかかる汗を拭う。手を見ると木の柄を握っていたせいか、金属の錆が付着したのか、土を少し触った時のものなのか、薄茶に染まっている。疲れた溜息を肺から吐き、また鍬を握る手に力を込める。鈍い音を立てて地面に突き刺さる。集中力が落ちていくのを自覚している。

ラスクさんたちのことを考えた。随分と人間臭くて、設定にしても家族まで有している。それに仕事の割り振りも適当だった。どんな人間が来るかなんてわかっていなくて、どう考えても俺達を見てその能力なんかを推察したとは思えない。常識的な思考と言うか、現実的な思考と言うか、とにかく人間から見て妥当な判断を下せるほどに思考回路は洗練されている。それこそ人間と見分けがつかないくらいに……

奈々華たちは大丈夫だろうか。子供を泣かしていたりしないだろうか。と、そこで思考を遮る声。

「ジンさん。休憩にしましょう」

右手を見ると少し離れた場所からラスクさんが手を振っている。もしかしたら……もしかしたら俺が作業に集中しきれていないことを見抜いたのではないか、と勘繰る。申し訳なく思った。そして自嘲じみた考えも同時に浮かんだ。まだそうと決まったわけでもない、単に時間経過で休憩を提案したのかも知れないのに、もう謝ろうとしている。卑屈は誰も幸せな気分にしらない。わかってる。肩にかけてスポーツタオルで顔一杯拭って、

「わかりましたー」
と声を張った。

結論として奈々華も沼田も乾さんも、きちんと与えられた仕事をこなしていたようだ。カリーナちゃんは眠ってしまったらしく、二階のベッドを見つめながら乾さんがやることもなくポケっと。沼田と奈々華は準備良くトーストやらクッキーやらを用意していた。どうもタイミングが良すぎることを鑑みるに、多分ラスクさんなりヴォルテナさんなりから時間を指定して軽食を用意するように言われていたんじゃないかと。俺の心配は杞憂だった。教科書の例文に使われてもいいくらいに杞憂だった。「お兄さんは自分に気を遣ってもらったのではないかと逆に気を揉んでいたが、そういうことではなかった」或いは「お兄さんは良く出来る妹の心配をしていたが、すっかり順応していた妹は兄以上にそつなく仕事をこなしていた」なんて。

それから皆で一階の食卓を囲み、カリーナちゃんも起こして、俺達は椅子がないので立食になって、皆でクッキーをつまみながら世間話をかわした。

結局作業が終わったのは、日が暮れかけた頃だった。未練を残すように西の空に橙の太陽。ぐっと気温が下がっていくのはアレが完全に消え去った後だろうか。昼夜の気温差が中々にある。俺が空を見ていると、ラスクさんが劳いの言葉を携えて近くまで来ていた。

「お疲れ様です。おかげで今日一日で目処が立ちました」
それでも畑の半分から3分の2といったところまでしか開墾できていない。

「あとは僕一人でも出来そうです」

本当だろうか。まだ手伝った方がいいんじゃないか。この人も俺と同じ、少し気を回しすぎるキライがあるように思っている。俺の視線が左に広がる雑草にまみれた畑に向いたせいだろうか、

「あっちは僕達家族の食べる分に夏野菜を植えるんです。多少荒れている土地でも育ちますから」

と気休めか本当かわからない口調で言った。そしてそう言われてはそれ以上踏み込む勇氣を持ち合わせない俺は「そうですか」と返すに留まった。実は後悔のようなものが胸の内にあった。先に銀行に行けば良かったという。だが背反してコレで良かったと達成感もある。半日費やしてギリギリ間に合ったのだからあんまりもたもたしていたらと思うと。それにあっちはいつでも行けるものなんだから、先に手伝っておいた方がどっちも気持ちいいと。

やっぱり先の葛藤も意味を成さず、俺は異世界というものをまだ自分の常識で捉えようとしていた節があったことを思い知らされる。夕食をご馳走になることになっていたのだが、準備までの時間を街で過ごしたらどうかとヴォルテナさんに提案された。奈々華は手伝いを申し出たが、「今日一日良く働いていたのでから、今

度は私におもてなしさせてください」と聖母のような笑みをたたえながら断られては、彼女も頷くしかなかった。そしてそのまま「どこか行ってみたい所はないのですか？」と問われ、銀行に行きたかったが今日は無理だろうという話をした。時間外だと思ったのだ。そして自分の頭の固さを思い知らされる言葉が返ってくる。「今から行けばいいじゃないですか？」と。

こっちの銀行は二十四時間やっているそうだ。よくよく考えれば参加者の利便を図って置かれているものなのだろうから、そうであっても何ら不自然はないが、銀行といえはいつ行っても閉まっているというイメージを払拭するには至っていなかったようだ。奈々華も驚いたようで「あっちの銀行にも見習って欲しいね」と冗談を言った。

四人で揃って歩くと、道の半分ほどを占拠してしまうくらいに道幅はなくて、それぞれのパートナーと並んで、列を形成するように歩く。太陽が沈んで家々の灯りが街灯の役割を果たすだけで、舗装されず地面をむき出した道を照らしている。

「お兄ちゃん汗かいたんだね」

「汗臭いか？」

「うん、ちょっと。何だか硫黄みたいな匂いがする」

「それはさっき俺が屁をこいたからだ」

いつものようにくだらない会話を隣の奈々華としていると、後ろから沼田が俺を呼ぶ。

「やっぱり半々ってのは不味くないですか？」

分け前の話だった。家を出る前にラスクさんは俺に爺さんのものと同じような巾着袋を手渡した。金のビー玉五十個だった。既に二十五は乾さんに渡してある。渡す段にも渋ったが、未だ納得していないようだった。

「どう考えても労働量と見合いませんって」

とのこと。家の中で安穩と子供の面倒を見ていた自分と、屋外で太陽と土と格闘しながら働いた俺の取り分が同じなのが不平等だと言

うのだ。これは俺の責任でもある。最初に報酬の分割方法について取り決めておくべきだった。

「だから。俺には子守なんか無理なんだから、適材適所。俺の方が多く働いたなんて思っていないよ。大体俺達はイーブンで組んでるんだから分け前は常に2分の1。それに……もし仮に君らの方が働いていないって今回は思ったとしても、これから先俺の方が足手まといになる可能性だってあるんだから言いつこなしだって」

と俺の説明ももう何度目だろうか。劇のセリフをなぞっているような気持ちだった。こういうのは四角四面に決めてしまったほうがいい。無駄に条件なりをつけたりすると揉めやすい。

「な？　ここは年長者を立てると思ってさ」

首だけ振り返って言い聞かすような瞳を作る。沼田の根負けが近いのを表情から悟って、乾さんがその手の平に何か書くとわかりましたと小さく頷いた。ありがとうございます、とも言った。ふとダメ押しの一手が気になって、乾さんが何を言ったのか沼田に尋ねる。

「お兄さんは格好つきたい年頃なんだから、ここは素直に甘えておこう」

沼田が感情を込めずに言う。乾さんはその間俺の目を見て、憎めない笑みを浮かべていた。

カルパッチョ銀行は、沼田の前情報に違わず、外見こそレンガ造りの建物だったが、内装は近代的であった。リノリウムだろうか、ゴムとも樹脂ともつかない微妙な弾力の白い床を踏み、内部を闊歩する。最初に見たホッタテ小屋のような内外の違和感だった。

「マジでATMだな」

ねずみ色の筐体を見つめ、それは銀行の端に三機あった、誰にともなく言った。優しい奈々華が「すごいね」と返してくれた。

画面はタッチパネルになっていて、やはりこの世界の時代設定からはポツンと浮いているような印象だった。指を近づけると「ようこそ、ビー玉ゲームへ」と野太い男声をイメージしたらしい機械音声が出た。何でだよ。ていうかもう知ってるよ。心の中で機械を激しく非難してから、メニュー画面に目を落とす。三つほど項目があって、「残金確認及びお引き出し」と「参加者一覧」それに「換金」という文字があった。換金……換金、換金だと。頭の中で高速でパズルが出来上がるような、清々しい閃きが起きる。思考が繋がる、繋がる。指はその爽快感に連動するように動きを早める。三つ目の「換金」ボタンを押して、次に出てきた画面は年代と国だった。「2009。日本」を探す。脳と目と体が同時にフル回転している。起き抜けに吸うタバコのように俺の全てを活性化させる。

「はや！ きも！」

沼田の雑音さえも耳が瞬時に拾い上げ、必要のない罵声だと判断して脳内から切り捨てる。

「お兄ちゃん扱ったことあるの？」

「いや、ないけど」

自分の中の疑問が氷解してしまった。そしてすぐにそれならばと仮定が浮かび、それを実証するような現実が目の前にある。本当にクロスワードの取っ掛かりから、縦も横も斜めも意味が通ったような

不思議な高揚がある。疑問とは即ち、ビー玉を貰っても実感がわかないということに起因していた。それはこっちの世界で生活するには必要不可欠のもののだが、実際に俺たちが生きる現実に向こうの世界で、それは他の参加者達にも言えることで、実際の益をもたらしているという感覚は味わいがたい。そしてその感覚の鈍重は、参加者同士をけしかけるような真似までしているホスト側としては打開すべきことではないか。そういう疑問がずっと胸の底に居ついていた。だから何らかの策を講じているだろうとは思っていたが……すぐに探し出した俺の生きる時代の国を選択する。「金…10300円。銀…1102円。銅…502円。青銅…100円」と為替レートが出て、確認ボタンを連打する。痙攣でもしているような指の動きだ。

「お兄ちゃん落ち着いて」

「ビーリングを画面にかざして下さい」

おっさんの機械音声と奈々華の声が被る。残念だが今はおっさんの声を優先させる。手の甲を向けると、幾ら引き出すが手元のボタンで操作できるようになる。画面は指輪に幾ら入っているのかを示している。金が十二個、銀が五個、銅がゼロ。金のところにカーソルを合わせて10を押す。確認ボタンを連打で押す。もう待ちきれず両手の人差し指を出して滅茶苦茶に押しまくる。「ご利用ありがとうございますございました。お取り忘れにご注意下さい」と言う紋切り型の注意と共に、機械の現金取り出し口が開く。手首のスナップだけでひったくるように全部摘み上げると、数え始める。見慣れた諭吉、見慣れた野口。

「だから動き速過ぎてうけるからやめてってば」

「お兄ちゃん、周りの人が見てるからやめてってば」

子供は黙ってなさい。手を全く止めずに数えきると、確かに十万と三千円ある。気がつくお腹から声を出して勝ち鬨をあげていた。

「じゃあ、オラー!!!」

つまりはそういうことだった。途中換金が出来るということは参加者の戦意高揚には持って来いだ。同時にあざといと思った。人間の欲深さを上手く引き出して、醜い争いを誘っている。趣味が悪い。どうせ接触する予定はないのだから、参加者一覧はいいだろうと、俺達は銀行を後にした。おなご共が恥ずかしそうにそそくさと出て行くその後を俺は勝ち誇ったような気持ちで追った。借金が返せるだけだね。

次に向かったのが、「ラッフェル中央商店」という小さな小売店だった。住宅と兼用になっているようで、建物は奥行きがあった。半分を店にしているようで、レジがその最奥にあってその更に奥に引き戸。その中が住宅になっているんだろう。何だか古い駄菓子屋を思い浮かべて心がポツと温まるような気持ち。品揃えはざっくばらんに一通り、細かいものはなさそうといった感じだった。棚も雑然としていてカテゴリー別に置いているという風ではなかった。

「きゃ」

四人が入ると店内は狭くて、棚の上を見上げていると、乾さんとぶつかってしまった。「大丈夫？」と声をかけている間に、ああそう言えば簡単な音は出せるんだったな、と沼田の説明を思い起こした。「ごめんね？ ああ、えっと。あった？」

フルフルと首を振る乾さん。謝罪についてではなく、成果の方だ。他の二人もこっちに集まってきて、芳しくないといった顔をする。店員に聞くことにしたのだが、この店員、まさしく駄菓子屋のおばあちゃんといった感じで、のんびりとレジの裏に置いた椅子に腰掛けて俺達を見ていた。近づいていくと「いらっしゃい」と優しく笑う。

「すみません。地図を頂きたいんですが？」

「チーズですか。はいはいありますよ」

うん。お約束だな。

「地図です。ち・ず」

「レズ？」

興味ねえよ。

「地図。ここら辺の地形とかを書いたヤツです」

ここまで精巧に老婆を作り上げなくても良いんじゃないかと、運営者に文句を言いたくなる。おばあちゃんはやつとこさ了解したよう

で、

「ああ。地図ね。地図なら…… あそこらへんの柵の一番上にありますよ」

そうして枯れ枝のような指を俺の体の向こうを指す。首を振って確認する。書籍がある柵らしい。

おばあちゃんが脚立を持ってこようかと、ふらふら歩くので、居心地が悪くて断ってしまった。俺が背伸びすれば届くだろうと思っていたのだが、目測が甘かった。いや、正確には届くには届いたが、ぎゅうぎゅうに詰まった一番上の段から、とても一冊を抜き取れるほどの力がこもらなかった。それにしても何でこんなに高い位置に目立たないように置いているのか不思議だったが、おばあちゃんの言では「ここいらに旅の人が来るなんて滅多になくてね」とのことだった。設定なのか、本当なのか、そんなことを考えながら奈々華の太ももをさする。

「ちょ、お、お兄ちゃん。何やってるの？」

首を持っていかれそうなほど、体が反り返る。俺の肩にまたがった奈々華が暴れればそうなるのは必然。何とか踏みとどまると、

「危ないじゃないか」

と注意。

「危ないのはお兄さんだよ。そろそろマジで通報しますよ？」

沼田の目が本気だったので慌てて言い訳を探す。

「いや、まあ。肩車なんてガキの頃にしてやったきりだったから懐かしくて」

「それで何で変態行為に及ぶんですか？ だって」

乾さんも沼田に加勢したらしく、読み上げる沼田は我が意を得たりといった雰囲気。触るとご利益があるとか言えば、上手く誤魔化せたんじゃないかと後悔した。

地図は銀のビー玉一つと交換になった。爺さんから貰った巾着袋の

中のビー玉から払う。これらは誰のリングにもおさめずに、これから先の必要経費として使うことに決めた。既に水筒を買って金が二つ減っていて、更に金が一つ壊れて銀が九つになった。

それから俺達は移動してもう少し商品の幅を絞った店に行った。アウトドア用品なんかを取り揃えている店だ。これから先宿をきちんと取れる状況ばかりではないかもしれない。道なき道を行くかもしれない。備えあれば憂いなしってヤツだ。そんなわけで寝袋を購入した。四つ揃えると金が二つ、銀が四つなくなった。丈夫な布で出来た服やレインコートもそれぞれ一着ずつ、その合計が金二つ、銀八つ。本当はテントなんかも買ったかったが嵩ばりすぎるので却下となった。

店を出る。

「さて今手元のお金はいくらでしょう？」

沼田が指で空に文字を書き込んで考えるうちに、乾さんは俺の手の平に文字を書き込む。「金が三十二。銀が七つ」と彼女は計算が得意らしい。丁度撫でやすい位置にあった頭を撫でてみる。絹糸を触るような感触の猫毛。その奥の丸い頭の輪郭も感じ取れる。楕円の奈々華のものもそれはそれで良いのだが、また違った趣がある。

「ああ。サナまで変態の毒牙に……」

「誰が変態だ」

軽口に乗りながら、俺としても意外だった。乾さんは少し驚いた顔をしたものの、今は素直に目を細めて撫でられるに任せている。嫌な顔をするんじゃないかと思っていたものだから、やめるタイミングさえ逸している。このままずっと撫でていようかと思った矢先には、俺は手を離すことになる。ケツに鋭い痛み。肉を捻りあげられている、と認識したと同時に振り返ると奈々華が感情の入りきらない目で笑っていた。

「いつまでやってるの？ ラスクさんたち待ってるんじゃないかな？」

「……はい。すみませんでした」

ラスクさんの家を辞すると、肌寒い通りを四人で練り歩いた。今日は本当に歩き詰めだったなと思う。万歩計でも持っていたら凄いことになったんじゃないか。温かい人たちだったなと、しみじみ思う。人ではないのかも知れないけど、人と変わらない優しさがあった。まだヴォルテナさんが作ってくれたコーンスープが胸にほのかな灯をともしような錯覚を残している。

「良い人たちだったね」

と奈々華。皆一様に頷いた。沼田は多少寂しい顔を覗かせた。カリーナちゃんは別れ際ぐずった。折角仲良くなったお姉ちゃんと別れるのが嫌だったのだ。

「またラスクさんの依頼があつたら請けよう」

俺はそんな沼田に柔らかく声を出した。沼田は翳をおさえて、快活に笑って頷いてくれた。こういう依頼ばかりを請ければいい。そう思った。この先どういう動きを俺たちがするかはまだ未定だけど、どの街に行ってもこういう仕事をしよう。優しい人たちが満足気に笑ってくれる仕事は、こっちの疲れなんて吹き飛ばす。

宿に着いた。ラスクさんの知り合いの家族が経営している。民宿と言った方がしっくりくる。幾らか大きい丸太の家。二階に数部屋あってそこを旅人に解放している。旅人も少ないのだから何処でも何時でも取れるとタカを括っていた俺達に、ラスクさんはだからこそ単価が高くなったりしていると教えてくれた。簡単に言うとか吹っかけられたりすることもあるのだそうで、急遽手を回してくれた。俺達としてはそれだけでも有り難い忠告と便宜だったのに、ラスクさんは自分の家にベッドが三つしかなくて、俺達を泊められないことを申し訳なさそうに謝った。「気を遣いすぎ」奈々華の言葉を心の中だけで再生させて、彼にもかけておいた。

シャワーも浴びて、人心地ついていると、早速簡単な給湯室のような備え付けの台所を我が物にした奈々華が紅茶を出してくれた。

「お疲れ様」

にこりと笑う。ややもすると整った顔立ちは冷たい印象を与えるが、こうして笑い皺を^{まなじり}眦に走らせるとぐっと親しみやすい顔になる。それはいつも俺をほっこりと優しい気持ちにさせる。その笑顔が彼女の実像に近いものだ知っているからかもしれない。「ありがとう」と口にしてカップを受け取ると、一口含む。俺の猫舌を知っている彼女はいつも丁度良い温さの飲み物を出してくれる。どうかと聞くので、美味しいと答える。ティーバッグじゃないのか、カップの底でゆらゆらと葉が揺れていた。

「カナのこと怒らないであげてね？」

奈々華がそんな笑顔をしまつて、俺の方を上目に窺うような顔で言った。

「何が？」

アイツは口も頭も悪いが、性格は中々に良いヤツだとわかっている。怒るという単語が耳に残った。

「ほら、取り分のこと」

「ああ、渋っていたね。でも最終的には納得してくれたんだから怒るってことはないよ」

奈々華がまた俺の好きな笑顔を浮かべる。どうやらこの子も俺のこの返答は織り込み済みだったようだ。

「カナのお父さんはお金にルーズだったって言うか、そういう人だったらしくて」

なるほど、と心の中で答える。反面教師にしているといったわけか。大抵金にルーズと言ったら、自分の金にはとことん執着して、他人のそれには無頓着といった人間が多い。金にせこくなりたくない、父親のようにはなりたくない、と。

「私がお兄ちゃんの話しても、ギャンブルやるって言ったら嫌そうな顔して…… あ、ごめん」

奈々華はしまったという感じに口を噤むが、俺の方はまたなるほど、と思う。試されていたのかもしれないな。

「……もしかしたらアイツとしては今まで会ったことのない人種かもね。俺は」

俺達兄妹は今まで金銭面で苦勞を強いられたことはない。金だけはふんだんに送ってきてくれるからな、あの父親は。それだけが親の義務だと言わんばかりに。

「かも」

だから俺は、金に対してルーズではなく寛容だと自分でも思う。例えば奈々華や沼田に何かを奢ってくれと、買ってくれと言われれば多分そうするだろう。勿論物理的に可能であればだが。だけど毎回毎回当然のように奢ってくれと言われるといつかは断る。それは額や頻度の問題ではなくて、俺に対する思いやりに欠けると思ってしまふからだ。ふと疑念が生まれて頭から離れなくなるのだ。俺は相手にとって都合の良い財布なんじゃないかと。多分、推測だけど、沼田の父親はそういう思慮を欠いた人間だったのではないか。そして多分博打を嗜んだんじゃないかと。ギャンブラーの中には、自分の種銭はおろか勝ち分さえも傷つけられるのを厭う人間が多い。

色々と考えさせられる。沼田が最初に遠慮無しに、俺を足代わりみたく言ったのは俺の寛容度をはかるためだったのではないか。執拗に話しかけてきたのは、俺の人格を見極めるためだったんじゃないか。全ては憶測だ。だけど全くの頓珍漢でもないような気がした。彼女にそういった明確な意思がなくても、人は心の深層に自分の苦手な相手か否か、推し量るような接し方をしてしまったりする。隣の部屋で乾さんと歓談に耽っているのだろうか、と沼田のバカ笑いした顔を脳裏に浮かべる。

「お兄ちゃん、もう寝よう？」

奈々華はさっきの失言を忘れたように、裏表のない笑みで言う。そうだな、そうしよう。相手の心情なんてわかりっこない。俺の等分の約束が彼女にどう映ったか、俺自身がどう映っているか、考えて

答えの出るもんじゃない。なるようにしかない。

「明日は学校行けるかな？」

電気を消したところで奈々華は俺には理解できない期待を含んだ言葉をはいてくれた。

目をさますと、見慣れた自室だった。寝る前から予測していたので、前回のように不必要に驚いたりはしなかった。ベッドの上の置時計を確認すると時刻は七時半だった。もう少し惰眠を貪りたいところだったが生憎すっきりと目覚めてしまった。

階下に行くと奈々華がまだ居たので、送っていくことにした。俺の姿を見た瞬間、幽霊でも見たような顔をして驚いて見せたのが少し悲しかったが、仕方のないことでもあった。

「お兄ちゃんのお弁当も台所に置いてるからね」
車中。

「ああ、ありがとう。えっと……」

ふりかけのことなだけどさ、と切り出したかった俺は、あどけなく小首を傾げてみせる仕草に言葉を仕舞った。この子なりに俺への愛情をああいった形で伝えているのではないか。繋ぎとめているのではないか。三年。離れていた時間を思えば、軽々にやめてくれと言うのはヒドイのではないか。そんなことを考えてしまった。

「なあに？」

いつまで経っても続きを言わない俺に、奈々華が痺れをきらす。

「いや、やっぱりなんでもない」

弱いなあ、俺。サンタクロースの砂糖菓子とか言われても仕方ないのか。奈々華はクスッと笑って、その様子が大人の女性を思わせて俺をまたたじろがせる。

「変なの」

わざわざハンドルから手を放して、かゆくもない鼻の頭に手をやった。

奈々華を送って家に帰ろうかという段、俺は今日一日何をしようかと考えていた。近所の家を一軒一軒ピンポンダッシュして回ろうか、

一人ジエングでもやろうか……　つまりは暇だった。金も手に入ったのだからパチンコにでも行けばいい、というところだが最近マイホ（マイホールの略。自分がよく行くパチンコ店のこと）は菜種油でも出るんじゃないかというくらいに客から搾り取っている。新装リニューアルから二週間、今行っても殺されるだけだ。そこで意識の底にあった一つの義務を表面まで掬い上げてくる。川瀬の家までは、ここから一時間とかからないか。七万ほど借りているわけだが今なら返済は出来る。勿論返済の意思はあるし、早く返しておきたいという気持ちもある。だけでもっと余裕を持って返済したかったというのが本音だ。残り三万ではどうにも不安だ。次に惨敗したらまた借りざるを得なくて、それでは本末転倒だ。この思考回路がカスがかさたる所以なんだろうな。決してしばらくパチンコは自粛しようなんて殊勝な考えは欠片も生まれない。

「まあ、また向こうで稼げばいいんだろう」

そう自分に言い聞かせて、家とは間逆、駅前の方に車を走らせる。と、十分と走らせないうちに俺の目は歩道の一点に釘付けになる。あまりに見慣れた姿だった。いつも可愛らしく輝くどんぐり目は、見るも無残にどんより淀んでいる。日本人形みたいに肩口で切りそろえた髪は、とぼとぼ歩くたびに小さく揺れている。車の時計を見ると、九時手前。遅刻ではないだろうか。路肩に停めて、控えめにクラクションを鳴らした。その小さな顔が漫ろにこっちを向く。窓を開けて少女の名を呼ぶ。

「乾さん」

口が「あ」という形になって、てくてこと駆けてくる。随分とけだるそうだったが、走れるということは問題ないのだろうか。俺が走らせてしまったのだろうか。車のすぐ横まで来て、いつものように手を取り合うことが出来ないことに気付いてどうしようかと思った矢先、乾さんは鞆からメモ帳を、胸ポケットからボールペンをそれぞれ取り出して、何かを書き込んでいった。「おはようございます」と見せた。挨拶一つにこう苦労するなんて不便だろうな、と俺は思

った。

「このままじゃあ遅刻じゃないの？ 乗せてどうか？」

俺の言葉の前半部で苦笑、後半部で困った顔をした。いつもこの乾さんと対峙すると、人は存外相手の声のトーンなんかも感情の判断材料にしているんだなと不思議な実感をもたらす。彼女の場合はその表情から察するしかない。この子にしても、最初よりかは格段に多くの表情を見せてくれるようになった。試していたのは、相手との距離を測っていたのは沼田だけではないのかもしれない。「イエス」も「ノー」も紡ぎにくかったのか、乾さんはその困惑したような表情のまま「体が少しだるいんです」と遅刻の理由の方を答えた。女の子にあって男の子にないヤツだろうか。口にしかけて、どうにも方便ではないかと疑りたくなかった。さっき走った様子を見るにどうもそういう感じではなかった。そして彼女の表情には何かを期待するような空気があった。

「……じゃあサボっちゃまうか？」

一瞬、それは魅惑的といわんばかりにパツと顔が輝く。その後すぐにそれを殺す。わかりやすい。

「おっさん暇なんだ。ちよつと付き合えよ」

わざと一昔前の不良のような口調で言った。また困った表情の乾さんを、強引に促して助手席に座らせると拉致が完了した。

隠れ家的な雰囲気を出そうとして失敗したような佇まいのその店は、大学の近くにあった。授業がある日なんかは女子学生で賑わい、味が良いと評判になっていた。店先に小さなホワイトボードがあつて、「今日のおススメ…当店自慢のイチゴタルト」とか書いている。蹴っ飛ばしたるか。ちょんちょんと裾を引かれて、手に体温。「蹴っ飛ばしちゃダメですよ？」何でばれてんだよ。俺の瞳にかすかな苛立ちを見たのかもしれない。

店内はレトロを意識したのか、踏むと軋む床板や黒ずんだプロペラがテーブルの上に回ったりしていた。ウェイトレスも大学生くらいだろうが、そつなく注文を取っていく。去り際一度振り返った顔には好奇の色があつた。別に誘拐してきたわけじゃないぞ、と心の中で反論しておく。

<学校サボるのなんて初めてです>

と乾さんがメモ帳に書いて俺に見せてくる。

「一昨日とか昨日もサボったじゃん？」

<自主的にってことです>

俺のせいにしない辺りは、彼女の優しさなのか、やはり内に秘めていた願望だったからか、俺には判断できなかった。

<なんかドキドキします>

言葉通り、文字の通りと言うべきか、落ち着かない様子で萎縮している彼女が微笑ましく、口を覆うように手を当てて笑った。

「中々オツなもんだらう？」

今度は乾さんがクスリと小さく。

<お兄さんは慣れてそうですね>

「ミスター勤勉とは俺のことだ。学校をサボるなんて……」

「うそ」

子供のような発音で、乾さんが笑いながら言った。短い単語なら話

せるのか。どの程度の長さまでなら相手が聞き取れる言葉を発せられるのか、少し気になった。やってみて、と提案しかけてやめた。もう少し長くても聞き取れるのなら、俺といるときはそうすればいいと思った。その方が彼女としても楽なんじゃないかと。だけど冷静に考えてみると、何と言う？ 「もう少し長い言葉も喋ってみてよ」と言うのか。デリカシーがないし、興味本位とも取られかねない。彼女の好きにさせようという結論に至った。もっと強い信頼関係が築けたなら、多少健常者とは違う発音で話しても大丈夫だと思われるくらいになれば、話してくれるかもしれない。奈々華たちにもしていないところを見ると、誰にもそうしないのかもしれない。どっちでもいいか。どんな方法でも彼女の意思は俺に伝わるし、彼女の人柄を俺は好きだ。それだけのことだ。店員が盆を持ってやって来た。

「お待ちせいたしました。イチゴタルトのお客様？」

黙って乾さんの方に手の平を差し向ける。俺はアイスコーヒーを貰う。店員が去り、早速タルトのへりにフォークを入れる乾さんはその味を脳内で膨らませているのだろうか、嬉しそうだった。「女は甘いもの食わしときゃ何とかなる」とは川瀬の言。どうしようもないアイツの言葉を思い起こしたのは癪だが、ある種真理だと思う。別にそんな単純な図式で女性を蔑視したいわけではない。女の子は大抵甘いものが好きだ。そして人は好きなものを食べれば機嫌が良くなる。だから「人は好きなもの食わしときゃ何とかなる」が正しい。

<おいしいです>

「いいから。食べなよ」

わざわざ手を止めて、紙に書いて知らせてくれる。おごりだと伝えただけから変に気を遣ったのだろうか。ちなみに彼女は遠慮したが、俺が無理に付き合わせたのだからと譲らなかつた。大体、ややもすると中学生にも見える背格好の子を連れた無精ひげの汚いおっさんがレジで割り勘なんて罰ゲームに近い。「格好つきたい年頃」そんな

風に受け止められただろうか。

パクパクとタルトを口にしまつていく所作が、失礼だがとても子供っぽく見えて、俺は微笑んでしまいそうなのを堪えていた。がっつかないように、だけど美味しくて手が止まらなくて、そんな葛藤の狭間のスピードに見えた。奈々華とはまた違った可愛らしさだ。じっくり見すぎたようで、乾さんが手を止めて、またも紙にペンを走らせる。

<お兄さんは何か食べなくていいんですか？>

退屈していると勘違いしたのか。と、自分が頭の中で紡いだ退屈という単語が引っかかる。

「いや、俺は甘いものはあんまり好かないんだ」

そして、なるほどそうかと合点がいく。彼女にしてみればコレが、相手を退屈させないための会話の唯一の手段なんだから、俺の目には手間に見えても、こうするしかないんだ。もうわかっていたことだろうに、未だに慣れきってはいないことに気付く。本当にどうしようもない愚鈍だな、俺は。おもわず失笑してしまう。

<どうしたんですか？>

正直に言うわけにもいかず、俺はさっきから言おうか言うまいかと悩んでいた、全く別のことを口にする。

「クリーム、口の端についてるよ」

慌てて小さな指で口元を拭うと、はにかんで笑った。まだちよつと付いていたものだから、俺は頬が緩むのを抑え切れなかった。

「そう言えばサナが来てなかったんだ」

奈々華の言葉に内心ギリとした。まさか連れまわしていたとは言えない。乾さんは奈々華の授業が終わる少し前に丁重にご自宅へと送還し、その足で迎えに来たわけだった。何だか浮気でもしているような分刻みのスケジュールに乾いた笑いが出た。

「へえ。疲れていたのかな」

平静を装う。この娘っ子はとても鋭いので殊更気をつけた。助手席をチラリと流し目に窺う。さっきまではその話題の主が座っていた場所だ。

「そうなのかな？」

奈々華は心配そうに眉を寄せた。チクリと罪悪感。話題を変えよう、強く意識した。

「なあ、ところでさ。金も手に入っだし、座椅子を買いに行かないか？」

苦しいかなと思ったが、奈々華は鸚鵡返しに「座椅子？」と聞いてきた。少し前から思っていたことだ。いつまでも膝の上に座らせているのも芸がない。いや、本音を言うとう夏を思った。夏、また彼女は自由参加の補習授業に出るだろう。その時に、また俺の部屋に来て教えてくれとなった時のことを考えずにはいられなかったのだ。暑苦しそうだ。

「いつまでも俺の膝の上に座らせるのも悪いしさ」

「……イヤ？」

イヤじゃない。そうじゃない。というよりお前がクッションを持ってくればそれで万事解決なんだが。

「まあ買おうじゃないか」

と強引に会話を切り上げると、俺はホームセンターの方にハンドルをやる。住宅街の中にポツンとため池があって、そこに隣接して建

っているのがそれだ。もう目に見える。俺たちが越えてきてしばらくして建ったものだが、便利になったと近隣住民にも好評だ。奈々華が不承不承といった感じで微かに頷く気配を感じた。

ポリエステルのカバーを被ったそれは俺のものと同じ型番の色違いとなった。商品のラインナップが一昨年と同じってのもどうなんだ、と経営者に聞いてみたくなったが、流行すたりがあるものでもないかと勝手に納得してしまう。赤と青が揃うことになる俺の部屋を少し想像してみる。狭くなるだろうな。慣れるまで夜トイレに行くときなんかに、足の小指をぶつけて悶絶したりするんじゃないかな。取りとめもないことを帰りの車中で考えている。奈々華はまだ納得がいていないのか、店内でも勿体無いやら必要ないやら散々呟いていた、ブスツとしている。「たまには俺の膝の上にも座っていいからさ」と宥めても無言。可愛いのは可愛いのだが、どうにも懐きすぎているような気もする。話題を変えよう、また思った。

「乾さんはさ……」

ふとどうしてか乾さんの顔がちらついて、気付いたら口にしていた。だけどその先に詰まった。

「……なに？」

ぶっきらぼうな返事。いつもメモ帳を持っているの？ と、心は尋ねたかった。どうしてそんなこと知っているの？ と返ってきたらマズイと頭がブレーキ。そして更に、人づてにばかり相手のことを聞くのも良くないなと思った。沼田のこともちろん、奈々華が話す分だけ、本人が話す分だけ聞くのがベターだと考える。

「ああ、いやさ。体が弱いのかい？」

結局さっきの欠席の話に回帰させた。奈々華はほんの少し訝しんだが、すぐに返答を考える顔になった。

「ううん。別にそんなことはなかったと思うけど…… 環境が急激に変化したからかな」

とってつけたように笑う。

「私達みたいに異世界慣れしてるわけでもないし」

とってつけたように言う。今度は俺が、何か隠しているんじゃないかと怪訝に感じる番。だが詮索する気は起きなかった。奈々華が言わないほうが良いと判断したなら、それは乾さん本人から俺が聞くべきことなのかもしれない。

「そうだね。まあ今日はそっとしておいてあげよう」

向こうの世界でもある程度体勢は整ってきた。今日は集まって何かを話し合うって感じでもないだろう。奈々華も同意を示してくれた。

集まって話すほどのことはなくても、色々考えることはあった。昨日の、異世界二日目の朝のことだ。奈々華の着替えはベッドの脇にあつて、やはり靴はたたきにあつた。随分と都合よく出来ている。ひよつとすると、裸で寝ていても下着まで用意されているんじゃないか。誰が判断しているのだろうか、ということだった。スムーズにゲームに入るために必要であろうと考えられる身の回りの品を過不足無く用意しているのは誰で、どういった基準でそう判断しているのか。対面に新たに増えた椅子の赤いカバーをぼんやり見ながら考える。すぐに身の毛もよだつ一枚の画が脳裏に浮かんた。例の黒いローブの変態たちが、ビルの屋上かどこから俺の部屋を望遠鏡で覗いている絵図だ。一気に煙草が不味くなつたような錯覚さえ覚える。機械だ。機械ということにしよう。あんなに精巧なロボットを作る科学技術を持った集団なんだから、そういった判断を下せる機械があつたって不思議じゃない。

次いで時計のことを思った。これはある程度の推測を持っている。恐らく一日を正確に計らせないためだろう。いや、推測と言うほどのものでもなく、それぐらいしか考えられない。だが理由はわからない。同条件でやらせれば不公平も生まれないというのに。保留事項だった。

首が凝っているような気がして、左右に傾けてみるが何の音もしなかった。大袈裟に肩を落としてみたが、今俺の部屋には他に人は居なかった。

時計を持ち込めないのはわかったが、今回の帰還でその逆も然りだとわかった。つまりあちらでの持ち物はビーリングと換金した金以外は例え肌身離さず持っていたとしてもあつちに残留ということになるらしかった。時計を持って来れなかったことで、試しに地図をポケットに忍ばせて眠つたのだが、今朝起きたときにはなくなつて

いた。これは理由もわかる。ゲームは厳密に向こうでの二十四時間に限定するためだ。地図を持って帰って、周辺の地理を把握しようと思っていたその浅ましい根性にノーを突きつけられたわけだ。

思考をそこで区切った。足に力を込めて深く沈めていた腰を座椅子から離す。階下から奈々華の声が聞こえたからだ。時計を確認するといつの間にゴールデンタイムとやらで、テレビではクソくだらないバラエティーでもやっている頃だ。配膳くらいは手伝ったのに、と階段に向かいながら出来すぎた妹が台所を忙しなく動く様子を思い浮かべる。段々下まで下りて行くと、まだ何かしているのか、トントんとリズム良く包丁をまな板に打ちつける音がしていた。唐突に、ああ俺の家だと実感した。安心した。異世界から帰って来た俺は、奈々華に向こうでしたように暮らそうと話した。奈々華もそれを望んでくれた。よく思い出せないことも多い向こうでの生活だったが、確かに誰かを殺め、それも複数の人間だ、奈々華に支えられて暮らしていたことだけは胸の内に残っている。記憶が判然としなのに、感情だけは残っていて、まるで他人の脳味噌を植えつけられたようで、気味が悪くて戸惑ったが、彼女と仲直りしたことだけははっきりと覚えていた。そしてそれだけが自分の脳味噌が自分自身のものであることを証明するような、彼女との絆だけが唯一のアイデンティティのような気がして、俺はそう提案したのだ。勿論彼女を好いているということだけでも十分そうしただろうが……

居間に通じる戸を開ける。奈々華は俺の記憶と変わらない笑顔で出てきてくれる。仔犬のように懐いてくれる彼女の笑顔はとても尊いものなのだと気付かなかった俺は相当の馬鹿で、逆説的にそれでも笑ってくれる彼女はとても尊いのだった。食事はカレーとサラダ。匂いでわかつてはいたが、その姿を拝見すると余計に食欲をそそる。奈々華が遅いよと苦言を呈しながら、それでも怒ってなんていなくて、俺の席の対面に座る。食事が終わったらいつもありがとうと口にしよう。美味しかったよと言おう。そんなことでしか報いること

が出来ないけど、そんなことで嬉しそうに笑ってくれるから、せめて心を込めて伝えよう。

「行ってきます」

「らっしやい」

バタムと車のドアが閉じる音を聞きながら、校庭に歩を進める奈々華の背を見送った。翌日になってもこっちの俺達の現実世界に居た。単純に交互というわけでもないらしい。視線を上げて彼女の通う女子高の校舎を見る。コンクリートに白い塗装は、スポンジに生クリームを塗ったよう。仏教系とかで奈々華は数珠を持っていたりするが、外装はそれとミスマッチな気がする。校庭の隅にクマシデが細い幹を数本まとめて、まばらな間隔で群生していた。何となく奈々華の背中が校舎の中に消えるまで見送ってから車を出した。

何をしようか。近くの公園に行つて砂場に埋まった猫の糞を余すことなく掘り返してみようか。家に帰って鼻から煙草を吸って耳から煙を出す練習でもしようか。昨日も暇だったのだから、今日も暇なのは必然といえれば必然だった。そしてやはり昨日も行きたくなかったのだから、今日も行きたくないのは必然といえれば必然なのか、彼女は果たして昨日と同じ場所に居た。もしかしてと思って来てみたのだが、居た。俺の車を見るや、わざとらしく下を向いて歩き始めた。よく見ると普段はしていない腕時計なんかを左手に巻いている。時間を計っていたのかな、と俺も時計を確認すると昨日出会った時間とほとんど変わらなかった。近くまで走らせると、また窓を開けて呼ぶ。

「へい、その彼女。暇ならボキとお茶しないかい？」

その彼女は俯いたまま小さく噴出した。おいおい、呼ばれて初めて気付いたフリするつもりだったんじゃないのかい。乾さんは笑いのまま俺を見た。今日は渋ることなく、はっきり頷いて、助手席のドアを開けた。

＜ボキって何ですか？＞

「高貴な者のみが使うことを許された一人称かな」

本当は昔やったゲームのサブキャラが使っていた…… ような気がする。何でさっき出てきたのか自分でもわからない。乾さんはまた笑った。奈々華とは違って本当に子供が見せる笑顔に見えたのは、多分彼女の体が小さいせいだけではないと思う。

「今日はどこへ行きたい？」

どうして学校に行きたがらない？ いつもそうなのか？ いじめられてるのか？ 乾さんは紙面に目を落として指を忙しく動かしている。

＜お任せです＞

そのメモ帳が何か関係するのかい？

「お任せかあ。参ったね。食い物屋は幾つか美味しい所を知ってるけど朝からはね。遊ぶと言ったら……」

パチンコ屋や競馬場に連れて行くわけにもいかない。

＜だったらカラオケに行きませんか？＞

「今からやっている所なんてあるかなあ？」

駅前にある店は夜間のフリータイムが終わって、再開は昼頃ではなかったか。乾さんは俺の返事を聞いて少し寂しそうな顔をした。慌てて二十四時間やっている所はないか考える。風営法とかで無理じゃないのか。

＜そこは、俺一人が歌う羽目になるからイヤだよ、って言って欲しかったです＞

悪戯っぽく笑う。乾さん、その自虐は俺には笑えないよ。ついでにその返しも俺には無理だ。と、そこである店を思い出す。漫画喫茶とビリヤード、ダーツ、カラオケなどなど、ぶち込めるだけぶち込んだ元が何なのかもわからない店だ。多分漫画喫茶なんだろうけど。乾さんが住む街の最寄りの駅前になかったか。

「なあ、乾さん。俺の汚い歌声を披露できる場所があるよ」

「え？」

驚いた顔は一瞬で、次いで期待をその小さな、いや大きいんだけど、

胸に膨らませたような、輝いた瞳を俺に向ける。我ながら名案だと思った。あそこなら俺の歌なんざ聞かなくても他にも娯楽がある。飽いたなら俺が喉が潰れるまで歌っている傍で漫画でも読んでいればいい。最悪個室に残してダーツにでも興じればいい。多分俺は一人むせび泣くだろうけど。

「行こうぜ？」

「え、でも」

これくらいの発音なら普通に聞き取れる。っていうか君が言いだしっぺだろう。

「いいからいいから。悪いようにはしないから」

本当にナンパでもしているような気持ちになるが、対案もないのだから推してみる。乾さんは少し怪訝な顔で頷いてくれた。

個室に入ると、照明を調整してお互いの顔が見えるくらいには明るくした。乾さんは物珍しそうにきよろきよろしている。来たことがないのだろうな、と冷静に思う。クラスの友達が誘うとも思えない。また誘ったところで、彼女が行くとも思えない。奈々華は何だかんだ俺の世話が忙しく、沼田にしてもバイトがあつたりで三人は頻繁に遊ぶことはないと聞いている。俺のように強引に連れてくる馬鹿にでも出くわさない限り縁のない場所だろう。

「何か食うかい？」

乾さんは首を定めて、俺の方を向いてまた落ち着きなく横に振る。あざとく軽食なんかも出す店だった。そう、と返してソファアに腰を落ち着ける。無駄に沈み込む仕様で乾さんが大きく見える。けどすぐに俺に倣うようにして隣に座るとやはり小さく見える。四角い機械を手にとって、俺はその名称を知らない、画面をタッチペンドで押す。と、そこで

「乾さんは普段は歌ったりするの？」

そう尋ねると、彼女は困った顔をした。そして暗所ということ考虑してか、俺の手を取って文字を書き込む最初の伝達手段に戻った。「歌うけど、聞き取れないから」とのことだった。口を開きかけて、乾さんがまだ俺の手を放さないので待ってみる。「普段は一人の時に歌ったりしてます」まだある。「それでもやっぱりイヤになって途中でやめます」そこで終わった。悲しそうな顔に、俺を気まずくさせないために重ねた笑みが見ていられなかった。

「歌ってみようよ？」

「え？」

気付いたらそんなことを口にしていた。デリカシーがないと理性はブレーキをかけるのだが、どうにも心が従わない。

「俺の友達に川瀬ってヤツが居るんだけどさ。これが恐ろしい音痴

で、歌わすと酷いもんなんだ」

乾さんはキョトンとしていて、俺の急激な話題転換に必死についていこうと頭を働かせているらしかった。

「でも本人は全く気にしないで歌うんだ」

「……」

むっとしているようでもあった。何かを考えているようでもあった。「こんなのは自己満なんだから好きに歌えば良いと思うんだ。聞き取れなくても、もっと言えれば誰かに聞いてもらう必要すらないんだよ」

この子の悩みや痛みはこの子のものだけど、それでもそれを理解したいと思ってしまった。ちょっとでも軽くないだろうかと思った。正しいかはわからなかった。傷つけているかもしれないかった。

「歌いたいなら歌えば良いと思う。勿論イヤならイヤで構わないけど」

もっど単純に考えて欲しかった。嫌われてしまうかもしれない、もう二度と俺を待っていることもなくて俺の前で笑うこともなくなるのかもしれない。そう考えると怖かったけど、それでもそうして欲しくなった。健常者じゃないから、そんな理由で自分のしたいことを抑制して欲しくなかった。乾さんは俯いてしまった。座高も俺の方が高いものだからそうされると彼女が何を考えているのか全くわからなくなった。ダメか。そう思いかけたとき、乾さんが何事か喋った。

「歌いあす」

「え？」

「私歌ってみあす」

まの発音が難しいのかも知れない。だけどそれは確かに聞き取れて、彼女の瞳には確かに希望の光が宿っているように見えた。

それから俺が機械を操作して、乾さんが歌いたいと言った曲を選択した。女性歌手が歌う流行のJ-POPだった。奈々華もCDを持

っていたような気がする。曲が始まっても、中々乾さんは歌いだすことが出来ず、テレビでは歌詞や映像が垂れ流される。出ようか、と思った。俺が居るから歌にくいのではないだろうか。だけど俺は結局動かなかった。今置いて出るのはあまりに無責任で、それこそ一番彼女を傷つけるんじゃないかと思った。それは単なる俺の思いあがりかも知れないけど、ずっと心の中で乾さんを応援していた。

やがて曲も半分を消化した頃、乾さんのマイクが音を拾った。「愛してる」と確かに言った。そうだ、「愛してる。ただそれだけを伝えたい。貴方だけが私の心の壁を打ち破って、本当の私を見つけてくれた……」いつの間にか心の中で復唱している。もう乾さんの声は聞き取れなかった。呂律が回らないように舌ったらずで、聞き取れなかった。だけどそんなことは本当にどうでもいいことだった。彼女が一瞬俺の方を見た。迷子が大人に見せるよりも不安げで儂い表情だった。俺は精一杯優しく笑って頷いた。いいんだ、それでいいんだ。俺の歌も後で聞かせてやる。君の悩みなんて悩む必要なんてどこにもないものだと思いき知らせてやる。しょうもない歌唱力で馬鹿みたいに気持ちよく歌ってやる。

結局乾さんはその一曲だけ歌ってそれから歌わなかった。俺ももう無理強いするような真似はしなかった。実は少しやり過ぎたかもしれないと後悔し始めていた。俺が歌っている間、耳を傾けながらも乾さんは時々寂しそうに笑っていた。一時間くらい歌ってから、俺達は店を出た。

まだもう少し時間があるので、俺は食事に誘った。断られても仕方ないと思っていた。乾さんはずっと黙りこくっていたから。だが俺の予想は裏切られて、彼女はコクンと小さく頷いた。「無理にとは言わないよ？」と弱気な言葉が自然と口から出てしまっ、しまったと思ったが、彼女は胸の前で小さく握り拳を作って「行きたいれす」と声にして伝えた。

ラーメン屋に行くことにした。どこが良いかと聞いたがくお兄さんが行きたいところ>と返ってきて、気取った所に行くのも何だか逆に気まずくさせそうで、そこを選んだ。味は良いが店内はごみごみしていて隠れた名店だと俺が思っている場所だ。車中も会話があまり続かず、完全に二人っきりの場所でこの空気に耐えられないと俺が逃げ腰になっているせいだったと気付く。

黄色いアーケードに「ラーメン」とだけ書いていて、店名もよくわからない。自動ドアなど無縁の引き戸をガラガラとやって店内に入ると、急に後悔が押し寄せた。店内にはカウンター席がなく、それも木目に沿って黒ずんでいる箇所もそこかしこ。椅子はカバーが破れて黄色い綿が見えているものも幾つかある。壁には汚い字で書かれてた黄ばんだ品書きが貼り付けてあって、同じように黄色く変色した元は白の壁紙に擬態するようだった。床は厨房から飛んだ油でぬるぬるしていて、靴が滑る。いくらなんでも考えなし過ぎたんじゃないか。女の子を連れてくるにはあまりにあんまりじゃないか。どうしてこの店はこんなに汚いんだ。廃墟か。最早店主に心の中で八つ当たりをするしかなかった。呆然とやりきれなく立ち尽くしていると、乾さんが俺の手を何故か遠慮がちに掴む。「こういうところ初めてで新鮮です」と。気を遣われたのか、と振り返ると俺の視線から逃げるように店

内に目をやった。

「……いらっしやい」

店内に俺達以外の客はいない。この店主は無愛想で、熊みたいな男だった。何だその接客態度は。やる気あんのか。なんでもみあげと髭が繋がっているんだ。飲食業に携わる者としてどうなんだ。ひねり糞ってやろうか。普段は逆に気を遣われるより居心地が良いと肯定的に捉えていた要素も、今となってはマイナス以外の何者でもない。

「……なんにする？」

<醤油ラーメン>と乾さんは紙に書いてツキノワグマの亜種に見せる。ヒゲダルマはあいよと気だるそうに。そっちの兄ちゃんは？と聞いてくるので同じものを頼む。おっさんは厨房の中で調理を始める。袋から麺を取り出して適当に湯の中に放り込む。グツグツと音がするそれを放置して、店の奥へ行ってチャーシューを切り始める。

<何か熊さんみたいです>

「そうだね。熊だ」

俺は返答も漫ろで、乾さんの表情を窺うことに専念していた。テンションに任せてあんなことをさせたが傷つけてしまったんじゃないだろうか。こんなところに連れて来られて内心嫌な思いを重ねているんじゃないか。後悔と気遣いが止まらない。乾さんは俺の視線に気付いたのか、すぐさまわざとらしく前を見る。今まで見たこともない表情に横からは映った。頬に微かな朱が差している。奈々華同様が白いので、少し赤らんでもすぐにわかる。あんまりまじまじと見すぎたかとまた反省してしまう。

<もっと歌えばよかったです>

ラーメンが出来るまでの間、乾さんが唐突にそんな言葉をメモに書いた。俺は驚いた。そして安直に救われたような気持ちになった。それは本当かい？ 時々寂しそうに笑っていたのは、そういうことだったのかい？ 言葉が口について出かけるのを、何とか抑える。

乾さんはその言葉の下にまた何か書き足している。

＜あんな風に言ってもらったの初めてでした＞

それはそうだ。カラオケに行ったのも初めてなんだから。俺は見苦しくさっきの確認を口にしようとして、また機を失う。

＜嬉しかったです。本当に……嬉しかったです＞

よかった。心の底から思った。俺の直感も捨てたもんじゃないなと思った。そうしてすぐに調子に乗りかけた気持ちを諫める。今回はたまたま、乾さんも本当は歌ってみたかったから上手くいったただけだ。俺の価値観を押し付けていつも奏功するなんて保証はどこにもない。

「また行こう。勿論乾さんさえ良ければだけど」

今度は奈々華や沼田も連れて行って皆でワイワイやったらう。だけど乾さんは困ったように眉を寄せた。ドキリとする。やっぱり調子に乗りすぎたのか。だけど乾さんは俺の予想とは違うことを紙に書き込んだ。

＜紗奈でいいです。私の友達はその呼びます＞

友達と書く辺りでペンが宙を彷徨ったのは、彼女も少し気を遣ったのだろうか。そんな気を遣わせてはいけない。

「そっか。サナちゃん。俺のこともお兄ちゃんって呼んでいいよ？」

「……おにいたん」

半分冗談だったが、サナちゃんはそう呼んでくれた。んの発音も抜けるようで「おにーた」と言っているようだったが、そんなことは些事だ。もっと重要なことがある。

「もう一度呼んでみてくれないかな？」

「おにいたん！」

やっと時代が俺に追いついて来たというところか。待ちすぎて首がキリンになるところだった。おにいたん。素晴らしい響きだ。今度奈々華にもそう呼ばせよう。そうしよう。乾さんは照れ笑いをしながら、丁度運ばれてきたラーメンを受け取る。メモ帳をしまうとき、前のページが見えた。いつ書いたのかはわからないけど、＜奈々ち

やんがお兄さんを大好きな理由、私にもわかりました＞とあった。

手元で鋭く曲がるそれは今をときめく一流の投手たちがこぞって投げるナウい変化球だった。カットボールなるものだ。インパクトの際の際まで捉えたと思っていたのだが、いざバットに当たるとそれは本当に根元で、快感すら覚える芯の打球とは違って両の掌にジンジンと不快な痺れを残した。捕邪飛だった。キャッチャーがマスクを放り投げて掴んだ。

「アウトー！」

うるせえな。知ってるよ。審判が捕手のミットの中を大袈裟に覗き込んで確認してから大声を出す。終始この審判はこんな感じだった。乾いた土を猛然と踏みしめて俺に歩み寄ると、人差し指の先を俺の顔に向けながら、

「アウトー！ バッターアウト！」

だから知ってるって。指を指すな、指を。握り拳を振り下ろすな。腹立つなあ。

ベンチに向かう。日よけのついた一塁側のベンチには、暗い影が落ちていて、皆の顔もそれにつられるように浮かなかった。戻って腰掛けると、ラスクさんがどんまいと声をかけてくれる。すいませんと返した声が自分で思ったより低くて、俺自身知らずチームの士気に影響を受けていることに気付いた。試合は七回表を終わって5-0と現実的な差をつけられて我等のチームのビハインドだった。

俺が何故野球をしているのかという理由を話すには、随分と時間を遡らなければいけない。乾さんを乗せて彼女の家まで送り届ける途中に、車ごと眩い閃光に包まれた。「ふおあー」とか謎の悲鳴が出たのを記憶している。光が消えるところちに居た。そうしてまたまた放り込まれた異世界で、車がどうなったのかだけが気がかりだっ

た。俺だけが生身で、正確には乾さんも含めて飛ばされていたのだ。それは恐ろしいさ。俺の車が大破しているだけならまだ涙を飲めばそれで済むが、運転手を突然失った自動車さんが人を跳ね飛ばしている可能性も全く捨てきれないのだから。頭を抱えて悶絶していたところ、奈々華が病院を勧めてくれた、そんな暇などないと言わんばかりに新しい懸念事項が舞い込んでくる。ラスク・パドリオードその人だった。

「野球の試合の助っ人を頼まれてくれませんか？」

なんでもどうしても負けられない草野球の試合があるとかで、俺はそんなことをするために時速60キロで走る愛車を残し異世界へと馳せつけたということになるらしかった。相応の活躍をすればチームから報酬が出るだとか、相手は長年のライバルとして競い合っているチームで今日負けると今季の幸先を悪くするのでどうしても勝ちたいだとか、そういった事情を聞くでもなく聞いて…… 今に至る。

「ジンさーん！ 行きましたよ！」

ピッチャーのラスクさんが声を上げた。遠くのお空にフライが上がっている。ぐんぐんとこっちに向かっている。センターを守る俺は打球を見ながら、落下点を予測して捕球体勢を取る。つもりだったのに、走る途中で太陽が被さってきて、その白い逆光の中に白球は消える。

「ふぉー」

大体ここらへん。芝をスパイクが噛む感触。落下予測地点に入った。目が焼かれるように上を直視できない。グラブを突き出す。大体ここらへん。本当か俺？ 大丈夫か？ 下手したらミスターウノだぞ？

「笑止！」

何かよくわからない気合を入れるが、白球はいまだ落ちてこない。

見えない。怖い。怖いよ。

「助けて奈々華ちゃん！」

バスッと乾いた音がして、掌が少しだけ痛い。何が起きたか、頭の表面だけが推測を飛ばして、実感がまだない。捕れたのか？ センイチに殺されないで済むのか？ グラブの中をおっかなびっくり覗くと、白い球。赤い糸で縫い目。ふう、危ない危ない。ここまでの三打席を二凡退、一安打と物足りない助っ人ぶりを発揮してしまっていた俺としては、その上に一エラーを付けなくてほっとしている。「ナイツキヤー！」

ナイスキャッチを崩したものだろう。チーム全員がそう俺に声をかけてくれる。ライトのオッサンが俺のケツをポンポンと叩いてから、追い抜いてベンチに戻っていく。何だかとても照れくさい。だけど悪い気はしない。

試合に集中しよう。車のことはなるべくにしなければならない。この人たちは例えそれがプログラムだとしても、組み込まれた思考だとしても、まだ試合を投げていない。次の回は上位打線から始まる好打順。気合を入れなおしたのだろう。ボールをマウンドの上に転がして、俺もベンチに下がる。強く奥歯を噛んでみた。力が湧いてくるような気がしたから本当に俺は単純だ。

ちなみに奈々華ちゃんとサナちゃん、あとついでにパンダちゃんは他の場所で他の仕事をしている。女人禁制だし、そもそも助っ人にならないので当然といえば当然。奈々華は紡績工場、サナちゃんと沼田は飲食店で調理なんかをしているはずだ。稼ごう。俺達はそれぞれが出来ることをやってその対価で面白おかしく過ごそう。口にはしなかったが、散っていく彼女達の背中を見送りながらそう思った。願わくば俺の車の修理代が十分に出るくらいは稼ごう、鏡に映ったダサイユニフォーム姿の自分を見ながらそう思った。

一番のおっさん、街の中心で酒屋を経営しているそうだが、9球粘った末にしぶとく四球を選んだことで相手のピッチャーのリズムが崩れたのかもしれない。何とか流れを変えたいとしたおっさんの氣迫が相手にプレッシャーを与えたのかも知れない。二番のおっさんが打った球は変化球が指にかかりきらない半速球で、明らかな失投といえた。しっかりと叩いた速い打球が、一二塁間を抜けていった。無理に逆らわずに逆方向を意識していたのもよかった。ノーアウト一二塁。久しぶりのチャンスらしいチャンスだ。

「ナイバー！」

ネクストバッターズサークルからラスクさんが声を張り上げる。氣弱な平素からは想像も出来ないほど闘志を剥き出しにした横顔がベンチからも窺えた。相手のキャッチャーがマウンドへと小走り。絶妙のタイミングだ。しばらく何かを話し込んで、キャッチャーがピッチャーの背中をポンと一つ叩いてベースに戻る。審判が例のわざとらしいほど大きな声で試合再開を告げて、ラスクさんがゆつくりとバッターボックスに入る。一球の牽制を挟んだ後、ピッチャーが振りかぶる。ボール。外角低目へと見事にコントロールされた良い球だ。二球目は同じようなところからスライダー。体が少し開いたスイングでラスクさんが空振る。心臓がバクバクいつている。俺の握りこんでいた手を開いて見ると、掌の皺に汗が溜まって小さく光っていた。

「ラスクさん！」

声を出して応援する。頑張れ。外角を無理に追いかけてちゃダメだ。これまでやられて来たパターンだ。外角に誘い球。それに目が慣れてきた頃に、ズバツと内角にストレートを投げ込んでくる。相手の裏をかくリード、そこに狂い無く投げる制球力。相手も然るものだ。ただラスクさんも負けるわけにはいかない。ラスクさんが人一倍

声を張って味方を鼓舞しているのは、自分が投げて5点取られたという責任を感じているからだ。気付けば俺は祈るように指を組んでいた。

三球目も同じようなスライダーだった。更に右バッターからすれば遠く逃げるように変化する。祈りは届かずラスクさんの体はそれを追いかけてしまう。コチンと小さな音がして、ボールは転々と内野を転がる。ゲッツーになる。俺は唇を噛んで見ていた。しかしボールは良い所に転がる。セカンドのかなり前、ピッチャーの少し斜め後ろ。勢いが死んでいるのも結果としてよかった。前に出るしかないセカンドは走りながらの捕球、体勢の整わないままの送球を強いられる。反転してセカンドは無理、ゲッツーはない。ラスクさんに視線を戻すと必死に体を揺らして走っていた。競争だ。セカンドがグラブを目一杯突き出して捕球、すぐさま右手に持ち替えてジャンピングスロー。弓なりの送球は精一杯。

「セーフ！」

塁審の両手が水平に開かれる。やった。ラスクさんは顔から一塁に突っ込んでいて、すぐにその土まみれの顔を上げて、その判定に大きな声を出した。当たりは悪かったとか、走り抜けたほうが速いとか、そんなことはどうでもいい。その気迫が俺の胸まで熱くする。

「次のバッター！ 次のバッター？」

主審が叫んでいる。その重厚なマスクの切れ目から俺を睨んでいる。ラスクさんの次、四番……俺じゃねえか。慌ててヘルメットとバットを抱えてベンチを飛び出す。誰か教えてくれても良かったじゃないか、と後ろを振り返ると皆同じように必死のラスクさんの様子を目に焼き付けていたようだった。左打席に立つ。後ろに控える五番のおっさん、さっきの飛球の際に俺のケツを叩いていったライト、が白いラインで囲まれた円の中から俺に激励。

「頼むぞ、助っ人！」

苦笑しそうになる。俺は城山仁と最初に名乗ったのに、このおっさ

んだけ全く覚えていない。メットのツバを触って、それに答える。土をならして、こんなのは格好だけだけど、構える。前を向く。俺と同年代くらいの青年が一人でここまでマウンドを守ってきている。落ち窪んだ瞳と薄い唇。黒髪ではあるが、どうにも中東系の顔立ちだ。俺と同じ異世界からの助っ人なんじゃないかと思う。ふと、マウンド上で俺に笑いかけた。ずっとポーカーフェイスを保っていた彼が初めて見せた人間の表情だった。そしてそれは親愛に見えた。ああ、そうか。俺達と同じような軌跡を歩んだのかも知れない。そう推し量った。誰か一人の依頼者と過分に仲良くなって断りきれずにこの試合に駆り出されたんじゃないか。逆を返せばそういうプロセスが、言葉は悪いがこの試合の発生条件だったのではないか。丸つきりテレビゲームの発想だが、向こうもそんな風に当たりをつけている。だからこそその先の笑みだ。お互い変なことに巻き込まれましてね、と語りかけるようだった。悪いヤツには見えない。だからと言って負ける気はない。青年は笑みをしまってボールをグラブの中で握りこむ。俺も気弱な笑顔を つられて浮かべていたが、それをした。

初球だ。そう思っていた。外角のストレート一本に絞っていた。すると投げられた球は俺の体に近いところ、インローにずばっと決まる。踏み出した体では反応できず、見逃し。大きなストライクコースルも相変わらずだった。唇を噛む。さすがにワンパターンな配球はしてこないか。いやもしかしたら外角狙いが打席からキャッチャーにばれたか。

マウンドで返球を受ける青年は涼しげな顔。またポーカーフェイスに戻っている。タフなヤツだなと感心する。五点差あるとは言え、ノーアウト満塁。そこで青年がサインに首を振る。また。二度振ってから頷いた。インコーススライダーか。救い上げるような打ち方を脳内で再現。振りかぶった。今度も俺は全く予期していない球、アウトコースをかすめるようなカーブ。ボールの判定。際どいコースだ。手を出さなかったんじゃないかって、出なかった。

「畜生、全然配球が違うじゃねえか」

誰にも聞こえないように、口の中だけで呟く。やめだ。ダメだ。所詮素人が配球読もうなんておこがましいにも程がある。来た球を打とう。ぼんやりとコースだけ絞ろう。

段々芯の近くで捉えられるようになってきた。目も慣れてきた。青年の顔にも疲労が隠し切れない。八球。くさいところはファールで、俺も粘っていた。フルカウントなのでもうストライクしか来ない。後は変化球かストレートか。塁上の味方も、内野の守備陣も一樣に真剣な表情で俺を見つめている。一瞬先の未来に、快音を残して鋭い打球が飛ぶ光景或いはキャッチャーミットにすんと収まる白球。どちらかを思い描いているのだろうか。青年が振りかぶる。汗が雫となって顎の方に伝っていくのを感じる。五感が研ぎ澄まされているのを感じる。

外角のストレートだろう。憶測のような言い方になるのは、本当に来た球にバットが勝手に出て行った感じだから。体が反応するとうやつか。指先に残る、抜けるような感触はボールを真芯で捉えた証拠。弾き飛ばされた白球はぐんぐん遠ざかっていく。遠くの鳥を見るような心境だ。

あ、走らなきゃと思い出したのは、ボールが無人の左翼スタンドにポーンと大きく跳ねた頃だった。

惜しかったね、と奈々華が慰めの言葉をかけてくれた。休憩で見に来たという彼女は、丁度俺の第四打席のピッチバイピッチをご高覧なさったそう。ホームランすごかったよ、と言うのが再会後の第一声だったもので大層驚いたが、事情を聞くとそういうことらしい。試合は俺の満塁ホームランの後は沈黙し、九回も三人で終わってしまった。貧打と嘆くなかれ、相手の青年を誉めるべきだろう。俺のホームランの後はケロッと立ち直り、正直打てる球なんてなかった。彼は経験者なんだろうかと疑問が湧いたが、それを確かめる術はなかった。青年は整列、礼と儀礼を済ませた後にはそそくさと帰ってしまった。彼もまた俺達と同じようにこのゲームを違った角度から楽しもうと決めたのだろうか。他プレイヤーとの交流を極力避けるという強い意志があるのだろうか、と。

「でもラスクさんも一矢報いたって喜んでたよね」

奈々華は黙り込んで青年のことを考えていた俺を、落ち込んでいるとでも勘違いしたのか、更に労う。俺は奈々華の紡績工場まで迎えに行った。これから乾、沼田ペアの飲食店にも足を運ぶつもりだった。カラッと晴れていた太陽は今日もその役目を終えて沈んでいている。道の左右を囲む畑、その中で農作業に精を出す人たちの影を長くしていた。

「……ラスクさん達には悪いけど、俺は楽しかったよ」

「え?」

そうなの？　と続けて聞く。

「生まれて初めて打ったホームランだからね」

とても爽快だった。あの感触に虜にされた者が、毎日手の平にマメを作りながら素振りに明け暮れるんだろう。頭を下げてバッティングピッチャーに球を放ってもらうんだろう。

「そうなんだ。えっとそれって……私のせい？」

最後の方は聞き取れるギリギリの音量だった。

「違うよ。俺は友達が少なかったんだ」

特に草野球に興じる年代、小学生時代は皆無と言ってよかった。決して四つ離れた妹の相手をするために毎日学校からダッシュで帰っていたわけではない。奈々華は何と言っていいかわからないように、顔を曇らせた。

「良いんだよ。俺には奈々華ちゃんが居たから。せいじゃない、おかげなんだ。俺がこうして道を踏み外していないのは」

さらっと。それでも十分気取ったセリフだ。だけど本当にそうなんだから仕方ない。奈々華が一瞬で曇りを払いのけ、嬉しそうに笑う。そうだよ、そうやって笑っていてくれ。

「ところで、工場の仕事はどうだった？」

話を変える。

「私のこと愛してるって言ったら教えてあげる」

「愛してる愛してる。大体愛してる」

コイツは凄いな。俺は照れくさくって仕方ない話を蒸し返して調味料まで加えるか。奈々華は少し口を尖らせたが、まあいいかと俺の質問に答える。

「ポケットを作ってたよ？」

「ポケット？」

「うん。なんでも被服部とかで……ズボンにポケットを縫うの」

「へえ。紡績工場って言ってたけど、結構多角なのな」

「この世界では結構大きな親会社とかって……設定みたいだよ？」
しばらく奈々華とお互いの仕事の話を話しながら歩いた。

宿に帰って、俺の部屋で順番に今日の報告をした。乾、沼田ペアが二人合わせて金のビー玉四十二、銀が三。基本給が一人当たり金で二十だった筈だから、多い分は出来高だろう。

「やあ、働いたからねえ。サナも今日一日で大分包丁捌きが上達したしね?」

そうやって沼田はサナちゃんに笑いかける。その返答として手に書き込んだ内容を、沼田は読み上げなかったが、きつと慎ましい彼女のことから謙遜を書いたのだろう。奈々華が次に巾着袋、こっちの世界の住人は巾着袋に金を入れるのがポピュラーのようだ、を開いてベッドの上にザーと並べてみせる。金が二十三。こっちの基本給も二十だったか。沢山ポケットを作ったんだな。

「偉いぞお、皆。頭でなでしてあげるからこっち来なさい」

沼田以外が俺の傍にやってくる。正直サナちゃんまで来たのは驚きだった。冗談なんだがね、とは今更言えない雰囲気。期待を込めた瞳が四つ。右手を奈々華、左手をサナちゃんの頭に乘せてなるだけ優しく撫でる。

「いつの間にサナまで手懐けたんすか?」

「人徳としか言いようがない」

「いや、真面目に聞いてるんですけど」

「わからんかね、しかし。俺の崇高なる魂を理解できない愚か者が」付き合いきれないと言った表情で沼田が肩を落とす。

「でも私も気になるな。いつの間に仲良くなったの?」

そして目が笑っていない妹。彼女の兄離れはいつの日なのだろうか。子供みたいに妬いてくれるのは嬉しいけど時折少しだけ鬱陶しい。うざ可愛いという新ジャンル。

「まあそれはその……」

サナちゃんを見る。困ったように曲げた眉には、不安と諦めが同居

していた。

「サナちゃんが具合悪そうにして歩いているところを家に送ってっただけだよ」

もう俺は奈々華に目を戻していたが、サナちゃんが驚いたような空気を感じた。伊達に君より四年も歳食ってないよ。知られたくないことなら言わないさ。何せ誤魔化すことにかけては天才だと自負している。もっとも、俺の視界の大部分を占める我が妹は納得がいっていないようで、探るような目を向けてくる。

「それで、それだけで名前で呼ぶようになるほど仲良くなったの？」嘘は言っていないのだが、それから先の部分も端折っている。彼女の洞察力の前では俺の天賦の才もかすむ。

「だから俺の人徳としか言いようがない。サナちゃんはとても感謝してくれて、まるで唯一神のように崇め奉るようになったところか。神が迷える子羊に親愛を込めるのは当然だろう。このバカチンがああ！」

冗談を交えながら、ふと客観的になる。どうして尋問のようになっているんだろうか。確か全員の今日の稼ぎを発表して、和気藹々きやつきやうふふの筈だったろうに。

「サナ、本当？」

沼田がサナちゃんに言質をとる。何という信用の無さ。サナちゃんは曖昧な顔で頷いた。俺が適当なことを言っているからなのか、彼女の心情を正しく読み取った驚きが抜け切らないからか。

「あの変態に何かされなかった？」

「変態じゃないと言うとるうに。これだから凡骨は」

大袈裟に首を振ってみせる。

「まあ、そういうことなら仕方ないね。サナもここ最近学校休んでたしね」

奈々華も頭の隅にしこりを残しながらも一応の納得は得たようだった。心の中でほっとする。

「やれやれ。まあ兎に角納得いただけたようで」

と口にもした。ベッドの上に転がった沢山のビー玉を見やる。小さな窓から注ぎ込む夕陽がそれらを強く照らしていた。

「俺の成果だが……」

ラスクさんから貰った巾着袋を縛っていた紐をすつと引いて、布団の上で逆さにする。いくつかは跳ねて体同士をぶつける小さな音を立てて、五十もの金のビー玉が全て白い敷布団におさまった。

俺は遠慮をした。試合は結局ラスクさんのチームが負ける結果に終わったのだから、助っ人としての役目は果たせなかったと思っていた。当然ゼロでも文句などつける気もなかった。だが全打点をたたき出した俺には彼の言う相応の報酬が用意されていた。チーム全員からカンパしたその額は金のビー玉百個だった。吃驚した。断った。ありえないと思った。それでも彼らは人の良さそうな笑顔を浮かべて、俺の名前を覚えていないおっさんなど小遣いだと思えとまで言った、それを渡そうとした。俺にとってはそんな申し訳ないことが出来るはずもなく、かと言って厚意を無駄にするのも気が引けて結局半分ということ手で手を打ってもらった。それでも勿論貰いすぎだと思っている。

「金が五十っすか」

沼田が元氣のない声で言った。言外に滲むものが多すぎて、俺は言葉を整える。

「これも合算して四等分ですか？」

同じように抑揚のない声。やはり来たか、と思う。

「そうだよ。前にも言ったとおり」

「……いいんすか？ お兄さんはそれで」

もう言葉は準備が出来ているので、俺は彼女について少し考察する。

「なあ、俺達は優勝を狙っているわけじゃないんだろう？」

「はい」

彼女は父親を反面教師にしていると推察したわけだが、最もそれが顕著なのが金の扱いじゃなくて、人の扱いなのかも知れないと考える。それは彼女にとって利益よりも人の心情を慮る傾向として現れているんじゃないか。金勘定にきっちりすることをポリシーとするのかと思っていた節があったことも認めざるを得ないから、何だ俺と同じじゃないか、と恥ずかしくて嬉しくなる。

「だったら四人で楽しく過ごそうや」

「それは…… 賛成ですが」

つまり彼女は俺が行く行くは稼ぎの差に不満を抱えるのではないかと危惧しているのだ。金が嫌いな人間など居ないから、常識的な判断だろう。ただ俺は特殊だ。金は好きだが、それ以上に人との繋がりの方が好きだ。青臭いだろうけど、金の苦勞をしたことがないからと言われればそれまでだけど、そうだ。そこまで考えて、用意していたはずの言葉が適切でないことを知る。

「……難しく考えるなよ。皆で助け合えば良いんだよ。お前が俺を氣遣ってくれる、その気持ちだけで俺は嬉しいよ」

心をそのまま言葉にするとクサかった。キャラじゃないことさせん

なよ。

「俺はお前等に迷惑かける気満々だからな。その時のための前払いだと思えばいい」

茶化すように言ったが、真実だ。迷惑をかけない人間なんていない。その時に少しでも、まあ序盤稼いでくれたからと目をつぶってくれと助かる。金の勘定は出来るけど、人が人にどれだけ迷惑をかけたかけられた、良くしてやったしてもらったというのは正確に計れないし計るもんじゃない。言葉を尽くして伝わっているだろうか、と不安になった。沼田はいよいよ諦めたような表情で一つ頷いた。

「……わかりました。もう言いません。だけど代わりにウチのが稼ぐようになって、お兄さんがウチに迷惑かけることになっても申し訳ないとか言わないでくださいよ？　思わないでくださいよ？」

「言わないけど思うだろうな。でもそれで良いんじゃないか？　遠慮とかとは違ってさ、お互いに相手を思いやっている証拠だよ。そう思うからこそ、相手が困っているときに当然に手を差し伸べれるんだ。恩返しするつもりで」

そうすれば切れない。ずっと繋がるんだ。理想論だろうか。綺麗ごとだろうか。だけど俺はそうしたい。そうしてくれる人と付き合いたい。一つ一つは小さなことでも、それを忘れてしまったら人は人を思いやれない。きっとそうだよ。それが一番の根底で、金の扱いはその派生でしかない。奈々華が俺にあれこれ世話を焼いてくれることにとても感謝している。だから俺はこの子に困ったことがあったら何があっても迷わず手を貸す。そういうことだ。そしてこの二人ともそういう関係を築いていきたい。もっと言葉を重ねたいのに、俺の気持ちを上手く相手に伝えるそれ等が見つからない。もどかしい。だけど次の瞬間には正しく伝わっていると、そう信じるに至った。三人が三人、まるで示し合わせたように優しい顔をしているのに気付いた。

「お兄さんて意外と熱いんすね」

そう言われると、俺は本当に顔まで熱くなっていく。

「あ、照れてる。可愛い」

奈々華が見逃さない。

「やめれ。恥ずかしくて死ねる」

素直に降参を認めて、窓際に寄る。組み合わせた丸太をそこだけ切って、窓枠を嵌めただけの簡素なものだが、ガラスは張っている。開けると西日に目を細めながら煙草に火をつける。

「サナがさあ、照れることないのに。とっても格好良いこと言っていましたよ？ だって」

沼田の声も便乗したように弾んでいた。

41 (後書き)

元々前話とこれは一つだったのですが、長いので分割しました。前話の終わりが変だったのはそういうことです。ご了承ください。

結局四人の合計が金115、銀3となるわけだから28個ずつをそれぞれおさめ、残りの金3銀3は共用の巾着袋に入れる。そういえばそんなご長寿も居たなあ。左手のリングにビー玉が吸い込まれるようにして消えるのを見つめる。改めて不思議だ。明らかに物理法則を無視していないか。吸い込んだ後も膨らんだり、げっぷしたりはしない。

「宿代が昨日と今日の分、四人で金四つだから、良い感じに補充できたね。まだちょっと赤字だけど」

奈々華が共用の巾着袋の中を覗き込んで嬉しそうに言う。自分の持ち分が増えたことよりそっちに目が行くあたり彼女らしい。さすがは普段から城山家の財務省。主婦じみている。

「ねえ、お兄さん」

首を振ると、沼田が俺を正面から見ていた。この部屋は本当に余分な家具がなくて、ベッドが二つあるだけ。俺と奈々華は俺のベッド、彼女等は奈々華のベッドの上に、向き合って座っていた。

「サナは友達だから下の名前で呼ぶんでしょう？」

俺が奈々華の主婦根性を垣間見ている間に、沼田はサナちゃんに更なる追求をしていたようだ。そうだよ、と簡潔に返す。

「だったらウチとも友達になりませんか？」

「あ、いいです」

「ひでえ。何すか？ 差別すか？」

「冗談だよ」

沼田は照れくさいことを口にしたせいかほんのり赤い顔で睨む。

「沼田って呼べばいいのか？」

「やっぱ差別じゃないですか。何でサナはサナちゃんてウチは呼び捨てなんすか？」

「何だ？ 下の名前で呼んで欲しいのか？」

「沼田ちゃんでも良いんですけどね。カナちゃんでも」

「カナちゃんて呼ぶ場合は括弧笑い括弧閉じるを、いつも俺の心の中でつけることになるが?」

「だから! 何で差別するんすか?」

「なんとなく」

なんとなくサナちゃんはサナちゃんて、お前は沼田なんだよな。性格のせいじゃないだろうか。そろそろマジで怒りそうな雰囲気があったので、俺は慌てて言葉を探す。だけどコイツが騒がしくて、サナちゃんが大人しくて可愛いのは揺るがしようなない事実。

「じゃあカナでいいんじゃない?」

奈々華がのほほんと言った。サナちゃんの時とは対応が違う。どうしてかと思案して、俺の対応が違うからかもしれないと思いついた。確かに隠し事、と言うほど大仰なものでもないが、は沼田に關してはない。中々凄いなウチの妹。

「……そうだね。カナブン」

「ブンいらない」

「はいはい。よろしくな、カナ」

手を差し伸べる。まだ少し赤が抜け切らない顔で、沼田が俺の手を見る。伸びて来た手を取ろうとこちらも伸ばした手同士が…… 触れ合わない。沼田のヤツが寸前で手を上げやがった。

「ははは。引っかかった、引っかかった」

小学生か。俺は立ち上がって強引に沼田の手を取る。あ、と小さく声を上げた沼田は、しかし抵抗はしなかった。握手。これでやっと名実共に共同戦線と言えるのかもしれない。柔らかに笑んでやると、彼女は視線を外した。そこで藪からぼうにサナちゃんが俺の空いた方の手を掴む。ヤキモチか、愛いヤツじゃのう。「カナちゃんは上の兄弟も欲しかったらしいですよ。だから照れてるんです」違った。冷静な解説だった。ないものねだりというヤツだろうか。ちらりと隣を見ると奈々華と目が合った。何だかんだ俺達兄妹は幸せなのかも知れないな。互いにこの兄が兄で良かった、この妹が妹で良かった。

たと思い合っているような。

「……でもお兄ちゃんの妹は私だけだけどね」

聞こえないように言ったつもりだろうが、聞こえてるよ。明け透けな好意はいつもくすぐったかった。

それからすぐに、彼女達も疲れたと言って解散になった。奈々華も目がトロンとしていて、少し早い眠りにつくことにした。

ひっそりと宿を抜け出すと、野外の空気を肺に循環させた。澄んでいる。こんなに澄んだ空気はあっちでは味わえないものだ。山から吹き降ろすのだろうか、時折俺の前髪を夜風が持ち上げる。周囲は明かりもなく、人は休んでいる時間なのだ実感させる。ほうほうと、どこかの木でフクロウが鳴いていた。

ここ数日のこと、世界の異同を問わず、カナサナ問わず、を考えていた。

少し身勝手ではなかったか。そう映らなかったか。距離を縮めた、心を通わせたと思っているのは自分だけの思い上がりじゃないか。いや、そんなことはない。彼女等は俺を友達と認めてくれた。きつと大丈夫だ。だけど、それでも考えずにはいられない。反省点ばかりを見つめようとする。俺は本当に生きるのが下手糞だ。

歩を進めて川岸まで近づく。スニーカーの先に泥が少しついた。宿は街外れの河のほとりにあった。周囲は鬱蒼と木々が生い茂って、部屋に居ても窓を開けると夜は羽虫が飛んで入る。そこらへんもこの宿にイマイチ人気がない原因かなと関係ないことを思う。

戻ろう。踵を返しかけた時、人が背後に居ることに気付いた。黒い髪に彫りの深い男、同じような特徴の女性と、顔立ちも少し似ている、腕を組んで立っていた。マウンドで見るよりも友好的な笑みを浮かべていた。

「グッドイブニング」

たどたどしい英語が青年の口から出た。気の弱そうな笑みも伴っていた。俺も全く同じ所作をすることになる。きっと第三者、例えば青年が連れてきている女性、なんかが見れば俺が真似たみたいだろう。俺も英語は得意でも何でもなくて、笑めば何か許しを乞うような卑屈なものになる。

＜こんなところで何をしているの？＞

青年は言いながらも、俺と目を合わせずに茂みの方に忙しく目を走らせる。「夜風が気持ちよかったから外に出てみたんだ」と返したかったのだが、夜風を何と言っていいかわからず、

＜河を見ていたんだ＞

と返す。俺も青年も積極的に関わる気もないのに、かと言って無視して立ち去る程の度胸はないのだろうか。失礼かとは思ったが、青年が連れてきている女性に自然と目が行ってしまう。にこにこ愛想の良い笑顔だった。仲睦まじく腕を組んでいる二人は恋人同士だろうか。視線に気付いた彼が紹介してくれる。

＜僕の姉です＞

ちよっと他人事とは思えない。俺のパートナーも妹だよと教えようかと思ったが、青年がまた視線を泳がせていることに気付く。そこで、俺の仲間が潜んでいないか警戒しているのかも知れない、と思いついた。彼からしてみれば、たまたま外に散歩に出たら、人気のない川原に人が居て、それは自分の存在を知る者。確かに気味の悪い事態じゃない。

＜君たちも河に来たんだろう？ だったら俺はもう行くから＞

先回りしてやる。そのまま二人とは十分な距離を取って道を引き返す。恐らくは彼のためにも、俺のためにも、例え出会う場所が違えば友達になれるかも知れないと思えるほどに共感出来る部分を認め

ても、必要以上に関わり合うのは良くない。しかし俺の気遣いなど不要とばかり、青年が近づいてきて、小さな声で、

<あのホームラン、何か言うことはないの？>

そう言った。

腹を殴られたのだと気付いたのは、青年の歪んだ笑みを滲む視界に捉えたときだった。見慣れた顔だった。人を馬鹿にして、人を嘲って、悦に入る、自分の優位を確認する、そういう類の笑みだった。割れた鏡に笑いかけたように、それは気色が悪くて、俺の心をざわめかせる。痛みと吐き気で、視界が安定しない。暗転するような眩暈。

<あれを打てたのは僕のおかげなんだからさあ……>

片膝をついた俺の顔に向けて蹴りが飛んでくる。すぐに顔の前で腕を交差させるが、あっさりと体ごと弾き飛ばされる。視界がグルグル回って、木にぶつかったのだろう、背中に痛みを覚えて止まる。足に力を入れて何とか立ち上がる。吐きそうだ。腕が鼻に当たったのか、血の匂いがする。口の中がジャリジャリする。砂を嚙んだのだと気付いて、つばを吐く。

<分け前くれても良いんじゃない？>

吐き気は目が回ったからとか、腹にまだ少し痛みがあるからとか、そんなことじゃない。その笑みをやめろ。仮面みたいな笑みだ。貼り付けたような笑みだ。女も、同じような顔で俺を見ている。やめろ。やめろ。俺は怒りと後悔が胸を押し潰そうとしているのを感じている。滑稽に騙されていた。あのマウンドの笑みを全く取り違えていた。彼の警戒の意味を真逆に考えた。

<出せよ>

ふざけるな。俺が打ったホームランだ。奈々華が凄いと喜んでくれて、サナちゃんが見たかったと子供みたいに悔しがった、カナが馬鹿とはさみは使いようなんてからかった…… 皆のために稼いだお金だ。皆で楽しく暮らすためのお金だ。

「出すかよ。言いがかりもいい所だろう。てめえ手加減して放つてたんじゃないだろうが」

伝わらなくてもどうでもいい。英語なんて考えている暇じゃない。青年もまた連れの女に自国の言葉で捲くし立て、二人が二人、小振りのナイフを取り出した。ヘラヘラと口元だけ笑う顔はやめない。不意打ちの一撃を腹にもらった相手に二対一で、武器まで使って負けることなんて微塵も考えていないんだろう。馬鹿が、と俺の方こそせせら笑ってやりたい気分だ。

走る。二人の顔がその速度に驚きを浮かべる。腹なんてもうとつくに直っている。素人に毛が生えた程度のヤツが持つ武器なんて屁でもない。女の方なんて構えから怪しい。俺が顔を顰めていたのは、お前等の醜い笑い顔が気に入らなくて、人の気持ちなんて何も考えない言い草に腸が煮えくり返っていただけだ。青年がナイフを構えて俺を迎え撃つ。振り上げる。刺せばいいのに、とやはり嘲笑したくなる。上がった右腕の付け根を掌で押さえる。初歩中の初歩。殴ってもいいかと思ったが、勢いがついていいる分、頭突きの方が早いなど、そうする。ゴチツと大きな音がして、俺の前頭部も少し痛い。鼻が折れたんじゃないかなと、いやに冷静な頭が考える。次いでドサリと膝から青年が崩れ落ちる音、女が腰を抜かして落ちる音が重なって聞こえる。鼻を押さえる青年の腹を蹴り上げる。仰向けに倒れなおした青年の左右の指を目だけで確かめる。夜にあって、右手の中指に光るものを見つける。青年が落としたナイフを拾い上げてから、すっと腰を落とす。女が何事か叫んで動かない体を無理矢理動かして俺の足を掴む。

「殺しはしないよ」

ただこのゲームから退場してもらおう。振り下ろす。女の悲鳴がうるさい。指輪はなまぐらのナイフでも簡単に壊れた。輪っかの部分の金属が千切れてポロリと落ちる。それと同時に、俺が昼間包まれたような白い閃光がどこからともなく起こる。女の手を蹴るように退けて立ち上がり、距離を取る。入れ替わるように女が光に包まれ

る青年に這っていく。光が消えると、青年の体はどこにもなく、女が地面に座っているだけだった。

俺の対応は素早かった。宿に戻り、階段を駆け上がる。本当のことを言うと、後の参考のために女もまた失格となるのか見届けたかったが、それは無理だった。警察がやってくるかもしれない。ホスト側は関知しないとしていたが、どこまでそうなのかは不明瞭だ。どこから参加者全員の動きを隠れ見えて、犯罪行為をした場合は、本仮想世界における治安維持機構とやらに即座に対応を促すかも知れない。それに、河の方へつけた一階の窓から覗いていた宿の経営者の夫人と目が合った。女の騒がしい悲鳴に気付いて見ていたのだとしたら、俺の方が完全に悪者だ。通報される、もしくは既にされている可能性がある。そして目が合った瞬間、怯えきった顔でカーテンを閉めた彼女の所作からは、可能性どこの話ではないことが容易に想像できる。俺の部屋に入る。電気を点けて奈々華を起こす。

「……ううん。夜這い？」

「ちげえよ。早く起きてくれ！」

奈々華が眠い目を擦りながら、やおら半身を起こしたあたりで、俺は身を翻して隣の部屋へ向かう。

ドアを開ける。女の子の寝室にノックもなしに入り込むのは、なんて悠長なこととは言っていられない。同じようにしてサナちゃんを起こす。サナちゃんは吃驚してすぐに起きてくれた。

「悪い。説明は後だ。カナを起こしてから俺の部屋に来てくれ！すぐに。非常事態なんだ」

喋っている途中で彼女たちが花も恥らう女子高生ということに気が付き、準備を入念にしてから訪ねられても困ると慌てて付け足していた。

戻る。部屋の中に安置していた大きなリュックサックを背負う。中にはこの間揃えたアウトドア用品が一式入っている。奈々華も非常事態を悟ったのか、戻ったときには起き上がっていてくれた。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

声にも緊張があった。理解の早い妹で助かる。

「後で説明する。とにかくお兄ちゃんが豚箱に放り込まれる前に出るぞ」

「何なんすか？ こんな夜更けに！」

振り返るとカナサナが部屋の戸口に立っていた。猿の絵がプリントされたサナちゃんのパジャマは可愛いが今はそれどころじゃない。

「説明は後だって。黙って皆俺についてきてくれ」

部屋を出る。ちよつと、とカナが声を出したが、無視して階段を下っていく。後ろがちゃんといついてきているか心配だったが、奈々華が上手く指揮してくれたのか、複数の足音が続いた。一階は食事処兼用で、テーブルが所狭しとある。カウンターの上に、巾着袋から取り出した四つの金のビー玉を置く。

「ちよつとマジにどうしたんすか？ てかどこ行くんすか？」

カウンターに寄って、店の戸口へと向かう俺と後から階段を下りてきた三人は丁度合流する。戸を開けると夜の空気が火照った体を少し冷やしてくれる。少女達には寒いのか、奈々華が自分の体を抱いた。

「人を殴った。警察に捕まっちゃう。逃げるんだ」

「え？ え？」

「良いから。今は俺についてきてくれ」

「逃げるアテはあるの？」

奈々華が一番冷静だ。さすが我が妹。

「アテはない。ただ山を、ラプラインダルだっけ？ それを越える」
ケーンズパークまでは平原を行くのだから分が悪い。追撃をやり過ぎすには山道の方がいいだろう。目くらましにもなる。俺はそれだけと言うと、先陣を切って夜の道を走り出した。

道の向こうから、紺に近い黒の服を上下にきちっと着た男が三人ほど走ってこちらに向かってくるのが見えた。警察だろう。やはり通

報されていたのだろう。黒髪の青年と少女三人と特徴を告げられていたら、間違えようがない。現に彼らの足取りに迷いはなかった。

「どうするの！」

カナが上がる息をそのままに尋ねてくる。

「任せろ！」

俺は更に走る足に力を込める。本当のことを言うと、三人の速さに合わせていたのだから全く全速力ではなかった。それを今やる。駆ける。

「止まりなさい！」

警官が決まり文句のように警告。日本の警官寄りかなあ、外国ならもう発砲されているだろう。いや、そもそもこの世界に銃火器の類はあるのだろうか。どうでもいい考察が湧き上がり、また沈めていく。警官の一人まで後数メートル。更に加速、跳ぶ。右膝を残しておいて、それを鼻っ柱に思い切りぶつける。ゴキッと嫌な音がして、警官は一発KO。蹴った感触も人とあまり変わらなかった。

「ごめんよお。マジごめんよお」

だからこそ本当に申し訳ない。残り二人も駆け寄ってくるが、警棒しか持っておらず、長物の扱いには自信のある俺からすればそれは大した腕前じゃなくて、軽くないなして顎に蹴りと拳を入れて、おとなしくしてもらった。遠巻きに見ていた三人が思い出したように走ってくる。

「お兄さんやバイっすよ！ これ公務執行妨害とか言うヤツなんじゃないんですか？　つか暴行？　傷害？」

「仕方ない」

警官たちを避けて再び走り出す。後ろもまた走ってついてきてくれる。本当によくついてきてくれると思う。十分に事情も聞かされなのまま、事態も把握できないままなら、俺は悪にしか映らないだろうに。

走る。走る。野道は暗いが、街の北出口はもうすぐだ。

ラプラインダル山は標高千五百メートル超の山だった。多種多様な木々をその山肌に育み、秋には色とりどりの紅葉で見る者を驚かせるのだとか。標高こそそこそこあるものの、山道は登りやすかった。急な斜面や、きりたった崖なんてお約束な障害もなく、そもそも登山コースのような整備された道もあって、苦労知らずに二合目くらいまで来た。

「……少し休もう」

警官はフライングニーをかました後は見かけない。対応が遅れているのか、俺が凶暴につき慎重になっているのか、はたまた深夜の山の探索は危険と判断したのか……

俺達は登山道を少し外れる。左手にコット川が流れるその道は、中々綺麗に整備されているが、歩を止めるなら目立つ場所には居たくなかった。獣道のような隙間をなぞって木々の間をすり抜けていく。ここいらまでも川の飛沫が飛ぶのか、地面は同様に湿気ていた。水の匂い、土の匂い、緑の匂い、それらが混ざり合った独特の芳香に少しだけ癒された気持ちになる。彼女等も黙って俺についてきた。チラと窺うと皆寝巻きの裾に黒い土をつけていた。疲れた顔をしていた。

「ここいらでいいかな」

歩道は少し下の方に見える。崖というほどではないが、今居るところからでは少し高低差がある。俺は木の幹に背中を預けてその場に胡坐をかいた。皆は俺を取り囲むように立った。

「そろそろ説明してくれない？」

奈々華が皆の心境を代表する言葉を俺に投げかける。神妙な顔を作って頷く。俺はあらいざらい話した。野球の試合で対戦した相手と、夜中ばったり出くわしたこと。彼は虫も殺さないような顔をして、俺から金を強奪しようとしたこと。返り討ちにして、強制送還を喰

らわしたこと。

「……すまない」

口にして、一番最初に言うべきことだったんじゃないかと自省の念にかられる。珍しく口を挟むことなく俺の話を最後まで聞き終えたカナが、一際不機嫌そうな顔をした。寝起きではさすがにパンダのようなアイシャドーはなかった。そっちの方が可愛いよと素直に思ったが、言葉にはしなかった。

「謝んのはナシだって。ウチ等助け合っていくんでしょ？」

とカナ。サナちゃんもコクコクと頷いた。

「それに正当防衛じゃないんですか？　どうして警察にきちんと説明しなかったの？」

言われてみて、そういう方法は頭の隅にもなかったことを知る。何故だろうと自問。不利だからじゃないだろうか。暴力行為の現場の目撃者、つまり宿屋のおばさんは、十中八九俺が暴力を振るってるところしか見ていない。そうになると話もろくに聞いてもらえない可能性がある。こっちの警察がどういう体質かはわからないが。

「ああ、俺警察不信なんだ」

「あのねえ」

カナの呆れた顔。

「いやだってさ。こっちの警察がこういう対応するかなんてわからないじゃん。多分俺完璧悪者として通報されているからさ。問答無用で逮捕なんて事態も考えられるわけよ」

「もう完璧悪者だしね」

奈々華が合いの手。あんまり嬉しい合いの手ではないが、公務執行妨害のおまけまでつければ確かに完璧であることは間違いない。サナちゃんが腰を落として俺の手を握る。「もしかして私たちに危害が及ばないように、あえて強攻手段をとったんですか？」うん？

少し言葉の意味を考えて、言いたいことを把握する。俺が逃げたりした場合には、連れの彼女等に青年が牙をむくと俺が考え、それで

その場でやつつけたんじゃないかと、彼女はそう言いたいようだ。彼女の言葉を読み上げ、それから話す。

「いやあ。買いかぶりだ。殴られてカッとなったただだよ」

正直に言くと、それは勿論憂慮していた。だけど大抵は言葉通りだ。俺達全員で稼いだ金を奪おうなんて不逞の輩には裁きの鉄槌を思ったのが主だ。

「はいはい。ええ格好しいね」

「ちげえってば」

カナの顔は呆れと、それ以上の愛着を含んでいる。俺はそんなにわかりやすいだろうか。

「じゃあ全員悪者ってことだね」

奈々華が締めくくる。皆のために犯した犯罪、そう言ってもらえると心がぐんと軽くなる。

青年との一件は、俺に二つの示唆を与えた。まず一点、違法行為をしてまでビー玉を集める人間の存在は由々しい問題だった。金の魔力なんて話もうわかりきっていることなので、思考の隅に追いやるが、実際動機がなんであれ、そういった危険な存在にこれから出くわす可能性を考えさせる。本来なら俺の性格上、奈々華は仕方ないけど、サナカナの二人には、今となってはお尋ね者の俺とチームを組むのは得策ではないと別行動を勧める気持ちが湧きそうなのだが、それが今以て全くないのはそのためでもあった。彼女等が危険な目に遭った時、このゲーム内では俺以外に彼女達を守る者は居ない。

もう一つが警察の対応だった。いくら山中に逃げ込んだといっても、追撃の気配すらないのはおざなりと言わざるを得ない。もしかしてと推測を立てさせる。彼らが追ってこれるのは街の中だけなんじゃないか。そうプログラムされているんじゃないか。またテレビゲームを思い浮かべる。例えば敵が動ける範囲が決まっている。街を出るとそれまでやっていたことがリセットされる…… どうなんだろう、訝りながらも有り得る話だと思った。青年と女は、腕は未熟ではあったが、ああいった追い剥ぎみたいな行為には慣れているように感じた。もし過去にも何度かやっていたとして、いつもいつも俺を襲った時みたいに人気のない場所で行っただろうか。警察の対応に穴を見つけていたからこそあの手法を取り入れたんじゃないか。

「お兄さん。お兄さん！」

ふと顔を上げると、カナが呼んでいた。

「私達着替えるからリュックを出してください」

俺が思考の渦を頭の中でグルグルやっている間にそういう話になっていたらしい。今日はここで休むつもりだったが、なんにしても彼女等にとっては汚い服装のままでは居心地が悪いのだろう。背中か

らリュックを外して、体の前に押し出す。

「じゃあ俺も一緒に着替え……」

「ないよね？ はいこれ巻いていて」

奈々華が俺のほつぺたを抓ると、ハチマキのような布切れを渡した。これで目を覆えということらしい。俺が覗くとでも思っているのだろうか。ガン見こそすれ、こそこそ覗くような真似は断じてしないというのに。

「サナ見張ってて。ウチ等が終わったら今度は私がやるから」

信用なんてこれっぽっちもないな。どうしてこんなことになったんだろう、ぼんやり考えながらハチマキで目を隠した。その後、サナちゃんが俺の傍に座る気配、二人が離れていく、木立の茂るほうに向かってだろう、気配。やがて衣擦れの音やリュックのチャックを聞く音、様々、扇情的な音が聞こえてきた。これはこれでアリだな。そう思った。俺はもう一つ上のステージへと昇れるかもしれない。

全神経を耳に集中させていた俺は、暗闇の中で不意に掴まれた右腕をぎくりと硬直させた。サナちゃんはそんな俺に一瞬戸惑ったようだが、すぐに書き込んでいった。「お兄さん怖くなかったですか？」すぐに青年と対峙したときのことを言っているのだと気づいた。

「……俺は武道をやってたからね。武道家がチンピラに臆するわけにもいかんさ」

月並みな精神論で茶を濁した。サナちゃんは「それでも」と書きかけて、俺の手の平に大きくバツをうった。「お兄さんはどうして私達をそんなに必死に守ってくれるんですか？」と書き換える。

「別に必死になった覚えはないさ。本当に何でもないよ、あれくらい」

どうにも強がりに聞こえないか。さつきサナちゃんが書きかけてやめた言葉の続きはなんだったのか。「でも守ってくれます」と。

「サナちゃんに惚れているからかな？」

言葉の意味を飲み込む時間があって、ひゃっ、と声がした。繋がっ

た手がバツと離される。

「冗談だよ、冗談」

とは言え、ちょっと傷ついた。気を取り直して、真面目な声音を作る。

「……君たちが何も聞かずにいつてきてくれた理由と多分同じなんじゃないかな？」

要するに友達だから。サナちゃんの顔は見えないわけだから、彼女が今どういった感情をしているか憶測することも出来ない。どうせろくな精度ではないんだから、それこそ青年の仮面を見破ることさえ出来なかった、とは思ってもやはり視覚に頼りたくなる。ハチマキを少し上げようと、手を近づけた。

「ダメ！」

サナちゃんの小さな手が俺の右手を差し止める。

「サナちゃんまで俺を信用していないのか？ 確かに俺は変態だけど、嫌がる彼女等の下着姿を無理矢理見ようとは思わないよ」

やがて、サナちゃんは俺の手を膝の上に戻し、掌を天に向けさせる。「違うんです。信じてます」俺も冗談半分だった。彼女等の中に俺への信頼を確かに感じるし、俺の中にも彼女等への信頼がある。そもそもさっきも言ったように、信じていないのなら黙ってついてはくれない筈だ。まあもつともこうして目隠しまで強制されているのだから、そういった方面では全く信用がないのだが。「私男の人に告白されたの初めてだったから、ちょっとまだ吃驚してるんです」と続いた。

「アレは冗談だからね。気にしないでよ？ っていうか驚かせてしまったんなら、ごめんね」

また考えなしに冗句を言ってしまった。どうして深く物を考えないままに口が動くんだろう。ホッチキスとかでとめておくか。どうせ放っておいてもろくなことを喋らないのだから。

「……はい」

サナちゃんの小さな声は、カナの馬鹿でかい「終わったよ！」と言

う声に掻き消された。

奈々華が話しかけてきたのは、他の二人が寝静まった頃だった。お兄ちゃんと突然呼ばれたものだから、驚いて体が不恰好に跳ねた。

「どうしたんだ？」

糞虫みたいに寝袋から顔だけ出した彼女等の方を向く。案の定二人は月明かりにぼんやり照らされて見る限り眠っているようだった。奈々華だけが目をはっきり開いていた。

「眠たくない？ 代わろうか？」

俺は見張りをしていた。警察や野生動物、一応は警戒しておかなければいけない。

「大丈夫だよ。お前ももう寝なさい」

正直に言うとは眠たくないはずもなかった。だけどコレは俺が一人でやろうと思っていた。それがせめてもの責任だと感じていた。いくら彼女等が寛容に俺を許したとしても、俺自身はやはり申し訳ないと思う気持ちを払拭しきってはいなかった。そもそも俺が外を出歩かなければこういう事態にはならなかったのだから。奈々華は糞虫から尺取虫へと変身。くねくねと体を振りながらこっちにやってくる。気持ち悪いような可愛いような。

「目が冴えちゃってさ」

嘘だ。眠る前に目をしばたかせて、欠伸を幾度もしていた姿を見ている。それを指摘する言葉はついぞ喉元に上がってこなくて、代わりに奈々華の頬を指の腹でくすぐる。ううんと甘えた声で唸りながら、彼女の方からも頬で指を押し返す。もち肌はいつ触っても心地良かった。

「……ねえ」

「うん？」

しばらくそうしてじゃれ合っていたが、奈々華が急に真剣な声を出した。

「やっぱり怖いね」

頬を撫でる手を止め、考える。

「ああ、お金がかかっているからね」

「お金ってそんなに大事なのかな？」

「……なんでも買えるからね」

なんでも、と奈々華が繰り返して、それは納得した声音ではなくて、
「人の心も？」

と尋ねる。きつと何万人もの人間が何万回も考えた問題じゃないか。
手垢まみれの提議じゃないか。

「……お金があるだけで心が潤う人間も沢山いる」
そっかっただけ。

「だけど、お金で作った絆はきつと脆いさ」

言いながら本当だろうか、と考える。だけど抵抗したかった。例えばこの子との絆が、ショーウィンドウの向こうに飾られていて、それには値札がついていて、読み上げるといくらくらと書いてある。そんなのはとても切ない。

「うん、そうだね…… 仁君の気持ちを買えるなら、私はとくに……」

奈々華は途中で言葉を切ってしまった。三年、彼女が一人で過ごした時間のことを言おうとしたのか。それともこれから先のことだろうか。後者だとしたら、これ以上彼女は何を望む。俺はまだこの子を満足させることが出来ていないのか。足りないのか。何が？ どうすれば？ やめよう。彼女は言葉を切ってしまったのだから、考えても正確な答えなど出るはずもない。仮定の話に仮定を重ねて膨らませるのは俺の悪い癖だ。奈々華は俺の心中を察したわけでもないだろうけど、話題を変えた。

「どう？ カナもサナも良い子でしょう？」

「ああ。お前の友達なんだからそれは最初からわかってたことだけどね」

彼女の長い髪が顔に掛かりかけていたので、すくい上げて耳に掛け

てやる。返答が彼女の望むものだったからか、その行動が彼女の気持ちを持ちを柔らかくしたのか、にこりと無邪気に笑った。やっていけそう？　と尋ねるので、ああと一先ず答えてから言葉を繋げた。

「二人とも俺の無駄に回す気を好意的に捉えてくれていると思う」

「そうだね。私にもそう見えるよ」

奈々華のお墨付きとなれば、俺も一安心。煙草を懷から取り出して火を点ける。自然の中で吸うコレは格別に美味い。肺の中にメンソールの清涼感を森の静謐な空気と一緒に取り込めば、胸の内が洗われるようだ。

「ねえ。疲れない？」

奈々華がそんな清々しい胸の湖面に石を投じる。ポチャンと波立たせる。

「何が？」

「そんなに人に気を遣ってばかりで」

奈々華の声には純粹な疑問しかなかった。俺の生き方に否をぶつけるような意思是汲み取れなかった。ただ言葉が正しく厳選されていないだけだった。

「疲れても疲れなくても、もう直りようがない」

「少なくとも……私と居るときはもっと我が侘言っていいんだよ？」

それが伝えたいことだったようだ。サナちゃんとの交流を思った。俺は彼女にこうすればいいのにと提案した。歌えばいいよと。それを押し付けがましいと散々後悔した俺だったが、奈々華はストレートにそれを伝えられる。今こう言われて気付いた。押し付けがましくなんてないんだ。取捨選択はこっちに残されていて、彼女の優しさだけが伝わってくる。湖面の波が引いていく。

「ありがとう。けどさ、俺はお前には気を遣っていないよ。優しくしようとしているだけ」

どうすれば君が笑ってくれるか、どうすれば君が喜んでくれるか、そればかり考えている。

「うん、そうか。そうだね。ちゃんと伝わってるもんね」

優しく瞳を閉じる。緩く口の端が持ち上がっている。

「でも…… して欲しいことがあったら言うよ。やめて欲しいことがあったら言うよ」

家族だから。これから先もずっと付き合っていくから。好きでい続けるために。

奈々華は少ししてから眠ってしまい、しばらく俺は三人の寝顔を見つめていた。昼頃になって皆が起きてきた頃に、太陽の光とは違った白い閃光が俺達を包んだ。

目が慣れてきたと思ったら、知らない場所だった。部屋。フローリングの床と白い壁紙。メタルラックは三段構えで、下の段に本や漫画、真ん中の段に辞書や参考書、上の段には亀とうさぎのぬいぐるみが沢山。勉強机もあって、そっちにはブックスタンドに挟まれた教科書が並んでいる。中ほどには化粧品や手鏡が乱雑に置かれている。端をスタンドライトが噛んでいて、それ自体は変哲のないデザインだったが、何かゴテゴテとデコレーションされている。プリクラなんかも貼っているようだった。カーテンは淡いピンク。ベッドカバーや枕の色もそれに統一されていた。女の子の部屋だ。化粧品や香水の匂い、それに負けない女子の匂い。

「……ウチの部屋みたいっすね」

「へえ」

奈々華も初めて来るのか、キョロキョロと無遠慮に首を動かしている。

「あの、お兄さん。クンクンすんのやめてもらえませんか？」

「はい、スイマセン」

いつの間にか俺は音を立てて鼻を動かしていたらしい。サナちゃんの白眼視。ぞくぞくするぜよ。

「なんだってウチの部屋に？」

カナはサナちゃんを。俺は奈々華を。それぞれ見合って、首を傾げる。今まではそれぞれの家に帰されていたのになあ。そこで俺はそんな疑問も吹っ飛ぶ大事な問題を思い出す。

「そうだ。俺車に乗ってたんだ！ どうなった？ 車どこだ？」

これだけいい加減な転送をされているようじゃ、かなり不安だ。誤ってクローゼットを開けるのだから、俺は相当動揺している。キャミソールが三着、パーカーが三着、ジーンズ素材のジャケットが一着……

「ギャー。何やってんすか！ やめろこの変態」

頭にゴスツと重い衝撃。辞典のようなもので殴られたようだ。振り返ると真っ赤な顔したカナが鼻息荒く俺を睨んでいた。

車はカーテンを開くとマンションの駐車場に止まっているのを発見した。誰が車庫入れしたの？ やっぱりのキチガイ仮面の変態達？ 嫌な想像は振り払って、とりあえずは気持ちを軽くして、次なる問題に取りかかる。

「ご家族は？」

カナに疑問をふる。彼女は首を横にふる。

「この時間は居ないでしょうね。タク…… ウチの弟拓馬って言うんですけど、あいつも多分外で遊んでるだろうし」

「お母さんは？」

「仕事」

短く返した。にべもなく、彼女が自分の母親にどういった感情を抱いているのか、欠片も察することは出来なかった。

「弟さんはいつも外で遊んでるの？」

奈々華の質問。

「ウチと遊ぶときもあるけどね。大抵は外で友達と…… 虫でも捕ってるんじゃないかな」

虫の単語のあたりで、眉根を寄せる。彼女は嫌いなのかも知れない。小学生くらいの男の子ということを考えると虫を使って悪戯をされたりするのもかもしれない。

「それはいいことだ。虫捕りはいいぞ」

「何がいいんすか？」

「子供の時、いかにバツヤやセミを残酷に殺すかで、大人になって

からの懐の深さが決まる」

「何それ？」

「真理だよ。大人になってからだ、今度は虫じゃ済まないしね」
「適当に繋いだ言葉だったけど、真理と言うのはガチだ。」

「ウチは殺してないんだけど？」

「だからお前はダメなんだ」

「私も殺してないよ？」

奈々華。

「私も」

サナちゃん。

「君たちは大丈夫だよ。そもそも女の子と男の子では全然違うからね」

「ウチも女なんですけど？　　っていうか何なのこの変態は。何でウチだけ差別するの？」

「お前が可愛いからに決まってるだろう？」

そう言って頭をグシグシしてみる。嫌そうな顔を作ってはいるが、口元が微妙に綻んでいる。払いのけられたりはしない。こいつも少しは懷いてきたんだろうか。

「きもいよ」

「そう思うなら手をはねのければいいだろう？　　てかちょっと嬉しそうだぞ？」

「誰が！」

すいと頭を動かして手から逃れる。そのまま部屋を出て行こうとする。

「どこ行くんだ？　　ウンコか？」

「死ね！　　お茶くらい出すってこと」

ボタンと強く扉が閉じられて、思わず顔を顰める。

「ふう、口の悪さは直らんなあ」

「今のはお兄ちゃんが悪いってサナが言ってるよ？」

口を開けばデリカシーのない冗談しか出ないんだから、いい加減慣

れてもらわないと困る。

これからどうしようかと言う話になるのは当然の流れで、俺は記憶を頼りに地図を書き起こしていった。まず点を紙の真ん中下寄りに打って、ラッフェルとする。そのすぐ上に半円を描いてラッフェル山。半円から二本平行線を引いてラッフェルの横を通して紙の下の方まで伸ばす。コット河。山の向こうに小さな点をもう一つ。

「これが？」

「そう。グーデルタ。小さな宿場町だ」

ラッフェル山を越える旅人や商人のために作られた街。憩いの場、休憩所という意味だったはず。

「ここを指すんだ？」

床の上の紙を皆が覗き込んでくる。いい匂いがする。ああ、と小さく。

「うへえ。やっぱりあの山登るんだ」

カナが嫌そうに声を出す。謝りそうになって慌てて口を噤む。気を遣うことに気を遣う。何だかがんじがらめになっているようで、苦し紛れに笑いたくなる。

「でもハイキングだと思えばきっと楽しいよ」

奈々華がお気楽に言う。ありがとうと言いつつになつてやはりやめる。俺が地図から顔を引くと、それが合図になったように皆一斉に顔を戻した。

「まあグーデルタは特に見るものもないようだし、最終目的地はその先……」

グーデルタの丸から更に上に、心持ち大きな丸をうった。フロリーングの板の継ぎ目に当たって、ぼこりと波打った。

「ハケルイン」

大きな街だという話。ここなら仮に俺が指名手配なんてことになっても、身を隠すには丁度良い。仕事也多そうだ。物流の拠点と

して栄えているようで、その意味は要衝。的を射ている。おずおずとサナちゃんが俺の手を取る。「どうしてそんなにあっちの事情に詳しいんですか？」もったもな疑問だ。タウン誌じゃないんだから、地図を見ただけで色々知っているのはおかしい。

「ラスクさんに話を聞いたんだよ」

なるほど、と皆納得。野球の試合中、雑談の種に困った俺はそういう話を彼から聞いた。試合に集中していないから負けるんだと言われればそれまでだが、自分の打順が遠いどうしてもダレる。ラスクさんの人の良い笑顔を脳裏に描く。せめて別れの挨拶くらいしたかったな。俺と関わっていたことで迷惑を掛けていないだろうか。カナはカリーナちゃんともっと遊んであげたかっただろうな。やはり謝りたい衝動が湧いて、苦い顔になる。懷から煙草のケースを取り出して、蓋を開けかけて、ここに灰皿がないことに気付く。最早意識の外、習慣の一つとなっているらしかった。

「ああ、灰皿…… ママの部屋にあったかな？」

カナが立ち上がるとうとするので慌てて制す。

「いや、いいよ。そろそろお暇する頃だろうし」

時計は午後の二時を指していた。カナが出した珈琲を一気にあおる。「ウチ今日はバイトないから、別に……」

寂しそうな顔をした。弟さんもきつと日が高いうちは帰ってこないだろう。つまり彼女は俺たちが帰ると一人になってしまう。参ったな、眠いんだけど。そう口に出来ないあたりは俺が俺たる所以か。きつと最初から一人なら、いつものことかどうかということはないんだろう。なまじっか友達が居るから、その落差を思ってしまうのかもしれない。

「……じゃあなんかやろうぜ」

そうしてボードゲームでもないのかと、探し出してもらったゲームが酷いものだった。

ステレオタイプなボードゲームらしく、マスが沢山あって、プレイヤーは台座のついた人形をサイコロの数だけ進めて行く。目に従っ

て止まったマスに書かれたことをこなしながら、一番最初にゴールのマスまで辿り着いた人間が勝利というものだが、その過程が問題だった。

「1、2、3、4」

奈々華が四つ人形を進める。ピンク色のヤツだ。マスに止まると指示が書いてある。覗き込む俺の頬に強烈な張り手がかまされる。パチーンと鋭い音がして目の前が点滅するよう。任意の人間に張り手をする、と書かれていた。一番手で出発したカナのローキックを皮切りに、任意と言ったら俺、という流れが出来上がってしまったている。

「お兄ちゃんに張り手したのなんてはじめてかも」

いやあ、何回か軽いヤツはやられている記憶があるよ。頬が熱を持っている。手でさする。その間にサナちゃんがサイコロを振る。3。まて、3っていったら……

パチーン！

奈々華と同じマスに人形を置くや否や、今度は俺の左の頬がはじける。ただでさえ眠気で弱くなっている意識を更に揺さぶる。視界に如実にあらわれて、立ちくらんだようにグニャグニャする。

「お兄さんの番ですよ？」

「ねえやめない？ これ。俺だけが損するゲームになってるし」

っていうか何なのこのゲーム。友達同士でやるには余りにバイオレンスじゃないかい。いいから、と囁いたてられて渋々にサイを転がす。6。おお、いいじゃないか。早く終わらせたいので大歓迎だ。青い人形の頭を引っ掴んで、六つ動かす。任意の人間に尻を叩かれる、とある。

パンパン！

四つんばいになって人形を動かしていた俺のケツは隣り合う二人にはとても叩きやすい位置にあった。

「ていうか叩かれるって何だよ。叩かれるって。いやそもそもなん

で二人に叩かれたの？」

「細かいことは言いつこなしたよ」

カナがまるで他人事の口調で言うと、サイコロを振る。4。任意の人間の腹を踏む。

「待って待って！」

「いいから早く寝そべって」

サナちゃんと奈々華が信じられない力で俺の腕を引っ張って大の字に寝かす。すぐさまカナが立ち上がって足を振り下ろしてくる。何とか腹筋に力を入れる間は持てたが、それにしても痛い。顔を顰めながら、さりげなくスカートの中を仰ぎ見る。水色の可愛いパンツが見えた。俺の視線を辿ったカナが、ギャーと悲鳴を上げて何度も俺の腹を踏みまくった。

結局三時間ほどの恐ろしいゲームをやっていたことになる。そろそろ夕飯の支度をしないと、とカナが言い出したのが天使の声のように聞こえた。誰もゴールまでは辿り着かず、暴力の嵐に晒されていた俺はそそくさとゲームを片付けた。片付けながらも、なるほどと思った。弟は小さいし、お母さんは仕事で帰って来ないのだから彼女が家事をするしかないのか、と。部屋を出ると、中々に広いマンションだった。十畳以上ある居間は台所と繋がっていて、廊下にはカナの部屋、お母さんの部屋、弟さんの部屋へと繋がる扉があった。居間からは大きなベランダがガラス戸越しに見えた。

「飯も食っていきますか？」

「いやあ、さすがに悪いよ」

他二人も同様に遠慮気味な面持ち。カナも言ってみただけといった感じで、すぐにそうっすかと小さく笑った。彼女は弟さんと二人でいつも夕食を食べるのだろうか。夕飯時にはお母さんも帰ってくるのだろうか。そんなことがふと気になったが、踏み込みすぎだと判断して言葉にはしない。分譲にしても賃貸にしても、そこそこ値が張りそうな所に住んでいることを考えると、お母さんは中々の高給取りなのかもしれない。いやらしいことを考えているのはわかってるが、そこらへんを加味するとお母さんは帰りが遅いのが常かなとあたりをつけてみた。

「カナは寂しがりなのかな？」

奈々華も知らなかった一面、ということになるか。助手席の彼女をチラと見る。サナちゃんは自宅に送り届けた後だった。

「かもね。憶測で物を言うのも、気が引けるけどさ」

「うん」

「上の兄弟も欲しかったのは、そういうことかもね」

サナちゃんには少し胸中を吐露したのだろうか。中学の多感な時期、家族が一人減った。それがどんなに嫌っている相手でも何も思うところがないはずもない。影響がないはずはない。もしかしたら父親と共働きだったかもしれない母親は当然仕事の量を増やしただろうし、彼女が高校に上がってすぐにバイトをし始めたのもそういった兼ね合いかもしれない。弟も大きくなり、お姉ちゃんばかりでもなくなったろう。小さな孤独を抱えているのかもしれない。痛みはさほどなくて、苦しさもほとんどなくて、それは出来物に抱く違和感のように、意識のどこかに小さく確かにある。騒ぎ立てるほど大きくなくて、でも少し寂しくて……

「お兄ちゃんにちよっと甘えてたね？」

「……どうかな」

彼女のその空洞を埋めるには、確かに上の兄弟が適切かもしれない。彼女よりも大人なその姉や兄は、それを敏感に察知して、少し構ってあげる。弟にそれをするばかりの立場の彼女にとって、叶わない憧れ。そう思うと、弟に対しても複雑なのかもしれない。何故自分だけがという思いもあるのかもしれない。

「だってあの子、お兄ちゃんが眠たいのわかってたよ？」

奈々華は責めるような感じではなかった。むしろ微笑ましいという感じだった。こういう時には自分本位に嫉妬ばかりでもないから、俺はこの妹が好きだった。

「はは。俺を蹴りつけたかっただけじゃないか？」

クスクスと奈々華の忍び笑いが聞こえてくる。バツが悪くてフロントガラスだけを見つめる。少しずつ暗くなっていく空に、街灯が明かりの役目を担っていた。

「……今度また遊びに行こう」

自然とそんな言葉が出る。俺はいつだって暇なんだから、彼女が暇なときに遊んでもらおう。サナちゃんの時と同じように何の下心もなくそう思える。そうだね、と奈々華も同意してくれる。

「携帯の番号くらい交換しておくんだったな」

「いいんじゃない？ 遊ぶときは私も一緒だから」
そこらへんは抜かないらしい。

家に帰ると、自分の部屋でパソコンを立ち上げた。インターネットでゲームについて情報を集めようと思った。今までそれをしてこなかったのは、個人的に好かないからだだった。確かに便利な道具だと思う。図書館なんかに行って書物を渉猟するよりはるかに短い時間で多くの情報を得られる。だけど同時に他の手間もある。集められる情報は逆に膨大で真偽も定かではない。まるで何も手を加えないまま淹れた珈琲のように苦いも酸いも辛いも混ざり混ざって出てくる。不良な豆を自分の手で弾かなければならない。そういった面倒、それをして尚残る不確実性がイマイチ好きになれない理由だった。それでも今からそれをしようと思ったのは、

「どこの掲示板だい？」

今膝の上に乗る妹、その友達までもの安全を俺が担保する身だからだ。艶やかに光る後ろ髪を見ながら聞いてみると、彼女は自分でキーボードを打ち始めた。指の動きまで弾んで見えるのは彼女の機嫌が良いからだろうか。俺がまだ寝ないでいるのが、彼女にとってはとても嬉しいことのようなのだ。一緒に居る時間をこんなに素直に楽しんでくれると、俺としても兄冥利に尽きる。

「ここだよ。サナが見つけたんだ」

サンキューと声をかけて、画面を見る。そこは真面目な話や趣味の話、与太話等々多岐に渡る話題を提供している掲示板だった。その一つ、ビー玉ゲームについて、というタイトルのスレッドが立っている。それほど盛り上がっているわけでもなく、よく見つけたなという印象。

「サナちゃんはこのくらいの好きなの？」

オカルトというか、都市伝説というか。

「みたい」

あら意外。とにかく目を通していつてみる。

目的の情報以外にも有用なものがありそうだったが、とにかく今は冒頭だけ流し読んで関係ないレスは切り捨てていく。そうして何度も画面をスクロールした後、見つけた。ゲームからの脱落、と題打たれているそれは、まさしく俺が知りたい情報を与えてくれた。熟読の後、それに対する反応も全て読んでからブラウザを閉じた。

「お兄ちゃん、やめちゃうの？」

同じように字面を追っていた奈々華。

「やめちゃうのは、どっちかって言うとな々華ちゃんの方かな」

パソコンの画面が忙しなく動いて、電源が落ちていく。奈々華は体ごと振り返って俺に説明を促す。アイコンタクトと言えるほどのものではないが、黙って見つめられるだけで把握した。

「この先どうなるかわからない。特に俺はお尋ね者になってしまったわけだから、捕まる可能性もある。そうなった時に君たちをあの世界に放っておくのは忍びない。出来たら指輪を自ら壊して棄権して欲しい」

警察の対応についての推測は、あくまでも勘に基づくもので、確証などない。今度戻った時には捜査網が敷かれていて、瞬間に逮捕されてしまう可能性だって十分にあるのだ。ああ、と奈々華は納得して、

「それで失格になった人の情報を集めていたんだね？」

「そゆこと。まあお前は俺と何メートルだっけか？ 離れたらすぐ失格だから良いんだけど。いや良くはないんだけど」

青年を失格に追い込んだが、実際に彼が元居た世界に無事送還されたかは知らない。そうだろうとは踏んでいたが、それもまた確証のないものだった。それを確認した。失格後の実体験を書き込んだものはいずれも無事に家に帰って、以降異世界に転送されることはなかったという内容。

「……出来たら皆にもそうして欲しい。お前にも状況判断次第では即座にやって欲しい」

「私は大丈夫だよ。そうする。お兄ちゃんが居ないんじゃないかな」

いし」

そう言ってくれると思っていた。彼女の額に手を当てて、親指だけ動かして前髪を掻きあげるように撫でる。嬉しそうに目を細める彼女にこっちまで優しい笑みを引き出される。

「多分サナもカナも納得してくれるよ。私から話しておく」

礼を言って手を離す。奈々華の目はその手を追って動く。名残惜しそうで、まだ甘え足りないことを知る。参ったな、流石にもう寝たいんだけどな。

「今日は宿題はないの？ 座椅子が真価を発揮する……」

「ないよ。座らないし」

座椅子とはなんだったのか。小一時間質疑したいが、やはりそんな元気はない。そこで、ふと違和感。彼女が春休み子供勉強会に行くようになってから宿題が出なかった日はあっただろうか。いや、ない。

「へえ、出なかったんだ。珍しいこともあるもんだね？」

「う、うん」

俺に対しては大抵歯切れ良い受け答えをする彼女にしては、これまた珍しかった。まあ何にせよ好都合だ。奈々華の勉強を見ているとただでさえ眠くなるのだから。

「まあ俺はとにかく寝るよ…… 一緒に寝るかい？」

「しょうがないなあ」

そう言って、すぐに立ち上がって俺のベッドに横になった。しょうがないのはお前じゃないか。

朝はすぐに訪れた。瞼は糊で貼ったように重い。その瞼をジンジン焼くように日光が注いでいる。眠気の抜け切らない頭にも、いつもとは違う感覚を抱いた。奈々華は普段俺を無理に起こすようなことはしない。朝も送って行ってくれとは言わない。つまり俺が朝日を拝むのは自主的に起きて、寝る前に閉め切ったカーテンを自分で開けた時だけの筈だ。

「お兄ちゃん起きて」

声まで掛けられるのは、これはもうないことだ。目を開けて半身起こす。視界に入ったのは、奈々華とは違う女の子。サナちゃんだと頭に伝わるが、どうして居るのか、考えながら首を振る。カナの姿もある。奈々華も発見。全員の背景は木立。青々とした背の低い草。……ここどこ？」

目を擦る。パサパサとした目やにが沢山採れる。再び目を上げると、奈々華が手を伸ばして来て、俺の頭をぐりぐり撫でる。

「またビー玉ゲームだよ？」

猫なで声。ああ、なるほど。眠い。

「よくそんな土の上で熟睡出来るよね？」

続いてカナ。そっちをぼんやり見ると、呆れた笑み。馬鹿にされたとすぐに理解すると、急速に頭の回転が速まっていく。

「万夫不当のネムリスト、城山仁とは俺のことだ」

減らず口を返しながら、起き抜けた頭で状況把握に努める。もう一度周囲を慎重に確認する。

「公僕は居ないみたいだね」

サナちゃんが首肯してくれる。

「そいつは何より。でさ、一つ話しておきたいんだけど？」

「お兄ちゃんが捕まったら私達もやめるって話はしたよ？ 二人とも二つ返事で了承してくれた」

「あ、はい」

あんまり寝すぎていると、置いていかれるよということだった。

それから俺達一行は予定通り山を登ることにする。カナももう不平を漏らすことはなく従った。俺に気を遣ったというよりかは、もう決定事項として消化しきっているようだった。その竹を割ったような性格が少し羨ましい。まあコイツはコイツで色々あるんだろうけど、根は明るくてサバサバしているんだろうと思う。

水はすぐ傍にコット河が流れているので問題ない。ラスクさんの話ではそのまま飲めるということだったし、実際大丈夫だった。生水を飲むことに抵抗があったし、体質によっては腹を下したりするという話も聞くので余計に嫌だったが、飲んでみるとなんてことはない。寧ろ美味いと感じた。俺の体はそんなにデリケートじゃないらしい。皆も大丈夫そうで、水には一家言ある奈々華などは、味がどうのこうのと息巻くものだから、生返事で聞いてやった。

もう何時間歩いただろうか。日の加減を見ても、江戸時代の人間じやあるまいし何とも言えない。だが五合目くらいまでは来たんじゃないだろうか、と樂觀的に思ってみる。麓に近い木々はとても小さく見える。

「おおい。皆大丈夫か？」

振り返って声を掛ける。心苦しさはまだある。彼女達にこんな苦行を強いてしまったことについて。三人は奈々華を先頭に続いてカナ、少し離れてサナちゃん。特にサナちゃんは疲労の色が濃く、途中でこけたのか、ズボンの中ほどまで土で汚れていた。立ち止まる。警察の追っ手もないだろうということで登山道を来ているのだが、それでも体の小さな彼女には厳しいのか。とても可哀想に思う。

「サナちゃん。おぶろうか？」

俺が立ち止まった地点に奈々華も、カナも順次止まり、サナちゃん

が登ってくるのを待つような格好になっている。やっと俺たちが居る場所まで辿り着いた彼女は、首を縦にも横にも振らず、困った顔で俺を見つめた。

「まさかとは思うけど、変なこと考えてないっすよね？」

「バカな。俺という人間の半分は優しさで出来とるわ！」

「残りの半分は？」

「……」

沈黙は金かな。

「サナ、歩いたほうが良いよ？」

奈々華までもがパンダに加担する。サナちゃんは皆の顔を一巡ずつ見て、俺の手を取った。「お願いします」と。俺は即座に背中のリュックを腹に回し、背を空けるとそのまま反転して屈んだ。

「動き速いってば。マジきもいから」

雑音がうるさいなあ。背中に手を当てられて、体重がかかる。いやでも背中に意識が集中する。しかし柔らかい感触はなく、代わりに二本の腕が当たっている。丁度肩に掴まるような感じで、胸とは距離がある。誠に遺憾である。気を取り直して、体の横から伸びてきている彼女の太ももを掴んで固定。そのまま立ち上がるとおんぶが完成する。これは中々重い。サナちゃんとリュックサック、どちらも単体ではそんなに重くはないのだろうけど二重となると話は別。荷物の方を引き受けるよう申し出てくれるんじゃないかと淡い期待を込めてチラと奈々華を見ると、冷ややかな目線を俺に送っている。

「さあ、行こう」

そのまま先頭を歩き出す彼女は、俺の現状を理解しているはずなのに、無駄に速い足取りだった。

頂上に着くと、日は橙を纏っていた。その夕陽に照らされて青い草花も緑に彩を加えていた。それまでずっと生えたい放題だった木々は切り株を残すばかり。人工的に開けた場所を作ったのだろうか。その切り株の一つを背もたれに、サナちゃんを下ろす。眠ってしまった。カナも奈々華も先に着いていて、やはり疲労困憊といった感じだが、俺の傍までやってくる。

「眠っちゃったんだ？ 変なことしてないよね？」

奈々華の鋭い目。笑えば天使、怒ると悪魔。睨むと目元に冷たい印象を受ける。鼻白むより苦笑する。彼女としてもサナちゃんが疲れていたのは知っていたから、苦渋の決断、しかし心は納得しきらずといったところか。してないよ、と軽く返して、

「お前らも疲れただろう？ 大丈夫か？」

他人事のようなトーンになって、少し時を戻したくなる。

「へとへとっすよ。山登りなんていつ以来か」

カナが心底疲れたような顔。あ、でもと何かに気付いたように口を開ける。

「お兄さんほどではないっすけどねえ。寝てる人間って重いっしょ？」

そうして意地悪そうに笑う。もうすっかり状況を楽しむことに専念している。彼女はやはり開けっぴろげで、時を戻すことなんて出来ないし必要なことを知る。

「ああ、まあね。そう思うなら荷物くらい持ってくれても良かったんじゃないか？」

おかげで俺は計5〜60キロの重りをつけた状態で山登りをしたことになる。サナちゃんを責めるようで口には出さないが、実際これほど片道に時間を費やしてしまったのは大きな誤算でもあった。

「マジ勘弁。無駄に体力の有り余った人が持つべきでしょ」

「お兄ちゃんお水頂戴」

今までの話をぶった切るように奈々華。水源は山の中、水筒に汲んでいた。肩から掛けたそれを取り、一杯キャップに注ぐ。それをまづ俺自身あおってから、もう一杯いれて奈々華に渡す。キャップ兼カップをくるくる回して、俺が口をつけた辺りから飲んだ。見なかったことにしよう。

「どうする？　今日はここで休むか？」

「そうしよう。起きてても腹へって死んじゃいますって」

俺達は朝からろくに食べていなかった。途中見つけた木の実や、水を飲んで誤魔化していたが、限界に近いものがある。改めて申し訳ない気持ちになるが、顔には出さないように努める。それから皆少し早い寝袋に包まった。

一人拝む朝日は、無感動人間の俺にも素直に綺麗だと思わせた。勝手に責任と感じてかって出ている見張りの仕事の終わりが近いことも手伝ったのかも知れない。いつも自分よりも遙かに高い位置にいる太陽が自分と同じ高さにあるような錯覚を覚えさせる。人にも言えることじゃないかと置き換えてみる。どんなに高い位置にいる人間も最初は俺と変わらない位置から昇るんだ。試しに両手を広げてみる。掴めないだろうか、と子供みたいなことを思った。だけど明らかに俺のリーチより大きくて、それはそうだろうなと独りごちる。広げた両手を交互に見ると、まるで手自体が輝いているように光を受けていた。ちょっととそうしていたが、虚しくなってやめる。後ろを振り返る。三つの寝袋も、それは黒なのだが、光を受けて白に塗り替えられているように見えた。皆を起こそうか、迷った。カナが眩しいのか、顔を顰めて日に背けた。他の二人も同じように顔を向こう側へやっている。サナちゃんの穏やかな寝顔が見えて、やめておこうと結論付ける。見れば昼間散々俺の背で寝ていたのに、まだ熟睡しているようだ。俺と肩を並べるネムリストになれそうだ。

また日に顔を向ける。輝きを増しているような気がする。眩しすぎて目を細めた。全ての人間に平等に光を与えるにはこれくらいしないとダメなのか。日陰者の俺は、斜に構えるような気持ちで煙草に火をつけた。

53 (後書き)

一応コレで僕の中では序章、及び第一章終わりのつもりです。

携帯の着信音で目を覚ました。当然に奈々華からだった。何かまた夢を見ていたような気がするが思い出せない。通話ボタンを押すと、いつものお迎えを頼むものだった。唸るような低い声で返事をしてやると、本当に起きてるのかと返ってきたので、今起きた。ちゃんと迎えには行くと面倒くさを消しきれない声音で返答していた。そこで電話は終わって、約束通り俺は起きる。伸びをして体をほぐすと、着替えを始める。

昨日は異世界。グーデルタを過ぎて、ハケルインに到着したところで戻された。山頂で野宿をした日からは三日が過ぎていた。警察はついに俺を捕らえには来なかった。ただグーデルタの銀行で確認した参加者リスト、俺の名前の横に罪名が記されていた。ちよつと名前は違うが暴行と公務執行妨害で間違いあるまい。しばらく仕事が出来なかったものだから、ビー玉を金に換えるのはよしした。名簿を覗いてみたのは、青年の連れの女がキチンと失格になったのか確認できたら、と思ったからだ。きつと中東のどこかの国ではないかと当たりをつけていたし、パートナーとは連続に並んでいるはずだからわかるだろう、と試しに見てみたのだった。思惑通りそれはなかったわけだが、もっと面白いことを発見した。罪人にその罪状が付記されるのもそうだが、名簿の名前が黒くなっているものを幾つか見とめたのだ。名簿の一番下に注意書きがあった。暗くなつて表示されている名前は、現在異世界にいない人間の名前だということがわかった。失格はそもそも名簿から名が削除されると、青年と女のものらしき、中東っぽい名前なんて俺の知識に頼るものだがきつと大丈夫、名前がないことから察せたわけだから、これは純粋に資格はあるが今は異世界の方に居ない者の名前という推測が立つ。画一的に全参加者が同じ日の同時刻にゲームを行っているわけではないらしい。

運ゲー要素もあるのね、と他人事のように思った。もし最終的に優勝争いを繰り広げるチーム同士が競っている状態になった場合、そういった要素も加味した駆け引きが要求されるわけだ。即ち今日あつちのチームが居ないから今日のうちに良い仕事をこなして差をつけておこう、だとか、明日は来るはずだから奴等が転送される街の仕事を独占してやろうとか。ひよっとすると優勝を狙うチームは毎日銀行でチェックして他チームの残り日数なんかもデータとして採取しているのかもしれない。ランダムだとしても、残り日数が少なくなってくれば予想確率はかなり信憑性を持つ。何だかなあ、と同時に思っただけで思考を止めた。

奈々華を迎えに行くと、サナちゃんとカナも居た。校門の前で皆して立ち話に花を咲かせていた。車を停めると近寄って、皆して俺の車に乗り込んでくる。

「お兄さん、昨日ぶり」

その挨拶に頭を少し働かす。この子達とも随分頻繁に顔を合わせているものだから、何日ぶりかなんて考えないようになっていた。三日前の朝方に帰って来て、夕方まで眠って起きてみたらまた異世界で、そこから翌日の夕方まで異世界、そこからは会っていないわけだから……

「なるほど、昨日ぶりだなあ」

「ひでえっすよ。こんなに可愛い女の子達とどれくらい会っていないかくらいすぐわかるもんでしょう？ 次会うときを待ち望んで指折り数えているもんじゃないの？」

「サナちゃんもこんなにちは」

運転席から振り返っていた首を、心持ち左に動かしてサナちゃんの顔を真正面に捉えて言う。にこりと笑って頷いてくれた。サナちゃんは学校をサボるのをやめた。俺に迷惑を掛けるし、二人にも心配を掛けるからしばらくはちゃんと行くと俺に話した。俺は迷惑なん

て思っちゃいないよ、と返したが、二人に心配を掛けるというのは同感だったものだから、基本的にはその意を尊重した。嫌われてしまったのかな、と頭の隅が嫌なことを考えたが、こうして会っても普通に接してくれるので大丈夫かなと踏んでいる。無視するなど雑音が聞こえてくるが黙殺。

「明日は休みなんだっけ？」

首を戻して発進。誰にともなく尋ねる。奈々華がそうだよ、と受けて、

「だから今から皆で遊びに行こうって」

それで勢揃いしていたというわけか。それにしても元々自主参加の特講に休みがあるというのも変な話だなと思う。大方教師の方で都合が悪かったのじゃないかと推測するが、本当にどうでもいいので深くは考えない。

「おっさんが一匹混じっていてもいいのかい？」

「運ちゃんに決まってるし。この薄情者」

声に怒りなんてないが、ちょっと根に持っていやがる。

何だ、お前こそ俺に会えない日を指折り数えているのか？ そんなわけないだろう、鏡見てから言え。それこそヒドイぞ、お前……
そんないつの間にか慣れたかけあいをこなしながら、車は進んでいた。

コインを包んでいた紙を丸めて、ベンチに座ったまま近くのゴミ箱へと放り込む。ヘリに当たって地面を転々とするピンクの紙を見ていると切なくなってくる。

「この距離で外すとは、俺も墜ちたな」

独り言を漏らして立ち上がる。そう、俺は今一人。妹とその友達二人と二駅ほど離れたアウトレットモールに遊びに来て、一人。最初は三人と回っていたのだが、一度店に入ると女子高生三人は中々出てこないもんだから、退屈して広場へ。全面禁煙のせいで口寂しくて買ったソフトクリームも食べ終え、いよいよ手持ち無沙汰。このアウトレットモールは一丁前に西洋気取りくさって、コンクリートの建物をレンガ色に塗って、二階建て。そこに服や小物を扱うテナントが入って、平日の昼間だというに、賑わっているようだ。流石に広場のベンチで一人座る男は俺一人だが……

顔を上げて、その賑わう店内を、ガラス張りなので外からでもよく見える、漫然と見やる。奈々華とサナちゃんが気に入った服のサイズを調べているのか、同じ服を幾つも取っては戻し。デジャヴのよくな光景だと脳が気付き、俺は昔を思い出した。

奈々華と出会う前。そうだな、十年以上前になるか。俺は親戚の家に預けられていた。親父の遠縁だとかいう話で、奈々華の母親に全く可愛がられなかった俺は、親父の取り決めでその家に厄介になる。昔から子育てなんてものに興味がなかった親父は、その家に養育費だけ払っていたようだ。結論から言うと、俺はそこでも可愛がられることはなかった。ある日、その家は両親と俺より幾つか年上になる娘が居たのだが、その三人が近くのショッピングモールに行くと言い出したことがあった。俺も帯同を許された。今思えばいくら可愛くない他人の子と言え、金をもらって預かっているのだから、一

人留守番をさせて何かあったらマズイという判断だったのだろう。ただ俺はどこかに連れて行って貰える、それが家族の一員として認められたような錯覚を覚えて、一人嬉しくなったのを記憶している。

そういうことではなかった。俺は一人ベンチに置かれ、今日みたいに近くの屋台のクレープを買い与えられて、そこを決して離れるなとだけ厳命された。子供心にぬか喜びしていた自分を恥じ入った。悲しくも虚しくも切なくもなった。定期的に両親のどちらかが、俺の居るベンチが見える位置まで戻ってきて、刺すような視線を俺に送っていた。居るよ。あんたらがそう言ったんじゃないか。子供の俺にはそれを守るしか選択肢なんてないじゃないか。回想の中のあの怜悯な視線に、今の俺がやり返す。そして今の俺は虚しくなる。馬鹿馬鹿しい。思っているのにやめられない。俺の瞳に映るのはアスファルト。だけどやっぱりの顔が張り付いて離れない。アスファルトの濃淡がそれらを作り出しているようだ。いつの間に唇を噛んでいた俺は痛みに気付く。馬鹿馬鹿しい。思っているのに歯にこめる力は強くなる。

そう言えばこんなこともあった。俺がいつか……

「お兄ちゃんってば！」

突然の大声に、びくっと体を跳ねさせて、音源に顔を向ける。目の前に奈々華が立っていた。日は正面から差していて、そこに立っていると遮るように影が頭に下りてきて、気付くのが普通だが、そんなことに気を取られないほど、深く考え込んでいたということか。

「どうしたの？」

俺の顔を見て、奈々華もまた表情を曇らせた。頬の辺りを触ってみて、慌てて笑顔を作る。

「なんでもないよ。お前こそどうした？ 買い物はすんだのか？」
見ると奈々華の片手には小さめの紙袋がぶら下がっている。一着だけ買ったんじゃないだろうか、と当たりをつけ、次いでならまだ買いたいものもあるだろうな、と思う。ここへは様子を見に來ただけ

か、と。振り払ったはずのさっきのおじさんやおばさんの顔が浮かんでしまう。いつまで馬鹿馬鹿しい考えに、生産性のない回想に囚われているんだ。

「うん。終わり。今日はそんなに欲しいものもなかったから」

また頬を掻いてしまう。この癖にも意味はない。奈々華の優しさに助けられるのはいつものことだが、今日もまた情けない限りだ。本当に良い兄は、「まだ見たいものがあるんじゃないのか？ 俺のことは気にしないで良いぞ」と返すのだろうが、不良の兄は、

「そっか。じゃあ二人が終わるのを待っていようか。よし、アイスクリーム買ってやろう。何味がいい？」

となる。奈々華もワイイと乗ってくれて、チョコレート味を所望。買ってきて奈々華にやると、嬉しそうに頬張る。

「……ありがとうな」

小さく呟いたとき、俺達兄妹を、太陽ではない光が包んだ。

55 (後書き)

しばらく間が開いてしまつてスイマセンでした。

俺たちが最後にビー玉ゲームの世界を離れた地点、つまりホテルの一室だった。木造の古い建物で、歩くとギシギシ軋む床板もある。

「ディーカルホテル」という名は、ディーカルさんという老夫婦が切り盛りしているからだそう。ロビーで受け付けてもらったときに、色々と世間話をしてから部屋に上がったのを覚えている。ここに送られてきて向こう、俺達兄妹はキョロキョロと室内を見渡していた。珍しいものがあるわけではない。殺風景な室内は壁板がむき出しになっていて、掛け時計がかかっているだけだ。あとはベッドが二つ。ハケルインは近々祭りがあるだとかで、このホテルも予約が一杯で、実は四人で一つの部屋しか取れなかった。そういう話の延長で、先の世間話を経営者のおじいさんおばさんとしたということだ。奈々華と俺、サナちゃんとカナがそれぞれ一つのベッドで夜を明かした。つまりこの部屋には今、全員が勢ぞろいしてなくてはおかしいのだ。

「そのテーブルの影に隠れてるなんてことはないよな？」

「サナはちっちゃいけど、そこまでちっちゃくはないよ」

小さなテーブルが部屋にはあった。ちゃぶ台と言っても良いくらい小さくて、確かに150センチにも満たない身長の子サナちゃんでも隠れる場所はなさそうだった。

「マズイな」

「マズイね」

不毛な確認をして、俺達は二人きりの部屋でしばらく立ち尽くすしかなかった。いつかは来るだろうとは思っていた。全組がバラバラのスケジュールであつちとこつちを行き来しているのだから、組んでいるとは言え、違う組の俺達もいつかはバラバラで招集されることもあるだろうなとは。

「どうする？」

奈々華の目には不安の色。

「後から来るかも知れない。先に来ていて、俺たちが居ないもんだから探しに行ったのかも知れない」

可能性の話。奈々華の不安が消えれば良いなと思って口にした。まだ俺を見上げる彼女は、いつもより格段に幼く頼りなげな目をして
いる。

「大丈夫だよ。別々によばれていたとしても、今生の別れじゃあるまいし」

その言葉の後におでこから前髪をすくい上げるようにして撫でると、
ようやくと奈々華は笑ってくれた。

「俺達も探しに行ってみよう。さっき言ったケースも有り得るしね」
カナやサナちゃんが無闇に俺抜きで動くとも思えないが、この部屋
に居てじっとしているよりはいい。アテもなく待っているのは良く
ない。気が滅入ってしまう。

俺達は外へ出ることにした。入れ違いになってしまふといけな
いので、書置きはしておいた。二時間くらいで戻るから、部屋で待機
しているようにと記した。

ハケルインは中々に大きな街で、メインストリートは道幅も広く、
人通りも多く、馬車なんかも走っていた。車はないんだなあ、と二
人で文化水準の違いを実感。牛が寝そべっていたり、無許可くさい
露天のおっちゃんが石ころを売っていたり。誰も動物が放し飼いに
されていても気にした風もなく、そもそも路上での商売に役所の許
可なんていらな
いのかも
しれな
かった。

「なんかのどかだよな」

「うん。思ってたのとは違うな」

流通の要所とか聞いていたものだから、もっと都会然としているの
かと予想していた。これじゃあ今まで見てきた街と大して変わらな
い。規模が大きいだけという話か。

「まあ同じ大陸の、もつと言えは同じ国の中なんだから劇的な変化はないよね」

奈々華にというより自分に。しかし言いながら国ってあるのかな、とふと疑問。思えばラスクさんにも誰にも聞いていない。正確には聞けていない。ロボットだから気にしなくても大丈夫だろうとは思いつつも、あまり非常識な質問はしたくなかったのだ。例えば日本に居て、どこでも良い、東京や大阪の道行く人に「ここって何という国ですか？」と聞いたならば、相手はポカンとなるか、からかわれてると思って無視されるか……

相変わらず舗装されていない道を、ジャリジャリ歩けど歩けど、建物が途切れない。民家が多いのかなと余所見しながら歩いていると、奈々華がぼそり。

「二人とも勝手に出歩いてないよね？」

「……大丈夫だよ。二人とも俺の喧嘩騒動を聞いておいて出歩くほどバカじゃないさ」

何となく、奈々華らしくないなと思った。普段の彼女なら一度納得した事案についてあれこれ思案するよりは自分の目で確認する筈だ。今回で言うところ、街を一通り回ってみて何処にも姿が見つからないことを確認して安心する。ちょっとした違和感を抱きながらも、もう一度大丈夫だと重ねてやる。それだけ心配なんだろうと自分で納得する。奈々華も本日二度目の納得をしたのか、黙って頷いて歩を速める。俺もそれに合わせて二人で街を見回った。二人はついぞ見つからなかった。

結局一抹の不安を拭いきれないのは、俺の不手際だと自分で思うわけだ。組ごとにマチマチに呼び出されるという事実を知った時点で、こうなることは予測出来たはずなのだから、当然にそのケースに直面した際の対応を協議しておくべきだった。協議と言っても結論は単純で、外へ二人だけで行くなというものになる。

再び部屋に戻った奈々華と俺は、そこへ詰めることにした。数時間遅れで二人が呼ばれるかもしれないという可能性を買った。さっきとは違って、やるだけのことはやったわけだから、多少は気も楽になって欲しいところだが、どうにも俺は四人のリーダー格と言うわけでもないが最年長として、唯一自衛の手段を持つ者として、晴れやかな気持ちとは当然いかなかった。逆に奈々華の方がケロッとしてしまって、彼女なりに気が済んだのか、やはり切り替えの早さに俺は少ししっくり来ないのだが、今は嬉しそうに俺の隣に腰掛けてアレやコレやと話しかけてくる。

「何だか久しぶりだね」

「何が？」

「こうやって二人っきりで居るの」

「いつも家で二人っきりじゃないか」

俺の家に住むのは二人。何をつまらないことを、とは口にしないで思うだけ。それよりも二人が勝手に出歩いてしまって、他の参加者の毒牙にかかっているなんて最悪の展開は…… いや、よそう。奈々華が正しいのだろう。やるだけのことをやった。アレから街を二周ほどしてみても、街の人間にも人相を伝えて聞き込んでみたが、ダメだったわけだから、居ないと考えた方が現実的だ。

「違うよお。いつもお兄ちゃん部屋に上がっちゃうし」

「お前は部屋までついてくるじゃないか？」

おかげで俺の一人の時間は随分と減った。宿題を見てもらうという

名目でやってくる彼女の相手をする毎日。

「でもテレビ観てたり……」

テレビくらい観ても良いだろうが。

「パソコンでつまらないつまらないって言ってるクセに麻雀したりクソゲーくらいやつても良いだろうが。俺は奈々華の少ししょんぼりし出した横顔を見つめながら、彼女の言わんとしていることが実はわかっていた。要するに純粋に自分だけ構って欲しいのだ。全くお前は今年で幾つになるんだ？」

「確かに…… 最近お前と話していないような気もするな」

話してはいるんだが、何の雑音もなく彼女とじっくり腰を据えて、みたいなのは少ない気がする。兄妹なんてそんなもんだろう。

「うん。だからなんか新鮮」

今の状況はそうするくらいしかやることがない。はあ、テレビもねえ、ラジオもねえ、車なんてそもそもねえ。だけどいざ話をしようよ、となって一体何を話せばいいのかわからない。

「学校は楽しいか？」

何でこんな質問が出たのかわからないが出ちゃったものは仕方ない。これじゃあ久しぶりに会った親戚のオジサンだろうに。と、そういや実際聞いたことはなかったな。人は案外自分で何でも決め付けてしまっ、きちんと確認するということを怠ってしまう、という良い例だ。カナが居て、サナちゃんが居て、勝手に上手くいっているものと想像してそれで終わってしまっている。なるほど、色々話してみるというのも悔れないなあ。

「楽しいよ。友達は二人だけだけど、楽しい」

「二人ってあいつ等だけじゃねえか」

少ねえ。焦りのような感覚は、奈々華が学校でハブられている図を想像してしまったから。

「クラスで苛められているのか？ お兄ちゃんがそいつ等に来世を見せてやろうか？」

「ち、違うよ。本当に仲の良い友達はあの二人ってだけで、普通に

話すし……」

パタパタと扇ぐように手を振って否定する。ほっと一安心。

「お兄ちゃんは楽しい？」

奈々華がベッドのふちに置いた手を少し滑らせて俺の方ににじり寄る。段々近づいている。

「楽しくないよ。楽しくない。じゃないと留年なんてしないよ」

「友達居ないの？」

「居るよ。俺も二人だけ居るよ。でも他の人たちは知らない人ばかりだよ」

大学なんてそんなもんだ。

「そっか。でもカナとサナが二人増えたよね？」

「おお。そう言えばそうだな。でも大学は楽しくないよ」

「もう。ちゃんといかないといけないよ？」

奈々華はここらへん理解がある。俺に友達を作って大学生活をエンジョイしなさいとは言わない。実際友達なんて広く浅く作ってもあまり意味はないのかもしれないしね。

「……」

「奈々華？」

急に黙り込んだ奈々華の顔を、俺は少し覗きこむようにして見る。本当に最初に二人でベッドに座った時より大分近づいている。

「お兄ちゃんは彼女居る？」

「え？」

「……恋人」

嫌なところを突いてくる妹だ。

「居ないよ。こんな根暗じゃあ無理だよ」

奈々華の表情を見ていたことを後悔。なんと笑いやがった。抑えてもなおこみ上げる感情に、口元が緩む彼女は俺に恨みでもあるのだろうか。

「何だよ。お前は居るのか？」

「居ないよ！ 居ない！ 居るわけがないよ」

「何を息巻いているんだ？」

奈々華ははたと我に返ったらしく、決まり悪いのか俯いて黙ってしまった。この子は何を考えているんだろうか。いきなり話をしようなんて言い出して、結局自分から黙ってしまつて…… 今日少し変だ。少しその原因を考えてみたがやはりわからないのでやめると、深い溜息が口から漏れて、どっと疲れる。実際歩きつかれている。

「全く…… 俺はちよつと寝るよ」

俺のことを好いていてくれるのだろうかという一本の大きな筋は見えるのだが、それ以外の細かい部分は四つ離れた異性の兄妹。

「じゃあ私も寝る」

大の字になった俺の横へもぞもぞ。

「あっちのベッドを使えよ」

「アレは二人のベッドだから駄目だよ」

「今は居ないんだから良いだろう？」

「居ないからって勝手に使っちゃ駄目だよ」

「……ああそうですかい。もう好きにしてくれ」

目を閉じると、脳みそが引っ張られるみたいに意識が遠くなっていく。

目を開くと家とは違う木の天井。ところどころ黒ずんだ木目が人の目みたいに見えた。冷たい視線。とても小さな子供を見る目とは思えない瞳。最初の記憶からしてそんな目だった。アレは俺がいくつくらいだろうか。奈々華は生まれていなかったように思う。そして彼女が生まれる頃には、俺はまた違う人間の同じ瞳に晒される……夢を見た。俺は大抵見た夢を覚えている。記憶力が良いのも考え物だなと思った。過去を追体験するような、スライドショーでなぞるような夢は久しぶりかもしれない。記憶の奥底に沈めたつもりのそれらは、一度掬い上げると湖底の泥と同じ。一度引っ掻いたら、周りの泥もムワリと浮き上がる。

「……お兄ちゃん？」

奈々華の声がすぐ横からしても俺は今度は然程驚かなかった。思えばわからないわからないとしながら、実は心の奥底ではわかっていたのかもしれない。奈々華が少し変だったこと、突然話をしようなんて言い出したこと。俺が思う要因、それだけではないのかもしれないけど。

「嫌な夢を見たの？」

「……ああ」

ヒドイ声が出た。

「いつものとは違うんでしょう？」

何となく、だけどそのくせ確信めいたものがあって、

「何か嫌なことがあったの？」

君はそれを訊きたかったんじゃないか？

「……別に」

「昼間向こうの世界で……」
やっぱり。

「……ちよっと考え事してただけだよ」

「……」

ちよろっと首を傾げるだけで奈々華の表情は見れるのだが、それ以上俺の表情を見せたくなかった。

「お兄ちゃん」

静かな声だが力があつた。

「何でもないって」

特にお前には言うわけにいかないんだよ。

「お兄ちゃん」

しぶとい。振り返ってみても何か悩み事があって、今まで奈々華に打ち明けなかったことの方が少ない気がする。甘ったれは俺の方なのだ。

「だから！」

「お兄ちゃん」

「何でもないって！」

声を荒げてしまってから、俺は後悔した。善意で、俺の力になりたくて声を掛けてくれる彼女の気持ちをほんの一瞬とはいえ、ないがしろにした。

「ごめん」

二人が謝ったのはほぼ同時。どうしてお前が謝るんだ、と聞く前に、

「お兄ちゃんにだって言えないことくらいあるよね」

怒り、とは違うのだが、もやもやした感覚が俺を襲った。奈々華はどうあっても俺が言うとおりでないというのは信じていない。

実際嘘はついているが、もう何年も前の話だ。自分で消化できている。はずだ。それにお前が憎くて嘘をついているわけではないのに。そんな俺の心中を察したわけでもないだろうが、謝って何も言わない俺に怒ったのか諦めたのか、奈々華は黙ってすつくと立ち上がる。

「私向こうで寝るね」

「何だよ。ちょっと感じ悪いんじゃないか？」

勝手に言葉が口から飛び出していく。使っちゃ駄目だったんじゃないのかよ。俺の言葉に返さず、カナサナのベッドにもぐり込む奈々

華はこっちに背を向けた。

過干渉なんだよ、お前は。いや、コレは駄目すぎるな。

俺にだって俺の考えがあつて黙っていることだってあるさ。お前を信じていないとか頼りにならないとか、そういうことじゃないんだよ。事情があつて話せないことだってあるさ。確かに声を荒げたり、無下にするような言い方になってしまったのは悪かったよ。謝る。だけどわかつて欲しいんだ。俺はお前のためを思つて。いや、コレも駄目だな。コレを付け足すと勘の良いアイツは気付くかもしれない。

「あー」

奈々華を起こさないように唸り声を上げるのも一苦勞だ。考える。考える。とにかく謝らないと。疲れよりも焦りや不安が押し寄せてきて、俺の眠りを妨げる。ついと奈々華の方を見る。定期的に上下に起伏する布団。眠っているのだろうか。不貞寝というヤツか。愛想を尽かされてもう知らない、ってことじゃあないよな？ 大丈夫だよな？ そこで奈々華が寝返りをうってこっちを向いた。目が合った。慌てて閉じたが確かに開いていた。こっちを窺っていたようだ。たまらなく嬉しくなる。謝ろう。きっちり謝れば大丈夫だ。それでベンチで考え込んだことについては、さっき考えたように説明して納得してもらおう。まだ解決もしていないのに、奈々華のさっきの行動が愛らしくて、どうにも仲直りしたい気持ちは同じなのだとしめて、俺はすっかり安心した。安心すると惰眠マニアの俺は、瞼が重くなっていくのだった。

どうしようか迷った。というのも朝起きてみると奈々華はいつもの奈々華で、昨日のことを引きずった様子もない。普通に挨拶をして、普通に話して、普通に笑った。もしかしたら自分の感情と折り合いをつけたのか。だったら俺の方から蒸し返すような真似は得策ではないのではないか。それに謝ると簡単に言っても俺は洗いざらい話すつもりはない。精々昔親戚の家に預けられていた頃のことをふと思い出したただけだ、とかそれくらいのこと。それだけで彼女は納得するだろうか。具体的には？ となるんじゃないか。

だったら謝らないのか。このまま彼女に合わせて昨日のことはなかったかのように振舞うのか。それでいいのか。彼女は実は俺の方から折れるのを待っているのではないか。不自然なまでに自然な彼女の様子は俺への無言の圧なのではないか。

「ねえ、お兄ちゃん。ちょっと外に行ってみない？」

結局何にも踏ん切りがつかないまま、その自然体の奈々華に促されるまま外出することにした。当然書き置きは今日もしておいた。

ハケルインの街は広く、昨日一周するのだけでも随分時間がかかった。奈々華は観光をしてみようと思っていたらく、彼の申し出は渡りに船だった。ホテルから出た俺達は右に行ってみようか左に行ってみようか、木の枝でも立てて倒れた方に行ってみようかなんてレベルのおのぼりさん。そこで声を掛けてきたのが奈々華よりも幾つか年下に見える少年だった。ベキラと名乗った。ベキラ君はこの街で観光客のガイドらしきことをしているそうで、俺達への用件もそういうことだった。

「それにしても…… その若さで働いているなんて凄いな」

友人に借金をしてまでも働こうとせずにギャンブルで返済しようなんて屑な発想の男とは大違いだ。ベキラ君は馬車の御者席に座ろう

と足に力を込めて自分の体を持ち上げる動作の途中だった。

「いえそれほどでもないです。家業の手伝いですよ」

そう言って歯を見せるが、やはりそれもそこの中学生が見せる笑顔より大人びて見えた。乗ってくださいと促されたのは、幌のついた立派な馬車。内部の造りもしっかりしていて、奈々華と俺が入っても床板が軋むようなこともなかった。石灰のような匂いがしたが、ひよっとすると運送業的なものもしているのか。床に座って上を見上げると、ちよっぴり日光を取り込んだ幌が白を増しているようだった。

「出発しますよ」

御者席と客席は布一枚、幌の延長みたいなもんだ、隔てただけ。そこに浮かんだ黒い影が声を掛けてくる。馬車は名所を巡る。馬がいなくてもなく静かに走り出し、幌についた小さな窓から外の景色がゆっくり流れていくのが目に映る。

「頼んでよかったな。見てみなよ。人がゴミのようだよ」

隣に座る奈々華はちょこんと借りてきた猫のよう。さっきから一言も喋っていない。

「奈々華？」

「え？ あ、うん。お兄ちゃんはゴミじゃないよ」

「……」

単語の拾い方がヒドイが、今はそれどころじゃなくて、俺は少し浮き上がりかけた気持ちを諫めることになる。口を開きかけて、何を話すかなんてまるで決めていないことに気付く。まるで氣道に膜でも張ったみたいと言葉が出てこない。

「お二人は、御夫婦なんですか？」

ベキラ君ナイス。いや、やっぱりそういう話題を振るのはよして。奈々華の顔色を窺う。彼女は眉一つ動かさずに、兄妹ですと。ぶっきらぼうに聞こえない程度の配慮で。まずいなあ。奈々華はやっぱり昨日のことを消化しているはずなんてなく、俺の説明を待っているんだろう。そう確信させられた。だって普段の奈々華だったら「

やだもう。ベキラ君ったら。私達夫婦に見えるんだって、お兄ちゃんどうしよう。えへへ」だ。そして俺の困った顔を見て、二ヘラと笑うのだ。

「これは失礼致しました。お二人で旅をなさっているようですから、てつきり……」

本当に申し訳なさそうな声音が伝わり、逆にこっちが恐縮するくらいだ。客商売における礼儀作法も十分に習得しているようだ。

「いや、いいよ。本当はあと二人連れ合いが居るんだけど、今日は別行動でさ」

ベキラ君と話しているほうが楽、という謎の現象。だけど、話しているが、言葉が脳を介さずに、口だけで話しているような感覚。だからこの後の会話はあまり何を話したか覚えていないという始末だった。

しばらくメインストリートを走る馬車。ややもすると沈黙しがちな車内。俺はその空気が居心地悪くてベキラ君に他愛無い話をしつつける。

「随分長い道だね」

ケインズパークと同じように街を縦断するほど長いメインストリートを軸に碁盤目状に道路が走る。そのことを話すと、ベキラ君は「あそこはハケルインを参考に街造りがなされた」と教えてくれた。続けて、

「このベキラ通りはこの街で一番古い道路なんですよ」と付け足す。

「ベキラ通り？」

奈々華が呟くように言った。俺と視線が合うと顔を俯けた。小さな声だったが、ベキラ君には聞こえたようだ。ええと返してくる。馬の走る音、街の喧騒、色んな雑音がある中車内の客の声を聞き取れるのはプロ根性のなせるわざなのか。

「ベキラ王が整備したからですね…… この街ではそのベキラ王の名を頂いて子供に名付ける人が多いんですよ」

なるほど。ベキラ君と言う名前はこの街ではポピュラーなそうなの。日本ではあまりないが過去の偉人の名前を拝借するなんてのはありがちだ。そこで会話は途切れた。奈々華は向かい合わせに座った俺の踝辺りにぼんやり視線を置いて動かさなかった。

最初に馬車が止まったのは、街の中心にあるなだらかな丘の手前だった。そこだけは緑に覆われていて、街の景観からは浮いている場所。奈々華と二人で街を回ったときも何かの遺跡でもあるんだろうか、と話題に上っていたが、当たらずとも遠からず。そこは先にベキラ君が話してくれたベキラ王ゆかりの地だった。というのもその

丘陵はベキラ王も名を連ねる、ハケルインの古代王朝「ルーバル朝」の王城があった場所なのだそうだ。丘に登りがてら、とうとうと説明してくれるベキラ君の背中から目を切って、俺の少し後ろを歩く奈々華を見る。また目が合ったのは一瞬、すぐに顔を下に向ける奈々華。気を抜くと暗澹とした気持ちになりそうな自分を鼓舞する。

「奈々華しんどくないか？」

奈々華はまた小さく顔を上げる。しかし俺の目を彼女が捉えることはなく、俺の胸の辺りで視線は止まった。うん大丈夫と返ってくる。それ以上言葉は続かず、俺はまた前を向いて歩き出す。丘の上には石造りの土台がまばらに残った建物の残骸、それを囲うような草むら。俺は一体何をしているんだろう。城の跡地なんて見ている場合じゃないだろう。後ろから聞こえる足音。前からはベキラ君のガイド。謝って解決するなら、俺は今すぐにでも謝っている。なあ俺が悪かったよ、許してくれよと。だけど事情は話せない謝罪に誠意はあるのか、意味はあるのか。そういう自問が頭を離れてくれない。ごめんね。うん、何があったか話してくれる気になったの？ いや、それとこれとは違うんだ。どういうこと？ お前にだけはこれは話せないことなんだ。そんな説明で彼女は納得してくれるだろうか。彼女の俺を真摯に心配してくれる優しさは何処へ向かえばいいんだろう。だったらこのまま昔に戻ったみたいに気まずいまま過ごすのか。ナビミスでパンクしたA R Tの復帰を待っているような、いたたまれない気持ちで。いやこんな例えじゃ伝わらない。奈々華には伝わらない。せいぜい川瀬みたいな社会のゴミにしか伝わらない。俺がいかにか今の状況を脱却したいか。いかにお前に感謝しているのか。

「……ごめんね」

不意にした消え入るような声に振り返ると、奈々華が眉根を寄せて俺を見ていた。久しぶりに視線がぶつかった。どうして……

「どうしてお前が謝るんだよ？」

冷たく聞こえないように、突き放すように聞こえないように。自然

と猫で声みたくなっていた。もさもさとした草の絨毯を踏みしめても、地を踏む感触じゃなくて、くるりと体ごと奈々華に向き合う時、スニーカーの裏で草を擦り切るようなイメージを持った。

「昨日、私もしつこすぎた」

「そんなことはない。奈々が俺のことを凄く心配してくれてるのは知っている」

そんなことはわかっている。相変わらず悲しそうな表情の奈々華を見ていると、考えるより先に口が開いていた。

「昔のことなんだよ。昔親戚の家に預けられていただろう？」

「うん」

「その時にさ、あん時みたいにな人で買い物を待たされてる時があったんだ。それをふと思いついたんだよ。それだけだよ」

案ずるより生むが易いなんて言葉は俺のためにあるんじゃないだろうか。だって奈々華はきよんとして、それから優しく笑った。

「なんだ、私でっさり……」

「てっきり？」

奈々華はかぶりを振って、

「なんでもない。それより、要はお兄ちゃん寂しかったんだね」

「え？」

思いもよらない言葉だった。なのに、そうか俺は寂しかったのかと素直に思った。時折奈々華の言葉は俺の胸の内にストンと落ちる。なぞなぞの答えを知らされたように、ああなるほど。自分の気持ちなのに奈々華の方が熟知しているようなそんな錯覚に陥る。

「私もね…… 私も寂しかったよ？ お兄ちゃんが居なくて」

そんなことを言ってくれる。もじもじする彼女の顔をじっと見ていると、どこかへ視線をやる。その先を見ても何も無い。照れ隠し。

「お兄ちゃんって昔のこと全然話してくれないのは…… どうして？」

あんまり見つめすぎたせいだろうか、奈々華は苦し紛れに核心に触れる。

「……今話したじゃないか」

「うん、それはそうだけど」

「それに昔のことなんてどうでもいいさ」

奈々華がまだ続けようとした言葉にかぶせて、

「今はお前が居てくれる。たった一人の家族でも。お前が居てくれる」

何だこれ、告白か。

「……なんだか告白みたいだね？」

奈々華の白い顔に少しの朱。俺も意識しすぎると顔に血が集中しそうだ。

「まあ二割くらいはそんなもんだ」

「少なくとも？」

誤魔化したようで何よりだ。俺はもう奈々華に背を向けて、少し開いたベキラ君との距離を詰めにかかる。後ろから奈々華の声。待ってよ、いつもの本当のいつもどおりの元気な声。

川瀬は本格的なカスだ。顔立ちは良いし、基本的に優しく良いヤツだが、人間として大切なものが欠落している。圧倒的な労働意欲の低さ、現実逃避能力、軽犯罪くらいは犯罪という意識すらないモラルの低さ、どれを取っても一流で、何処に出しても恥ずかしい駄目人間だ。

「久しぶりだな」

キリッとした目元ではあるが、その奥の瞳は死んでいる。コレはボinas、ART当選時や確変ラウンド中以外は輝かない。シャープな顎も無精ひげで汚らしくコーティングされている。駅前の歩き煙草禁止区域で悠々と煙草をふかす川瀬は相変わらずだ。人生の迷子らしく地べたに平然と座り込んでいる。金を返すと連絡をした。ちよつと相談したいこともあった。相談相手として決して適格ではないが、俺は友達が少ないので仕方がなかった。

「悪いな、いきなり」

いや、気にするなと立ち上がる川瀬の下半身が、見たくもないのに視界に入ってしまった。丁度立ち上がる時に煙草を地面に落としたからだろう。ちなみに俺はポイ捨ての際にはその後キチンと踏み消すが、コイツはほったらかしにする。ここまでは墜ちたくないものだ。と、今はヤツの股間を見てしまう。青いトランクスが見える。

「おい、チャック開いているぞ?」

注意してやる。途端に、川瀬は変な顔を作り、

「かあゝ」

わざとらしく額に手を当てて苦悶してみせる。オーバーリアクションが妙に腹立たしい。

「開いているなんてよくそんな貧困な発想が出来るな?」

「ああ?」

「開けてるんだよ! 聞いているこっちが汗顔ものだわ」

何を言っているんだ、この変質者は。そして警察は何をしているんだ。

「コレは」

そういつて自分の穢らわしい下半身を指差す。

「何かあったらすぐに出せるようにしてるんだろうが。出すもの出しても良いんだぞ？　っていう周囲への威嚇行為に決まってるだろうが。そんなこともわからんかね」

川瀬は本格的なカスである。

ファミレスに場所を移動すると、しばらくぶりの雑談に花が咲いた。台や店の情報、感想などを適当に話し合うだけで簡単に時間は過ぎていく。川瀬とは最初からこんな間柄だ。ギャンブル仲間。知り合ったのは大学構内であるが、学友なんて口が裂けても言えない。俺もコイツも大学に行くよりパチンコ屋に行く頻度の方が遙かに高い。だがコイツとギャンブルの話をしているときは時間が経つのが本当に早いので、きつとどれだけ憎まれ口を叩いても、俺はこの時間が大層好きで楽なのだろう。あまり他人に聞かせて気分の良い話ではないだろうから外でやる時は互いに心持ち声量を落として話合うこの感覚も久しぶりだった。

「お前何か悩みでもあるんじゃないか？」

宴もたけなわというほどでもないが、一しきり下らない話をした後、川瀬は突然そう言った。相談事があることは事前に話していなかったものだから、吃驚した。ああそう言えば、コイツは意外と鋭いところがあったなと思いつく。

「ん、なんでそんな風に思うわけ？」

「最初に会ったときお前、相当しょっぱい顔してたからな」

それは生まれつきだけだな。

「そんなに出易いかね」

自然と顔に手が伸びる。何度も鏡で見た自分の造形をチョロチョロ

と撫でていたら、

「まあ無理に聞こうとは思わんがね。何となく俺に相談事があるんじゃないかと思っただけで」

川瀬の方はどう取ったのか、少し身を引く。

「ああ、いやまあそうなんだが」

どう切り出したものか。

「お前、姉貴が居るって言ってたよな？」

「何だよいきなり。まあ居るけど」

虚を突かれたような顔になって、それでも肯定を返してくる。コイツとはあまり家族の話なんてしないが、以前そんなことを言っていたの思い出したのだった。

「姉貴とはどうだ？」

「どうだとはどうだ？」

「仲は良いのか？」

「まあ互いにもういい歳だからな。顔を合わせれば殴り合いなんてことは勿論ないけど。仲が良いかって言われると……」

どうなんだろうと考え込んでしまう。普通の兄弟とはこんなものだろうな、と思う。つまり川瀬の所は所謂普通の兄弟ということだ。

「一緒に寝たりはしないか？」

「……いや、普通にしないだろう」

俺も何を聞いているんだろうか、と自分でも少し可笑しな気分になる。

「まさか紹介しろとか言うんじゃないだろうな？」

川瀬は微妙な顔をして聞いてくる。なるほど、今の話の流れだと俺が川瀬の姉貴に興味があるのかと勘繰られてしまうか。

「そういうわけじゃない」

「だったらどういうわけだよ？」

さっぱりわからないといった感じでソファーに背を預けてしまう。手を広げてふんぞり返るような仕草になる。まあわからないだろうな。俺が寝起き一発、妹の胸を揉んで気まづくなって逃げ出してお

前に会いに来たとは夢にも思わないだろうさ。

「まあ簡単に言うとは妹の機嫌を損ねて家に帰りにくいって話だよ」

「お前妹が居たのか」

ああ、どうやら過去の俺は耳に入れるのも汚らわしいと判断して話していなかったようだ。とにかく詳細に話す気はなく、しかし頭は今日の昼下がりのことを思い出していた。

昨日の昼下がりに向こうへ放り込まれたのだから、当然今日の昼下がりには帰ってくる。向こうではカナたちのパーティが居ないこともあって働いていなかったわけだから暇だった。奈々華との間に今更そんなにふんだんに話題があるわけでもなく、俺がシエスタと決めたものは必然的なものだった。そしてその内にこっちに帰ってきっていたのだろう。そこまでは良いのだ。いわば予定調和。事件は俺がこっちで目を覚ました時に起きた。

目を開いたとき、奈々華の顔が近くにあった。添い寝をしていくれたらしい。奈々華は目を開けているようで、いつものように優しい顔をしていた。意識は半覚醒。このまま再びまどろみの中へ落ちていくことも出来そうで、体を奮い立たせて一気に起き上がることも出来そうな曖昧な境界に居たのだと思う。自分の行動や思考に明確な根拠を見出せない程には曖昧だった。だからそんな中で、ふと奈々華に触れようと思ったその思考回路にも俺は未だに十分な理由をつけれずにいる。もしかして覚えていないだけでまた嫌な夢でも見ていたのかも知れない。どこにどうやって触ろうとかそんな具体的な考えは無く、ただ触ろうと思ったように、布団の中にあった手を持ち上げにかかった時だった。むにゃつと柔らかい感触が手の平に広がった。ただただ柔らかい感触、奈々華の驚愕の声。段々と意識が帰ってくる過程で、コレは彼女の胸で、俺が触っていいものではなくて、現状が非常にマズイ、と階段を踏むように一歩一歩理解していった。ごめんと謝って手を退けると、奈々華は口をパクパクさせて、慌てて顔を逸らして立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。

俺はしばらくして彼女の部屋の前まで行って謝った。彼女は部屋の戸を開けてはくれず、それでもドア越しに「大丈夫、ちょっと吃驚しただけ。気にしてないよ」とこっちを氣遣う科白を返してくれた。

もう一度謝ってから自室に引き返したが、どうにも落ち着かず、夜を待たず川瀬に連絡を取った次第である。否、夕飯時にどんな顔をして奈々華に会えば良いかわからず、逃げ出してきたと言った方が正しい。辛いときや迷ったときは逃げる。コレが俺の処世術であり、随分と染み付いてしまったものでもある。

「どうした？」

黙り込んだ俺を不審に思った川瀬が声を掛けてくる。川瀬は何処を見ているのか、視線は他のテーブル席へと向いているようだった。彼自身神妙な面持ちで相談を受ける柄じゃない。だからこそコイツとの付き合いは楽だった。

「いや。まあ、どうやって機嫌を直してもらおうかなと」

奈々華は怒っている訳ではないだろうが、便宜上そういうことにしておく。まさか本当のことを話すわけにもいくまい。

「俺に聞かれてもなあ」

まあそうだろう。コイツと奈々華は面識も何もないのだから。

「まあでも古今東西、謝るときには誠意が大切ってやつじゃないのか？」

「誠意」

一応真剣に謝ったつもりではあるのだが、どうしたものか。そもそも腹を立てられているわけではなく、互いに気まずい状況にあるだけなのだから謝ることにさして意味があるわけでもないのかもしれない。

「誠意つつつたら……」

川瀬が俺の顔に向き直る。締まりのない顔で手をこっちに向ける。人差し指と親指で輪っかを作っている。金、ということらしい。やはり俺自身かなり動揺していたようだ。よりにもよってこんなヤツに相談を持ちかけるなんて。そこまで思っ、俺はとどまった。いや、待てよ。コイツは馬鹿だが、金をかけて誠意を見せるってのはあながち悪い方法でもないかもしれない。いわゆるプレゼント作戦というやつだ。何か状況を好転させる切欠くらいにはなるかもしれない。

ない。楽天的だが意外と良い作戦に思えてくるものだから、俺はかなりの余裕の無い状態なのかもしれない。

「行こうぜ、城山！」

バイトもしていない俺たちが金を増やす手段と言うのは一つしかない。川瀬が立ち上がる。伝票を引っ掴み、景気づけに奢ってやるよと力強く言い放った。

三時間後。俺は久しぶりに本気で思うことになる。俺以外皆死ねばいいのに、と。地面に蹲って右手を見つめる。何か呪いでもかかっているんじゃないだろうかと本気で疑りたくもなる。

「しょうがねえよ」

川瀬が慰めをかけてくる。しょうがない。わかってはいる。百回同じ状況に置かれて百回同じ台を打つような状況。そこで負けを悔いるのなら結果論にしなければならない。それをするのならもうパチンコを、スロットを止めるしかない。良釘の台を、設定の良さそうな台を、打つ以外に勝てる手段はないのだ。期待値というものを追いかけてやる以外に方法はないのだ。

「しょうがねえ、つつてもあまりに負け過ぎではないか？」

パチンコを打ったのならわかる。ボーダーを越えた台を打っていても勝率にすると低い。その代わりにスロットよりも多くのリワードがあるのがパチンコ。でも俺が今日触ったのはスロット。機械割りというものがあって、出玉率というものが明確に公表されているもの。その機械割りというものが百分を上回っていれば、理論上は打てば打ち続けるほどメダルが増え続けるという。という。嘘じゃねえだろうか。勿論機械を相手にしていることだから、数字が一時的に大きくブレることがあることくらいは承知。そういった上下の波を含んで取った平均値を出しているわけだから。にしても、俺がこの半年どれだけ下ばかりを叩いているか……

「まあ、しょうがねえよ…… ほら。生きるためにも要るだろう？」

川瀬が往来も気にせず財布から万札を幾らか抜き取る。俺が返した
3万円が瞬く間に帰ってきた。

腹が立つ。働いているのがそんなに偉いのか。俺が退いたすぐ後に座った仕事帰りのサラリーマン。瞬く間にボーナスを引き、A R Tに捻じ込んでやがった。そりゃそうだろうさ。あの台が6じゃなかったら俺はもう一度解析サイトを徹夜で読み直して、そんで死んだほうが良い。くそ、そんなに俺が気に入らないのか？ あの手は。この世界は。つまんねえ。くそつまんねえ。俺が何をした？ 働いていないのがそんなに気に入らないのか？ 馬鹿にしゃがって。妹に何か買ってやろうと、そんなささやかな願いすら踏みにじる世界なんて大嫌いだ。国が悪い。どう考えても国が悪い。無理矢理に社会の歯車に組み込まうとして、それを拒む因子に冷たく当たる。保護しろ、俺を。今すぐ。

「はあ」

奈々華はどう思うだろうか。このクズの兄を。寝起きに胸を揉んで気まづくなって逃げ出して、帰って来たらギャンブルで負けたとほざく。俺が今日打った台は、普通の人間が打てば勝てるものだから説明しても理解してもらえないとは思えない。また理解もしないで欲しい。ギャンブルに理解の早い妹など、困ってしまう。

「ああ、もう。誰か俺のこと撥ねてくれないかなあ。そしたら金引っ張るんだけどなあ」

やるせない閉塞感。終わりの見えないスランプ。刻一刻と迫る労働の時。

「撥ねろよなあ、信号赤で渡ってんだからよ」

急激に速度を緩めて止まった車のフロントガラス越しにぎょっとした顔で固まるおばさんが見えた。一瞥だけ残して横断歩道を渡りきる。足取りは嫌でも重くなる。ケーキでも何でも買って帰ってやりたかった。沢山勝ったなら前欲しがっていた鞆を買って帰ってやりたかった。いい歳して悪夢にうなされる兄を見かねて同衾して安心

させてくれる妹にヒドイ仕打ちをしてしまった。わざとじゃないとかそんなことは言い訳にもならなくて…… 今更、自分のしでかしたことの重大さを理解してきた。嫌だったんじゃないか。普通の妹なら兄貴に胸を触られて楽しい筈が無い。嬉しい筈が無い。不快であつただろう。恩を仇で返された気分かもしれない。

俺が住む街は駅を中心に、南側を商業地帯、北側を住宅街が囲むように出来ている。丁度駅が丘の頂に、どちらに向かうにせよ坂を下っていくような形になる。坂の多いこの街に越してきたのは三年前になる。借家を借りて、奈々華と住み始めたが、互いにかなり距離を持って暮らしていた。それがここ最近急速に互いの距離を縮めた。功罪は必至なのかもしれない。話し相手には困らなくなったし、煩わしい雑事も増えた。何にせよ俺は一人でいることに慣れすぎたのかも知れない。今日だけのことではない。昨日だって少しぎくしゃくした日を送った筈だ。勿論仲良くすることが悪いとは言わない。ただ、今の距離感に対応しきれていないのだろう。これからこんなことが頻繁に起こるのかもしれないと思うと気が滅入りそうだ。いつそまた一人の生活に戻ったほうが楽なのかもしれないなんて気持ちも生まれてくる。俺みたいなダメ兄貴の世話をしないですむと、奈々華にとってもそれが最善だろうと、そんなおためごかしじみた言い訳まで浮かんでくる。だけどそれはダメだということもわかっている。俺達は家族だ。軋轢があっても、摩擦が起こっても、葛藤があっても、それでも得られるものは他人と居るよりもっともつと大きいものだということも十分に知っている。

「つっても気まずいものは気まずいんだよな」

一体彼女は どうして簡単に兄貴の布団へと入れるのだろうか。こういう可能性というか危険性を常に孕むということぐらいわからない筈もないだろうに。やはり彼女が優しくて俺が不甲斐ないからだろうか。放っておくと悪夢に魘される俺を放っておけないからなのか。だったらやはり不注意だった俺が悪いということだ。既にそこらへ

んは理解はしているのだが、何とも。随分と身勝手な俺は、なんだったら放っておいても死にはしないし、今日みたいな危険があるのだから、やめておけばいいのになんて考えてもしまう。こういうとき二人家族というのは難儀だなあ。どれだけ気まづくても間に立つ人間が居ない以上、サシで顔を合わせなきゃいけないんだから。

と、考え事をしながら歩く俺の目が、見覚えのある顔が近づいてくる姿を捉えた。丁度坂を下っていく途中だったものだから、相手は登って来る途上である。今は誰とも会いたくはなかったが、もう回避のしようもなく、相手も俺の方に気付いたらしく、口を「あ」という形にして駆け足になる。

「どうもっす」

金色の髪をした彼女は懐っこい笑顔を浮かべて俺の前に立った。

「どうしてこんな所に？」

彼女の家はここからは遠い。もう八時近いのに何をほっつき歩いているのだろうか。まあ俺も他人のことは言えないけど。

「お兄さんの家にお邪魔してたんですよ」

ちよっと考えればわかりそうなものだが、言われるまで気付かない辺り、俺は考え事に気を取られすぎていたらしい。駅に向かう道は幾通りかあるものの、俺の家からだ一旦大通りに出るよりもこの脇道を使ったほうが早い。明かりがまばらで、しかも手入れを忘れられて伸びすぎた街路樹が街灯を覆う箇所もあり、決して明るいとは言えない道。幅も狭く、通行人は互いに身を避けさせてすれ違う格好である。女の子の一人歩きには向かない。横着なのか、危機管理の意識が低いのか、カナは平然と歩いてきたが。

「お兄さんはどこに行ってたんすか？」

少し非難めいた目をする。ギャンブルで金をすったと正直に話した日には、その瞳は今の何倍も非難の色を強くするだろう。都合の良い方便を探そうと、中空に目を泳がす。もう少ししたらこの道も夜桜が綺麗になるのだけだな。今は青々した葉と、瑞々しい小さなツボミしか見えない。

「ちよっと友達と会ってただけだよ」

「ふうん。そうなんですか」

やはり何か言いたそうな顔をしている。相変わらずのギャルルックの瞳は今は細くきつい。

「何だよ」

「いえね。奈々華が……」

「何か言ってたのか？」

思わず聞いてしまった。そして軽く後悔する。恥の上塗りとはこのことか。妹の様子をその友達からコソコソ嗅ぎ回るような真似。

「ウチがお兄さんはって聞いたら、遊びに行っただって寂しそうに言うんだよね」

可哀想だろう？ と暗に非難していたわけらしい。

「おまけにウチが帰るまでに帰ってこないんだからさ。歩く羽目になったじゃん？」

いや、それは知らないけどね。

「それはそうと、サナちゃん是一緒じゃないのか？」

奈々華が寂しそうにねえ。ほんの少しだけ気持ちが軽くなったような気がしないでもない。

「あ、話逸らしやがった」

「逸らしてないよ。誤魔化しただけだ」

「一緒ですよ…… まあいいか。呼んだんだけどサナは用事があるとかで」

「ふうん」

「あ、そうだ。今からでも送ってってくださいよ」

名案、とでも言いたげなカナ。

「送るって言うてももう駅すぐそこだろう？」

後ろを振り返る。駅の南側から上がってきて、通り過ぎて、北へと下り始めたところで遭遇したわけだから、本当にすぐそこだ。

「アレ？ 奈々華んとこ行く時はいつも歩いてるんすよ？」

「え？ 結構距離あるだろう？」

ちよつとカナの家までの道筋を思い出してみる。やはり歩くには少々骨の折れる距離。どうして、と言う顔をしたつもりもなかったのだが、

「歩けない距離じゃないし。電車賃が勿体無いっしょ」

カナが笑って言う。そういえば意外としっかりしているんだよね。金で苦労した彼女の過去を思うと、同調して笑みを浮かべるその顔が自然に笑えていたかは自信がない。

「チャリンコくらい持っていないのか？」

それでまた話を少し逸らす。

「盗まれたんすよねえ。随分前に。腹立つから新しいのも買っ
てないし」

「へえ、結構苦勞してるなあ…… まあ俺も盗まれたことあるけど
ね」

コイツが俺の車を何かと利用しようと画策しやがるのは、江戸時代
の民草のように歩いてばかりいるせいらしい。一度樂を覚えてしま
うとまあ仕方の無いこと。

「腹立ちますよね。他人様のものを」

まあ俺のは放置禁止区域に置いていて、行政に撤去されて取りに行
くのが面倒くさかったから、厳密には盗まれたとは言えないのかも
知れないが、気持ちは盗まれた以外の何者でもない。

「まあいいや。送っていけば良いのか？」

「おう、ラッキー。やっぱり意外と優しいですよねえ」

「意外とは余計だ。知らないぜえ？ 送り狼になっちゃうかもよ？」

「その時は奈々華に示談を持ちかけますよ」

「うへえ」

俺は歩き出そうと、一歩踏み出す。

「どっち行くの？ 家はあっちだよ？」

え？ 俺の家に行って車を取ってくるものだばかり思っていたの
だが、どうやら歩いて送っていかというこらしい。それならやっ
ぱり面倒だと言いかけて、やめる。遅らせてどうなるわけでもない
のだが、どうにもまだ心の準備が欲しいような気もしていたものだ
から、存外良い提案かもしれない。

「わかったよ。俺とそんなにおしゃべりしたいんだな」

「ちげえし。まあこんなんでも居ないよりは居たほうが安心かなっ
て思っただけ」

憎まれ口を叩かれながら、俺は護衛を始めた。

「そーい、昨日は悪かったね」

思い出したように言ったが、実は早く謝っておきたかった。奈々華と会ったということは、事情は理解しているだろうが、それでも自分の口からも謝っておきたかったのだ。

「いやあ、仕方ないよ」

「まあでも、結果的には運転手役を放り出したことにはなるわけだし」

「故意にやったわけじゃないんだから、気にしないで良いですよ。サナも多分何も怒ってないでしょうし」

「そう言ってくれると助かるよ」

駅の南へと下っていくと、少々賑わいを見せ始める街。店が立ち並び、繁華街とまでは言いにくいだが、それなりに人の群れも出来始める。丁度大学でも送りコンパなんてものも開催されているような時期で、色んな組織で人の入れ替わりのあるこの頃、居酒屋なんかの前では老若男女問わず声の大きな酔っ払いがたむろしていたりする。居酒屋の赤い提灯の近くでくだ巻くおっさんを入社したてだろう兄ちゃんが宥めすかしている脇を通り抜けながら、カナがぼそりと言う。

「あたしも優しいお兄ちゃんが欲しかったな」

「……」

「お兄さんて、奈々華とぎくしゃくしたりしないんですか？」

「え？」

今そうだけど？ 三年ほど続いていたけど？

「鬱陶しくなったりしないんですか？」

どうしたんだいきなり、とは言わなかった。何となく想像がついた。だけどその想像を口にすることもまたしなかった。

「そんな時も勿論あるよ。だけど……」

「だけど？」

さっきのおっさんだろうか。怒鳴り声のようなものが後ろから聞こえてくる。それが止むのを待ってから。

「それ以上に可愛いよ。俺には過ぎた肉親だとも思っている」

今そうでも、三年ほど続いていたけども、これだけが変わらず思っていることだ。第一、ぎくしゃくしている原因は大抵俺の方に非があることばかりだ。だから余計に思う。過ぎた妹。逆に俺の方こそ鬱陶しく思われていることが多いんじゃないかと危惧してしまうほどに。

「そう……ですか」

「ああ」

お前は？ お前は弟が可愛くないのか？

「あたしも優しいお兄ちゃんが欲しかったな」

お兄ちゃんに甘えていたよ。奈々華が言ったカナの考察。ないものねだり。隣の家の芝生。一番上は上を、一番下は下を、欲しがらんじゃないか。幻想を抱いているだけだよ。俺はそんなに優しい兄貴じゃない。奈々華に迷惑や苦勞を掛けてばかりだ、きっと。

「……」

喧嘩したのか？ 今俺はそれを聞いて、仮に甘えられても、何か為になるようなことは言えないだろうし、そんな余裕もない。俺の方が相談したいくらいだ。それなのに。よせばいいのに、と思いがながら、俺は結局一度止めた言葉を口にする。

「弟さんと喧嘩でもしたのか？」

よっぼど。よっぼど川瀬のほうで俺よりも大人なのかも知れないな。アイツはもう少し婉曲に、気遣いながら聞いたような気がするよ。

「……」

コクンと小さくカナの首が縦に振られた。

「俺でよかったら……俺でよかったら話してみてくれないか？」
妹から逃げ回って往復で二時間近くかかりそうな距離を寄り道している男の言葉とは思えないな。カナがこちらを見る。すがるような

目をしている。

「タクがね」

幼い子供の喋り方みたいだった。

「あたしの作ったもの、残すんだ」

作ったもの…… ああ、料理のことか。母親の代わりに作っていると言っていた。

「うん」

こっちも子供をあやすような猫なで声が出た。

「ママが作ったのは食べるくせに」

「それは嫌だね。辛いね」

「学校に行く時間もわざとあたしとずらすようになったし」

以前は一緒に行っていたのだろうか。あそこらへんの小学校となると…… ああ、あそこか。確かに一緒に行けるな。カナの高校の道すがらで行ける。

「頭にくるから、残すんならもう作ってやらないって言ったら……」

要らないよ、って馬鹿にしたみたいに笑うから」

カナはいつしか立ち止まっていた。繁華街というほどでもないが、人通りの多い場所は抜けていて、辺りは再び静かな住宅街へと様変わりしていた。フルフルと震えている彼女は、悲しいのだろうか。悔しいのだろうか。怒っているのだろうか。不甲斐ないのだろうか。彼女の気持ちを推し量るのが難しい。思えば奈々華は我が侘や反抗が比較的少ない子供だった。弟と妹という違いもあるかもしれないけれど。

「怒鳴ってしまったのかい？」

コクンとまた一つ。俺は男ということもあって、弟さんの気持ちもわからないでもない。姉と一緒に登校するのが気恥ずかしくなったり、無闇に反抗してみたくなったり。加えて父親の居ない家庭環境。俺のところとは状況が違うものの、その不在を共に享受する兄弟にどんな感情を抱くだろうか、と考えるとまた少し思うところもある。掛ける言葉を探す。すぐに見つかった。

「仕事だと思っちゃったらどうだい？」

「仕事？」

何を言っているんだコイツは、みたいな顔をして俺を見る。

「そう、姉貴っていう仕事」

ちよつとドライになってみる。根詰めて思い詰めて無理するよりも、意外と好転する場合がある。入れ込めば入れ込むほど煙たがられるような年頃の子供には。

「少し突き放すとまでは言わないけど、離れてみる」

「……」

真剣な顔で聞いてくれている。

「無理に愛情を注ごうと思わなくて、無理に良い子に育てようとか思わないで、自分しか居ないとは思わないで」

子は放っておいても育つ。よく言ったもので、ちよつと放任しても、色んな失敗をして、色んなことを学んで子は育つ。

「奈々華だって、聞き分けの良い子ではあったけど、時には反抗したりもしたよ。そういう時、俺はちよつと離れてみた」

父親代わりになろうと、意気込んだ時ほど彼女はそうなった。今から思えば、子供というのは敏感で、そうしてこっちが無理をしようとしているのを察知して、逆に肩の力を抜いて欲しいと無意識に考えるのかもしれない。守られるだけの存在であることを嫌がるのかもしれない。

「そっか。ちよつと構いすぎてたのかもしれないね」

「かもね」

笑ってやると、彼女も不恰好に笑った。非常に弱々しくて、まだ光明を見つけたとまでは思っていないかも知れないが、それでも少しは気持ちを軽くしてくれていると嬉しい。

「難しいね」

「ああ、難しいよ」

親もきつと難しいのだろうが、兄や姉だって難しい。でもきつと、弟や妹だって難しいんだろう。

今日はありがとうございました、とイヤに丁寧に頭を下げるので、気にするなとわざと軽く言っただけ。そんな頃には、俺の方は全く好転しているわけでもないのに、気持ちが悪くなるのを感じていた。お姉ちゃんとお兄ちゃん。立場は違えど、皆多少なりとも兄弟間の悩みというものを持ち合わせているのだなと。

「付き合わせたあたしが言うのも変だけど、早く帰ってあげて」
カナは最後にそう言って、マンションのエントランスへ入っていった。俺の方も踵を返す。

こういうのは勢いが大切なんだと昔誰かに教わったような気がする。謝するときのことだ。相手の意表を突いて、相手を飲み込むほどの完璧な土下座をかませば、相手は怒っていたことも頭から飛んでしまい、やがてお前を許すだろう。そんな言葉だったような気がする。誰の教えだったか。ああ、川瀬だ。

「しょうもない」

あんなロクデナシの言うことを真に受けるなど、正気の沙汰とは思えない。家までの道すがらを歩いて代替案を考えることにしよう。

こういうのは勢いが大事だ。押し入るような勢いで戸を開け放つ。

「ただいま！」

ボタンと大きな音を立てて扉が開けると、丁度居間から出てきたらしい奈々華の姿をみとめる。ここだ！

靴を脱ぎ捨てて、奈々華に駆け寄り。すんでのところで止まると、足を素早く折り畳み、体を曲げる。膝に溜まった心地良い乳酸を感じながら、肩から勢いをつけて床へと両手の平を叩きつける。続いて額に鈍い痛みを感じてゴツンと大きな音を耳が拾った。少し膝小僧も痛む。どうやら勢いがつき過ぎたようで、床の上を滑ったらし

い。

「今日はすいませんでした！ お兄ちゃんのこと嫌いにならないで下さい！」

言えた。勢いに任せて言うたった。俺の顔の影が落ちて黒くなった床をひたすらに見つめる。奈々華が呆氣に取られているようなそんな空気を感じる。だけどやがて、

「お兄ちゃん。顔上げて」

言われたとおりにする。まだ土下座の姿勢は崩さず、姫にお目通りかなった武士みたいに顔だけ上げる。奈々華は呆れた顔で笑っている。

「もう。馬鹿なんだから。スライディング土下座とか初めて見たんだけど」

俺も初めてした。

「怒ってないって言ったでしょう？ 当たり前だけど嫌いにもなっていない。ただ…… 他人に触られるのが初めてだったから吃驚しただけ」

「……」

それはまた罪悪感を一層煽る。

「お兄ちゃんは何も悪くないでしょう？」

奈々華が膝を曲げて俺の顔に自分の顔を近づける。

「私が勝手に布団に入っただけなんだから」

「いやでも」

それは俺がうなされたりしないようにという意図であって、実際にそれで助かっているわけで。

「もう。とにかく良いの。ほら、ご飯食べてないんでしょう？ 早く起きて食べちゃって。食器片付けられないでしょう？」

強引にこの話題を終わらせようとする。立ち上がって先に居間に入ろうとする。許された。まだ謝り足りないような気もするが、許された。ウジウジ悩んでいたのが馬鹿みたいだ。案ずるより産むが易し。そんな格言が俺の頭に浮かんだ時。

「それに…… 別に…… じゃな……たよ？」

ガチャリと音がして、ドアノブが回されて、居間の景色が見えてきて。そんな過程で、小さな、本当に小さな声を聞いた。聞こえなくても良いじゃなくて、聞こえないように言ったようだった。

「え？」

「ほら、早く起き上がって！」

奈々華は先に居間の中へと消える。ドアは閉めないで俺を待っている。ゆっくり立ち上がりながら、さっきの言葉を脳内で幾度も再生させる。声になる前の音のような部分を、言葉に当てはめる作業を終わらせて、文脈や状況と照らし合わせてその整合性を確認する。たらりと冷や汗をかくような気持ちになる。もう少し悪い耳を持っていた方が良かったんじゃないかと、自分でもよくわからない後悔が生まれる。ともあれ立ち上がる。少しふらついたのは、急速に動いた所為じゃない。もう一度耳と頭に問うてみる。やはり正解だと返ってくる。

彼女はこう言ったのではないだろうか。

「それに、お兄ちゃんだから、別に嫌じゃなかったよ？」

川瀬のしょうもない教えは、功罪を生んだ。グダグダ考えていても仕方ないし、俺個人としてはもう一度顔を合わせてきっちり謝りたいと思っていたので、自分に発破をかける意味でも土下座にしようなんて考えた。スライディングになってしまったのは、奈々華が日頃から廊下を綺麗にしてくれている証左でもあったが、今は割愛したい。

功は仲直り。仲直りと形容していいのかもわからないが、とにかく昼間ほどは気まずい空気にはならないのではないか。まあ俺の対応次第になりそうだが……

罪は俺の胸に巣食う困惑、一つの疑念。勿論今まで考えたことがなかったわけでもないが、それにしても今日のそれは一段と強い。確信…… するほど自意識過剰じゃないものだから、確信に近いエリアまでその疑惑をステップアップさせてしまうような言葉を実妹から賜った。

「参ったねえ」

食後の煙草がこれほど美味しくないのは久しぶりかも知れない。苦みばしっていて、時折喉の奥から酸っぱいものがこみ上げてくる。もう消そう。そうやってフィルターの先をつまんで灰皿に押し付けた時だった。

コンコン。控えめなノック。

「入ってますよ」

返事をしてやると、ドアが開いて奈々華の顔が見える。憂いはなく、どちらかというとはにかむように小さく笑っていた。思わず目だけ逸らした。こんなこっちゃダメだとはわかっていいるのだが、どうにも反射的に逸らしてしまった。同時に考えても仕方ないことを考えた。どうして俺達兄妹は次々わだかまりそうになるんだ。昨日だって微妙な雰囲気だったじゃないか。それを振り払えたかと思うと今

度はこれだ。心労が絶えない。神様は俺のことが相当嫌いなのか。このままじゃ禿げるのではないか。パキケファロサウルスみたいな頭になってしまいうんじゃないだろうか。

「あの、宿題見て欲しいの」

「ああ、構わないよ」

奈々華は一瞬躊躇するような仕草を見せたが、結局俺の方へ歩いてきて、膝に座った。昔からのお気に入り場所で、三年座らなくて高校二年生になろうかというのに、昼間には何とも言えない感じになったのに、座る。きつと…… きつと今日の出来事をお互い無かったことにしようと努力してくれているんだ。

小脇に抱えられていた問題集がテーブルの上で開かれる。生物のようだ。単細胞生物の断面図を模写した絵がページの上部に載っている。だけど俺の目はそこから焦点がずれていった。ぼやけたレンズで覗いたみたいに、背景の一部へと降格していく。焦点は、奈々華の後頭部へと移っていた。枝毛が一本もないのではないかと思うほどに傷みを知らない綺麗な黒。指を絡めるとするすると合間から抜けていって、やがてストーンと跳ねて戻るのを知っている。水をすくったような滑らかさ。彼女が少し前のめりになって鉛筆を動かすたび、毛先の方が微かに波打つ。

「ねえ」

奈々華が首は動かさずに呼びかけてくる。やましいことなんて何もないのにギクリとする。

「パチンコで負けたの？」

ああ、言われるまでほとんど忘れていた。そんな些事を考えている余裕はなかった。ああそうだよ、と答えると、背中越しに何か言葉を探すような雰囲気を感じた。

「お金ある？」

挙句妹に心配されている。多分、根本的に川瀬とは意気込みが違うのだろう。負けない、絶対に働かないという意味がアイツの方が何倍も強いに違いない。俺は負けてしまったら、また借金返済の為に

異世界で奈々華たちと働くのも悪くないと心の底で思っている。精神論なんてあまり好きじゃないけど、そんな風にも考えてしまう。

「何とかね。ただ闘志は折れてしまったかもしれない」

「……じゃあしばらく行かない？」

そういうことになるかもしれない。俺はどんなギャンブルにしても、知識と技術、折れない心、押し引きのバランス感覚、この三つが大切だと考えている。心技体じゃないが、どれか一つでも欠けていると、正常な立ち回りというものが難しくなる。カスが感染ってはいけないので奈々華には詳細に説明しないが、

「うん。多分ね」

結論だけ話してやる。奈々華は途端、振り返った。子供みたいに顔中で笑っている。嬉しさが抑えきれないという感じ。何故だか嫌な予感がする。

「それがどうかしたのか？」

「ううん。明日から一杯遊べるなあって」

「は？」

「私今日で特講終わりだったんだよ？ 行けなかったけど」

何だと。いや、まあ教師だって休みが必要なんだろうし、春休み中ある訳でもないのか。だけど急に、そんな……

「明日から何しようかなあ。ねえ、どっか遊びに行こうよ」

邪気もなくテンション上がりまくりの妹に待ったをかける勇気がない。いや、まあ嫌なわけじゃないけど、それにしても一日中一緒という格好になった場合は話が違ってくる。この子もいつか一人の時間が欲しくなって部屋に籠ったりするだろう、なんて甘い考えをしていると痛い目を見るのは知っている。

「や、えっと…… じゃあお前なんで宿題なんてしてるの？」

「あ」

しまったという顔になって、すぐに俺に後頭部を向ける。どうやらコレも方便だったらしい。もしかすると今までも宿題なんて出ていなかったのかもしれない。素直に遊びに来たと言えば良いのに……

深くは追求せず、奈々華の宿題（偽）を見ていると、まあ明日からは少しくらい家族サービスするかなんて気持ちになってくるから不思議なものだった。

二日目の昼過ぎにギブアップとあいなった。俺の器が小さいということなのだろうか。それとも一人で過ごす時間が長すぎたのか。それでもまだ頑張った方だとも思ってしまう。何せ昨日はトイレと風呂を除いたほとんど、いや全てと言っていい、時間を妹様と過ごしたのだから。俺の膝の上に乗ったり、膝枕で寝転んだり、隣に座って肩を寄せたり……とにかく離れてはくれなかった。彼女じゃないんだから、なんて軽口も、例の微妙な発言の後では喉の奥にしまいこんで彼女のしたいようにさせるしかなかった。一度、お兄ちゃん部屋に行きたいなど、やんわりと離れるように促したが、「や!」と子供みたいに拒否された。その言い方が妙に可愛らしかったものだから強くは言わなかったのが運の尽き。寝る間も含めれば二十四時間程はぴったりとマークされていたことになる。

嫌だったわけではないのだ。ただ、あまりに長時間一緒に居ると疲れてしまうのも事実。これは奈々華に限らず誰だってそうになってしまふ筈。寧ろ彼女は気心も知れているし、比較的楽であって然るべきなのだ。それなのに、こうしてエスケープを選択してしまう。やはり俺の器が小さいということになるのか。確かに、奈々華のそれを仮に横綱昇進を果たした力士が酒を注ぐ金杯のような大きさだとしたら、俺のそれはペットボトルのキャップにも満たない大きさだとは自覚している。何せ彼女は昨日は終始ご機嫌だった。俺の方は昨日の後半にはもう既に横綱奈々華の強烈な束縛攻撃に、徳俵まで追い込まれていた。そして今日の正午を過ぎた辺りにあえなく土俵を割ったということ。

逃げ込んだ先は大学。川瀬はこんな時に限って連絡がつかない。多分昼間っから寝ているんだろう。俺も奈々華と他人同居時代は相当乱れた生活を送ってはいしたが、アイツは実家暮らしにも関わらずそれを今なお敢行している。あるときは昼から寝始め、あるときは深

夜に寝始めたり、あるときは三十時間くらい起きていたり、あるときは二十時間以上寝ていたり。そして眠っている間は電話をしてもメールをしても全く起きない。というわけで俺はやることも行く場所もなく、大学へと赴いたわけだった。奈々華には春から始まる前期授業のシラバスを取りに行くなんて嘘をついた。ついて来そうになったものだから、すぐに帰ってくるよと嘘を重ねた。当然嘘であるわけで、シラバスの配布開始時期はもう少し後なわけで、つまり俺の勘違いだったということにして、もう一度本当に取りに来る際にエスケープが可能という二段構え。心が痛んだものだが、このままでは身がもたないのも事実。ごめんよ、と心の中で謝りながら家を出たのだった。

うちの大学は、東京ドーム何個分なんて広さは無くて、まあ歩いて端から端までは行けるくらいだ。といっても流石に時間が掛かるので、移動にチャリンコを使う学生も多い。景観のためにポツポツと緑を配し、化粧レンガのブロックを敷いた中央エリア。校門を潜ると、すぐ右手と左手に建物がある。一号館と四号館。右手の方は文理問わず必修科目の授業が行われる、いわば主要な棟である。左手の四号館は講堂があり、著名人を招いた講義や、保護者を招いた説明会、超人気講義なんか割り当てられたりする。総勢四百人程が収容できるとか。それを過ぎていくと、十字路にぶちあたる。左手が学生館。学生課があつて俺も留年時にはお世話になっていたりする。奥へ行くと三号館と二号館。文系のゼミ講義が開かれていたり、教員の部屋などが割り当てられている。右へ曲がると、メインストリートというのは少し違うかもしれないが、イチヨウの並木道。その道の右手はまだ一号館の建物。一号館は他と比べて大きいのだ。並木道には各種インフォメーションが貼り出された掲示板が立ち並び。学生の呼び出しや、就職説明会の案内、レポートの課題を貼出す授業もあったりと、俺にとっては思わず目を背けたくなるような内容。左手は広場みたいにドンと広大な空間を作って、手狭な入

り口付近を多少風通し良くしている。広場には芝生が敷き詰められていて、比較的並木道に近い位置に、しょうもないモニUMENTみたいなものが飾られている。岩を組み合わせて造形したものだが、最初に見たときはどこぞの原始人の悪戯かと思ったものだ。並木道を更に突き進んでいくと、学生食堂と部室棟。もつと奥の方が理系の専門棟、体育館、果ては南門へと繋がる。

さて学食で茶でも飲むか、なんて考えていると、丁度一号館から出てきた女性とばったり出くわす。

「お、城山君」

俺が川瀬以外にもう一人、友達にカウントしても良いだろうと考えている人だった。

戸部美咲とべみいささんは、俺の一年先輩になる。つまりは大学四年生である。彼女とは高校時代でも先輩後輩の仲である。俺が殺人なんて大罪を犯す一年前に卒業なさっていたのだが、まさか大学で再会することになるとは思いもよらなかった。越す前の、つまり二年半以上過ごした高校の同門が選ばないような大学を選んだつもりだったので、顔を見たときには大層驚き、そして慌てた。彼女は俺がやらかしたことについて知っている風に俺は思っているが、本当のところはわからない。俺からは勿論言い出せていないし、彼女からも何も聞いてこない。ただ高校時代と変わらない態度で接してくれる。ありがたいような、身に余るような、何とも言えない気持ちになった當時を今でも思い出せる。

彼女はサバサバした性格だ。俺が会って間もない頃に、戸部美咲って、何か今にも自殺しそうな名前ですよねなんて口を滑らせた時にも、ああ美咲と岬をかけてるんだね、なんてカラカラ笑っていた。ちよつと男っぽいとも言えるかもしれない。大学で再会してから麻雀を習いたいなんて言って俺に教えを乞うたこともある。俺は小学生の頃にあのクソゲーを覚えて、高校一年の時に雀荘なる場所で知らない人と金を賭けて遊び始めたりと、一応は人に教える位は出来るものだったから、教えた。飲み込みも早く、教え易かったのを覚えてる。ただ覚えたはいいが、その腕を振るう機会はほとんどなかったようだ。自分のサークルに俺を呼んでやるが多かったのだが、部員同士だけで卓を囲む際には参加しなかったそうだ。サークルも三年になった頃には辞めてしまったらしくて、彼女が牌を握ることはもうないかもしれない。スロットもやってみたいなんて言うてきたりしたが、こちらもあり単独ではやらないようだ。もう売り払ってしまったが俺の家にあった実機を少し触らせた程度で終わってしまった。こういうところは奈々華に通じるものがあると思

う。あの妹も一応は俺に麻雀のやり方、役、牌効率、点数計算なんかは習ったのだが、実際にはほとんどやらない。俺がネットで少しやっているとチョコチョコやって来て見ている程度。きつとマトモなんだろう。俺や川瀬はどこか頭の螺子がおかしいのだ。金銭感覚だったり、退廃的なものへの幼い憧れじゃなく、本気で傾倒してしまふ辺りだとか、気が触れているとしか思えない。根本的に一度楽を覚えると忘れられない、弱い心を持った人間がああいったものへ本気でめり込んでしまふんだろうと思う。先輩や奈々華は違うということ。確固たる自分を持っているのだろう。

「ねえ、どうかした？」

先輩の顔が少し近くにあって、思わず半歩下がった。どうやら随分とこの先輩について考え込んでいたようだ。まあ途中から俺が如何にカスであるかの証明に移っていたような気がするが。

「いえ。なんでもないです」

「なーに？　考え事？」

似合わない、と言外に。口の両端を少し吊り上げただけの笑い方を彼女がするとき、俺をからかったりする合図。整った容姿でそれをされると、それもまた悪くないなんて変な考えを男にさせる。キリッと凛々しい眉、大きな目には何か吸い寄せられるような力がある。鼻梁も淀みなくスツと通り、少し厚めの唇も顔の構成にあって足を引っ張るところかチャームポイントに変わるほどに艶っぽい。顔の系統から奈々華とは少し違う。目元辺りはスツピンのカナに少しだけ似ているかも。不思議なのはこれほどの美人だというに、浮いた話を一度も聞いたことがないということ。世の男性陣はどういつもこいつも節穴なのか。

「な、何？　ひとの顔じつと見て？」

「クセです。考え事をする時の」

君が考え事？　なんてからかい口調で言われそうだったので先手を打って、

「先輩は今日はどういう用件で大学に来たんですか？」

と質問をぶつけておく。

「え？ ああ、ちょっと近くに寄ったから」

嘘をついている。そう思った。彼女が弱々しく笑いながら言う言葉は大抵嘘である。なんだかんだ付き合いは長いんだな、と俺は内心で思う。

「そうなんですか。じゃあ特に用事はないんですか」

「そうそう。結構暇なんだよ。就職先も決まった四年生なんてね」
大手の薬品メーカーだったか、と彼女の内定先を思い出す。高校時代から勤勉で優秀だった。秀才。彼女を褒める言葉は色々俺の中にはあるが、一番尊敬出来る部分を如実に表す言葉。ああそうだ、ここもまた奈々華とカブる。

「ははは。俺学食に今から行くんですけど、暇だったら来ますか？」
「あ、行く行く！」

しめしめ、暇つぶしの相手を見つけたぜ。暇なら家に帰れよ、なんて自分に突っ込みたくもなるが、まだ少し気がひけている。

しばらく近況を話し合ったり世間話をしていると、ケツのポケットが震えた。川瀬の馬鹿かと思いきや、奈々華からのメールだった。微妙な顔をしたのだろう、先輩が窺うような雰囲気を作った。

「妹からです」

便箋のマークを開くと、「まだ帰ってこないの？」と。

「ああ、そういえば」

先輩は奈々華のことを知っている。一度、高校時代に当時中学生の奈々華と道を歩いている所に鉢合わせたことがあった筈だ。後日会ったときに、彼女かと思ったなんて所感を頂いた。手を繋いで歩いていたのだからそう思ってしまうのも無理はない。

「最近あんまり話してなかったけど、まだ仲良し兄妹継続中なんだ？」

「……ええ、まあ、そうなりますかね？」

継続と言って良いのか。あまり話題に上げなかったのは数年の断絶があったため。こう思うと川瀬は勿論、友人と言ってもあまり深い話はしてこなかったんだな、なんて少し空虚な気持ちになった。まあ人に相談してどうこうなる問題でもなかったわけだし、仕方なかったと言ったらそれまでか。なんとなく嘘をついたようでバツが悪くなつて先輩から視線は外す。食堂内は長期休暇中ということではまばらだった。サークルの関係で来ている学生。くたびれた背広のおっさん。こっちは教員か大学職員だろう。天辺から豪快に禿げた頭が、三寒四温の温、暖かい春の訪れを期待させる明るい陽を浴びてキラキラと輝いていた。どいつもこいつも一人ぼっちで、長テールブルの端と端に牽制しあうように座って飯をむさぼっている。

「早く帰って来いって？」

エスパーですか？ と聞きたくもなかったが、何かしらさっきの問答で感じたものがあつたのかもしれない、と口を噤む。もっと具体的

に言えば、俺があまり仲良し兄妹というフレーズに快くなかったのが、じゃれつく妹から方々の体で逃げ出し、一人の時間を取ろうと大学に収まったという経緯。つまり俺が奈々華が面倒くさいものだから、仲良しと評されるのに不服という洞察。まあ80パーセントくらいは当たっている。

「まあ、そんな感じです」

「ふふ。本当に奈々華ちゃんはお兄ちゃんのこと大好きなんだね」

「……」

肯定すればシスコン、または自意識過剰。否定すれば家族の好意すら真っ直ぐ受け止めれないガキ。沈黙が金でございます。

「その携帯に貼ってるのも、奈々華ちゃん？」

プリクラのことだ。光量を玄妙に調整して俺ですら中々まともに映っているが、その横でそんな小細工なしでも十分に整った容姿をした妹様が満面の笑みで枠内におさまっている。思わず苦笑いして頷く。気がつくと携帯裏面に貼られていた、ということまで言ってしまうえば墓穴を掘りそう。からかわれるにしろ引かれるにしろ。

「ねえ、奈々華ちゃんって……」

気がつくと空になった茶碗の上で割り箸をペンみたいにクルクル回していた。行儀が悪いと奈々華に散々窘められている悪癖。

「ひよっとして彼氏とか居ない？」

どっち？ 居るんじゃないかと踏んでいるのか、居ないと踏んでいるのか、判断がつかないニュアンスだった。顔を見ても曖昧に笑っているだけで、それは踏み込んだ質問をしている自覚がそうさせているだけで、やはりわからなかった。居ますよ、と答えたくなった。

「……居ませんね。彼女が言うには、ですが」

「ふうん」

「あ、でも俺に嘘ついてるだけで本当は居るのかも知れないですよ」

「今も手繋いだりする？」

「え？」

話の繋がりが見えない。

「あっちからスキップしてきたりする？」

「……まあ、してきます」

ごくごく稀に、と嘘を重ねてしまいたくなる。ここまで来ると、俺の方も彼女の話の展開が見えてきた。

「私は一人っ子だから、良くはわからないけど、少なくとも、初めて彼氏が出来たりしたら、男兄弟とか男親とかに何となく近寄りがたくなったりするものだと思うの」

ああ、この割り箸木目がとっても綺麗だな。

「まあそもそも私もあんまり経験のないことだし、そもそも私は結構男っぽい所あるってよく言われるくらいだし、あんまり参考になるかはわからないんだけど……」

マレーシアから来たのだろうか、インドネシアから来たのだろうか。どこかにせよ、それが外国なら、原材である木は何を思うだろうか。遙か異国の地で、知らない人間が飯を食べるただけに自身の体の一部を消費する。憤るのだろうか、それとも人よりもっと長生きな彼らは達観し、そんな贅沢すら許してしまうのだろうか……

「全く推測で悪いんだけどさ…… ちょっとそういう部分もあるのかな、って聞いている？」

「聞いてますよ。厳粛に傾聴しております」

「すぐバレる嘘を平気でつく癖って直らない？」

「……」

「ごめん。色々お節介が過ぎたね。奈々華ちゃんも待ってることだし、帰ろっか？」

それでお開きとなった。割り箸を器の中にそっと置いた。

厳肅かどうかは知らないが、実際聞いていた。聞いていたからこそ耳が痛くもあった。言われなくても知っているよ。川瀬が相手ならそんな風にあしらっていたかもしれない。もっともアイツなら俺のメールに興味を持つなんて有り得ないから、込み入った話に発展することもなかっただろうけど。先輩の面倒見の良い性格があつてそのものだろう。そして敢えて踏み込んできた厚意の内容はこうだ。奈々華ちゃんはひよつとすると寂しいんじゃないかな。確か女子高に通ってるって前言ってたよね。上手くは言えないんだけど、一番恋愛したり彼氏作ったりしたい時期なのに出会いが少ないわけじゃん。その代替ってわけでもないだろうけどさ。斜に構えてしまってるのかもしれないね。家族が居るから恋人なんて居なくても大丈夫だよ。みたいに。達観したフリしているのかも。私もそういうところあるし、何となくわからないでもない、かな。でも何だかんだでふとした時に虚しくなったり、寂しくなったり、そういうときに思いつき甘えて紛らわせる。

彼女自身、どこかしら探りながら、言葉を厳選しながら話にくそうにしていた。実際去り際に、

やっぱり忘れて。私がどうこう口挟むことでもないし、推測だし。

あーあ、何で私あんなこと喋ったんだろう。なんか城山君たちの兄弟の絆を侮辱してるみたいにも聞こえたかも。本当にごめんなさい。そんな後悔も覗かせた。すいません、割り箸に思いを馳せていたものですからあまり聞いてませんでした、と軽く流そうとした。けど先輩は、優しいねと呟いた。どうやらしょうもない猿芝居は奏功しなかったようだった。

「ウィンカーくらい出せよ、ハゲ」

帰り道は混んでいた。少しでも空いた車線に素早く入り込んでいく、その凶太さが俺にはどうにも持てない。これくらい強引で、自己中

心的な部分を前面に押し出せたなら、短絡的に生きられたなら、ひよっとするとこんなことで悩んだりしないのか。

「お前ばっかり構ってらんないよ」

ってピシヤリ。今一人きりの車内で呟いただけで、奈々華の泣き出しそうな顔が容易に脳裏に浮かぶ。無理だ。そんな可哀想なことは出来ない。気を遣いすぎだよ。でもな、どちらも百パーセント我を通すなんて出来ないんだよ。家族内では気を遣わないのが円満の秘訣、そんなの嘘だ。そう思っている人間は、きっと自分が円満だと思っているだけで他の家族がその人の分も余計に気を遣って我慢しているんだ。何も一挙手一投足ビクビクと相手の顔色を窺えなんて話じゃなくて、もう少しよく見たら良い。近すぎて見えにくくても見れば良い。そうすれば相手は自分と居るために少なからず妥協してくれているのがわかる筈だ。だから、気を遣うという表現がよそよそしいなら、感謝と謙虚を持てばいい。それらが相手のキャパシティの範疇におさまってなければ、一見円満に見えてもいつか破綻してしまうかも知れない。

奈々華は沢山のことを俺にしてくれている。割り箸を回す癖も、靴下を脱いだままほったらかしにする癖も、所構わず屁をこく癖も、注意はするが我慢してくれている。ギャングブルでヒドイ負け方をして、部屋の隅で小一時間膝を抱えていても、自業自得も甚だしいのに、優しく慰めてくれる。だから俺もあの子の家族として感謝と謙虚は忘れずに居るつもりだし、彼女と家族を続けるための努力も妥協も惜しむつもりはない…… でも……

「……ちよつと違うんだよな」

先輩の考えはちよつと違うかもしれない。代替ではなく、そのものの如く、依存が激しいのだ。時折ではなく、いついかなる時もなのであって、時折感じる虚無や寂寞から来るものとも思えないのだ。もう少し兄離れしてくれないと、このままいくと……

ハンドルを握る手が嫌な汗をかいているのがわかる。将来のことを考えると大抵嫌な気持ちになるが、これはまた別格だ。きっとまだ

モラトリアムが二年残っていて、まるで誰そ彼時に見るぼんやりとした人影のように、それが妖とも確定していない状況。それとは違って、よりクリアーで身近なんだろう。逃げ出したい現実が近く訪れる可能性。

ブーブーとポケットの携帯が震える感触がした。運転中なので取れませんよ、お姫様。

「……はあー」

帰ってすぐ煙草が切れかけていることを思い出した。へそを曲げているかと思った奈々華は意外に大人しく、その代わりあまり甘えてもこなかった。リビングでテレビを見るともなく見る俺を放置して台所に立って夕食の準備をしているだけだった。

「奈々華。俺コンビニ行ってくるけど何か要る？」

ソファアの背中越しに奈々華に話しかける。

「あ、じゃあ私も行っていい？」

少し遠慮がちな声。家族とは便利でも厄介でもあって、あまりあからさまに甘えてこないのも、いつもなら有無を言わさずついてくるくせに今日に限って許可を求めるのも、何となくなんでかわかってしまう。

「いや、煙草買ってくるだけだから。すぐ戻るし」

「……そう」

「うん。何もないんなら、行ってくるよ」

俺はそう言って最後の一本を啜えて立ち上がる。ぽいっと空箱を手近なゴミ箱に投げる。ここしかないと思えるような素晴らしい弧を描いて、おさまった。

何とはなしに考えていることがある。

奈々華を少し兄離れさせたい。このままではあまり好ましい事態にはならないのではないか。そんな気がする。先輩の言っていたことを思い出す。穏やかではあったが、諫言とも金言とも感じた。彼女は当て推量だと言ったが、奈々華の精神性について発せられた彼女の言を真っ向から否定するのは憚られた。またその精神性の帰結として推量された感情に関して、俺自身思い当たる節があるのだ。俺に対してやや倒錯した思いを彼女が抱いているのではないかという疑念。先の爆弾発言に留まらず。それはふとした拍子に背中に感じ

る強い視線だったり、甘えながらはにかむ姿だったり…… 違和感を感じることが今までなくはなかった。兄への親愛、その奥に背反せず芽生えた淡い恋情。勿論全て俺の第六感に近い部分を感じ取ったものであり、それらは全て錯覚で、或いは俺の自意識過剰からくるもので、実は純粹に兄妹愛を示してくれているだけという可能性もある。答えは俺の胸の内からは出てこない。奈々華に直接尋ねてみる以外には知り得る手段はない。だが勿論そんな勇氣はない。断じてない。もし聞いてみて、肯定なんてされた日には、体中から変な汗が漏れ出てきそうな気さえする。

煙草が短くなったので捨てる。側溝に落とされた瞬間、ジュツと断末魔をあげて沈んでいく。それを見てみると、ふと横顔に視線を感じた。側溝に目を落としているわけだから、横と言うと俺の進行方向の逆、後ろからということになる。気付いていないフリをして、目だけチラリとそちらに向けてみる。電柱の影に隠れるようにして俺を見ている女の子がいる。これが見知らぬ女の子で、彼女は街で見かけた時から俺に一目ぼれして、居ても立ってもいられず、俺のことを群集の中に探す日々を送り、そして今やっと俺を見つけ、物陰からひっそりと話しかける機会を窺っているいらしい娘、とかなら中々嬉しいものだが勿論違う。電柱の君は、十年以上前から知っている娘で、床で寝転がっていたら掃除機で俺を追い掛け回すなどする時々バイオレンスな女の子だ。奈々華はまだ俺が気付いていないとでも思っているのか、電柱の影で息を潜めているようだ。変質者と言わざるを得ない堂に入ったストーキング。

俺は前を向いて歩き出す。数十メートル進むと止まる。ペタペタとした足音も止まる。そんなことを二、三度繰り返す。毎度電柱やたて看板を過ぎ、しばらくして止まってやるのは俺なりのストーリーカーさんへの思いやりだったりする。まだばれていないとは流石に妹君も思っていないだろう。振り返る。電柱の影から出していた顔が慌てて引っ込む。だけど淡いブルーのスカートに包まれたお尻がピョコッと柱からはみ出している。まさかまだ隠れきっているつもり

なのか。笑っちゃいけないんだろうけど、少し可笑しくなる。同時に、さっきまで俺が考えていたことは思い過ごしかもしれないという気がしてくる。恋など知らぬ、ちっちゃい子供がやるような微笑ましい尾行。ここに兄への親愛以外の何かの感情が挟まっているだろうか。

「……出ておいで」

優しく言う。奈々華ははっと息を呑んだ雰囲気になるが、やがて観念しておずおずと顔を見せる。さらにしばらく待っていると、全身を影から出し、ちょこちょこ歩いてくる。

「……怒ってる？」

第一声。俯き加減な妹。

「怒ってないよ」

兄離れ。俺の本心はそれをして欲しくないのかもしれない。そつと頭を撫でると奈々華は少しはにかんだ笑顔を浮かべた後、目を細めて受け入れてくれている。それから手を繋いでコンビニまで一緒に行く。俺は勝手だ。息苦しくなって離れて、奈々華にそれを悟らせるとして、それでも可愛いと甘えさせるんだ。奈々華は勝手だ。それを悟ってなお、甘えたいから甘えてくるんだ。

夕焼け空に情緒のないカラスの鳴き声を聞きながらそんなことを考えた。

翌日はカナとサナちゃんと会えた。カナはともかく、サナちゃんとかうのは随分久しぶりな気がした。といっても家に遊びに来たわけではなかった。ホームタウンにしようかと思っではいるのだが、未だ慣れぬハケルインの宿屋でだった。二人に挨拶をすると、二人とも寝起きの自分の姿を異性に見せるのが恥ずかしいのか、すぐに出て行けと言われた。二人とも少しは懷いてきてくれていると思っていただけに、少しショックでもあった。やはり部屋を二つ取りたいなどと思うが、宿のそこかしこで賑やかな話し声が聞こえてきたりして、満室という話は本当なのだなと実感。逆に長期滞在を予定している俺達の存在は鬱陶しいのではないかとまで思えた。

四人揃ったので、仕事を再開しようということになった。川瀬のヤツに借金が丸々残る俺としては金を稼ぐという提案は勿論賛成だ。仕事をするということ自体には賛成なのだが……

「ろくな仕事がないな」

今は幹旋所について例によって例の如く小汚い帳簿を受付に見せてもらっているところだ。帳簿に限らず、店自体、豚でも寄り付かないほど汚い路地の先にあった。

「まあ今は祭りの準備がほとんどさ」

受付は初老の男性。最早弁護のしようもないほど頭髪が禿げ上がっている御仁で、口からはハツカの匂いがした。

「ああ、なんかお祭りがあるんでしたね」

奈々華がずいと俺の隣に顔を出す。ちよつと頬擦りするような格好になる。どうやらわざとのように俺の頬にぴたつと自分のをくつつけた。ぷにぷにする。そんな体勢のままどれどれと俺が捲っていたのと逆向きに帳簿を捲り始める。間髪入れず、後ろから、イチヤイチャするなと怒号が飛んでケツを蹴られる。

「カナが妬いてる」

奈々華が茶化す。やはり目新しいものがなかったのか、帳簿を置いてカナサナの下へ戻っていく。キヤイキヤイとかしましい。子供の遠足みたいな雰囲気にし少し呆れた溜息が口から漏れる。

「ええっと、確か一年の豊作と息災を祈る祭りでしたっけ？」

丁度神道の祈年祭みたいなものか。時期的にも通じるものがある。受付のおじさんは軽く頷く。

「ああ、アンタ等旅行者じゃないのか？ 祭り目当ての」

「ええまあ。っていうか、ここに来ている時点で違うでしょうに」

「まあそれもそうか。ハーレム旅行ってヤツかと思って、おじさん
年甲斐もなく興奮していたんさ」

「違いますよ」

ていうかハーレム旅行って何だよ。ハネムーンならわかるけど。いやそれも違うけど。あとアンタが興奮してもしようがないだろうに。色々言いたいこともあったが、面倒くさそうなので適当にあしらってから帳簿を更に捲っていく。

「じゃあ兄ちゃんの本命は誰なんだい？」

「……」

意外としつこいオヤジだ。両サイドを残して正面から進むサヘルに、何となく粘着質っぽそうなんて失礼な想像をしていたが、実際人は見かけによる。どうあしらおうかと考えていると、ふと違和感。後ろで仔犬のようにじゃれあっていた三人が静かになっている。振り返るとカナと目が合った。しかしすぐ不自然に逸らされる。他の二人も同様。なに聞き耳なんか立ててるんだか。

「あの子達は全部俺の妹です」

「嘘付けよ。全然似てないじゃないか。第一髪の色だって違う」

「若者は髪を染めることが出来るんです。貴方とは違うんです」

つい口が滑って余計なことを言ってしまったが、それ以降切なくなつた受付のオヤジは何も言ってこず、仕事をゆっくりと探せた。

しかし、結局どれもこれもつまらなさそうという不評で、途方に暮れた。気持ちはわからないでもない。会場の設営がほとんどを占めていて、こういった類はあちらの世界でも結構ある。有名アーティストのライブが集中する夏場なんて特に。そんなわけで、受付の勧めもあって、また時間を改めて行ってみることにした。午後になったらまた新しい依頼が更新されるかもということだった。

「しかし君らも贅沢だね」

俺達は街を少しぶらつくことにした。奈々華とは軽く廻ったものの、他の二人はあまり街を知らない。

「しょうがないっすよ。折角だから楽しんでやりたいじゃんか。お兄ちゃん」

カナはさっきのおっさんとのやりとりを茶化したらしく、俺をさつきからお兄ちゃんと呼ぶ。あまり悪い気がしないあたり、俺は本物の変態なのかもしれない。カナに対して邪な気持ちを抱いていると、チヨイチヨイと俺の袖を引く感触。顔を下に向けるような格好でその行為の主を見るとサナちゃん。

「どうしたの？ サナちゃんも俺のことお兄ちゃんて呼びたいの？」

「気持ちわる！ マジ吃驚するほど気持ち悪い。警察呼ぼう！」

雑音がする。サナちゃんはちょっと困った顔をして、そろそろと指を伸ばす。俺に何か伝えるために手の平に字を書くには明後日の方向だな、と思っていると、その指が中空でピタリと止まる。指差す先。奈々華もそれを見て「面白そう」とちょっと興奮気味の声を出す。

角材やその加工器具や仮設のテントみたいなものが犇いている辺り。何かの会場を設営途中といったところか。その近くでチラシを配っているお姉さんが居る。なんだビラ配りだって大して面白くないだろうと言い掛けて、お姉さんの居る近くにのぼりが立っているのを見つける。時折風ではためいたりしているその白い布地には赤文字が目立つようにこう記されていた。

「ミス・ハケルインコンテスト開催！ 参加者募集中 優勝賞金

金のビー玉100個!」

正直意外だった。どちらかというところ、こういうことに対しては消極的な反応を示しそうな子だと思っていた。俺の勝手なイメージだったということか。ついついサナちゃんを見てしまう。俺より数段低い位置の頭が俯いてしまったらこっちは表情を窺い知ることはいできない。カナも奈々華もどうやら俺達二人の様子を見ているようだ。ちよつとしてから、サナちゃんがおずおずと俺の手を握る。「いや、奈々華ちゃんが出たら良い線いくかなって」と、そんなことを書いてくる。

「サナちゃんは出ないのかい？」

「……」

首を縦にも横にも振らず。俺は考える。この反応は多少なりとも興味がある証拠ではないだろうか。女の子は…… いや、性別問わず、実は自分の容姿に完全に絶望を抱いている人間というのは少ない。まして俺の目から見てもサナちゃんは可愛い顔をしている。奈々華のようにハツとさせられる程整っているというわけではないが、顔のパーツもそれらの調和も可笑しな所はなく、所謂可愛い系というやつだ。そんな様子はおくびにも出したことはないが、実際彼女の内心にはちよつとした自信くらいはあるのかもしれない。加えて、こっちの方が大きいのだろうけど、ここは自分の住む世界とは違う。旅の恥はかき捨てなんて心理もあるのかもしれない。例えば箸にも棒にも、なんてことになっても、ここに永住するわけでもなし。多少開放的な気分になっているのかも、なんて邪推していると、

「サナはなんて？」

奈々華が業を煮やしたらしく聞いてくる。俺は彼女の文言どおり伝えた。

「そ、そうかなあ」

照れ照れ。

「……お兄ちゃんはどう思う？」

そんな照れた顔のまま俺に水を向ける。肩を揺らしてくねくねしだす。

「うん。腹が減った」

「お兄ちゃんはどう思う？」

ごまかし作戦は失敗。

「良いんじゃないか。きっと大丈夫だ。君なら出来るよ」

「……」

アレは飯抜き顔だな。

「まあ良い線いくんじゃないか？　まあ、その、なんだ。お前は俺と違って顔立ちだけは良いしな」

「顔立ちだけ？」

「ああ、いや。まあ性格も良いところはあると思うよ」

何だって妹の友達の前でその妹を褒め称えなくちゃいけないんだ。公開羞恥プレイとは高度すぎてお兄ちゃんはついていけません。

「なんでそんな引かかる言い方するの？」

「皆の前で手放して誉めたら、またシスコンだの、異常性癖だの罵られて嬉しくなるだろうが」

「お兄ちゃん、しょうもないボケかましてるところ悪いんだけどさ、コレ多分あたしら無理だよ」

貰ったビラを妙に大人しく見つめていたカナが声をかけてくる。

「どういうこと？　あとお兄ちゃんはそろそろやめない？」

「ここ読んでみて。あと満更じゃないでしょう？　ド変態」

受け取って読んでみる。どうやら参加するにあたっての諸注意が記されているようだ。ああなるほど、と一点を読んで納得。参加者以外は公平をきすために舞台袖には入れないようにしているらしい。つまり奈々華が参加する場合、男である俺は当然参加できないのだから、離れ離れになってしまう。そうなると俺達はゲーム自体に失格となってしまう。俺は何だか安心する。奈々華のしつこい追及を逃れられるからだろうか。兄として妹を見せ物みたいに人前に晒す

ことに抵抗があったからだろうか。まあどちらにせよ、俺は残りの二人にも参加が厳しい状況を伝える。ぶうぶう言い出す奈々華。そんなに出たかったのか。サナちゃんの顔を窺うところらもやはり少し残念そうだ。カナはというと、

「でも一つだけ何とかなる方法があるよね」

と建設的。何だ。そんな方法があるのか。色々考えてみる。俺と奈々華が離れすぎないようにする手立て。

「お兄さんも参加させればいいんだよ」

「はあ？」

素っ頓狂な声が出る。

「ミスターの部もあるのか？」

「いや。そんなことは書かれてないけど、参加資格に女性であることは明記されてないんですよ」

それは当たり前だからじゃないのか。言わずもがなとかそういうことなんじゃないのか。

「だからルール上問題ないはずだよ」

「常識的に問題があると思うんだ」

「いいじゃないですか。今更お兄さんに失うものなんて何も無いでしょう？」

「いや、それはないけどさ。でもあちらに迷惑が掛かるんじゃないか？」

どうだろう、という顔をするカナは、ビラを配っていたお姉さんの下へと歩いて行く。何か話しているようだ。時折二人がこちらを振り返る。お姉さんは好奇の目をしている。カナがぺこっと頭を下げてこちらに駆け足で戻ってきた。

「大丈夫だそうですよ。前代未聞だけど面白そうだから良いんじゃないかって」

テキトーだな。

「まあいいじゃないっすか。可愛い妹のためだと思って」

「……そうだなあ」

チラリとサナちゃんの方を見る。

「じゃあ君らも参加するなら出るっていうのはどうだ？」

「え？ あたしとサナ？」

「そうそう。どうだい？」

「無理無理。何言ってるの？ 奈々華も出るのにウチに勝ち目があるわけないじゃん」

カナは顔の前で手をブンブン振る。その振られる手の向こうの顔。僅かに期待の色が見て取れる。女の子ってこういうところが面倒くさいよね、とは言えず、

「そうか？ お前は結構整った顔してるし、サナちゃんもお人形さんみたいに小さくて可愛い顔してるし、タイプは違うけど二人とも可愛いと思うぞ？」

「な、な、そ、そんなこと……」

カナが慌てふためく。ちよつと面白いな。

「いきなり何言い出すんですか！ 警察呼びますよ！」

暗にフォローしろってことだったんじゃないのかよ。それとも、そうだね奈々華に勝てるわけないもんねって笑い飛ばせと？ そんな世の理不尽を感じていると、横顔にも何か感じた。嫌な予感がするので、目だけ動かして確認すると、奈々華がジトツとした目で睨んでいる。いやまあ身内ってなんか褒めにくいじゃん、と視線で語ってみた。そっぽを向かれた。

俺達はエントリーの手続きを済ませてその場を後にした。安物の机の上で名前を書いている間中、お姉さんは笑いを堪えているような雰囲気だった。ともあれコンテストはこっちの時間で四日後と五日後の二日間。街全体を挙げた祭りの最初の日と次の日にまたがってやるそうだ。何かおかしいことになってきたな、とは思いつつも折角サナちゃんが自分から何かしようというのだから出来る限りの協力はしてあげたい気持ちもあった。カナも言っていた通り生きていること自体が恥ずかしい俺が今更恥も外聞もあったものではない。だからもし三人がダメだった時も、俺なんか男なのに出たんだぜ、と馬鹿笑いでやれば良い。願わくば四日後、若しくは五日後にこちらの世界に居ますようにとだけ、いるとも知れない神に祈ってみた。

結局正午を過ぎてまた幹旋所へ行ってみたものの、目ぼしい仕事は見つからず、何もやらないよりはと会場設営の仕事を請けた。しかし残りの三人は全く関心を示さず、というよりも力仕事がメインになるようで、俺一人でやることにした。それにしても奈々華なんかは平素ならちよこちよこやってきて仕事を手伝わないまでも邪魔くらいはしそうなものだが、俺が働く現場の隅で座ってカナたちとくっちゃんべっているだけだった。まだ拗ねているのだろうか。

勿論今日の仕事は俺一人の取り分と言うことになっている。今まで協力してやっていたが、乗り気でもまして適性でもない仕事を無理に手伝わしても仕方ないし、俺一人が働いている状況で山分けと言うのも逆に心苦しく、三人の提案を呑んだ格好。皆が働いてそれぞれ賃金に格差が出たというなら山分けは辞さないが、今回はやむなしだろう。それにしても率先して俺が働くなんていよいよ落ちぶれたものだ。

仕事はまさに肉体労働だった。砂や石をリヤカーに乗せて指示された場所まで運ぶ。その往復、繰り返し。安全用に被ったヘルメットの中で髪が蒸れて湿気ていく中、黙々と作業を続けた。

半日働いて、現場の責任者から給与を受け取った。正中にあった太陽が西に傾いて久しい頃だった。ずぶの素人の俺は実際に建物を作っていく行程は触らなかったが、組まれた足場の向こう、大分建物らしくなってきた土や石を見るに、中々の充実感が胸中にはあった。監督に頭を垂れて失礼し、ビー玉の入った巾着を手に奈々華たちと合流する。

「待たせたね。ごめんよ、退屈だったろう？」

何もせず待つというのは結構気力の要るもので、即座に謝る。

「お疲れ様」

と一同。サナちゃんは言っていないけど、顔が労うように優しく笑っている。

「ていうか奈々華の言ったとおり、やっぱり謝った」

指でもさされそうな勢いでカナが笑う。奈々華にはお見通しということか。なんとも苦笑してしまう。年下の女の子達にこんなに気を遣ってしまう自分は、彼女から見たら情けない男なんだろうか。そんな益体のないことを考えながらの宿への帰り道。三人を無事宿まで送り届けた後、奈々華と一緒に銀行へ出かけた。

「良かったね、お金が手に入って」

「うん。ああ」

奈々華はぶっきらぼうに言う。手も繋がらない。いつもは俺がポケットに突っ込んでいても引っぱり出して繋ごうとするくせに。

「またパチンコに使っちゃダメだよ？」

「ああ、わかってる」

スロットにぶち込んでやろうと思っている。

「借金も返せるね」

俺が今日手にした金は三十万ほど。うち半分は奈々華に預かって

らうことになった。あつたらあるだけ使ってしまうという奈々華の見解に、失礼だがよくわかっていてというのが俺の感想。まあポジティブに考えるところからタバコ代なんかは出るわけだから最低限のライフラインが保証され、心置きなく有り金を捻り込むことが出来るというもの。

「……」

「……」

夜風は冷える。シャワーを浴びている間に、すっかり外は夜の帳。見上げると雲に半身を隠した朧月。そういえば月や星が見えるということは此処はやはり地球上のどこかなんだろうか。地球の数あった選択肢の果て、パラレルワールドなんだろうか。つ、と視線を下げると、奈々華が俺を見ていた。その顔が妙に寂しそうに見える。頬にかかっている髪をそつと耳の裏に掛け直してやる。嫌がられるかとも思ったが、抵抗されることはなかった。その代わり表情も浮かないままだった。可愛いと言ってやればいい。顔も性格も。カナよりもサナちゃんよりも。

だけどそれでもし本当に単純に顔を輝かせたら……

「……今日は冷えるな。早く帰って寝よう」

俺と奈々華は同じ布団で今日も眠る。

朝、川瀬からのメールで起きたときは天啓だと思った。彼の示したイベントの内容は復帰をかけて闘おうという俺にとって申し分ないものだった。設置台の三分の一が456確定。さらに「てっぺんシート」なんてあって全6確定もあるそう。こちらに帰って来たという実感もそこそこに、涎が出そうなイベントに心躍った。俺は闘った。抽選の番号は悪くなかった。台選びも悪くなかった。素直な上げ変更の多い彼の店で、前日前々日と凹みのデータを示している角台を取れた。それはもうタバコを放り投げん勢이었다。軍資金も申し分なかった。十五本あればどれほど吸引力のあるART機を打っても形になる前にショットなんて事態は起きない筈だった。勿論子役の取りこぼしもなかった。血走った目でリールの回転を追いかけていた俺に死角なんてなかった。ボナ察知の際の下段バービタも一度もミスは無く、最速で揃えた筈だ。そして何より設定は最悪でも4は見込めた。偶数の上である挙動を最初から見せてくれた。いや、敢えて言うなら8対2くらいで6だ。

だのに。だのに負けた。一体何が悪かったのだろうか。答えは簡単だ。ヒキという自分ではどうしようもない、そして一番重要とも言えるファクターが足りなかったのだ。

ボーナスがレグに偏る。最低継続66%のARTが八回も連続で単発終了する。勿論数字上起こり得ないことはない。ないが……起らない確率の方がとても高い。すんごく高い。嵩む投資、増えないメダル。夕方には一般解放せざるを得ない状況。俺を嘲笑う6。店は悪くない。俺の右手が悪いだけの話。川瀬は抽選がすこぶる悪く、スロットなど取れない程であったにもかかわらずパチンコで十萬弱勝った。おまけにスロットのハイエナに成功し、天井ARTを足がかりに一気に三箱近くカチ盛る始末。結局店に残して一人敗走してきた。そう、要するにヒキ。俺になくてアイツにあるもの。同

じゴミなのに、どうしてこうも差がついてしまうのか。俺はもうこの稼業に向いていないのではないか。今まで多少なりとも実入りがあったからやっていたのに、これでは続けることに、デメリットこそあれ、メリットなどないのではないか。ただ徒に金を減らすだけ。昨日汗水垂らして働き得た金の四分の一ほどが数時間で消滅してしまった。皆俺の傍から離れられないから待たせてまで働かせてもらって得た金。申し訳なさすら感じる。不甲斐ない俺の右手。いっそタバコでも押し付けて根性入れなおしてみるか。

やっぱりそれも怖くて出来ない。黒透明な灰皿にそっと押し付けて揉み消す。ごめんなさい。生まれてきてごめんなさい。ヒキが弱くてごめんなさい。だったらやめれば良いのに。わかっていてもすっかり傾倒してしまった俺はもう中毒。ごめんなさい。どうしようもなく愚かでごめんなさい。

奈々華は部屋に居ない。俺一人にしてくれている。頭を冷やせということなのかもしれない。朝早くに妙に殺気だった目で出て行って、夕方にはいじめられた野良犬みたいに汚い顔して帰ってくれば彼女が事情を悟らないわけもない。ごめんなさい。ダメなお兄ちゃんでごめんなさい。俺はでも本当は働きたくないんだ。また昔みたいにコレだけやって遊んで暮らしたいんだ。ニート学生で居たいんだ。でもモラトリアムってそういうものじゃない。君とまた仲良く暮らせるようになったけど、君と上手くいっていなかった時もコレだけは楽しかったんだ。脳を麻痺させてくれるんだ。麻薬だよ一種の。

溜息を一つ吐いた時、靴下をまだ履いていることに気付いて脱いだ。ツンと嫌なおいがした。何か、吹奏楽器の空気穴から漏れ出した涎汁のような、長い時間をかけて醸成されたような、すえた匂いだ。急に腹が立った。カッとなるのはこのことだ。なんで俺の足はこんなに臭いんだ。川瀬の足は臭くない。奈々華の足は臭くない。不平等だ。俺だけが負けて凹んで臭い。

ほとんど衝動的な動きだった。どたどたと階段を駆け下り、リビン

グに駆け込む。夕食の準備をしている奈々華が吃驚して目を見開いている。その奈々華を押し退けるようにしてシンクの脇にある金ダワシを引っ掴んで風呂場に行った。

「お、お兄ちゃん？」

奈々華の声を背中に聞きながら、乱暴に服を脱ぎ捨てて。洗濯機に上手く入ったものも、そこらに散乱してしまったものもあったが、気にも留めず、俺は風呂場に入る。やたら興奮しているのに気付いていたが、体が制御できなかった。蛇口を捻りシャワーで足を洗う。こんな水洗いで俺の足の匂いが取れるはずがない。多分俺は今最高の好敵手に出会ったように、不敵な笑みを浮かべている。衝動は止まらず、持ってきたタワシで思いきり足の裏を擦った。これで良い。妙な満足感があった。自傷行為というものは元来俺の癖ではない。だが、突発的にその一端を理解したような気がした。自分という矮小な存在を痛めつけてやることで、ある種の充足が得られる。それは罪の意識から逃れるためだったり、その矮小さや卑屈さから誰にも向けることの出来ない嗜虐心を、例え自分自身にでも向けられることに快感を覚えるためだったり。鬱屈した感情の発露。痛い。激痛が走る。シャワーが流す水に、赤が混じる。強く擦ったことにより、足の皮の大部分が捲れて出血してしまったようだ。

そこでやっと俺は我に帰った。何をやっているんだ。いや、勿論一部始終を覚えているが、まるで俺じゃない誰かに体を乗っ取られていたような錯覚すら覚える衝動だった。人間の野性に近い、突発的で原初的な感情に支配されていたのかもしれない。いや、そんなことを考えている場合じゃない。痛い。何これメツチャ痛い。メツチャ血が出てる。死ぬ。やばい。シャワーを止める。足を踏ん張って立とうとして、また激痛が走る。声にならない呻き声が喉の奥から漏れる。淡いブルーの風呂椅子の下の方にも血が飛び散っている。俺は這って浴室を出ると、バスマットを敷き、タオルを取って体を拭いて、下半身をそれで巻き、奈々華を呼んだ。助けてと呼んだ。

奈々華は俺の様子に只ならぬものを感じていたのだろう、洗面所と

廊下を仕切るアコーディオンカーテンの向こうに居たらしく、すぐに血相を変えて入ってくる。

「どうしたの！」

「足をタワシで擦ったら血が出てきた」

「なんでそんなに馬鹿なの！」

てんやわんやして、奈々華の手当てを受けられたのは三十分ほど経ってからだった。

翌日目が覚め、自分の家だった時はほっとした。今向こうに行っても何も出来ないから好都合だ。それに二人に見られたら気でも触れたかと思われてしまう。奈々華は当初は驚き、呆れ果てていたものの、まあお兄ちゃんが馬鹿なのは今に始まったことではないし、と概ね慣れてくれていた。こういうとき家族というのはありがたいものなのだ。と実感する。本当に迷惑ばかりを掛けて申し訳ないけれど、その迷惑を呆れながら被ってくれる彼女には無限の感謝を。と思っていると奈々華はちよつと機嫌が良い。俺が家にずっと居るのが、いや居ざるを得ないのが嬉しいのかもしれない。今現在俺は二足歩行が困難な状態にあり、家中を這いずり回って移動している。その姿を赤ん坊のようだと表現して、ほっぺをつついてきたり、世話を焼いたりしてすこぶる楽しそうな妹君。もしかして一昨日の夜寂しそうにしていたのは、俺が金を手に入れてまたパチンコ屋に行つてばかりで自分の相手をしてくれない未来を予想してのことだったのかもしれない。まあ愛いヤツといえそうなのだが、本当に凄いなと思う。俺の今回のことは自分でも若干ひく程に酷いものだった。どうしてあんなことをしたのかと今問われれば、カッとなつてやったとしか言い様のないものだ。何せ老人でも赤ん坊でもないのに、自分の足で歩けなくなる事態を俺はこの歳まで考え付かなかった。事故やアクシデントの怪我ならまだしもだ。そんな俺に愛想を尽かさないう彼女は本当に俺に深い愛情を寄せてくれている。稀有で尊い存在。こんなことで再認識したなんて知ったら奈々華はまた呆れるだろうけど……それともう一つわかったことがある。這い這いで階段を下りるのはとても怖い。

昼頃に恐れていた事態が起きた。カナがやってきたのだった。サナ

ちゃんとは帯同していない。聞いたところまた用事があるのだとか。家の事情がちょっとあるみたい、というカナの顔は本人でもないのに気まずそうだった。何かもう少し詳しいところを聞いているのかもしれない、と勘が告げたが、聞き出すことでもないでそうなんだとだけ返しておいた。

「で、なんでお兄さんは足に包帯巻いてるの？」

ソファーに座って隠すように左足を右足の後ろにやっていたのだが、目ざとく見つけられてしまう。俺が擦ったのは左足の裏だけである。血が出ていなかったらきつと両足やるまで気がすまなかっただろうけど。

「ちょっと剣山を踏んでしまっただけ」

考えていた嘘。完璧にして疑いようのない嘘だと自負している。

「なんか自分の足の臭さにカッとなって、風呂場で金ダワシで擦ったんだって」

なんで本当のこと言ってしまうん？

「ちょっと何言ってるかわからない」

カナは苦笑いしながら小首を傾げてみせる。

「……」

「……」

「ていうかマジなの？ 馬鹿じゃないの？」

結構予想外の反応。いや、言葉は予想内だけど、彼女の表情は予想の範疇にないものだった。ドンビキされると思っていたものだが、言葉の最後は少し笑いを含んでいたし、顔も穏やかで優しかった。どちらかというと哀れんでいるような、愛おしんでいるような、そんな表情にも見えた。

「馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけど、本当にどうしようもないね」
逆に居心地が悪くなる。ゲラゲラ笑ったり、ひくひく笑われた方がまだ対処がしやすい。

「でも馬鹿な子ほど可愛いっていうのも本当だよ」
奈々華がカナに笑いかける。カナも同意したように生暖かい笑みを

俺に向け、なるほどそんな風に思われたのかと納得する。納得はしたものの、今度は気恥ずかしくなってくる。居たたまれなくなつて、ソファを下りて這い出す。目指すは冷蔵庫。アップージュースがあつたはずだ。俺が飲みたいのもあるけれどカナや奈々華に出してやろう。

「はいはいしてる」

「それはするさ。歩くと痛いんだもん」

ちよつと自棄気味に答えてやる。

「どこ行くの、お兄ちゃん」

奈々華が背後で立ち上がる。速く歩いているわけでもないのに、あつという間に背後に、いやこの場合尻後に、立たれた気配。冷蔵庫だよ、と答えると、返事の代わりに背中に柔らかくて暖かい感触。奈々華が乗つたらしい。ちよつと懐かしい気持ちになる。昔はこうやってお馬さんごっこをしたっけか。ちよつと感傷に浸っているとパチンとケツを弾くように叩かれる。

「はいどー。はいどー」

「やめてあげて」

カナの声はやはりいつもより随分優しい。弟はここまで馬鹿ではないだろうが、それでも年端も行かない男の子となれば多少は馬鹿やつて、それが可愛かったりするんだろうか。

「後でカナもやればいいよ。ちよつと楽しいよ」

「え？　ほんと？」

やっぱアップルジュースは俺だけ飲むことにしようか。

興味を持つ事柄以外にはまるっきり門外漢。これは人間なら誰しもある程度は仕方のないことではあるとは思う。好きこそ物の上手なれ、とはちよつと違うかもしれないけど、知識造詣を深めるにもその事柄に対して興味があるというのは非常に大きなファクターを担うのは間違いない。趣味とはそういうものである。そしてまた、そういう興味、探究心のベクトルが違いすぎると理解に窮する、理解されることが困難な場面にぶちあたったりする。

同性であつても俺の理解の範疇を超える趣味趣向を持つ者が沢山居る。例えば大学の同期で今はやんごとなき事情、まあ俺の留年なんだけど、により先輩となつている男が居る。飲み会の席でそいつのした「貯金が趣味だ」という発言を聞いて、俺は思わず「生きていて楽しいのか？」と聞き返してしまったことがある。本当にそう思つてしまったのだから仕方がない。まあそれを口に出してしまうところが俺クオリティーということにはなるのだが。だが逆にそんな彼からすれば大切な身銭を当然のように賭け事に費やす俺なんぞは道端のウンコにも劣る存在に見えるかも知れない。このように同性ですらこのザマなのだから、異性など何をかいわんやということになる……

俺に化粧を施している間、カナは終始嬉々としていた。彼女は化粧を自分にするのも人にするのも好きなのだそうだ。自分にするのが好きだというのは何とはなしにわかる。女の子はいつでも可愛くありたい、という誰が言い出したのかもわからない通説みたいなのもあるし、よく知る自分の顔を理想に近づける行為というのはそれなりに精神的効果があるだろう。朝少し早く起きてちよつと手間を掛けるだけでその日一日を堂々と過ごせるのなら易いものかもしれない

い。だが、誰か他人にするのも楽しいというのはもうコレは俺の思考回路では手に負えない感覚領域、感情回路。

「お兄さん、ちゃんと目開けてください」

「開けとるわ。元々じゃ」

今は俺の睫毛によくわからない小さな筆でよくわからない物を塗っているようだ。怖いなんてものではない。目に入ったら多分俺は死ぬのだろう。というような抗議も最初の方は盛んに行っていたが、異様に高い彼女のテンションについていけず、抵抗は無駄と知り、最早諦めの境地。血を分けた肉親も、何故か乗り気で、カナのアシスタントのような真似をしている。

「ほら、瞬きしないで」

「無茶言うなよ。目が干からびて死んだらどうするんだ？」

「死にませんよ。どうしてすぐ死のイメージを持つんですか」

「俺ほどの繊細さんが、何なら辞書の繊細の単語の末尾に俺の名前が載っててもいいくらいの……」

「ちよつと唾飛んだ！」

「舐めてもいいぞ？」

「目刺すよ？」

「はいはい。ごめんなさいごめんなさい。産まれてきたのがそもそも間違いでした、すいませんでした」

投げやりに謝りながらも、さっきよりはマシになっているのではないかという予想もあった。何せ今度は唇に紅を塗られるような展開がない。数十分前に洗面所に高速ハイハイをしたことを思えば、是非そうであってほしい。アレは我ながら酷かった。どのクリーチャーが映っているのかと鏡を見て固まってしまった。奈々華は大爆笑するし。

「よし、まあこんなものかな」

眉に筆を入れていたカナが、仕上がったという合図にペチンと俺の頬を軽く叩いた。叩く必要性は芥子粒ほどもないと思うけど。

「終わったの？ 見せて見せて！」

奈々華が息巻いて俺の首を捻る。俺は別に鞭打ちでも寝違えでもなんでもないので、捻ってもらう必要性は芥子粒ほどもない。まあそもそも仮にそれらの状態で首なんぞ捻られたら本当に死にかねないけど。ともあれ覗き込む妹と真正面から向き合う。期待に満ちた目が、喜色に溢れる。

「わあ！ 目開いてる！ 若干カッコよくなってる」

「いっつも開いてるよ？」

いっつもカッコイイよとは流石に冗談でも言えないのがちょっと寂しい。

「これなら大会に出しても物は投げつけられないんじゃないかな？」
カナが少し誇らしげに言った。手鏡を俺に手渡してくる。

「そう言えばそういう動機付けだったね」

途中からは半分以上二人の玩具になっていた気分だが。鏡を覗き込むにも、期待よりもやっと解放されるという安堵のほうが強かった。だけどいざ覗いてみるとそこにはちよっぴりマシになった俺の顔が映っていた。目元に力がある。相変わらず濁った瞳はしているものの、その外回りについては確かなカナの技術によって抜本的な見直しが行われていた。

「すげえ。目が開いてる」

思わず口から漏れた第一声。

「何だ自分でもそう思うんじゃない。でもお兄さんっていつも眠たそうな目してる以外は案外整ってるよね？ さすが奈々華のお兄さんって感じ？」

整っているというのは多分世辞。正確にはその他のパーツについては欠点もないけど、取り立てて目を惹くようなものもない、というのが自己評。ふむふむと唸りながら鏡を手放さない俺に、二人がクスリと笑った。

「気に入ったんですか？」

「ううん。まあ、大会に出る以上多少は努力をしておいた方が良かったって再認識した次第、かな」

化粧の有用性については理解できたものの、やはり二人が楽しそうにしているのはよくわからない。女の子の思考回路は難しいなということについても再認識した次第だった。

カナを自宅まで護送した後、戻って来ると奈々華はすぐに飯の用意に取り掛かった。平素ですらあまり手伝わせない奈々華。今の俺の足の状態では最早話にもならず、戦力外通告の俺はソファーに横たわってテレビを点けた。春の高校野球なるものがやっている。高校野球は好きだ。まだ精神的に未熟な高校生達は感情が表に出やすく、それが直接パフォーマンスにも繋がる。心が折れた瞬間というのがプロよりもわかりやすい。こんな陰険な楽しみ方をしているクズは俺以外にはそうは居ないだろう。名門校と初出場の高校が戦っているのをしばらく黙って見ていたけど、前者の横綱相撲に、次第に興を殺がれていった俺は、背後から聞こえる調理の音に意識を持っていかれる。規則正しい包丁のリズム。グツグツと鍋が煮える音。同時に食欲をそそる甘辛い匂いが鼻腔を満たす。

「今日のご飯は何じゃらほい？」

「すき焼きだよ」

「かたじけない」

好物だ。まあ俺が嫌いな食べ物なんてないんだけど。奈々華は大袈裟だなあと小さく笑って、また調理に戻った様子。台所とソファーでは身を乗り出すなどしないと互いの顔は見えないというのに、彼女が今どんな顔をしているかが何となくわかってしまう。

「カナちゃんさあ」

「うん？」

「ちょっと丸くなった気がしない？」

テレビから歓声があがる。名門校の五番がタイムリーを打った様子。なおも満塁が続いている。無名校の背番号一は下唇を噛みしめながらレフトと代わり、新しいピッチャーがマウンドへ。趨勢はほぼ決まりだろうな。リモコンを取って音量をかなり下げた。

「……どうしたの？ いきなり」

尋ねながら、俺も奈々華の感想にその実同感だった。カナが丸くなった。というより、少しずつ余裕が出てきた。どこがどう、と言われても難しい部分があるけれど。

「ううん。多分ね、お兄ちゃんのおかげなんだよね」

「俺？」

少し意識が逸れていた一瞬で、塁上のランナーは一掃されている。さっき代わった投手はまだ二年生のようで、マウンド上で迷子のような顔をしていた。高校生くらいの子達は感情が出やすい。きっと世界がまだ大人ほど広くなって、目の前で起こる事象に、それだけに一生懸命なんだ。そんなことを無頓着に考えて、ちよつと自嘲的な気持ちになる。自分の精神年齢を棚に上げて何様なんだろうな、俺は。

「ちよつとは心当たりない？ お兄ちゃん的にはもう一人くらい妹が増えたような気分なんじゃないの？」

「……よそ様の子をそんな風に子供だって決め付けるのは流石に傲慢が過ぎるよね」

奈々華が不思議そうな顔をしたのが、空気で伝わる。

「いや、なんでもない。カナは自分の力で色んなことを考えている筈だよ。俺なんぞに兄貴面されたら迷惑じゃないだろうかね」

「そんなことないと思うけど」

いつかカナに弟のことで相談を受けた。あの時のこと、俺の無責任なアドバース、その帰結。色んなことが想像も交えながら浮かばないでもない。

「お兄ちゃんへの話し方も凄くマイルドになったし」

「年上だからだろう、一応」

ええ、と承服しかねるらしい声が上がって、

「でもタメ口きかれてるじゃん。最初の方がまだ硬かった気がするよ？」

でも内容の方は俺をアッシーにするような無遠慮な発言なんかはこのところは皆無で、今日だって足を自損した俺が送ることに何度も

氣遣いを示してくれた。ひよっとすると事故るんじゃないかという心配からだったかもしれないけど。

「まあ奈々ちゃんの言わんとすることはわかるけどね。親愛の情は少なからず持ってくれているのかもしれないね」

肯定か、首を捻ったのかわからない「うん」が返ってくる。

「お兄さんって、良くも悪くもテキトーだよ」

「え？」

「カナが言ってたんだよ。私もわかる気がする。お兄ちゃんの良い意味でのテキトーさっていうの」

わからない。まあ百歩譲って、カナが俺の処世術を少しは参考にしたとして、それで多少心にゆとりが出来てきたとして。奈々華は何故そのことの所感を俺に聞くのか。どういう返事を期待しているのか。わからない。俺は寝そべっていたソファから身を起こし、台所の方を向いた。

「……」

探るような目をしていた。何故だか予想していた通りの目だった。思えば彼女の炯眼を感じる時は、大抵俺の感情の動きを透徹しようとしている時と等号のような気がする。奈々華の俺に対する好意の質。いまだ決着を見ず、見たくない懸案。もし、もしも、俺がカナに対して下心を抱いていて、それで今の情報を聞かされていたらどうなっていただろう。株が上がっただろうと内心喜ぶ俺のその感情は、容易くこの妹の鋭い瞳に見透かされるだろう。テンションががた下がる。この子がわからない。本当にそんな目的だったのか、単に友達と兄が懇ろになるかもしれない過程を把握しておきたいという家族としての感情からなのか。わからない。俺の感情は多分見透かされるだろうに、俺の方は彼女の感情がよくわからない。

「ま、まあ何にせよ、カナがもし楽を覚えてくれたならそれはそれで良いことだよ」

無理矢理に締めくくって、俺はテレビの音量を随分上げた。

俺の家から少し南に行った所に工場がある。確か空調設備か何かを作っている会社のものだったと思う。まるで刑務所のようにコンクリの高い壁で仕切っていて、中は見えない。何か中で悪いことをしているに違いないと、以前奈々華に話したらそんなわけないでしょうと一笑に付された。まあそれは蛇足で、俺の話に戻ると、そのすぐ傍を流れるドブ川に滑落した。夜中の三時頃だった。

そんな場所で何をしていたのかというところまで、遡ってみると、リハビリがてらの散歩をしていたのだ。そしてそのミッドナイトウォーキングは実際途中まではすこぶる調子良くいつていた。左足は二日の期間で少しづつ皮が再生してきていて、凝視するとすこぶる気持ち悪いのを除いては、経過は良好だった。そこでリハビリである。奈々華には迷惑を掛けているし、カナには笑われるし、それになにより今向こうの世界に放り込まれでもした日には、皆を守るどころか文字通り足手まといとなるわけである。そこらへんの事情も鑑みての行動だった。

その道程にアクシデントが起こった。くっせえくっせえ言いながらドブの近くを歩いていたときのこと。タバコを吸おうとしてその箱を丸ごと取り落としてしまった。タバコは無事だった。鉄柵の下からドブの方へ転がっていった箱はしかし水音を奏でなかった。ドブを囲うコンクリの途中、出っ張った場所にポテンと落ちていた。ラッキーと思った。無駄にでかい体を地面に這いつくばらせて、無駄に長い手を伸ばせば届きそうな距離だった。体が万全の状態なら確かに取れただろう。どこかとてもイージーな任務であっただろう。左足の踏ん張りが効かなかった。伸びきった体が一瞬ふわりと浮くのを感じた。飛行機が離陸する時の感覚に似ていた。金玉によくわからない刺激があった。それから体全体が宙に浮く感じがして、目の前がセピアになるほどの強い危機感が本能を揺り動かした。咄嗟

に伸ばした手で出っ張ったコンクリの足場に手を掛けた。だけど少し苔むしたそこはずるりと俺の手を避けて、嘲笑うように最後の希望を捨てさせた。幸いなのはその一瞬の判断により頭からの転落を免れたこと。ケツにバットを食らったような衝撃と、バシヤンというけたたましい音が俺の鼓膜を震わせたのは同時。俺の体の中から響いたと錯覚したのは、骨伝導というヤツのせいだろうか。いや、この場合ケツ伝導というべきなのかもしれない。

どれくらい放心していたのだろうか。やがて事態を理解してくるにつれ、やりきれない怒りが湧いてきた。何か最後の最後で踏ん張っていた感情の堰が切れてしまったような感じがした。悔しくて腹が立って、俺はその場で大の字になって怒声を上げていた。今となっては何を吼えていたのかは覚えていないけど感情の丈が全て詰まっていたのだけは間違いない。多分「もう殺せよ」とか「俺が何したってんだ」とか「生きててもなんも良いことなんかねえじゃねえか」とか、そこらへんだらう。覚えていないのにわかってしまうのは、俺が今もそっくりそのままの心の声を押さえ込んでいるからだだった。とにかく二十分もしないうちにパトカーがやって来た。近隣の住民が通報したのだろう。夜中の三時にドブの底に横たわって奇声を上げている変質者が居る。至極当然の対応だらう。駆けつけた警官に三人がかりでドブから引き摺りだされ、陸に上がって、即御用となったわけだ。そして任意同行という名の強制連行の末、警察署にやって来た俺は今までの状況説明をそっくりそのまました。

「……俺は悪くないです」

そしてそれを終えて、ドンひいている公僕共にそう言い放った。何も間違ったことは言っていないつもりだった。

「まあ確かにドブに落ちてしまったのは不幸だったけどね。だからって近隣に住宅もあるんだから、大声を出したら迷惑になることくらいわかるでしょう？」

対応している警官は二人。年配の柔和な男と、まだ三十代くらいの少し神経質そうな男。年配の方はマルメガネを掛けていて、ポチャ

ツとした愛嬌のある顔によく似合っていた。そしてそんな二人に豚小屋のように小さな部屋に押し込められて、事情を詳しく聞かれていた。

「……」

実際今の俺にとっては他人の迷惑なんて知ったことかという感じだった。寧ろ掛かればいい。沢山の人に迷惑が掛かればいい。ああ、どうせクズだよ。害虫だよ。カマドウマだよ、セアカゴケグモだよ。そんな自棄っぷりだった。

「俺は悪くないです」

自己弁護だけを繰り返す。

「悪いのは俺みたいな野糞を生み落とした両親です」

「キミ！ それは流石に言いすぎだ。ご両親がそんな言葉を聞いたら……」

若い方の警官が急に熱くなった。テンション上げんなよ、気持ち悪いな。んなこと言われても母親の顔なんて見たこともないよ。父親の顔なんてすぐには思い出せないよ。

「だいたい、何があったか知らないけど、君は自分だけが不幸だとも思っていないか？」

「思っていないっすよ」

いい感じに鬱陶しくなっている若い警官に適当に返しながら、年配の方を見た。カリカリと調書のようなものをこっちから見えないように机の下で書いている。膝の上で文字書いたらガクガクしない？なんて笑いながら言ったら二人が二人ぶちきれるんだろうか。ちよつとやってみたい衝動が起るが、なんとか堪える。

「キミより不幸な人なんて沢山居るんだ。キミはそうして無事で生きてるし……」

ああ、本当に変なスイッチが入っている。俺もなんだか受け流してばかりで言われ放題なのがシャクになってきた。やっぱり相当余裕がないんだろうか。

「だからなんですか？ 僕が不幸であるという主観と、顔も見たこ

ともない人間の不幸と何の関係があるんですか？ 他の人の話やめてもらっていいですか？ 今は僕が不幸か、不幸だと思っているか、っていうのが焦点でしょう？」

つい勝手に口が回る。

「な、なんてことを」

どっかで受け売りしたような、そんな科白で俺の腐った心を動かそうなどとチャンチャラ可笑しい。大体あんなのは本旨から論点がずれているのが大概。口八丁で良いように丸め込もうという魂胆に反吐が出る。大体その自分より明らかに不幸な人間、その本人がそれくらいで不幸と言うな、と怒るのならまだ納得も出来る。謝罪の言葉も出るだろう。というのも、それは自分が不幸であるという考えを取り消すというより、より不幸な人間の気分を害したことに對する謝罪である。それがなんだ。三段警邏棒なる殺人兵器をチラつかせて善良な市民を脅すことを快感にしているようなサドどもが、威を借るかのようにしたり顔ではざいても、全く心動かされない。腹が立つただけだ。

「キミはそういった人たちに申し訳ないと思わないのか。たかだかドブに落ちたくらいで」

じゃあお前も落ちてみるよ。ドブネズミの仲間入りをしてみろよ。とてもじゃないが、そんな不特定多数の無関係な人間に思いを馳せている場合じゃなくなるから。

「全く思いませんね。そんなイマジネーションだけで、心動かされるような情緒豊かな人間だったら、とっくにこんなクズから脱却してます」

「キミは……」

顔が赤くなってきている。

「大体その考え自体が逆説的にそういった人々を貶めていると思いませんか。自分はこの人たちよりはまだマシだ。まだ大丈夫だ。だから頑張ろう」

「そんなひねた考え方……」

まあひねてるっちゃひねてるのかもしれないが、真理だと思うよ。実際に余裕のない人間の思考なんてでもないが、汚わいまみれだよ。もうちょつとそこらへんを付け加えてやろうとしたら、「お前等、いい加減にしろ」

低くドスの利いた声でした。いつの間にか対面の中年警官が顔を上げて俺を恫喝するような目で見ていた。素直に迫力があつた。

「城山くんだっけか、何があつたか知らんし、興味もないけどな。」

そうやってべらべら口を動かしてる暇があつたら、なんで自分がここに居るかもう一度よく考えてみる。留置所にぶち込むぞ？ お前

も余計な説教なんてしてないで、仕事だけしとけばいいんだ」

俺に、後輩に、その目を巡らせて、黙らせると、自分は淡々とした手つきで調書を書き上げていった。

結局今回は口頭での注意だけで済ませるという形だった。大体俺の今回のような事例では、犯罪者として引つ立てる明確な根拠条文とか、条例とか、そういうか、そういったものがないように思う。チンチンを放り出したとかなら、色々思い浮かぶものの、奇声を発して人々の安眠を妨害した、ではちょっと思いつかない。

「畜生、やっぱりあのおっさん、脅しただけじゃねえか」

拘留所にぶち込むぞなんて、そんなハツタリかけていいのかよ。畜生、畜生。

パトカーで自宅まで送るといふ提案を蹴って、自分の足でピョコピョコ歩く。ドブに落ちた時に、汚水にまみれたのが悪かったのか、左足が痛がゆい。やはり送ってもらったほうがどう考えても賢明だった。突っぱねたのは、警官がそもそも嫌いだとか、遠慮だとか、そういった感情からではない。意地を張ったのだ。子供のように拗ねたのだ。怒られてバツが悪くて拗ねたのだ。大人に怒られるという経験を随分久しぶりにしたが、存外堪えるのはまだ俺が精神的に幼いからだ。だから意地を張った。それを認めないように。気取られたくないから。俺のその態度に、おっさんは「そうか。次やったら容赦しないからな」と警告して署に引き返していった。不貞腐れたような声が出たし、おっさんのその返答も妙に淡白で、意識的にそうしているような気すらして、多分勘付かれている、と思ってしまう。

「ダサイ。恥ずかしい。格好悪い」

本当は自分が悪いということくらいわかっていた。いくら不運にもドブネズミに成り下がったとして、それが他の人間に迷惑を掛けて良いということには決してならない。あの若い警官に言った言葉が跳ね返ってくる。論理的におかしいのだ。自分の不幸と他人の不幸に連関性もない。わかっていた。だから大人しく善良な一市

民として、やり過ごすつもりだった。それがスマートだし無駄がないと考えていた。なのに、あの警官の言葉についついヒートアップしていた。もしかするとあの場で一番冷静さを欠いていたのは、誰であろう俺自身だったのかもしれない。親のことを言われた。お前が何を知っているんだ、そう思った。思ったが負けだった。

「ああ、もう」

ひとん家の石垣に背を預けるようにして凭れて、そのままズルズルと滑ってアスファルトに腰を下ろした。ケツからひんやりとした感触が伝わる。ケツ伝導というギャグの汎用性に気付く。どうでもいい。

奈々華を、カナやサナちゃんを、守りたいと思ったんだ。それは本当に偽りのない気持ちだったんだ。ガチクズの俺でも、顔も知らない人間の不幸を強く同情は出来なくても、顔も性格も良いところも知っている人間の不幸なんてさせるわけない。あっちの世界には悪意がある。危険がある。腕力くらいしか取り得のない俺が、それすら満足に果たせなくて、彼女たちが悲しむことになったら、それこそ本当に死んだ方がまだ良いほどのウンコだ。だから俺は結構本気でリハビリのつもりだった。なのに俺が悪いのか、と不条理にガキ同然の怒りを抱いた。いや、やめよう。これじゃあの子たちに罪を擦り付けてるみたいだ。

「ああ、畜生」

未熟さ。身勝手さ。突きつけられたらしく、また大声を出したくなかった。ダメだ、ニコチンが足りない。イライラする気持ちは、まず一服してから落ち着ける。と、そこで気付く。俺がそもそも転落抽選を受けたのは、そのタバコを取ろうとしたことだった。

「はああああああ」

鳴き声のような溜息を吐いて、ぐっと足腰に力を入れて立ち上がった。

家に戻ると電気が点いていた。俺がのろのろした動作で玄関戸を開けると、奈々華が弾かれたような勢いで居間から飛び出してきた。

「どうした？ そんな鉄砲玉みたいに勢いつけて」

「どうしたじゃないでしょう？ どこ行ってたの？ 心配したんだよ。足もまだ治ってないのに、どうしてそうフラフラするのかな。大体出かける時は携帯を持って出ないとダメじゃない。誘拐されたかと思って…… くさっ、くっさ。お兄ちゃんドブ川みたいな匂いがするよ。どうしたの？」

ああ、うるさい。かあちゃんか。

「ドブ川に落ちたんだよ。シャワー浴びるから、ちょっと待って」
ノタノタと靴を脱ぐと、ジググつと水を含んだ嫌な音がした。奈々華がギャーと大きな声を出したかと思うと、ちよっと待っててと声を掛けてどこかへ走っていく。そして雑巾片手に戻ってくる。仕方がないこととは言え、実兄に雑巾で体を拭けとは少々厳しい対応。風呂から上がって、奈々華に詳しい説明をする。寝付けなくて散歩していたらドブに落ちた。腹が立って世の中への不満を喚き散らした。警察がやってきて捕まった。事情聴取を受けて不問となって戻ってきた。あまり感情をこめずに話した。また怒りが湧いてきて奈々華にあたってしまうようなことがあったら、もう本当にどうしようもないから。話を聞き終えた奈々華はとても残念そうな顔をしていた。とても惜しいところで間違えてしまった生徒を、労わることもなく見る教師のようなそんな目。

「どうしてお兄ちゃんは…… そう……」

「クズなの？ か？」

奈々華は視線を逸らす。どうやら当たり。

「いいよ。はつきり言ってくれて。気にしないしわかってる」

逆にいじらしくさえ思った。ここ数日の間で怒涛の勢いで痴態、醜態の限りを尽くした兄を、未だに氣遣う素振りを見せるなんて、どこまで殊勝なのだろう。

「足を怪我してからが良い子にしてたのに…… いきなり警察に捕

まるなんて……」

「まあ汚名挽回といったところか」

「どうしてそんなことになったの？」

まさか奈々華たちの為に早く万全になりたかった、とは言えない。そもそも足の怪我だって俺の奇行が原因なのだから、恩着せがましい。だから答えずに、奈々華が座る対面のソファーに向かう。

「なあ、奈々華」

隣に座る。奈々華はちよつと挙動不審気味に何と返事する。嫌がっている素振りはない。

「抱き締めていいか？」

「え？ ええ！ な、あ。私に匂いを移すためでしょう！」

「そうだよ。よくわかったな」

それは勿論冗談で、体を入念に洗った結果、意外なほど簡単に匂いは落ちた。もうドブに落ちた形跡は、明日の朝一でゴミ置き場に放り込まれる予定の俺の着衣一式くらいだろう。眉を寄せて俺を睨むが、口元がどうにも嬉しそうだった。了承と取ってそつと奈々華の体を包む。柔らかい。背中ですらプニャプニャとした男にはあまり付かない肉がついていて、抱き心地が非常に良い。首筋からよくわからない甘い匂いがした。あえて形容するなら和菓子のような、控えめで、だけどどこかほっとするような。しばらくそうしていたくなって、そうした。けど今の状態、カナあたりに見られたら、シスコン、変態とさんざ罵られそうだ。

「もう。どうしたの？ なんか子供みたいだよ？」

声が笑っている。時々奈々華の方からおふざけみたいに抱きついてくることがあるけれど、その時とても甘えん坊な子供に懷かれているような気持ちになる。今それを逆に奈々華が感じているんだろう。

「ごめんな」

なんで謝ったのか、自分でも少しの間わからなかった。ずっと考えていて、奈々華とまた一緒に布団に入ったあたりで何となくわかった。両親は困らなくても、いじらしいほど俺を氣遣ってくれるこの

妹は、きっと俺が居なくなったら困ってくれるんじゃないか、と。
罪悪感と照れ隠しと、感謝と、安堵と……

81 (後書き)

ちよつと今回二話とも字数が多くなってしまいました。読みにくかったかもしれませんが、反省はしてません。

何か疲れてませんか？ というサナちゃんの手文字に俺は曖昧に笑って誤魔化した。奈々華の卑劣な策略により、二日間にわたる謹慎処分を甘んじて受け入れる羽目にあったのだ。それは疲れもする。

彼女の言い分はよそ様に迷惑を掛けるくらいならずと家に居なさい、という主旨だったが、実際得をしたのはあっちの方で、四六時中ベタベタと甘えてくる奈々華をあやすのにこちらは精根尽き果てたといったところ。しかもあの晩俺の方から気安く抱きついてしまうという、今となっては愚行以外の何者でもない暴挙を犯してしまった手前、奈々華の方からのスキンシップも邪険にするわけにもいかず。おかげで愛おしさと鬱陶しさが、引いては寄せる波のように交互に胸に去来する日々を重ねた。

ならばそんな忠告など無視して外へとエスケープすればよかったのではないかという話になるが、これが卑劣極まりないことに、奈々華はそれを無視した場合、カナやサナちゃんに事件の顛末を話して笑いのものにしてやると恫喝してきたのだ。別に警察に捕まったことくらいは話されても痛くも痒くもないが……

「警察の人に怒られて凹んで、私に抱きついてきたもんね。子供みたいに」

嬉しそうに笑いながら言ったその一言で、忠告は強制力を持った命令へと変貌したわけである。流石の俺でも一応羞恥心なるものはあるわけで、そこを怒らせずに且つある程度の威嚇になる加減で玄妙にくすぐる辺り、彼女は存外小悪魔。そしてそういった事情を話すに話せない俺は笑うしかないのだ。

＜何か足怪我したって聞きましたけど、それが原因ですか？＞
右手を握ったままのサナちゃんがそう書く。ちなみに左手は奈々華と繋いでいる。どんだけお兄ちゃんのこと好きなんだよ、という話だ。

「ああ、実は深い事情があつてな……」

<自分で傷つけたんですよね。何か臭くて腹が立ったとか>

「……」

無言で左の奈々華を見る。知れ渡つとるやないか。ちよつと睨むが、彼女の方はキョトンとしている。サナちゃんとの会話は、仕方ないことだけど、当事者同士にしかわからない。

<もう大丈夫なんですか？>

首肯しておく。幸い十分な静養と奈々華の余りある癒し効果によつて歩行は勿論、軽く走る程度では痛まないくらいには回復していた。それは良かったという感じに笑つて、サナちゃんは手を離す。お話は終わり。少し前を歩くカナの方へと足を速めて追いついていった。サナちゃんはあまりウチに遊びに来なくて、最近はほとんど話す機会が持てなかったから少し残念な気がした。今だってウチに遊びに来て会ったわけではない。そう、今日は久しぶりに異世界へと誘われていた。

朝起きると見慣れぬ風景、というのも久しぶりの感覚だった。寝ぼけていたらしい俺が変な寝言を口走ったそうで、何か動物か子供でも見るように優しい目で笑う三人を起き抜けに見るのも随分久しぶりの経験だった。しばらく眠気を振り払う大業に従事していると、

「お祭始まつてるみたいだよ」

カナがそう言つて窓の外を指した。みたいだね、と返して少し窓の外を窺う。視覚に頼らずとも祭の始まりは今この街に居ればすぐに気付くことが出来る。ドンドンと地鳴りのように重低音が、起きてからこつち間断なく響いている。街の至る所で楽器が鳴らされているのだ。そのドンドンの正体は、木の筒に動物の皮を貼り付けたものを打ち鳴らして音を出す楽器が奏でるもので、まあ普通に太鼓と構造も音も同じ。少し俺達の世界のより細長いらしく、言われて見ればちよつと音が高いような気もする。

「さっきパンフレットみたいなのをメイドさんが置いていつてくれたよ？」

奈々華が紙の冊子をひらひらする。

「メイドさんか…… 早起きしておくんだったな」

「おばさんだよ？」

「……ない、かな」

「なあに？ 今の間？」

無視して奈々華の隣に腰掛ける。ベッドが二人分の重さに少し軋む。このホテルとも民宿ともつかない宿泊施設はかなり年季が入っていて、掃除などは行き届いているものの、家具類は古い。パンフレットを覗き込むと、演目や会場の案内、昨年の祭りの風景のスナップ写真なんかが載っている。こんながあるならもっと早く持ってきてくれても良いのに、と思う。ああそうか。こっちに来るのも数日ぶりなんだった。ひよつとするとそのメイドさんの方からすれば、何度か部屋を訪ねて留守だったのがやっと今日捕まったという事情だったのかもしれない。

「ねえ、アタシたちも外に出てみませんか？」

カナは意外とこういった催し事が好きなのか、さっきからソワソワしている。サナちゃんは俺と入れ替わって眼下の風景をぼんやり眺めているようだ。

「そだね。まあ折角だし廻ってみようか」

いつの間にか俺の膝に頭を乗せていた奈々華の頬をくすぐって、立つと合図する。

「お兄ちゃん、目やにが信じられないほどついてるよ」

「つけてるんだよ」

洗面所で最低限身だしなみを整えて、街へと繰り出すことにする。鏡を見て眦を擦っている間、何となく予感した。長い一日になりそうだと。

街は知らぬ間に雰囲氣を一変させていた。馬車が忙しく行き来する往来は今歩行者天国よろしく。そんな馬車を道端に寝そべって鬱陶しそうに眺めていた家畜なんかもちゃんと住み家に帰されたのか、姿がない。良くも悪くも雑然とした雰囲氣のあった通りが、祭に際してきちんと整備されているようだ。だけど根底にあった雰囲氣、どこか町に成りきれず、純朴な印象を受けたそれは変わらずに在るような気がする。浮き足立つ人々の顔には祭を観光事業として捉えるようなスマートさは感じられず、自分達が楽しむためという感情が多分に現れている。いや、この街に限らず祭とは本来そういうもののなのかもしれない。祭事を政としているのは役所ばかりだろう。

「これ昨日から夜通しらしいよ」

カナが誰にともなく言った。嬉しさを噛み殺したような声音。

「二日間不眠不休で楽しんでぶっ倒れる人も居るとか」

馬鹿だよねえと笑う。勿論本気で馬鹿にしている雰囲氣はない。カナは伝えたいことは伝えたのか、それとも落ち着きを完全に失っているのか、面白そうなものを見つけたらしくパタパタ駆けて行く。道中にある大道芸の舞台に目を奪われたらしい。俺達もちょっと立ち止まってみる。巨漢が口から火を吹くと観衆から拍手と感嘆の声が上がる。歯笛を鳴らして囃していた男がアンコールを所望すると、次々便乗する聴衆たち。カナもそこに加わっているのを見てやれやれと首を振っていると、同じような顔をしていた奈々華と目が合う。「なんていうかお祭だね。私達の世界のとはやっぱり違うのに、そう感じる」

俺達の知るのは、こういった芸事をやる感じじゃないし、

「屋台とかがないしね」

「うん。面白いよね。多分砂が舞うから食べ物なんかは屋外じゃ厳

しいんだろうね」

乾燥しがちな気候。ダートの街。

「それにしても…… お前は結構冷静だな。祭あんまり楽しくないか？」

「え？」

冗談のつもりだった。付き合いが長いだけあって、奈々華がこういった賑わいに際してどういったスタンスを取るかくらいは重々理解している。例えば宴席だと少し離れたところから皆がわいわいやっているのをチビチビ焼酎をやりながら微笑ましく眺めているタイプ。決して本人は楽しんでいないとか、そういうことではない。そんなことはわかっている。だから冗談のつもりだった。

「……そんなことないよ。でも、やっぱりカナみたいに純粹にはしゃいでる方が可愛いよね？」

まさかのクリアパス。見透かされている。そう思ってしまうほどタイムリーだった。確かにさっきの興奮気味に楽しんでいる様子のカナを可愛いと思った。ただそれは多分大人が子供に抱くような類で、奈々華が思っているような感じじゃなくて、そもそなんで奈々華はそんな風に一々俺の感情の動きを探ろうとするのか、それはあまり考えないようにしようかと思っている所存で…… ああもう面倒くさい。

「そんなこともないよ。奈々ちゃんみたいな子もそれはそれで可愛いと思うよ」

結局この子はこの言葉を引き出したいだけなんじゃないだろうか。というのが結論。それは間違っていないかったらしく、はにかんで笑った。そして変なシナを作ったかと思うと俺の腕に巻きついてくる。何を俺は祭で妹と良い雰囲気になりかけているのか。奈々華にばれないようにそっと溜息をついて、遠く太鼓の演奏を聴いていた。

ミスコンテストの会場にやって来たのは昼飯を済ませてからだだった。

会場は想像より立派だった。受付こそ麻のテントに簡易の長机なんて体育祭運営本部みたいなしょっぱい感じだったが、奥にはキッチンとした建物があった。ちょっとした講堂のような外観。受付で確認を済ますと、その建物内で待機するように指示を受けた。どうやらイベントは午前と午後に分かれているようで、俺達は午後の部の方で出れるらしい。つまり二日開催で午前午後で二回ずつ、全部で四回行いう計算になる。それにしても参加を申し込んだ時点でそのどこかへと明確に割り振られなかったが、そんなアバウトで大丈夫なんだろうかと受付のお姉さんに聞いてみると、「ぶっちゃけ今年はあんまり集まらなくて、どこの部も定員割れ状態だから適当でも大丈夫なんです」と本当にぶっちゃけてくれた。ともあれ指示通り中に入ってみる。奥行きがそれなりにあるようで、パイプ椅子が整然と並び、奥の方にはステージたる雛壇があった。脇に控え室兼更衣室があるようで、小さな扉がついている。さしずめ体育館のような構造で、卒業式のような様相だった。中では同じように指示されただろう女性たちが、ざっと三十人くらいか、いらっしやった。俺を見る目はとても好意的とは言えず、中には覗きに來たのではないかとあからさまに疑うような視線もある。正直カチンと来る。

「ミスコンなんて言うからどんなゲロマブな美女たちの集まりかと思えば、とんだメス豚どもの犇めき合いだぜ。俺が入賞するまである」

とか言えたらどれだけ気持ち良いんだろうか。実際は視線を逃れるように壁際に避難するだけ。そして改めて内装をぐるりと見て軽口。「おいおい。ミスコンでも開けるんじゃないか？　これは」

まあ軽い口調で言っているが、実際感心していた。軋まない床は俺たちが宿泊しているボロホテルよりしっかりしている。壁をノックしてみても向こう側に倒れこんだりしない。真新しい木特有の瑞々しい匂いさえ漂っている。これをミスコンだけではないにしても、幾つかの催し物のためだけに設営して、終わったら取り壊すというんだから、勿体無いと言ったらいいのか、物凄い気合の入れようだ

と評価すれば良いのか判断に困るところ。

「お兄さんも出るんだからしっかりして、ってサナが言ってますよ」
「そいやそんな話だったな」

何せ仕事の方はいつぐらいにします？　なんて質問を受けて初めて俺はそういやミスコンに出るんだったなんて話を思い出したくらい、異世界のことを忘れかけていた。それだけここ数日が濃すぎたのかもしれない。

「ちよっとしっかりしてくださいよ」

「冗談だよ。流石に覚えているさ」

そんな軽口を叩き合っていると、建物の奥から女性が出てきて、午後の部の参加者を呼ぶ。更衣室兼控え室の準備が整ったようだ。俺もついていけば良いのかと動き出したご婦人方の流れに合わせようとするとその女性が指示。

「あ、その男性の参加者の方は、おトイレの近くに衣装を捨てて…… 置いてますので、そこらへんで着替えてください」
「はい」

俺は更衣室にはデフォで出禁のようで、さっさと着替えを済ませると、会場に無駄に設置された椅子の一つに腰掛けて所在無くしていた。二十分くらいだろうか、ようやく開いた更衣室のドアから三人が出てきた。馬子にも衣装。そんな言葉も浮かんだけど、どうにもガキ臭い照れ隠しだと自分でも気付いていたので、余計なことは言わないことにした。よく知る少女達のハレの衣装は、どうやら色違いの同一デザインのものらしい。奈々華の説明では、公平を期すために参加者のそれらは統一ということらしい。個性というものを無視した斬新な規定だ。そしてその衣装というのが、一言で現すに、ドレス。ひらひらした感じではなくて、シックな感じ。上質な素材を使っているのか、ラメなんかの加工はしていない様子なのに、生地自体が光に反射してテカテカと光っている。残念ながら女性の服、しかも見慣れないものとなると、形容しようにも中々言葉が出てこない。ワンピースタイプではあるが、テレビで観る著名人が着ているような、胸元や背中が大きく開いたものではない。奈々華が純白、カナがちょっと派手な赤、カナちゃんが落ち着いた感じの薄い青、とそれぞれ着こなしている。

「どうかな？」

奈々華からくると思った質問は、自信なさげなカナからだった。そう言えば参加に際してもなにやら表面上は自信がないような態度を取っていたのも彼女だった。

「いいんじゃないか。よく似合ってる」

カナの評が終わったところで、サナちゃんと目が合う。じゃあ私はどうですか。そんな目をしている…… 気がする。

「いいんじゃないか。よく似合ってる」

なんともむず痒いが、こういうのは気にした方が負けなのは定説。

「じゃあじゃあ。私は？」

「イインジャナイカ。ヨクニアッテル」

「顎を叩き割るよ？」

随分と凶暴な子に育ってしまった。いい加減察せ。身内を褒めるのは一等こそばゆいのだよ。同意を求めるように他の二人にも目を向けるが、カナは口を尖らせているし、サナちゃんも不機嫌な感じに目を細めている。まあ皆同じ感想じゃちゃんとした意見として役立つたないのはわかるが、こっちとしてもカドが立たないようわざと画一的にしたわけで、そんな顔をされても困る。だが同時に俺のような社会ゴミの見解でも参考にしたいと思う気持ちもわからんでもない。これから衆目に晒され、あまつさえその美をああでもないこうでもないと評価される、そういう場に臨もうというのだから。三人の意思が固いことを表情から察して、渋々詳説することにする。

「まあ…… そうだな。カナは何と言うか健康的な感じが上手く赤で引き立っている感じかな。選んだ色としては全然悪くないと思う。スタイルも良いし、そういう服自体が似合うんだと思うよ。だからさっき言ったのはまあ本心ということだ」

うろたえ始めるし。キョドキョドと視線が定まらず、そのくせ俺の方は決して見ようとしない。ほらあ。俺が口説いてるみたいになつてんじゃないかよ。だからやだったのに。どうすんだよこの空気。

「案外お前褒められるのに耐性ないよな」

一人でこの疲弊ぶり。悄然とした顔を作って残りの二人を見やる。お前等も忌憚なき意見が欲しいのか。本当にいいのか。なんか青春みたいな雰囲気になるけど良いのか。期待に満ちたようなそれでいてどこか照れたような顔を両者浮かべている。イエス、のようで。

「うーん…… サナちゃんは元々小柄で可愛らしいんだけど、ドレスを着るとどっかのお姫様みたいに見えるな。カナとは方向性は違うけど、元来持つてるものを引き立てられてるような気がする。それに肌が白いから青がよく馴染んでる気がする。配色も良いってことかな。似合ってると思う」

それに胸も、と続ければきつと奈々華に顎を割られるのだろう。俺

の意見を聞くと、サナちゃんはカナとは対照的に俯いてしまつて、恥ずかしさに耐えているようだ。そんなになるくらいなら聞かなきゃ良いだろうに。まあ褒められて悪い気のする人間なんて居ないわけだから、聞きたくなる気持ちもわからないでもないけれど。

「まあそんなところか」

「ちよつと。一番大事な人を忘れてるよ？ 最愛の妹を忘れるなんて若年健忘にしても早いよ！」

ああ居たな、そんなの。っていうか、何でそんな若手芸人みたいなノリなんだろう。まあ、こいつも一丁前に照れているということか。おべっかを色々考えても見るが、どうにも見たとおりの感想が先に立ってくる。そういう辺り俺って凄いのかも知れない、と思う。一番近い異性を今更評価するなんて異常事態に、まるっきり他人事のように公平な分析眼をもつて遂行する心構えを瞬時に纏め上げれる、沈着冷静さ。いつからこんな考え方が出来るようになったんだろう。まるで感情を一切排したようなロボットみたいな…… 何を俺はよくわからないシーンでシリアス入ってるんだろうか。ちよつと落ちてこうと胸のポケットからタバコを取り出して火を点ける。最初の一口を肺に一杯溜めてから吐き出す。

正直な感想は綺麗だ、という一言に集約される。三人を一目見たとき気付かれないようにハッと息を飲んだのも、彼女に対してだったのが悔しいところなのだ。何せずらい。カナのスタイルの良さも、サナちゃんの色白も、奈々華はそれぞれよりもきつと高い水準で持ち合わせているのだ。くびれた腰は、高名な芸術家がロクロで仕上げた渾身の茶器でも敵わないと感じる曲線美。無駄な肉がなく、それでいて健康的且つ女性的な柔らかさを感じさせる二本の足。丸く澄んだ瞳はこれまた芸術のような比率で保たれている二重の瞼に収まっている。凝視されていて恥ずかしいのか、少し朱がさしはじめた頬は少し下膨れているのだが、決して顔全体の調和を損なうこともなく、また決して太っているという印象など与えようもなく、どちらかというところとあどけなさや親しみやすさを感じさせる。おまけに

キチンと産毛まで手入れされていてモチモチした感触だと知ってしまっている俺としては、思わず撫で回したい衝動がこみ上げる愛らしさも持ち合わせている。肩から流した長髪がドレスを黒く彩る様もまた、間逆の色同士なのに不思議と潰しあうことなく、どころかそれが至極自然であったかのように馴染んでるように映るから怖い。コレが、こういう人間が盃を戴いて尚天を仰ぐことを許される選ばれた存在なんではないかと、どこか女神や天使を目の当たりにしたような現実感の喪失さえ味わっているのかもしれない。近づき難い程の美貌と、近づいて愛でたおしたい程の愛くるしさが矛盾なく共存できるものなのか、と俺は純粹に理解が及ばない。馬子にも衣装という言葉が決して万能でないと知った。美女にもまた衣装だ。何を着ても綺麗な人は綺麗なのかもしれない。だけど、綺麗な人が綺麗な衣装を纏えば、最早こちらの理解が及ばないほどに変わる。

「お、お兄ちゃん？」

何度か呼ばれていたのは気付いている。

「ああ…… 綺麗、だと思ふ」

随分と落ち着いた声の調子だった。陳腐ではあっても、思ったこと感じたことをそのまま言葉にただけだからかもしれない。実際心も落ち着いたもので、奈々華の反応の予測も立っていた。照れて憎まれ口を叩くか、照れてふざけた調子で応じるか、照れて無理くり平静を装うか…… そのどれもが違った。

奈々華の瞳から一粒涙が零れ落ちるのを見て、俺は何を思ったのだろうか。動揺したのだろうか。やはり第三者の視点に立ったように、現実として泰然と受け入れたのだろうか。人間というのは自分が思っているより自分という者を理解していない。誰かがどこかで言った言葉をいつか聞いたことがある俺は、今それをぼんやり思い出していた。自分の感情であるはずなのに、上手く掴めていない。どこかフワフワした感覚なのに、ケツがびっしょりびしょに汗をかいてるのはわかる。

<結構吃驚しました>

それはどのことに対してか。俺の隣の椅子に座ったサナちゃんの指の感触に軽い異物感を覚えた。

<お兄さんがいきなり奈々華ちゃんのこと口説き出すんだもん>

「口説いじゃないよ」

何を馬鹿な。サナちゃんの指が「説」という漢字を書いていた時点から反駁したくなっていた。余裕がない。そのことから、俺は少なからず動揺していたのだと気付く。サナちゃんはわかったのかわからないのか、曖昧に笑ってから俺の手を離してトイレの方に首をめぐらせた。突如ご乱心の我が姫は、ごめんとしきりに繰り返してトイレへと逃げ込んでいった。カナも心配になったのかその後を追っていた。面倒見の良い彼女のことで。上手く落ち着かせてくれているんじゃないだろうか。

「口説いじゃないよ。ただ…… 何と褒めて良いかわからなかったんだよ。あの子も難しい年頃だし、そのくせ俺には懐いてくれているし、どう言葉を選んだものか考えあぐねて……」

言い訳くせえ。また俺の顔を見たサナちゃんは微笑笑といったところ。なおも何か言い募ろうと俺の本能が働きかけたところ、遮るように第三者の声が聞こえた。先程参加者達を誘導していた女性だ。

見たところ妙齡だが、元気な声をしている。参加者全員に向けたように、今から出演順を決める籤をやるということだった。なるほど、厚紙で作られたらしい箱を持っている。参加者達は全員着替え終わっていて、俺達と同じように観客用の椅子に座ってくつろいだり、落ち着かない様子で場内を歩き回ったり、他の参加者と談笑したり、皆思い思いに過ごしていたのだが、鶴の一声とばかりに全員が引き締まった表情になり、おもむろに列を成し始めた。

<どうでしょう？>

奈々華たちのことだ。代わりに引くか何かした方が良いでしょうか。

「すいません」

声を張り上げる。

「ツレが便所に行ってるんですけど……」

「ああ。まだ時間はあるから、帰って来てから引いてもらう形で大丈夫です」

貴方達は先に引いて下さいという追加の指示も飛んできた。丁度先頭の赤毛の女性が籤箱に手をつっ込んでいるのが見えた。俺達も並ぶ。

26番という数字を俺はどう捉えれば良いかわからず、後ろで引いたサナちゃんの番号を見せてもらったが、27番という数字にまた反応に困るという結果に終わった。ちゃんと混ざっているんだろうか、コレ。全自動卓とかいう麻雀以外に何ら利用できない産業廃棄物でさえ、クシヤクシヤに混ぜ繰り返して、ゴミみたいな配牌をプレイヤーに届けるというのに。

「俺の後か。冷えてるか温まってるかのどっちかな」

それも氷河期か火口かの程度で。なにせ俺が着ている衣装ときたら、何の変哲もない紺の背広。便所の前に捨てられていた衣装はいくつかあったのだが、その背広以外のラインナップを挙げると、フイギアスケートで着るようなナルシズム全開のものや、半魚人変身

セットとか。とにかく主催者側が俺にどういった役割を期待しているのかよくわかった。それでも悩んだ挙句、ピエロではなく安定を取った俺は、しかしながら三枚目。カナがこれから少し手を加えてくれる予定だが、基が知れてりゃ結局は付け焼刃。そしてそんなルックスを期待されていない一発ギャグ要因が妙に色気づいて中途半端に着飾って出て行っても、場は白けるかもしれない。ただ真剣に見に来た人が多そうなら逆におふぎけは不快感を与えるかもしれない。こればかりは客層を見てみないとどう転ぶかわからない。そしてどういった巡り合わせか、俺の後に出るのがサナちゃん。とにかく。少し視線を下げて年齢にしては少し小さめの少女を見る。不安なのか、俯いて抽選番号が書かれた紙の皺をちっちゃな手で伸ばしている。サナちゃんの迷惑になるようなことだけは絶対にやらないように、臨機応変に対応しよう。そう思った。

俺たちが引き終わって五分くらいすると、奈々華とカナも帰って来て籤を引いた。どういう顔をして奈々華と接しようか思いあぐねていると、あっちの方が俺よりも気恥ずかしいのか、あまり目を合わせずに抽選番号だけ見せてくれた。8番ということで随分前に終わるようだ。気まずい沈黙が横たわりかけた時にカナに呼ばれて俺は無駄な努力と言う名の化粧を施してもらうことにする。時計を見ると開始まであと三十分ほどに迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5096m/>

妹の異世界譚 パート2

2011年8月12日20時06分発行